特232
232

ガ島血戰盡忠錄

愛知縣
恩賜財團 軍人援護會愛知縣支部

始

特232
232

はしがき

大東亞戰爭決戰下、敵米英を急追せる吾が皇軍は、遂に敵の穀倉「濠洲」を扼するガダルカナル島にまで挺身した。

飢餓瘴癘の地ガ島！　に善謀勇戰すること半歲、所期の目的を達して我軍は轉進した。その戰鬪や壯烈！　苛烈！　眞に鬼神を哭かしむる阿修羅の相を吾等こゝにおろがむ。

今や屢次の報道により、その血戰！　その盡忠！　の全貌は吾等の前に露呈され、言々句々吾等の肝に銘ぜさるはなし。

嗚呼！　ガ島勇戰部隊の勳績、畏くも上聞に達せる趣き洩れ承る。感激何ものにか比せん。

吾等一億國民、殊に精忠無比の鄉土勇士多數を捧げし本縣民は、苛烈なる決戰の實相と、上聞の感激とを夢忘れては相成らない。

ガ島戰の苦鬪、血戰を偲べ！　而して盡忠の英靈に續け！

茲にガ島英靈の血戰盡忠錄を收集し、縣民座右の敎本たらしむると共にその勳績を永く後昆に示さん。

謹んでガ島陣歿の諸英靈御前に本書を捧ぐ。

（昭和十八年十一月二十九日部隊合同慰靈祭嚴修の日誌す）

愛知縣知事談話（一八・九・二一）

本日南方戰線ガダルカナル島方面に於ける作戰に參加せられ名譽の戰死を遂げられましたる吾が鄕土勇士將兵の氏名が發表せられました。

茲に謹んで英靈に感謝の誠を捧げ又御遺族各位に對し衷心より哀悼の意を表する次第であります。

此の度のガダルカナル島作戰に於きましては縣民各位は既に新聞ラジオ等に依りまして吾が鄕土の多數の勇士が言語に絶する困苦に堪へつゝも克く皇軍の本領を發揮せられ所期の目的を達成し作戰上の轉進を致されましたることに付ては充分御承知の通りでありまして縣民擧げてその武威を讃へ且衷心感謝致しつゝあるところであります。

然し乍ら此の方面の戰鬪に於きましては吾が鄕土よりも尊い多數の戰死者を出したのでありまして如何に苛烈凄愴な戰ひであつたかは吾々の全く想像以上のものであつたと承はるのであります。此の激戰の最中に　大君の醜の御楯として散華せられた勇士の一人々々の勇戰奮鬪に思ひを致しまする時その殊勳に對し吾々は只々感謝感激の外言葉もない次第であります。又此等戰歿者の御遺族の身上を思ひまするとき御同情の念で一ぱいになり自ら眼頭があつくなるのであります。

本日の發表に引續き此等勇士の英靈の故山に凱旋せらるゝ日も近からんと察するのであります。

縣民諸君！　ガ島戰歿勇士の散華を夢忘るゝことなく大東亞戰完勝の日まで只一筋に「ガ島英靈に續かん」ことを誓ひ御遺族を温く護りつゝ相携へて飽く迄聖戰の完遂を期し以て　聖慮を安んじ奉らねばならないと思ふのであります。

名古屋師團參謀長談話

南太平洋方面戰歿勇士の遺族に告ぐ

御子弟、御主人、若くは御父兄が南海の果に奪き散華をせられてより早くも半歳餘　英靈の晴の凱旋も　間近ならんとする今日御追憶も新ならんと御察し致しますが　吾々の感慨も亦極めて切なるものあり　茲に衷情を披瀝して遺族各位に告げんとするのであります。

左記ガ島附近戰鬪概況の如く「ガ」島作戰部隊は戰略展開の掩護として遠く萬里の僻地に先遣せられ至難なる狀況の下　寡兵克く極めて優勢なる敵に對し長期に亘り强靱なる戰鬪を續け完全に其の任務を達成して　戰局全般の推移を極めて有利ならしめたのでありまして其の燦然たる偉勳は古今東西の戰史に其類を絶し一億同胞をして感奮興起せしめたるは固より　盟邦に於ても上下を擧げて　其忠烈に驚嘆し且讃仰措かざる所でありますと共に敵に與へた損害　特に其精神的脅威は實に甚大でありまして　之れに依り敵は眞に日本の恐るべき所以を痛感し甚しく國民の志氣を沮喪せしめたのであります。

即ち今後幾歳に亘りて聖戰を完遂するに當り今回擧げ得ました精神的大戰果が戰勝の一大素因として極めて重大なる價値を發揮すべきは贅言して憚らぬ所と信ずるのでありまして　此の間御子弟達が勇戰奮鬪　刀折れ彈丸盡くるも尙戰ひ　或は重傷を裹み或は頻死の病軀を驅つて任務に邁進する等壯烈鬼神を泣かしむる皇國軍人の眞骨頂を遺憾なく發揮して遂に護國の人柱となられた　比類なき御武勳に對し衷心敬仰の誠を捧ぐる次第であります。

而して此の方面の部隊は其の作戰の任務が特殊のものであつた關係上其の撤去は異狀の困難を極め戰死將兵の遺骸を悉く收容し得ざるものあり　縱ひ收容するも火葬に附する能はずして埋葬するの已むなきに至れるものあり　是れは病歿將兵に就ても同樣であります。尙海上或は水際に於ける戰鬪に際しては水中に沒して浮かばざるものあり　又は粉碎して收集し得ざるものもある等の關係から遺骨中還らざるものも相當數に上るべきかと考へ各位の御悲嘆に想到するとき眞に斷腸の思ひに堪へざる次第であります。

然し是れは戰鬪の樣相が益々苛烈を極めつゝあります近代戰に於きましては今後と雖も免れ難き所でありまして此の際　皇國軍人及其の家族たるの心構を謹に三省して戴き度いのであります。則ち昔「スパルタ」の母は其子の出陣に餞して「汝楯に乘りて歸れ」と謂ひ　又支那の武將は屍を馬革に裹むを以て其の本懷としたのでありますが　皇國に於ては必ずしも然らずで戰陣調に「屍を戰野に曝すは固より軍人の覺悟なり縱ひ遺骨の還らざることあるも敢て意とせざる樣豫て家人に含め置くべし」と謂へてあります如く古來より皇國の武人は一度征旅に上るや征く者も送る者も此の覺悟を固めて居つたのでありまして　既に二千年の昔大伴家持は大君の御爲には水漬き草蒸す屍となるも顧みはせじと歌ひ或は日露役の軍神廣瀨中佐は旅順港外僅か方一寸の肉塊を止めたのみにして散華し　又近くは事變の初め敵地に自爆せる空の至寶山內大尉の老母堂は征きて歸らぬ愛子の英靈を空飛ぶ飛行機に偲びて「我れに尙男兒殘れり兄の志を繼がすべし」と雄々しき覺悟を示されましたこと等其例は枚擧に遑なき程でありまして吾々が生前既に遺髮を原隊に殘し生還は固より遺骨も還らざるの覺悟を示しつゝあるも是故に外ならぬのであります。

萬一遺骨の歸らざる場合斷ち難き骨肉の至情は深く御察しする所でありますが　此の聖戰に勝ち抜かんが爲め、皇國を萬代搖ぎなからしめんが爲め一切の恩愛を斷ち忍び難きを忍ばれ度いのでありまして　是れ即ち尊き身命を笑つて御國に捧げた御子弟達の遺志であり又其の忠烈を意義あらしむる所以と信ずるのであります。

然し遺骸は南溟の底深く沈み「ガ」島の土に埋もれても不滅の忠魂は戰友の心を籠めた白木の箱に宿つて必ず歸つて參ります。即ち維新の志士が所刑せらるゝに方り　身は縱ひ武藏の野邊に朽つるも大和魂は皇國皇土に留まらんと詠したことや　大楠公が七生報國を誓はれたこと等は實に此の間の消息を物語つて居るものでありまして各位は御子弟達の陣歿の內報を受領せられて以來神棚に、佛壇に或は遺影の前に朝夕合掌して敬虔な祈りを捧げて居られることゝ存じますが是れは形無しと雖も即ち英靈の存在を信じての行と考ふるのであります。何卒各位は近く凱旋すべき英靈を心から迎へられ將來忠魂と共に强く生き雄々しく進んで戴き度いのであります。

尙遺骨のなき場合或は骨箱の中に砂或は土等の收られて居るものが有るかも知れませんが是れは從來と雖も例の有つたことでありまして此の際往々現地の者が惡戲をしたかの如く考へ憤慨せられたる向も有つたと聞き及んで居りますが此れは大なる誤解でありまして各位の中にも嘗て出征された方は戰場に於ける戰友愛が如何に深いか體驗されたことゝ存じますが是れは到底常人の想像だも出來ぬ程でありまして例へば戰濟んで勝ちしと思ふ歡びも一度斃れた友の上に思を馳する時實に斷腸の思に咽ぶのが常でありまして其の間微塵も戲れ心の起る理はないのであります。

疲れ果てた身に尙戰友の遺骨を胸にして進軍を續くる兵、僚機が自爆した空に高角砲彈の炸烈を身邊に浴びながら危險を顧みず別れを惜しむ低飛行を敢てする荒鷲の心情等總て此の間の深い戰友愛を物語つて居るのであります。

若し骨箱の中に遺骨以外の物を收められて有つたとしたら其れは勇士の血に染んだ土であり砂でありまして　隊長が或は同僚が其所に英靈の宿りしものと考ふるが故にせめてもの形見として遺族に送らんとする優に柔しき武人の情より出たものであり　又　木片や物を燒いた灰或は果物の皮等が有りましたなら　それは現地に於て慰靈祭を行つた際の白木の柱其他祭祀用具等を削り或は之を燒いたものであり又は供物の一部でありもして所謂分靈（ワケミタマ）として送つて寄したのでありますから吳々も誤解のなき樣敬虔な氣持で受領して戴き度いのであります。

以上を以て私の述べんとする所は概ね盡きたのでありますが肇國以來未曾有の大戰は今や正に苛烈なる決戰の段階に入りつゝあるの秋國民志氣の振否が戰局を支配する重要なる役割をなして特に各位の言動が之れに感作を與ふることは實に甚大なるものが有るのであります。何卒各位に於かれては名譽ある陣歿勇士の御遺族として皇國の爲英靈の遺志を繼承して强く雄々しく聖戰の完遂に邁進せられんことを御願ひして止まざる次第であります。

終りに臨み英靈に對し謹みて敬弔の誠を捧げ各位の御健勝を御祈り致します。

ガダルカナル島戰鬪概況

一、昨年五月頃帝國海軍の一部隊はガ島ルンガ岬附近を占領して之を守備し且飛行基地を建設中でありましたが八月七日に至り敵米國海兵師團約一萬が飛行機の掩護の下に戰車、重砲を伴ひまして俄然ガダルカナル島及ツラギ島に上陸來襲して來ました、當時我海軍は寡軍良く防戰に努めましたが敵が優勢でありましたので遂に占領地點を敵手に委するの已むなきに至りました。又當時「ガ島」飛行場は殆ど完成に近かつたのでありますが惜しいことに之が敵の手に歸しましたから之が爲めに我軍の爾後の上陸作戰には測り知るべからざる辛慘を嘗めさせられ此爲覆多尊い犧牲を拂はなければならないことになつたのであります。

二、我軍に於きましては此情報に依り早速其急を救ふべく當時基島に待期中でありました一支隊を派遣致したのでありまするが、同部隊は八月下旬「ガ島」東部に多大の困難を冒して上陸作戰を決行し敵陣地に迫りましたが敵は既に飛行場の四周に堅固なる近代式築城を終へ之に加ふるに優勢なる砲兵火力及び飛行機の爆撃を以て應戰した爲め我軍には忽ち多大の死傷者を生じ遂に敵陣地を奪取することが出來ませんで戰鬪交綏の狀態に陷りました。

三、次いで其後更に我軍の一部隊の上陸作戰が强行せられましたが之亦前回同樣敵の制空下に於て上陸を敢行した爲め多大の損害を受け其上糧秣、彈藥の補給が意の如くならず爲めに上陸部隊は全く言語に絕する辛苦を嘗めざるを得ないことになつたのであります。

此實情は既に新聞紙上にて御承知のことゝ思ひます。

四、併し上陸部隊は此困苦を耐へ忍び敵を壓倒するの意氣込は少しも衰へなかつたのであります。敵陣地の正面攻擊に成功を收めることが出來なかつた我部隊は敵を夜襲するに決しジャングル地帶を迂回して行動すること三日間よく企圖を遂行し、其先頭にあつた突擊部隊は暗夜に乘じ不意に敵飛行場に突入し米兵を銃劍を以て一人平均七、八人を刺し殺してゐるのであります。斯樣に奮戰したのでありまするが其補給が續かず敵の優勢なる統砲火や爆擊、銃撃の爲め死傷續出し殆んど全滅の景況となり遂に此夜間攻擊も成功しなかつたのであります。

五、其の後亦一部の增援を行ひ戰線强化に努めましたが何分敵の飛行機砲火の優勢に依り攻擊意の如くなりませんで近距離に敵と相對峙するの已むを得ざるに至りました。斯樣にしてガ島作戰部隊は半歲の久しきに亘つて酷熱濕潤のジャングル地帶内にあつて凡有困苦缺乏に堪へ專兵を以て克く敵の猛烈なる攻擊に對し頑張り通したのでありました

六、此部隊が絶大なる辛苦を嘗め奮戰してゐる間に我主力軍はビルマ、蘭印諸島、ニューギニア北部、ソロモン北部、マーシャル群島、及び其以北に亘る太平洋の島々に戰略展開を終り樞要を確保して爾後の作戰遂行の基礎的態勢を確立したのであります。

七、茲に於てガ島作戰部隊は二月上旬以降命令に依つて撤收を開始し新任務に向つて轉進せしめられたのであります。撤收部隊の兵力は決して尊小ではなかつたが敵機や艦艇の跳梁する中に幾多の困難を冒し陸海協力の下に行はれたのでありますが此時敵も恐れをなしたか我撤收を承知して爲た模樣であつたが敢て出擊したかつたのであります。

八、此南太平洋方面會戰に於ける戰果は敵側に與へた損害を見ますると人員二萬五千名以上、飛行機二百三十機以上、火砲三十門以上破壞、戰車二十五臺以上を破壞炎上せしめ、我方の損害は戰死及戰病死者一萬六千七百三十四名、飛行機自爆及未歸還百三十九機であります。

九、斯樣に大なる戰果を收めましたが言語に絶する苦闘の後途に斃き犧牲となつた幾多勇士に對しては心から冥福を祈ると共に感謝の誠を捧げ、同時に吾々は飽く迄此仇を打たねば止まぬ決意を固持せねばならぬのであります。

ガ島方面戰歿者遺族並縣民教化指導要綱

一、趣　旨

大東亞戰爭の實相愈々深刻の度を加ふ其の苛烈凄愴なる眞に重大決戰の機と謂ふべし

殊に南方戰線中ガ島方面の皇軍將兵は善謀勇戰眞に皇軍の精髓を發揮して餘す所なし

今や吾等は悲痛の裡にも感謝を以てガ島戰歿の英靈を迎へんとし決意愈々堅く敵米英撃ちてし尙熄まざるを誓ひ縣民一致茲に蹶起し以て英靈に續かんことを希ひ而して其の遺族を護り遺族又家門の榮譽を只管顯揚し以て縣民の赤誠に應へしめ飽く迄戰爭を完勝し　聖慮を安んじ奉らんことを期す

二、指　導　方　針

激烈なる科學戰と共に廣大なる地理的條件の下に闘ふ近代戰は戰場に散華せる貴重なる遺骸を確保するは至難の實情に在り即ち遺骨に代り戰場の土砂或は慰靈祭に捧げし供物の一部或は又墓標の一片を箱に納め英靈茲に神鎭ると合掌し送り屆くる英靈あるを銘記すべきなり

英靈を迎ふる遺族及一般縣民にして之を具象する實體を拜して若くは想像して思ひに過ぎたる心痛をなすこと等無之やう遺族に對し又一般縣民に對し戰闘の苛烈なる眞相を明確に把握せしめ遺骨なき英靈の凱旋又眞に止むなきの事實を強く認識せしめ今こそ仇敵米英覆滅こそ天與の使命なるを感得せしむる如く指導するを根本方針とす

三、實　施　大　綱

（一）戰歿者遺族に關する事項

1、遺族に對し賜はる　皇后陛下　御下賜品並御歌複本の速かなる傳達
2、知事の談話發表
　公報發表と同時に知事談話を發表す
3、合同慰靈祭の執行に協力
　名古屋、豊橋に於ける部隊合同慰靈祭執行に際し諸般の協力をなす
　イ、英靈に對する驛頭並街路の出迎へ
　ロ、佛教會による日泰寺の奉仕
　ハ、合同慰靈祭の協力
4、戰歿者遺族懇談會の開催
　イ、郡市別遺族懇談會　軍並縣共同主催により英靈歸還前適當の日時に開催し遺族の覺悟を固めしむ
　ロ、師管外遺族懇談會　軍並縣共同主催により合同慰靈祭の前日之を開催し遺族の覺悟を固めしむ
　ハ、地方事務所、市區單位遺族懇談會　英靈自家に歸還後適當の日時を選び之を開催、慰藉激勵に併せ「遺族援護」趣旨の徹底による援護の萬全を圖る
5、各宗別戰歿者慰靈法要の嚴修
　佛教各宗別に但し宗内各派は之を合同し慰靈法要を嚴修せしめ英靈の追弔遺族の慰藉激勵をなす
　開催の日時は概ね彼岸會の際とす
6、市區町村別戰歿者慰靈法要の嚴修
　佛教各宗各派を一丸とし市區町村單位に慰靈法要を嚴修せしめ英靈の追弔遺族の慰藉激勵をなす

（二）一般縣民に對する事項

1、ガ島方面戰況實相報告特別講演會の開催
　官公衙學校各種團體の長並軍人援護關係各方面代表者等指導階層の者を限り招集し大本營陸軍報道部派遣講師による戰況實相の解明を乞ひ愈々不拔の決意を堅持せしめ遺族並一般縣民指導の積極的推進力たらしむ
2、ガ島方面戰況報告公開大講演會の開催
　前項以外の指導階層を目標とし大本營陸軍報道部派遣講師による縣民士氣昂揚大講演會を開催す
　開催豫定　名古屋市、豊橋市
3、ガ島方面戰況報告地方別講演會の開催
　地方事務所、市單位に概ね一ヶ所とし師團司令部派遣講師による巡回講演をなす
4、ラジオ放送
　「遺骨なき英靈凱旋」の趣旨を各家庭に浸透せしめ一層の士氣昂揚を圖る
　講師は軍當局又は内政部長乃至軍事課長とし地方放送とす
5、軍人援護教育の徹底
　國民學校兒童、中等學校生徒、大學專門學校學生生徒に對し軍人援護教育の徹底を圖るため「英靈凱旋」に關する訓話乃至講話資料を作成し關係方面へ配布す
6、英靈感謝米英擊滅戰意昂揚縣民總蹶起運動の實施
　イ、方針　英靈歸還に際し　一般縣民に對し英靈に感謝し戰力增强に拍車を加へしめ遺族に對しては其の悲痛を米英擊滅の決意に轉ぜしめ全縣民打つて一丸戰意の昂揚を圖らんとす

ロ、運動實施期間　英靈の原隊歸還合同慰靈祭の日より凡そ各市町村公葬終了に至る間とす

ハ、指導主眼事項

(1) 英靈敬弔に關する事項

(イ) 英靈到着日時は全縣民一齊に感謝の默禱を捧ぐること

(ロ) 英靈到着の當日名古屋市並豐橋市内は各戸必ず弔旗を揭揚すること

(ハ) 英靈通過沿道の店舗は固より銀行會社等勤務者は能ふ限り堵列出迎を爲すこと

(ニ) 一般通行人も堵列出迎を爲すこと

(ホ) 英靈通過沿道最寄の左記各方面に對しては特に團體的に堵列出迎する樣指示すること

官公衙の長並其の職員　學校方面（國民學校に在りては概ね四年生以上、青年學校、中等學校、大學專門學校に在りては全員）　團體方面　能ふ限り多數

(ヘ) 愛知縣佛教會の指導により英靈歸還の日より合同慰靈祭執行の日まで安置所（覺王山日泰寺）に於て讀經供養すること

(ト) 右期間中一般縣民は努めて安置所に參詣し弔意を表すること

(チ) 出來得る限り學校團體等に在りては右安置期間中指導者を附し隊列を組み參拜すること

(2) 合同慰靈祭に關する事項

(イ) 慰靈祭執行の當日は全縣各戸弔旗を揭揚し敬弔を表すること

(ロ) 慰靈祭當日參集の遺族に對し敬弔感謝の赤誠を現はすこと

(3) 英靈に對する感謝表徵に關する事項

(イ) 感謝貯蓄、感謝献金の勵行

(ロ) 勤勞の倍加、生産增强、食糧增産に付具體策を樹立し之が實行を爲すこと

(ハ) 最低生活の勵行　最前線將兵の勞苦を偲び最低の生活を實行すること

(三) 特に縣に於て執るべき事項

1、ガ島戰歿者遺族に關する一齊調査

イ、名古屋師團關係縣内居住の遺族
ロ、他師團關係縣内居住の遺族　九月十日までに調査を終了すること

2、戰歿者遺族援護指導機關の强力なる運用

イ、市區軍人援護主務課長乃至主任會議の開催

ロ、地方事務所軍人援護主務課長乃至主任會議の開催

ハ、銃後奉公會聯合會主事會議の開催

ニ、婦人指導囑託會議の開催

ホ、保健指導婦會議の開催

ヘ、方面理事會の開催

ト、宗教關係者その他婦人會、翼贊會支部首脳者等の會合の開催

チ、その他適當と認むる協議會等の開催

3、印刷物の作成配布乃至新聞紙上登載に依る趣旨宣傳

イ、遺族に對するもの　「遺族の誓」「戰歿者御遺族となられた皆樣へ」

ロ、一般縣民に對するもの　「遺骨なき英靈に應ふるの途」

上聞に達す！ガ島勇戰部隊

陸軍省發表（九月二十九日十六時）「ガダルカナル」島方面の作戰に從ひ武功拔群なりし堺歩兵部隊（舊廣安歩兵部隊）陶村歩兵部隊（舊土井歩兵部隊）に對し義に軍司令官より感狀を授與せられしが今般畏くも　上聞に達せられたり

感　狀

堺　歩　兵　部　隊
（舊廣安歩兵部隊）

右はガダルカナル島作戰に從ひ部隊長廣安大佐指揮の下に昭和十七年十月下旬大密林地帶を跋渉し、ルンガ飛行場南方地區に近迫して堅固なる敵經營陣地を急襲し力戰奮鬪部隊長以下多大の損傷を被るも毫も屈せず士氣益々旺盛なり、次で命に依りマタニカウ上流地區に集結し爾後の攻擊を準備中適々海岸道方面に對する敵の攻擊に會し急遽該方面に反轉せしめらるゝや新部隊長堺大佐指揮の下に極度の疲勞飢渴を忍び艱難般涉を敢行して優勢なる敵の壓迫を受けつゝある友軍を赴援し敵の猛攻を拒否して危機に瀕せる戰局を打開せり、十一月上旬歩砲飛連合の優勢なる敵の攻擊を受くるや激戰數日敵に多大の損害を與へて之を撃退し更に敵を追擊して砲兵臺東岡に進出し爾來翌昭和十八年一月中旬まで極めて優勢なる敵歩砲兵と至近に相對峙しつゝ海岸方面の支撐を確保し以て敵の全面的攻擊を撃退すること三回におよべるのみならず或は敵背後に潜入奇襲して兵器彈藥を鹵獲し或は出擊を以て敵の攻擊準備を妨害する等積極潑剌たる行動を以て敵の心膽を寒からしめ連日連夜敵飛行機の執拗なる爆撃の下熾烈なる砲火と艦砲の霰駆とに堪へ亂餓疲勞の苦難を偲び部隊の戰鬪員急激に減耗するにいたるも毅然陣地を死守して主力の左側背を安全にし全般の作戰を容易ならしめたり是實に部隊長を核心とする肇國なる團結と將兵全員に充溢せる攻擊精神との賜にして皇軍傳統の精華を如實に顯現し武功拔群なるものと認む

仍て茲に感狀を授與す

昭和十八年二月十一日

軍　司　令　官

陶　村　歩　兵　部　隊
（舊土井歩兵部隊）

感　狀

右は部隊長土井大佐次で陶村大佐指揮の下にガダルカナル島作戰に從ひ昭和十七年十一月中旬より翌十八年一月下旬に至る七十餘日の久しき間堺臺附近アウステン山右翼陣地及見晴臺附近の重要且廣正面に亘る攻勢據點を占領し且夜襲烈なる砲彈雨の下反覆執拗なる敵の攻擊を撃退せり此の間死傷逐次增加し彈藥糧食の缺乏其の極に達するや傷病將兵悉く陣地の守備に任じ杖に倚りて歩行し得る者は後方より彈藥と糧食とを運び體力堪許す者は挺身敵陣に潜入して之を奇襲攪亂する等最も苦難なる戰局に處して上下相信倚し戮力協心克く其の任務を完遂せり特に翌昭和十八年一月十日頃より開始せし猛烈なる敵の全面的攻擊に際會するや各據點何れも優勢なる敵に四周を包圍せられ補給杜絶すること十數日に及び敵の壓圍攻擊愈々其の猛威を加ふるも最後の一兵に至る迄最終として陣地を死守し遂に壯烈なる迎擊を敢行して敵の突破を阻止し以て主力の作戰を容易ならしめたり

右は實に部隊將兵の肇國なる團結及精到なる訓練並充溢せる攻擊精神の賜にして皇軍の精華を如實に發揮し其の武功拔群なりと認む

仍て茲に感狀を授與す

昭和十八年二月十一日

軍　司　令　官

陸軍省發表（十月二日十六時）昭和十六年五月以來中隊長として廣東、香港、アンボン、チモール、ガダルカナル島に轉戰し、遂に壯烈なる戰死を遂げたる陸軍中尉若林東一に對し義に軍司令官より感狀を授與せられしが今般畏くも　上聞に達せられたり

感　狀

陶村部隊中隊長
陸軍中尉　若　林　東　一

右はガダルカナル島作戰に從ひ昭和十七年十一月二十日以降中隊長として見晴第二及第三陣地の守備を命ぜらるゝや適切なる陣地選定に依り、猛烈なる砲爆撃に堪へ常に機先を制して敵を撃退すると共に自ら少數兵力を率ゐ敵陣地を奇襲、潰乱して其の攻撃企圖を破碎するに努むる等積極果敢なる戰闘指揮に依り克く陣地を確保しありしが、翌十八年一月十二日敵の全面的攻撃に際しては中隊の兵力僅かに十數名に過ぎざりしも義烈として敵を拒止し、至近距離に攻撃準備中の敵に對し部下四名を率ゐて之を夜襲、潰乱せしめ、中尉は部下に重傷を負ふに至りしも志氣益々旺盛、依然戰闘を繼續せしが、十四日に至り彈藥は既に射盡し糧食絶ゆること三日に及び、且熾烈なる砲爆撃の爲陣地大部は破壞せられ死傷續出して戰闘惨烈を極め、而も敵は陣地背後に溢出包圍し來り、中隊は全く孤立に陷るや九時中尉は部下數名と倶に敢然逆襲を決行し軍刀を揮つて群敵に突入、其の數名を兩斷せしも敵迫撃砲彈數箇所に命中し壯烈なる戰死を遂げたり

中尉の熾烈なる責任觀念と職責に邁進する鞏固なる意志とは軍人精神の精華を遺憾なく發揮せるものにして又沈着剛毅なる其の指揮は克く長時日に亘り優勢なる敵を拒止して軍の作戰を有利ならしめ其の武功拔群なり

仍て茲に感狀を授與す

昭和十八年二月十一日

軍司令官
陸軍中尉　若　林　東　一

感　狀

右者土井部隊、次で陶村部隊中隊長として昭和十六年五月以來一年八ヶ月此の間廣東、香港、アンボン、チモール、ガダルカナル島に轉戰し毎戰赫々たる偉勳を樹てたり

就中香港攻略戰に在りては戰機を看破して敵陣地の鎖鑰を奪取し以て全軍戰勝の基を開き、又ガダルカナル島作戰に在りては孤軍奮苦を克服し、或は寡兵を以て死地に進み優勢なる敵を撃破し、或は熾烈なる敵の砲爆撃の下孤立せる陣地を克く長時日に亘り固守する等軍の作戰に寄與せる所頗る大なるものあり、其の最後に方りては重傷に屈せず陣頭白兵を振ひて敵數名を兩斷し遂に敵彈に玉碎す

眞に壯烈鬼神を哭かしむ

中尉の戰に臨むや常に烈々たる責任觀念と旺盛なる敢闘精神充溢し適切なる情況判斷の下その所信を斷行し宮に陣頭に指揮し、以て全軍戰勝の端緒を開き又は戰果の中核を成せり、宜なる哉香港攻略戰に於ては其所屬部隊に感狀を授與せられ又ガダルカナル島作戰に於ては個人感狀を授與せられたり

累次の武功は實に拔群にして全軍將兵の鑑鑑たり、茲に重ねて感狀を授與し之を全軍に布告す

昭和十八年五月一日

軍司令官

陸軍省發表（十月七日十六時）ガダルカナル島作戰に從ひ拔群の武功を樹て遂に壯烈なる戰死を遂げたる陸軍中尉大舛松市に對し龔に軍司令官より感狀を授與せられしが、今般畏くも　上聞に達せられたり

感　狀

陶村部隊中隊長
陸軍中尉　大　舛　松　市

右はガダルカナル島作戰に從ひ昭和十七年十一月十五日以降第二推進の隊長として他中隊及び機關銃一小隊を併せ指揮し樹叢附近を占領するや連日熾烈なる砲爆撃の下優勢且執拗なる敵の攻撃を撃退すると共に進んで小部隊、挺進斥候等を以て敵陣地の要點を奇襲擾亂する等各種積極的手段を以て敵の攻撃企圖を挫折せしめ七十餘日の長期間克く陣地を確保しありしが翌十八年一月十日拂曉より開始せし敵の全面的攻撃に際しては寡兵克く十數倍の敵の重圍を意とせず力戰奮闘し一月十三日には猛砲撃の爲陣地は大部破壞せられ守兵

仕死傷続出して戦闘激烈を極め六時頃には中尉亦敵砲弾の盛頭面及左前膊破片創を受けて重態に陥りしも士氣益々旺盛守備を厳にして戦闘を継続せしが九時頃既に弾薬を射盡し部下僅かに十数名に減少するに及び中尉は率先陣頭に軍刀を揮ひ果敢猛烈なる逆襲を敢行して群敵と白兵戦を交へ遂に壮烈なる戦死を遂げたり、中尉の旺盛なる責任観念、熾烈なる戦闘意志は軍人精神の精華を遺憾なく發揮せるものにして又その戦機に投ずる機敏なる指揮は爾後の我戦闘指導に貢献せしこと甚大にしてその武功抜群なり

仍て茲に感状を授與す

昭和十八年二月十一日

軍司令官

陸軍省發表（十月二十三日十六時）ガダルカナル島作戦に從ひ武功抜群なりし鬼塚部隊に對し二月十一日軍司令官より感状を授與せられしが今般長くも上聞に達せられたり、該部隊は先づガ島ルンガ敵飛行場の攻撃に協力したる後、海岸道方面に對する敵の猛攻を撃破して戦局打開に寄與し、又十一月下旬以降困難を極めし我持久作戦に方りては各要點に陣地占領し僅少なる弾薬を以て二ケ月に亘り優勢なる敵の反撃を挫折せしめ、さらに本年一月下旬の撤收作戦においては後衛部隊に屬し敵軍の追撃を撃退しわが軍の企圖達成を容易ならしめたるなど常に絶大なる困難を克服して全局の作戦に甚大なる貢献をなしたるものなり

感　状

鬼塚部隊

右はガダルカナル島作戦に從ひ昭和十七年十月下旬ルンガ敵飛行場攻撃に協力したる後、適々海岸道方面に對する敵の攻勢に際會し急遽該方面に轉進を命ぜらるゝや、極度の困憊飢餓を忍び膂力に依り火砲を搬送しつゝ嶮難密林を踏破急行し、戦機に投じて密に沖川河畔の友軍歩兵部隊に協力し屢々戦車を伴ふ優勢なる敵の猛攻を撃破して危急を告げし戦局の打開に寄與せること甚大なり、十一月下旬以降困難を極めし我が持久作戦遂行に方りては主力を以て○○部隊、一部を以て○○部隊に配屬せられアウステン山、見晴臺、御臺等第一線歩兵陣地の直後に陣地を占領し爾來約二ケ月に亘り日夜不断の熾烈なる砲撃下、極度の困苦缺乏に堪へ巧に○○砲の特性を發揮し僅少弾薬を以て有効なる射撃成果を收め、以て優勢なる敵の反覆する攻撃を挫折せしむると共に友軍の志氣を昂揚し第一線歩兵の戦闘を有利ならしめたり、翌昭和十八年一月下旬の撤收作戦に於ては後衛部隊に屬せられ至難なる狀況の下、將兵の損傷大なるを顧みず最後迄全火砲を確保したるサフアロンゲ附近に於て追撃する有力なる敵歩砲兵を撃退し以て敵の全般的追撃を遲滯せしめ我軍の企圖達成を容易ならしめたり、是實に部隊長の適切なる統率指揮と將兵の默々として苦難を意とせざる犧牲的精神とに依り絶大なる困難を克服し常に戦場の緊要なる方面に於て○○砲隊の特性を遺憾なく發揮し全局の作戦に貢献せること甚大にして武功抜群なり

仍て茲に感状を授與す

昭和十八年二月十一日

軍司令官

第一部　報道篇

陸の精鋭ガ島に上陸す

谷萩大本營陸軍報道部長談（一七・一一・一五讀賣新聞掲載）

西南太平洋における戰略的要衝ソロモン群島に對する米國の奪還計畫の成否は世界の注目を集めてゐる折から谷萩大本營陸軍報道部長は十四日午後四時次の如き談話を發表、わが陸軍の精鋭がソロモン群島中に勇奮作戰中なる旨をはじめて明かにした。この談話は目下開催中の地方長官會議において陸軍側から說明された最近の戰況を經緯としたもので、支那方面、南方方面、北方方面に大別し最近の支那大陸戰線の動向、ビルマ地域における狀況、特に絕海の孤島とも稱すべき不毛瘴癘の地ソロモン群島のガダルカナル島及びその付近に去る八月アメリカの精强を誇る大部隊が大擧上陸したのに對しわが陸軍部隊が海軍との緊密なる協同の下に數回に亘る極めて困難なる上陸作戰を敢行、目下勇壯果敢なる作戰を展開しつゝある旨を明かにした。

緬甸の攻定と比島の攻略成つて早や六ケ月、莫大なる損害を受けて大東亞の地域より撃攘せられたる米英は「これ迄の敗北は日本の奇襲作戰に依るものであつて、いはゞ緒戰の短期間に生じた局部的現象に過ぎぬ」と唱へて國民の士氣昂揚と國防强化を圖り局面の打開に苦心しつゝあるが、就中米國は軍備の大擴張を行ひつゝあるばかりでなく、支那、印度、アリューシャン等に對し空軍を增派し、本土空襲を企圖し、又は我が南方占領地に一部兵力を上陸せしむる等既に反擊作戰に着手し、其の政府及び國民の戰爭に對する態度が逐次眞劍になりつゝあることは注目に値する、我陸海軍は緊密なる協同の下隨時隨處に敵を撃破し赫々たる戰果を擧げつゝあるが大陸、大洋兩方面に於ける陸軍部隊關係最近の狀況は左の通りである。

一、支那方面

支那派遣軍は全支に亘る廣大なる地域に於て三百萬の重慶軍に對し毎月平均大小二千餘回の戰鬪を繼續して敵戰力殲滅と占領地治安の確保とに邁進してゐる。北支方面では八月下旬より各兵團緊密なる連繫の下に殘存共產軍の討伐、掃作作戰を展開した。中支方面では五月以降四ヶ月に亘り浙贛作戰を實施した。即ち我軍は困難なる地形と惡天候とを冒し浙江、江西、福建方面に於て對空襲を企圖する敵航空基地を覆滅すると共に第三戰區に對して大打擊を與へてその反抗を完封し、更に重要なる資源

地域を管制下に收むる等の大戰果を擧げたがこの作戰間兵團長酒井中將の壯烈なる戰死は國民の記憶に新たなる所であらう。本作戰の結果敵空軍は奥地に退避し湖南、廣西等を基地とし、米機の增援を待て我が間隙よりゲリラ的空襲に出で六月下旬以降今日迄に二十五回の來襲を見たが、これに對し我が在支陸軍航空部隊は絶えず果敢に邀擊し將また進擊してその五十數機を擊墜破した。この間我が方の損害は自爆四機、未歸還六機である。なほアフリカ、西亞、印度を經由して重慶側に輸送せらるゝ米國機は毎月相當數に上りあるも我不斷の攻擊により現在活動中のもの百數十機であり、これに重慶在來の空軍とを合せて目下大陸における敵勢力は約二百五十機内外と推定せらる。右機數は今後も引續き增加するものと豫想せらるゝに依り我占據地の要點更に進んで我本土に迄も空襲を企圖することは萬なしとは申されぬ次第である。

二、南方方面

占領地の治安は概ね恢復し適切なる軍政と相俟つて建設事業は着々進展し我戰爭遂行に原動力を提供しつゝあるが、局部においてはなほ作戰遂行中である。

（イ）ビルマ方面

目下印度における米英軍は印度軍と合し地上兵力約五十萬、飛行機約五百と判斷されるが、愈愈次增强されつゝある模樣である。ビルマ方面陸軍部隊は西部國境方面でこれと接觸し軍部は概ね怒江の線で十數ケ師の重慶軍と相對峙してゐる。

ビルマ内の治安は我が軍政下における新行政府の施設に伴ひ益々良好となりつゝあるが、東部印度、雲南方面を基地とする敵空軍はゲリラ戰による内部擾亂を企圖し、殆ど連日十機内外を以て來襲し、我軍は常にこれを擊滅してゐるが、特に先般のチンスカヤ、チッタゴン飛行場攻擊における戰果を始めとし、十月末以降今日迄に擊墜破約七十機の損害を敵に與へた。その他雲南方面における重慶軍の擊滅等終始戰鬪を繼り返へして居るのである。將來米英空軍等の增强により此方面の航空戰鬪は更に激化すべく又敵軍は情勢の推移を窺ひ印度及雲南方面より相呼應してビルマ奪回を策することもあるべく、我方は如何なる情勢にも對處し得る警石の備を固めてゐる次第である。

（ロ）ソロモン方面

次にソロモン群島方面の陸戰に亦てゝあるが、我が海軍部隊が僅少なる兵力を以て古據しあつたガダルカナル島及其付近に本年八月米軍部隊が大擧上陸した。茲に於てわが陸軍部隊は海軍との緊密なる協同の下に數次に亘り極めて困難なる上陸を敢行した。既に數次に亘り發表せられたソロモン方面の諸海戰も實はこの陸戰と相關聯して惹起せられたものである。

而しソロモン群島方面は彼にして之を失へば米濠の連絡線を分斷せらるゝのみならず、直接濠洲を脅威せらるゝが如き戰略上の要域である故に、敵軍は必死の努力を以て凡有手段を盡し陸海空の戰力を增派して之が保持を期して居る模樣である。

同方面は南太平洋に於ける我が作戰根據地より遙しく遠隔し、且つ絶海の孤島とも稱すべき不毛原野、未開の地であり此方面に既に根據を占めある敵軍の航空勢力の活動を制して、上陸特に補給を行ふことは尚に容易の業ではなく、隨つて目下此方面の作戰に任じて居る將兵の艱苦も想像に餘りあるものがある。然したがら我が陸軍部隊は是等極めて不利なる諸條件を克服し、逐次敵軍に壓迫を加へつゝある現況である。

三、北方方面

アリューシヤン群島方面は六月八日陸海軍部隊相協同して、その西部數島に上陸之を占領以來陸軍部隊は殆んど連日に亘る敵空襲下に之を確保して米軍の進攻を邀撃してゐる。

又濠洲に於ては關東軍は日夜防衛に從事し或は訓練に努め以て變轉常なき世界情勢の下體として北邊の護衛に任じつゝある。

以上最近に於ける陸軍部隊關係の概況を述べたが、御稜威の下我が陸軍部隊はアリューシヤン、濠洲、支那、南方諸地域等寒帶より熱帶に到る廣大なる地域に、或は作戰に警備に又は訓練に邁進してゐる次第である。

大東亞戰爭決戰は續く

平出大本營海軍報道部課長講演

（一七・一二・八中部日本新聞掲載）

大本營海軍報道部課長平出英夫大佐は十二月七日午後八時よりAKのマイクを通じ『決戰は續く』と題する開戰一周年記念講演を行つた。この講演に於て太平洋の波濤を賭し米英海軍擊滅の陣頭に起つ帝國海軍に新鋭戰艦數隻、新鋭空母、巡洋艦多數が就役活躍しつゝあることが初めて明かにされ一億臣民の誓ひも固く征戰完遂に邁進する全國民に『帝國海軍かくして强し』の深い感銘を與へた。平出大佐は冒頭開戰一年目こそ國民總決戰の年であると叫び、この一ケ年の戰局推移、凄絶極まるソロモン海域の戰鬪狀況についてわが航空兵隊、水上艦艇の勇戰奮鬪の實例を擧げ、ソロモン海域の戰鬪のみで戰爭は終結するものではないが、わが戰略體制は完璧であると語り、さらに米國の戰前兵力と現勢力について敵の殘存兵力を新造艦を加へて戰艦十一隻、空母を約十隻、さらに防空巡洋艦と稱される新巡洋艦六隻と推定したのは注目される。ついで大佐はこの敵のこの艦艦狂奔に對して力强くわが海軍の備へを全國民に明示し、この兩國の生産戰と武力戰の密接不離の近代戰に勝ち拔くため、更に新たな覺悟をもつて粉骨碎身すべきことを要請した。

大東亞戰爭開戰以來茲に一年、今や日章旗、軍艦旗は太平洋、印度洋を壓して翩翩と靡いてゐる。僅か一年前の今日世界の誰がこの現實を豫想し得たであらうか、御稜威の下眞に日本國威の隆々たる世界顯現であるといはねばならない。しかし敵は相亞ぐ敗戰にも拘らず豐富なる物資力と强大なる生產力に物をいはせて旗拘なる反擊を企圖してゐるのであつて、われ／＼は敵が如何に新手をもつて出擊し來ようとも、其出鼻を徹底的に叩き息の根を絶たねばならない。昨年十二月八日あの日の感激は今尙われ／＼の胸底强く湧り立つてゐるが、明日に迫まる大戰第二年は百尺竿頭更に一歩を進めて一層『敵擊滅への國民總決戰』の年でなければならぬ。われ／＼國民の忘れんとして忘れることの出來ない十二月八日を再び迎へるに當り過去一ケ年の海軍に關する戰局を展望し、戰爭が現に如何なる姿において推移しつゝあるかを概觀し敵擊滅の決意を新たにしたいと思ふ。

一ケ年の戰局大觀

大東亞戰爭が天人倶に許さゞるアメリカの挑戰によつて勃發致したことは今更申上げる迄もない。當時敵は戰備を整へ南方要域の堅固配備を一日々々と强化し、既に十二月八日に先立つてその對日作戰計畫を發動し現に飛行機、艦艇による日本宣海の强行偵察或は潛水艦のパラオ攻擊更にハワイ西方海域におけるわが潛水艦に對する攻擊等帝國が耐へ得る死か生かの最後の關頭に迫つに至つたのである。かくて宣戰の大詔は渙發あらせられた。大詔を拜するや皇軍將兵は發然として起上りわが海軍は緒戰に續開にしても、何れも必勝眞時をとらんとする準備的作戰であつた。その後のわが海上作戰は雄渾なる規模のもとに展開され、わが制空制海權はいよ／＼擴大强化されるとゝもに敵の敗戰の姿は一層深刻なものとなつて來た。一方南方資源戰略物資を確保するに至つたことは申すまでもない。かくて帝國は戰略的にもまた經濟的にも有利な態勢の基礎を確立したといへるのである。

アングマン群島よりコロンボ、ツリンコマリーの强襲によるインド洋作戰の開始にしても、アリューシャン列島並にミッドウェー急襲による東太平洋作戰の展

逐次攻略、戰前敵が不敗を誇つた對日包圍の鐵鎖は寸斷された。緒戰早くも我れに有利なる戰略態勢の基礎が確立されたのである。わが海軍は必要なる足場を確保するとゝもに機を逸せず新たなる進擊態勢をとつた。四月上旬を期して實行されたインド洋作戰、六月上旬火蓋を切つた東太平洋作戰の新展開がこれである。

ソロモン海戰の概要

アメリカは緒戰以來のかゝる頽勢を挽回せんものと强大なる生產力を動員して對日反擊作戰を企圖するに至つた。その主作戰目標を日本打倒におき主戰力を太平洋に集中するに至つたのである。かくて敵は太平洋に反擊作戰を展開した。八月上旬を期してアリューシャン、ギルバート、ソロモン方面への出擊がそれであり、この中敵が主力を傾倒したものはソロモン群島方面であるが、かゝる一聯のアメリカの反擊はハワイ海戰以來九ケ月にして初めて出擊に轉じたものとして注目される。第一次、第二次ソロモン海戰について、こゝではその後の同方面の戰況を大摑みに申上げたい。第一次および第二次ソロモン海戰終了以來二ケ月以上に亘つてわが方は滿々たる自信をもつて沈默して來た。敵はこの沈默をもつてわが海軍に甚大なる損害を與へた證左なりと宣傳し、同方面の最高指揮官を更迭しなければならぬほどの敗戰の事實と次ぎ／＼に生起する自己の大損害を糊塗すると共に戰勢を挽回するためにその根幹兵力をこの方面に注ぎ込んで來たのである。

即ち敵は一擧に勝を制せんと同方面最高の艦隊指揮官ゴムリーをハルゼーに更迭すると共に、海上兵力の集中を行ひ自信をもつて十月二十六日出擊して來た。かくてサンタクルーズ諸島方面、北方洋上を壓する大激戰が展開された。これが南太平洋海戰である。この日敵は新鋭の戰艦數隻を基幹とする部隊をソロモンの海面に出動せしめて奪制運動を試み、他方有力なる航空母艦群および新戰艦各數隻を中核とし、乾坤一擲を期する根幹兵力をサンタクルーズ諸島北方洋上遠く、彼等のつもりでは所在を祕匿したものと信じながらわが手に乘ぜられてゐるとも知らず、勇敢に突込んで來たのである。わが艦隊は時まさに到れりとまづ先制的に大航空戰を展開し文字通りの殲滅的邀擊戰、追擊戰を敢行、黎明より夜間にわたる一日にして大本營の發表通り敵戰艦一隻、航空母艦三隻、その他の夥々たる戰果をあげたのである。本海戰が如何にわが方の壓倒的勝利であつたかは、次の一例をもつても容易に想像されるのである。すなはちわが艦艇のあるものは同日の追擊戰において晝間攻擊に大破して航行不能に陷つてゐる敵航空母艦ホーネットを發見したのである。接近して見ると敵驅逐艦が母艦に砲擊を加へこれを沈沒させて、わが方の捕獲を免れんとしつゝあつたのである。ところが敵驅逐艦はわが來襲に驚き忽ち母艦を捨てゝ倉皇として遁走したのである。わが艦隊は直ちにこの大破した敵母艦を捕獲し曳綱をかけ曳船に移つたのであるが、殘念ながら途中曳航不能に陷り遂にこれを處分致したのである。アメリカ海軍當局はこざかしくも本海戰の敵日前「ソロモン方面において海空軍の一大海戰が生起されるであらう」と自信たつぷりの豫告をしてゐる。傲慢なるその態度、人を嗤つたその宣傳これを「驕れる兵」と言はずして何であるか、果せるかな天譴は彼等に降つた。

翌十月二十七日はアメリカの「海軍記念

日」であつて奇しくもこの「光榮ある」記念日にアメリカ海軍に大惨敗の贈物が届けられたといふことは大東亞戰爭に對する「神の啓示」と申さねばならぬ。

かくの如くアメリカは第一次、第二次ソロモン海戰に次ぐ南太平洋海戰において敗戰を重ねてゐるに拘らず、ガダルカナル島に上陸せしめた部隊の救援補給と隱蔽までこゝを確保して對日反擊の足場たらしめんとして執拗な出擊を試み、海上においても絕えず彼我の間に熾烈な激鬪が繰廣げられたのであるが、十一月十二日より十四日にかけまたも激烈な海上決戰が敢行された。これが「第三次ソロモン海戰」である。

十一月十二日ガダルカナル島に輸送補給を敢行せんとして出現した敵有力艦隊および輸送船團に對し、わが海軍部隊は終日これに痛擊を加へ同日の夜戰において敵巡洋艦三隻を擊沈、翌十三日も追擊の手を弛めず敵航空基地に對しても猛攻を續け十四日夜に入り遂に同島沖に敵大部隊を擊破してわが部隊の上陸を敢行したのである。次いで同日夜に入りわが金剛を阻止せんとして出動した戰艦群を基幹とする强大な敵艦隊と遭遇、こゝに彼我ともに戰艦を交へての凄愴な大夜戰が展開されたのである。わが艦隊はまたとない好餌に全員の鬪志一丸となつて爆發、司令長官自ら陣頭に立つて水雷戰隊を隨へこの有力な敵戰艦に敢然として突入、眞に眩々相撃す肉彈戰を演じ怒ちにして戰艦二隻撃沈一隻撃破、その他大本營發表の通りの戰果をあげ、また敗殘の敵は負傷として敗走しこゝにわが方は部隊の擁護を敢行したのである。この海戰に於てわが方は戰艦一隻を失ひ一隻を大破したが以て本海戰が如何に激烈な死鬪決戰であつたかゞ窺はれる。再三の敗戰にも懲りず敵はなほもわが方を窺ひ反擊を試みんとしたのである。これを察知するや我が艦隊は猛然としてこの敵陣に突入、敵に萬大な打擊を與へた。これが十一月三十日ガダルカナル島付近に於ける「ルンガ沖夜戰」である。この日我が水雷戰隊は壓倒的に優勢なる敵艦隊に肉薄突擊し、遂に敵の主力たる戰艦一隻を屠り去つたほか巡洋艦一隻を撃沈、驅逐艦四隻を撃沈破した。かくて八月七日の第一次ソロモン海戰以來約四ヶ月の間に同方面において敵は戰艦四隻、航空母艦八隻のほか各種艦艇、輸送船をも含して百二十五隻を撃沈破、飛行機八百五十機以上を撃墜破した。これに對しわが方においても戰艦一隻を失つたほか輸送船をも合せて四十一隻、飛行機は未歸還機とも二百三十七機を喪失してゐる。

艦隊畫戰の實例

次ぎにわが海軍將兵がかゝる海戰に於て如何に戰つてゐるかについて二、三の實例を申上げたいと存ずる。南太平洋海戰に參加したわが航空母艦の或る勇士の話であるが、母艦の飛行機が敵を攻擊して撃墜する迄には實に七つの彈幕を突破しなければならないといふ事である。即ち母艦を飛び去つて攻擊に向ふわが艦載機はまづ敵戰闘機の防衛陣を突破しなければならない。ついで敵巡洋艦群の熾烈な對空砲火を受ける。これを突破すれば今度は空中に一面の幕を張るが如く敵驅逐艦群の對空砲火が待つてゐる。なほもこれを排除していよ〳〵敵戰艦或は航空母艦に殺到するのであるが、敵はこゝにも必死の彈幕を張つてゐるのである。この彈幕を縫つて必殺の猛攻を加へるのであるが歸途もまた同樣の砲火を逆に潜らなければ無事歸還は出來ないのである。かゝる困難な戰鬪であつて艦載機の犧牲が相當數に上るのもまたやむを得ないのである。既に第二次ソロモン海戰後二ヶ月間における未歸還七十八機、南太平洋海戰においても未歸還四十數機、第三次ソロモン海戰において自爆および未歸還四十一機といふ犧牲を出してゐる。これは主としてわが攻擊部隊の勇士達が敵擊滅に全力を注ぎ生還の如きは全く眼中になかつたことを物語るものであつてひたすら盡忠報國の一念に燃え、身をもつて敵擊滅の魁と散つた幾多の忠靈がかゝる戰果の蔭に冥るることを深く肝記し衷心より敬弔を捧げるものである。

また第三次ソロモン海戰においてわが驅逐艦は猛然敵艦隊の眞ッ只中に必殺の突擊を敢行まづ敵大型巡洋艦に雷砲擊を浴せて見事これを撃沈、これに續く

敵驅逐艦を砲擊をもつて一瞬に屠り、さらに逃げかゝる他の驅逐艦に猛砲火を浴せてこれを大破せしめるなど阿修羅の如き奮戰をなし、實に一驅逐艦をもつて敵巡洋艦一隻、驅逐艦二隻を屠つたのであるが、遂に壯絶な最期をとげてゐる。洵に壯烈無比な奮戰振りである。又十四日の夜戰において大破したわが戰艦は戰艦を中心とする敵有力部隊に遭遇するや直ちに照射砲擊を浴びせ、先制攻擊の集中弾により最初に狙はれた敵戰艦を撃沈さらに攻擊の中心となつて奮戰を續け、他の敵戰艦をも大破したのであるが、敵戰艦群のわが戰艦に對する集中攻擊は熾烈を加へつひにわれもまた大破してやむなく艦列を離れた。しかし最後まで堂々その威力を示したわが戰艦の奮戰は海軍傳統の敢闘精神を遺憾なく發揮したものといへよう。

戰爭の現段階

右のやうな各海戰の推移、戰鬪の狀況によつても判然するやうにこれらの各海戰はまさに凄愴なる「海上決戰の連續」とみることができる「海上決戰の連續」といふことは從來の海戰にはみられなかつたことであつて、近代海戰の特質を物語るものである。これは主として航空兵力が作戰上極めて重要なる要素としての價値を實戰的に立證するにいたつたこと、且つ敵が强大なる生產力に基礎づけられてゐることなどによるのであるが、殊に相次ぐ海上決戰による敗北にもかゝはらず、敵は戰意を喪失するどころか「最後の勝利われにあり」と呼號し新手々々をもつて執拗なる抗戰を持續しつゝあるこの現實を見逃す事は出來ない。

日露戰爭においては日本海の決戰による敗北によつてロシアは遂に戰意を喪ひ、戰爭が比較的短期に終幕したに反し、今次大東亞戰爭においては戰爭の終末は簡單には決せられないのである。この點が過戰爭の本質的に異るところであつて特に注意を要するのである。つぎに何故にかくもソロモン方面を重視しこれが確保に堂死の努力を傾倒してゐるかにつき今少しく述べてみたい。

と思ふ。

本格的戰爭第二年へ

元々ソロモン方面への敵の出撃はかつてない大規模な積極作戰であつた。現にアメリカ政府はこれをもつて「日本に對する大決戰である」と宣傳し國民もまた「日本軍の眞珠灣攻撃後八ケ月にして日本の手から主動的立場を取戻した」と有頂天に喜び、殊に相次ぐ敗戰は隠蔽され戰勝のデマ宣傳しか敎へられないアメリカ國民はいよ〳〵氣をよくして「アメリカ及び聯合軍は今や太平洋に於て一大攻軍を開始した。太平洋の潮流は逆流しはじめたのである」とまるで日本軍を叩きのめしたかのやうな錯覺に陶ひ、アメリカの軍事評論家たちも「太平洋勢力の均衡を破る一大決戰である」としてソロモンを繞る海戰に大きい期待をかけてゐたのである。然し嚴たる事實は否定すべくもない、現に軍事評論家として知られるハンソン・ボールドウインの如きは最近太平洋の前線を視察して歸國、ニューヨークタイムス紙々上に於て第一次ソロモン海戰を批判し「アメリカ艦隊は航空機から日本艦隊接近の報告を受けてゐるにも拘らず、まるで坐つてゐる家鴨のやうに面喰ひ僅か二、三發發砲したに過ぎない。責任はひとリゴムリー提督にのみ歸すべきではない。米將兵は防戰一點張りの心理を暴露してゐるが、これを是正せぬ以上アメリカは敗北するかも知れぬ」とアメリカ海軍省の發表を無視して暗澹たるアメリカ艦隊の敗戰ぶりを傳へてゐるのである。しかし現に陸上戰鬪における陸軍部隊の戰鬪も海戰同樣死鬪血戰であつてこの點特に銘記しなければならぬ。同方面においては現在否この瞬間においても幾多の勇士が肉彈となつて敵と交戰禮國の華と散つてをられるのであらうと存ずる。われ〳〵は同方面の戰鬪の壯烈さを考へるとき肅然として總身の引締るのを覺えるのである。然しながら先程も申上げた通りソロモン方面より敵を撃攘するだけでは、戰爭の勝敗は決せられないのである。それはアメリカが甚大なる生產力を動員し對日反攻の戰備を強力に整備しつゝあり、その戰意亦旺盛であるからである。ではアメリカの最近の戰備擴充狀況は如何なるものであるか次にこの點を大觀しやう。

敵の戰備狀況

大東亞戰爭開戰當初アメリカ海軍の保有量は、アメリカ側の公表によれば戰艦十七隻、航空母艦七隻（ほかに特設空母二隻）、巡洋艦三十七隻、驅逐艦百八十五隻、潛水艦百十八隻と稱してをつたのであるが、最近に至る約一ケ年間においては戰艦九隻、航空母艦十隻、巡洋艦二十九隻、驅逐艦約五十隻、潛水艦約五十隻を喪失してゐる。ところがこの間アメリカは中破以下の艦艇を修理するとゝもに大建艦計畫を擡起となつて促進し、戰力の補給に主力を注ぎ込んでゐる有樣であつて、その實數は未詳に屬するが外國新聞などの傳へるところによると開戰以來戰艦四隻、甲級巡洋艦六隻、航空母艦や特設航空母艦十隻以上竣工したといはれ現に各海戰に出現しつゝある新艦艇の例よりしても新艦艇の建造も相當數に上

るものと見なければならない。またアメリカは開戰以來從來固執し來つた戰艦第一主義を一擲して航空母艦重點方針をとりこれとゝもに航空機の飛躍的遂成に乘り出してゐる。これはアメリカの戰略思想の變革を表明するものであるが、今後アメリカは航空母艦を始め多數の艦艇を建造生產するであらうし、殊に航空機の如き最近にあつては月產四千機を突破すると稱してゐる狀況であり、商船の如きは十一月には一萬トン級の商船八十四隻建造に成功したと稱してゐるのである。かゝる數字は額面通り受取る必要はないとしても、アメリカの生產力が現在作戰の要求に相當程度即應しつゝある事實は決して輕視を許さないのである。もとよりわが方にあつても所要の戰備は着々として整備されつゝあり、殊に精鋭なる新戰艦數隻がすでに就役堂々第一線の護りに就いてゐるほか開戰以來の戰訓をとり入れたわが獨特の航空母艦も巡洋艦その他の艦艇とゝもに續々と建造就役中である。わが海上勢力は日を追うて威力を加へつゝあるのであつて誠に力强い限りと申さねばならない。

敵が如何に戰備を整へ反撃を繰返すともすでに撃摧されたわが戰略體制は嚴として固く勝算は炳乎としてわが掌中にあるのである。いかに前線の將兵が訓練行届き敵撃滅の精神に燃えて作戰に從事するとしても、それに所要の精鋭なる武器を供給し得なければ敵撃滅に萬全を期することはできないのである。國民一人々々が實戰に參加してゐるのだといふ認識、國民の各自がその職域に死力をつくすといふ精神これが戰爭遂行の重要なる要素であり、戰爭勝敗の鍵を握るものであることを銘記すべきである。

戰爭の本質と國民の覺悟

申すまでもなく戰爭の目的は敵の抗戰力を徹底的に撃滅し、その戰意を喪失せしめ以て最後の勝利を制するにあり、從つて各戰鬪に勝つたゞけでは勝利とは申されぬ、假りに百回の戰鬪において九十九回勝ち續けたとしても、最後の一戰に致命的敗北を喫すればその戰爭に勝を制することは出來ぬ。我が國においても開戰以來の各戰鬪に勝ち續けてゐるからこの戰爭に今後も悉に勝てると思ふことは危險である。殊に今次の戰爭は最後の勝利を獲得する迄は妥協の餘地のない戰であつて、中途半端で中止出來るやうな生優しい戰ではない。現に前駐日アメリカ大使のグルーは歸國後「日本國民を平服さすには實戰に於て徹底的に撃滅する以外にはない」と强調してをり、また南太平洋海戰直後アメリカ政府の意を體したラジオ評論家ウイリアム・ウインターは「アメリカ海軍の大目的は日本を永久に地球上より抹殺するにあり」と天人倶に許さぬ暴言を吐いてゐるのである。眞に嗤ふか嗤はれるか、叩きのめすか、のめされるかである。それが戰爭の實質であり今次世界戰爭の假借なき「激しい委」である。かゝる戰爭である故に一戰に勝ち、二戰に勝ち最後まで勝ち拔かねばならぬ。勝ち拔くために武力戰の强力なる遂行とそれを基礎づける生產戰に旺盛なる進軍を必要とすることは申すまでもないところである。

長期間に亘る間には、わが方にあつても相當の犧牲は當然覺悟しなければならぬ。「七轉び八起き」といふ言葉があるが、敵は幾度か轉ばされてゐるにも拘らず、なほ起上り得ると自負してゐる。現に彼等は「損害を受けたらそれを補給すればよい、敗北したとしても勝利の日が幾分遠くなるだけである」といつてゐるのである。戰局の一張一弛に一喜一憂するが如きことあつてはこの大戰爭を勝ち拔くことは出來ぬ。もとより長期戰と申しても眞に戰爭の大勢を決する重大な時機はこゝ一兩年とみるのが妥當であらうと思ふのである。しかし戰爭を短期間に終熄せしめるも否も一に軍といはず、官といはず、民といはず、全國民總てを擧げての決意と協力如何にかゝつてゐるのである。

われ〳〵は過去一年の勝利によつて將來の勝利への基礎を强化した。この基礎に立つてわれ〳〵は今年こそ勝利への大道を決定的なものにしなければならないのである。

申すまでもなく大東亞戰爭はわが皇國以來の大義に則る聖戰であり、三千年來强力に培はれて來た國民の總力を擧げての血戰である。大義あるところに天佑あり、人事を盡すところに神助が顯現されるのである。努力せず最善を盡さずしてどうして天佑神助を期待出來よう、いまや前線の將兵は眼中に榮譽もなく地位もなくひたすら　大君の御ため國家のために全身全靈を敵に叩きつけた九軍神と同じ精神をもつて戰つてゐる。きうして常に不可能事を擔身と精根を盡して可能ならしめてゐる。この赤誠、この氣魄は日本人たる限りたゞ一人として持たぬ者はない筈である。たゞ問題はこれを自覺しこれを顯現するか否かにある一面よりすれば心の米英をも撃滅し米英的精神理念を完全に驅逐するか否かにあるともいへる。生産戰においても思想戰においても日常生活の部門においても同樣のことがいへる。要は時あらば總てを捨て　天皇陛下に歸一し奉る日本臣民の直な心に還ることである。かくして神國三千年の歷史は儼として護り了せるであらう。明日は十二月八日であるが、この日を單に過去の赫々たる戰績を回顧する記念日であらしめてはならぬ。開戰第二年の十二月八日は實に完全に敵を撃滅する本格的戰爭の「新發足日」なのである。決戰は今戰はれてをり尙續いてゐるのである。

南太平洋の作戰について

大本營發表　週報第三一三一號掲載

（一八・二・一七發行）

（二月九日十九時）

一、南太平洋方面帝國陸海軍部隊は、昨年夏以來、有力な一部をして遠く挺進せしめ、敵の强腰なる反攻を牽制破碎しつゝ、その掩護下に、ニューギニア島及びソロモン群島の各要線に戰略的根據を設定中のところ、既に概ねこれを完了し、こゝに新作戰遂行の基礎を確立せり。

二、右掩護部隊としてニューギニア島のブナ附近に挺進せる部隊は、寡兵克く敵の執拗なる反撃を撃攘しつゝありしが、その任務を終了せしにより、一月下旬陣地を撤し他に轉進せしめられたり。

同じく掩護部隊としてソロモン群島のガダルカナル島に作戰中の部隊は、昨年八月以降引續き上陸せる優勢なる敵軍を同島の一角に壓迫し、激戰敢闘克く敵戰力を撃摧しつゝありしが、その目的を達成せるにより、二月上旬同島を撤し他に轉進せしめられたり。

我れは終始敵に强壓を加へこれを屈伏せしめたる結果、兩方面とも掩護部隊の轉進は極めて整齊壯實に行はれたり。

三、現在までに判明せる戰果及び我が軍の損害は、既に發表せるものを除き左の如し。

（一）敵に與へたる損害

人員	二五、〇〇〇以上
飛行機撃墜破	二三〇機以上
火砲破壞	三〇門以上
戰車破壞炎上	二五臺以上

（二）我が方の損害

人員　戰死及び戰病死	一六、七三四名
飛行機　自爆及び未歸還	一三九機

昨年七、八の候以來南太平洋ソロモン群島及びニューギニア方面において、日米兩軍の激戰が展開されてをりました。累次の海戰については既に發表されてをりましたが、陸軍の關係は作戰進展中のため今日まで秘密に附されてゐたのでありますが、二月九日以上の如き大本營發表があり、次いで翌十日、貴衆兩院の議員總會において、政府委員から大要左の如き說明があり、今日までの實情の概況が發表されました。

南太平洋方面の作戰經過

昨年八月七日、米海兵隊約一個團が有力なる海軍護衛の下に、ソロモン群島中のガダルカナル島、ツラギ島等に上陸し、五月下旬以來ガダルカナル島を占領してゐた我が海軍の小部隊を襲撃して來たのであります。この通報に接した陸軍は、直ちに太平洋方面に行動中の某支隊を急派し、次いでその他の方面からも兵力を抽出增派しました。派遣された第一線指揮官は、友軍である海軍部隊の危急を救ふため、獨力優勢な敵に對し攻撃を敢行し、或る部隊の如きは敵中深く突進し、敵飛行場にも進入して、敵に大なる打撃と脅威とを與へたのでありますが、遂に敵撃滅の目的は達するに至らなかつたのであります。

爾後さらに兵力を增加して、南太平洋方面における戰略的根據地を設定し、今後の大作戰遂行の基礎確立を掩護するため敵をこの方面に牽制するの任に當らしめましたが、ガダルカナル島の地上作戰に協力すべき我が飛行隊の兵力は、僅少であつたばかりでなく、協力飛行場はガダルカナル島から一千キロ以上も遠く隔つた位置に在つたのに對し、敵軍は機械力を利用して短期間内に多數の飛行場を設定し、これに優勢なる飛行隊を續々增派して來たゝめ、我はガダルカナル島方面の制空權を獲得することが出來なかつたのであります。敵は制空上絶對優位の下に、さらに兵力を增加し、飛行場周邊には堅固なトーチカ陣地を構築しました。

我が作戰根據地から海洋遙かに隔絶したこの堅固なる陣地に對し、しかも敵制空下に遠く海上機動を行つて攻撃することは、洵に至難の業であります。

またニューギニア方面にある敵は、濠洲を根據地とする米濠聯合軍であります。敵は既に昨年八月頃からポート・モレスビーに駐屯してをつた濠洲軍に對し逐次兵力を增加してをりました。

この敵に對し、我が一部隊は、昨年七月上旬ブナに上陸し、九月初めスタンレー山脈の線を突破し、一旦ポート・モレスビー近く迫りましたが、全般の關係上、ブナ附近海岸線附近の部落を固守して、ガダルカナル島部隊と同樣に、南太平洋方面における戰略據點を設け、今後大作戰遂行の基礎確立を掩護するため、敵を該方面に牽制するの任に當らしめたのであります。

かくしてソロモン群島中のガダルカナル島並びにニューギニアのブナ附近守備の我が部隊は、爾來半歲の久しきに亘つて、酷熱でしかも濕潤なジヤングル地帶内に在つてあらゆる困苦缺乏に堪へ、寡兵克く執拗な敵の反撃に對し常に果敢な攻撃に次ぐ攻撃を以てし、如何に損害を蒙つても飽くまでもこの要地を固守し、敵を牽制してをつたのであります。その間ビルマより西蘭印諸島、北部ニューギニア、北部ソロモン群島を經てマーシヤル群島及びそれ以北に亘る線に部隊の配備を終り、戰略據點を確保し、今後の大作戰遂行の基礎を確立することが出來たのであります。

そこでブナの掩護部隊は一月下旬以來、ガダルカナル島の掩護部隊は二月上旬、それ〴〵撤退を開始して新任務に向つて轉進したのであります。兩方面の掩護部隊の撤退は、敵の制空權下、特にガダルカナル島方面においては敵機敵艦の跳梁する中でありましたが、船による困難な撤退が常に我が軍の制壓下に、敵を懲伏せしめつゝ、整齊確實、且つ悠々とこれを完了したのであります。

ガ島、ブナ方面作戰の戰術的意義

我が軍は此島、マライの結戰に大戰果を擧げてから、引續き敵に息をも繼がせず總追撃に移り、大東亞における敵の戰略據點と重要資源地域とを悉く神速果敢に攻略するため、ビルマからスマトラ、ジヤワ、セレベス、チモールを經てニューギニア及びソロモン群島の線に向ひ、一擧に敵を急追したのであります。

この我が軍の總追撃の最尖端に突き進んだ追撃隊が、このガダルカナル島及びブナ方面の部隊であります。

一方、敗退に敗退を重ねた敵は、濠洲及びその附近の根據地庇護の下に新たな增援兵力を傳てニューギニア及びソロモンの線において我が軍の追撃より逃れ、立ち直つて反撃に出たのであります。

こゝにおいてニューギニア、ソロモン群島の線で我が追撃と敵の反撃とが期せずして一大遭遇戰を惹起したのであります。

かゝる狀況により、ガダルカナル島及びブナ方面に向つた追撃部隊は、戰術的にみれば、丁度この日米大遭遇戰の前衛の役割を果してをつたのであります。本隊の展開、即ち本隊が後方要域において戰略態勢を確立するのを掩護するため、敵の反攻準備がまだ整つてゐない以前に、敵地深く進撃したのであります。

抑々遭遇戰における前衛の任務なるものは、要地に向つて獨力攻撃し、或ひは要地を占領して敵を拘束し、この間、我が本隊に整然たる展開の自由を與へるにあるので

ありません。

ガダルカナル島は、米國の反攻據點である濠洲と、米本土との連絡路を脅威するところに位置し、敵側にとつては密に大切な所であります。またソロモン群島及びその附近においては良好なる航空基地があるところであります。そのガダルカナル島に向つて我が部隊は獨力攻撃を敢行したのであります。

ブナ部隊も同じく前衛の役割を占め、獨力攻撃を敢行し、側後ブナ附近の要地を占領して本隊の展開掩護に任じたのであります。

この兩部隊の獨力攻撃により、敵は濠洲及び米濠連絡路を脅威せらるゝ痛さに堪へ兼ねて、その出し得る力を擧げてニューギニアの一角及びガダルカナル島に反撃して來たのであります。

かくしてソロモン群島中、四國の半分にも足らぬ叢雲たるガダルカナル島とニューギニアの一角が、日米遭遇戰の焦點となつたのであります。

この戰闘の焦點、特にガダルカナル島には、我が海軍部隊の一部が敵に先んじて上陸し、その一角を保持したのでありますが、遺憾なことは航空基地が敵の領有に歸したため、我は戰術上、甚だ不利となり、特に海上補給が非常に難しくなりました。しかし我が部隊はこの困難を堪へ忍び、半歳餘の久しきに亘つて惨戰苦闘を續け、しかも、この不利な立場にありながら絶倫精強的に、攻撃に次ぐ攻撃を以てしたのであります。

その間闘勢力によつて米國の太平洋方面に向けてをつた海陸空の全力をソロモン、ニューギニア方面に集制しました。そのお蔭で本隊たる諸部隊をして、ビルマより蘭印諸島、ニューギニア、北部ソロモンを經て、マーシャル及びその以北に亘り確實に戰略展開を完了し、戰略據點と重要資源地域とを悉く包藏する大東亞共榮圏の外壁として、且つ今後の攻勢作戰の足場として、これを固めることを得しめたのであります。

本隊の戰略展開が餘りに迅速整齊に出來たので、世人の注意を惹かなかつたのでありますが、この展開、即ち大東亞の外壁を固めることは實に容易ならぬ大事業であるのであります。

しかるに米軍にとつては、濠洲や米濠連絡路に脅威を感ずる痛い所とはいへ、ソロモン諸島やニューギニアの一角に半歳餘に亘つて全く牽制せられて、我をして他の全域を悠々と固めさせた米軍戰略の間違ひさ加減は、まことに笑止千萬であるといはなければなりません。

ガ島、ブナ方面より轉進の理由

次ぎに何故にガダルカナル島、ブナ方面の部隊が撤退したか、といふことについて述べませう。

遭遇戰において、前衛が要地を獨力攻撃する場合には、通常本隊はこの前衛の戰闘に逐次加入して敵を攻撃するのが本則であります。しかし時としては、前衛をして前方の要地に戰闘せしめ、本隊はその後方に展開して戰闘準備が出來ると、前衛を却つ

て本隊の線に後退せしめる方式があります。この方式を戰術上、後退展開といひます。南太平洋の遭遇戰には、この後退展開の方式が採用されたわけであります。

その理由は次ぎの通りであります。

(一) この作戰は、我が軍が比島、マライの線から何千キロに亘る大追撃を行ひ、その追撃の末端において起つたところの遭遇戰であつて、彼我各々その資源地からの距離は比較になりません。從つて彼我展開の速度に大なる懸隔が出來ることは免れません。故にもし我が本隊が、通常の場合のやうに、ガダルカナル島の前衛の線に逐次加入して決戰を行ふとするとなると、展開速度において大なる懸隔がある以上、戰闘は頗る不利となるのであります。

元來、後退展開といふ方式は、敵に比し我が展開速度が遅くなつたとき、終始劣勢な兵力を以て優勢な敵と對戰する戰術上の不利を信はんがために採用されるものであります。次ぎに、

(二) ガダルカナル島の敵航空勢力に對し、我れまたニューブリテン、北部ソロモン群島方面に航空根據地を進めましたが、地形の關係と距離の關係上、ガダルカナル島並びにその南方に組織された敵の航空根據網に對し空中優勢を獲得することは、短時日の間には殆んど不可能であります。從つて敵の制空權下に、しかも遠距離に亘る海上輸送によつて、兵力、軍需品をガダルカナル島に展開集積するには、莫大な船舶の損害を覺悟しなければならないばかりでなく、彼我の戰力集中において我が方は著しく不利に陥るのであります。次に、

(三) 將來、積極作戰を企圖する我が軍としては、一歩でも二歩でも前方に地歩を占めて置くことは必要には違ひありません。ガダルカナル島方面に我が軍が進出したことは、米濠連絡路に大なる脅威を與へるので敵にとつては痛いのであります。しかも我が方にとつてはガダルカナル島そのものは大局的には大きな影響はありません。

かゝる島一つのために船舶その他、莫大なる損害を賭して敵の制空權下、戰術上不利な場所において決戰を求めることは兵家の最も戒むべきところであります。

しかしながら北部ニューギニアより北部ソロモンに亘る線は大切なところであります。

ブナ方面はガダルカナル島方面とは少しく事情が違つてゐますが、航空根據地と補給の困難な點において戰術上の理由はほゞ同一であります。

以上、三つの理由により遭遇戰の後退展開といふ方式を採用し、ガダルカナル島、ブナ方面の部隊を撤退せられたのであります。

これら部隊の撤退は、該部隊が孤軍奮闘克く敵を牽制し、この間、本隊たるべき我が軍主力をして戰略展開を整齊確實に完了し、大東亞共榮圏の外壁を固め、次ぎの積極作戰の足場を獲得する目的を達成し得たるが故に、これ以上孤立戰闘の必要なしと認め、撤退せられたのであります。

特筆すべき三點

以上、南太平洋作戰に關し戰術原則に照らして說明したが、この作戰に關しては、次ぎの三つの重大事實を述べなければなりません。

その第一は統帥上の英斷であり、その第二は陸海軍の協同であり、その第三は軍隊の苦心と功績であります。

（一）統帥上の英斷について

決戰は最も有利な條件の備はる場所で行ふことを、戰略の原則は要求してゐます。

ガダルカナル島やブナ方面に出て決戰することはわが足場が遠く、特に航空根據地と補給の關係に格段の差があり、敵を著るしく有利ならしめるものでありまして、戰略上好んで採るべき策ではないのであります。

昔、柴田勝家の部將佐久間玄蕃は挺進して江州の賤ヶ岳を占領しましたが、次いで秀吉の大軍の攻勢を受けた時、佐久間玄蕃の挺進隊は柴田勝家の本隊が越前において戰鬪準備を整へてゐたので、賤ヶ岳に執着することなく、秀吉軍と決戰を避け、速かに勝家の許に撤退すべきであつたのであります。ところが暴虎馮河の勇はあつたが、大局をみる智略に乏しい玄蕃は、賤ヶ岳に執着してこの擧に出ず、機略に富む秀吉はこれを各個に撃破し、しかもこれに尾迫したため、柴田勝家の本隊も一擧に崩れて、越前北ノ庄に勝家は敢へない最期を遂げるに至つたのであります。

しかし、かゝる過去の戰例についての批評は容易でありますが、現實に一小部隊であつても撤退することは、なか〳〵容易ではありません。特に日本軍は撤退を好まない、また撤退は最も不得手とするところであるにも拘はらず、陸海兩統帥部の英斷によつて遂にその難きを斷行し、以て、本隊を整齊確實に展開し、最も有利なる條件を具備する決戰の場所を求め、第一線部隊また長時日に亘る困難苦鬪、よくその牽制の任を達成し、且つ最も困難なる撤退を沈勇大膽よく整然とこれを斷行したのであります。

（二）陸海軍の協同について

開戰以來、帝國陸海軍は水も洩らさぬほど緊密な協同を續け、また現に續けてをるのであります。南太平洋の作戰におけるわが陸海軍は、最早や協同などゝいふなまぬるい言葉では表現できません。全く渾然一體であります。

即ちガダルカナル島に先遣された我が海軍部隊が敵の來襲に遭ひ、苦戰に陷つたとき、陸軍部隊はこれに駆けつけ、友軍救援の熱情に燃え、兵力の劣勢も彈藥の補給も意に介しないで、全滅を賭して敵に猛當り的攻撃を斷行したのであります。

次いで陸軍部隊が苦戰に陷り、しかもその苦戰が全く後方からの彈藥糧秣及び補充員の海上輸送の困難にあることを知つた我が海軍部隊は、危險と損害とを顧みないで、最初は運送船の護衛に任じてゐましたが、敵制空權がいよ〳〵強化され、遂に運送船を以て近づくことが出來ないやうになつてからは、兵員はもとよりのこと、兵器・彈

藥・糧秣さへも軍艦によつて輸送されたのであります。

軍艦は元來輸送には必ずしも適しません。その積載量は少いのであります。從つて往復も幾十往復も、敵の制空權下、爆彈と魚雷の中を、たゞ〳〵友軍補給の熱情に燃えて、文字通り不眠不休の活躍であります。なかんづく、陸軍航空部隊の進出するまでは、專ら海軍航空部隊が遠い基地から飛來して、陸軍部隊の苦痛を救はんがために、時には基地に歸る油の消滅するのも忘れて戰つてをつたため、海中に不時着したものも決して少くないのであります。

陸軍將兵はかうした海軍將兵に對して代して感謝の誠を捧げたのであります。かゝる海陸眞に一體となつての適切巧妙なる作戰指導により、敵機敵艦の跳梁下に、船に據る未曾有の困難な撤退行動が殆んど損害を受けることなく、整齊整々と出來たのであつて、これは全く戰史に例の無いことであります。

（三）軍隊の辛苦と功績

(1) ガダルカナル島、ブナ兩方面の部隊とも、我が作戰基地から遠く離れて敵の航空威力圏内に深く突進し、敵機の跳梁下にあつて戰鬪を繼續したのであります。一兵といへども天空に暴露する時は、忽ち敵機の熱烈な攻撃を受けます。一日兩三回のスコールに濡れた軍衣を天日に乾燥するか、または炊事する煙は直ちに好目標となり、銃爆撃を誘致します、この間における部隊の勞苦は察するに餘りがあります。

殊に敵の制空權、制海權下の補給輸送の困難さは言語に絶するものがあります。敵航空機、または潛水艦の攻撃を受けながらも、勇敢なわが船員諸君は克くこの困難な任務を成し遂げたのであります。

このやうな狀況でありますから、揚陸された軍需諸品は僅少であり、從つて主食の如きは一日一合にも足りません。時には數日間支給されず、しかもその米は埠頭設備もない海岸に揚げられ、海水に浸されてをります。炎熱下に放置した米は腐敗してをりますが、これを敵機の目を盜んで數回分同時に炊飯しなければなりません。さらに喫食するまでには炎熱とスコールのためいよ〳〵腐敗の度を加へ、これに僅かばかりの粉味噌をふりかけて流し込むといふ有樣であります。

副食物の如きは殆んどありません。久し振りにたゞ一度梅干一つがわたりました時には、將兵は子供のやうに手を拍つて喜び、後方部隊の勞苦に對して泣いて感謝したといふことであります。從つて將兵は木の實を摘み、草の根を掘り、苟くも毒でないものは悉くこれを取つて飢渇を凌ぎ、海水を飲んで饑氣をとつたのであります。椰樹に銃劍を突き刺し、またはジャングルの蔦を軍刀で切つて、そこから滴る水で咽喉をうるほして數日夜を送つた者もあります。

敵を前にして上下相信じ、ます〳〵その團結は強化せられたのであります。難局に處して上官は部下を、部下は上官を思ひ、一握りの糧を互ひに分ち合ふといふ劇的な場面は各所に見られたのであります。作戰地はいはゆる瘴癘の地であるため、マラリアに冒され、或ひはデング熱に惱まされたのでありますが、安靜を保つべき民屋など

はありません。しかし、我が勇士は一言半句の不平も言はず、不満ももたずに、戰友同志勵み合ひ、慰め合つて戀ゆるやうな敵愾心を米軍に結集し、叩きつけて、日夜敢然として戰ひ續けたのであります。

(2) こんな困苦缺乏の中にも、我が軍は毫も受身の防禦はしてをりません。終始攻撃に次ぐに攻撃を以てし、常に敵を壓倒してをります。昨年十二月十三日、某部隊の中澤少尉丁兵斥候(長以下五名)が至嚴な敵の警戒網を潛つて敵陣地内に挺進潛入し、飛行場にあつた飛行機二、給油タンク二、探照燈一を爆破して敵の心膽を寒からしめてをります。また寺澤少尉工兵斥候(長以下五名)も同夜ルンガ河下流の敵陣地を爆破し、敵に大きな損害と不安危惧感を與へたばかりでなく、爾後における作戰指導上、有利な資料を得て歸つてをります。

なほ、歩兵重火器、迫擊砲、一部砲兵を以て、敵の宿營地に對し火力奇襲を行ひ、或ひは小部隊によつて俘虜獲得を行ふ等、優勢な敵を翻弄してゐるのであります。

かゝる果敢なる行動が克く敵を牽制し、しば〳〵有力なる米艦隊を誘致し、精鋭なる帝國海軍に大戰果を擧げる好機を與ふる原因であつたと思ふのであります。

(3) また某部隊長は、困難な密林を長驅機動した後、夜襲を以て敵陣地に突入したが後援が續きません。敵中に孤軍奮戰すること一週間、最後に手兵十數名となつて部下を無理に後方に遁し、自らは壯烈なる戰死を遂げたのであります。「男子我れ防人となる甲斐そあれ、東半球の果てに死ぬれば」とは、その部隊長の辭世であります。かやうに敵國降伏を祈り、七生報國を誓つて散華した戰友は幾多あります。

(4) この勇戰奮鬪鬼神を哭かしめた我が軍の活躍狀況は、これを敵國側の報道について見ると明らかであります。即ちクライブ元陸英大使はテレグラフ紙に書を寄せ、ソロモン及びニューギニアにおける日本兵の頑强極まる戰鬪は、死を恐れざる 天皇陛崇の信念に基づくものにして、歐米諸國の兵と異りその如何に恐るべき敵なるやを證するものである。對日作戰の特異性は寧ろ日本軍將兵そのものに在ると警告してをります。

またブナ附近の戰鬪に參加したロンドンタイムス記者の目擊談によると、

「米軍は二ケ月に亘り猛攻し、その情景凄慘を極め、日本軍の一部隊は遂に包圍せられたのであるが、米軍の降伏勸告を拒否し全滅したり。日本軍指揮官は、降伏か退却かのいづれかを選ぶべきやの場合は、敢然として最後まで戰ひ拔き、將兵は皆 陛下の御爲に死ねば來世は皇室の藩屏となり再び生れ來るべしとの信念に燃え、その背嚢には寫眞と共に遺髮を入れ、死を決しあるを見た」と。

また英國新聞は「ガダルカナル島における日本兵は、犧牲的精神を發揮し、頑張つてゐる。八月上旬同島に上陸した米國軍は、有利なる態勢を保持してをつたのに拘はらず、數ケ月以上を經たる今日なほ、日本軍を撃退し得ないのであつて、この日本將兵の勇敢な態度なるものは、皆 皇室に對する宗教的精神から出てゐるものだ」と述べてゐます。

(5) タイムスの臺灣特派員は、最近ニュ

ーギニア戰線に關して次ぎの如く述べてゐます。

「四ケ月のニューギニア戰爭は我々に實に尊い教訓を與へた。第一に、日本軍の根據地を一つ〳〵奪取し、一つの島から他の島へ飛び、かくして日本軍の現在の內線的戰略地位から追ひ出さうと企てゝゐる我々の作戰は、結局遠方もない長期戰となり夥しい人命の犧牲を必要とすることが明らかとなつた。たとへ制空權や制海權を我々が握つても、もつと直接的打擊を加へぬ限り日本軍を搖蕩することは出來ない」

むすび

ガダルカナル島、ニューギニア方面の我が部隊の困苦缺乏、難戰苦鬪の偉功は、繼續し述べたやうに、大東亞共榮圏の外壁を固め、來るべき大作戰の根據を確立し得しめ、また帝國海軍をしてしば〳〵偉大なる戰果を擧げる機會を作るにも與つて力を効した戰略的大功績のほか、以上、敵の口を閉して語らしめたやうに、我が將兵の忠誠勇武、猛烈果敢の奮鬪は、克く敵の心膽を寒からしめたのであります。

これらの部隊の偉大なるこの犧牲は、大東亞戰史に不朽の光を殘すことは勿論であります。しかし我々は、米軍に萬斛の恨みを殘して、斃れて行つたこの勇士達の仇は、必ず討たねばならぬのであります。

戰線銃後、一體となり、一億眞に一丸となり、今日までに戰ひ得た有利な戰略態勢と重要資源とを活用して、今後いよ〳〵戰力を擴充し、ます〳〵積極作戰を展開し、米英を必ず屈伏せしめずんばやまぬところの、熱鐵の覺悟をいよ〳〵固めなければならぬのであります。

日本が米國の存立を脅かしたことが爪の垢ほどでもありませうか、しかるに彼は徒らに日本國民を輕侮し、壓迫し、經濟的にも軍事的にも帝國の存立を危からしめ、こゝに帝國は自存自衛の絕對面に追ひ込められて必死となつて蹶起したのであります。

戰爭勃發後ルーズヴェルトは、その戰爭目的をデモクラシーの擁護といつてみましたが、それでは國民の戰意が燃えず、よつてルーズヴェルトは昨年四月、この戰ひはウオー・オブ・サーバイバル、七月ハル國務長官はウオー・オブ・エキジステンス、すなはちこの戰爭を無理矢理に「生存のための戰」だとこじつけて戰爭目的を僞造し更に滑稽なのは、昭和十六年十一月二十六日、日本に挑戰狀を叩きつけながら、パールハーバーの奇襲を種子に、戰爭の挑發と戰略上の奇襲とを混同して、必死になつて國民の敵愾心を煽動理遣してゐるのであります。

戰爭目的の僞造、敵愾心の捏造、米國の政治に何處に正義や人道があるのでありませうか。たゞ暴戾の一語に盡きるのであります。

米國の指導者が暴逆であるだけ、政治に正義が無いだけ、外交や理論で話せる米國ではありません。我等はどうしても勝つて勝ち拔いて、眞に日本人の實力を彼等の眼に物見せて、正當なる禮儀を以て我に對して來るやうに至らしめなければならぬのであります。

これがためには、今後、敵の反攻を片ツ端から撃碎するのみならず、進んで彼等の心臓部に我がメスを加へなければ、傲慢なる米人の戦意を放棄せしむることは難しいでせう。よつて我等は一億國民の創意と工夫と努力と誓願により、職場において、工場において、農場において、家庭において今日の決戦、明日の決戦を戦ふと共に、多少時日はかゝつても、米國の心臓に必ず我がメスを、加へなければならぬのであります。我等は眞剣にこれを準備してをります。

かうして戦ひ抜いてこそ初めて我等は、今日犠牲となられた一萬數千の英靈に、更に大東亞戦全戦役の英靈に、ほんたうに解かに眠つていたゞくことが出來るのであります。

南太平洋の戦況について

谷萩大本營陸軍報道部長談（一八・二・二〇中部ニ本新聞掲載）

廣島市における「決戦完勝の講演」のため二月十九日來廣した谷萩大佐は同講演に先立ち記者團と會見し「南太平洋の戦況」について次のやうな談話を發表した。

先きに帝國陸軍部隊は海軍部隊と緊密なる協同の下に大東亞諸地域より米英惡勢力を一掃するや西は支那、ビルマ、南はジャワ、ニューギニア、ソロモンを經て北はアリューシャンより北邊に亘る戦略要點を確保した。

敵米英は焦慮措く能はず急遽戦備を充實して受動より主動へ轉換し、一つは自國民の出鼻を押へ一つは反樞軸諸國並に中立諸國の信望を繋持せんと努めその具體的現れとして昨年十一月北阿に對する米英軍の上陸作戦と、昨年八月上旬ソロモン及びニューギニア方面に對する反攻となつた。そこで我がニューギニア及びソロモン方面陸軍部隊は後方要域における戦略態勢の確立を容易ならしむるため敵の反攻準備整はざる前に進んで我より攻撃を加へ、敵の企圖を粉碎すべく掃蕩部隊を敵地深く派遣挺進せしめた。

昨年の初夏のことである。當時この部隊の進出が敵側に如何に衝撃を與へたかは次の一例をみても肯かれる次第である。即ち昨年九月十三日のサンデー・タイムス紙は「ポート・モレスビーの危機は甚だ大で

ある。飛行場、港灣施設その他の軍事施設は反樞軸軍の攻撃前進基地として無比の重要性を有してゐるが、これがもし敵手に落ちたならば濠洲攻撃のための日本軍の比類なき基地となるであらう」と述べてゐる。

また九月二十四日のロンドン放送は「目下有力な日本軍がスタンレー山脈に待機してゐるが、これは高度の訓練を受けた密林部隊である。このニューギニアの一線は濠洲、ニュージーランドにとつて非常に重大である」と述べてゐる。一方ソロモン方面掃護部隊は昨年八月わが海軍特別陸戦隊が寡兵守備しありしガダルカナル島に對し、優勢な米海兵部隊の上陸するや機を失せず海軍部隊と協同し敵の空中、海上よりする執拗な抵抗を排除しつつ數次に亘り上陸を敢行、爾來約半歳優勢な敵を同島の一角に封鎖緊縛した。

敵の形勢挽回策はこの絶海の一孤島に陸海軍を増員せんとし、これにより優勢なる敵兵力を吸收牽制する結果となり、茲に莫大にして連續的なる打撃を與へ、我が後方戦略態勢は大なる妨害を受けることなく順調に進捗、然も十分なる時間の餘裕を得ることに成功したのである。敵は同島に上陸するや忽ちにして近代的飛行場を構築我が荒鷲の數次に亘る猛攻にも直ちに復舊、損失を補充し常時約百機の飛行機をこゝに補給してゐた。この事實は私共の看過し得ざるものである。しかし乍ら唯守るに汲々とし所謂「桑蟻の策」を封じて防禦に從事し、わが部隊の撤去に關する企圖を察知せず、從つて何等積極的な妨害を加へ得ざりしたのは、天佑とは申し乍らわが部隊の勇猛果敢なる攻撃の結果であつてわが神武の前に潛伏したと申すべきである。同戦線從軍の一アメリカ人記者はジャングル戦の一斷面と鬼神にも比すべき日本軍の勇猛果敢さについて次の如く報じ、米國内に一大衝動をまき起してゐる。

西南太平洋方面における日本軍の勇猛きはジャングルの猛虎ともいふべく、米兵は一人殘らずグルー前駐日大使の「日本軍はアメリカにとつて最も手強い敵である」との言葉を身を以て經驗した。日本軍は防禦を好まず常に攻勢をとり、然も肉薄攻撃によつて先づ米軍の度肝を抜き、無二無三に殺到して來る。その精鋭凄絶さはこれを防ぐべき何ものもない。ジャングル戦では敵味方とも千古の夢を包んだ深い落葉の中に身を潜め、兩軍の距離僅かに數尺にまで接近したことあり、又日本軍の一小部隊が突如米軍の前面に飛出すと米軍はこれに一齊射撃を開始するが、その途端全く出しぬけに米軍の直ぐ傍らに潛伏してゐた日本軍部隊から猛烈な射撃を受け、殆と全滅せられたこともあつた。時には正面から米軍の心臓めがけて突撃し、わが軍は殲滅的打撃を受けたことも一再ではなかつた。

ある者は聲を一杯張上げて手榴弾を投げ、日本刀を振りかざして怒濤の如く殺到して來る。われ〳〵はこれを阻止しようとしても、あとからあとから進んで來て米軍陣地の一角に突入し物凄い戦闘が繰擴された。さうかと思ふと日本兵は米軍に見つからぬやうに巧みに數時間も首までつかる沼の中や木の頂上でぢつとしてゐて物習一つ立てないこともある。日本兵は何よりまづ米軍將校を射殺せよといふ命令を受けてゐ

るらしい。よくアメリカ高級將校が狙はれるのである。また日本軍の技師は高度の能力を有してゐる。アメリカ軍が障碍物で遮斷した道路をすぐ回復させてしまふ。また時には爆撃を受けた飛行場を四十八時間で修理してしまふのである。

これをもつてしても如何にわが將兵が土氣旺盛なるかを窺ひ知ることが出來るのである。

我が上陸部隊はわが作戰基地より遠く離れて敵の航空勢力圏内に深く突進し、敵機の跳梁下にあつて戰鬪を繼續し揚陸せらるゝ軍需諸品は僅少で埠頭設備もなき海岸に揚げられ、海水に浸され炎熱下腐敗せる米を敵機の目を盗んで數回分同時に炊出するを要し、さらに喫食する迄には炎熱とスコールとのため數回腐敗を繰返す、これに僅かばかりの粉味噌をふりかけて流し込むのである。一週間に唯一度梅干一つ、澤庵二片が渡されたとき子供のやうに手をうつて喜び、後方部隊に感謝を捧げたといふことが報告されてゐる。主食は一日一合にも足らず、時には數日に亘り支給されず、將兵は木の實を摘み、草の根を掘り、いやしくも毒ならざるものはこれを搦つて糊むしのいでゐた。その勞苦その奮鬪は到底筆舌につくし得ざる處である。唯聲を呑みて感謝の念を捧げるのみである。誠に將兵は神兵といふべきである。今次戰爭は妥協成立などは思ひもよらず、又戰局の推移も極めて樂觀を許さぬのである。

我が國は内にあつては一億の鐵壁の團結あり、外は百萬の陸海軍の精鋭あり、又戰爭遂行に必要な資源はわが手中にあり、さらに東亞數億の民の後方における協力がある。われ〳〵は一喜一憂を戒め不撓の度胸を持ち上下左右相信じ、最後の勝利を確信して大なる希望の下に夫々の職域において精進しようではないか。

攻防、我に絶對有利

谷萩大本營陸軍報道部長講演（一八・二・二一朝日新聞掲載）

大阪府、市、翼賛會府、市兩支部、大阪商工會議所共催、在阪各新聞社協賛の「時局戰況大講演會」は二月二十日中央公會堂で開催、會場外にもあふれた七千を超える聽衆を前に谷萩大佐は「新攻勢を展開すべき雄大な磐石不動の布陣を終つたが、これを掩護したわが南方挺身部隊の筆舌に絶した辛苦と武勲を偲べ」と數十倍する米濠兵を相手に皇軍將兵の生々しい血戰ぶりを傳へたのち、對支問題に移り「國民政府の參戰を契機に日支はいまや本然の姿に還り、かくてアジア十億の人力と無限の資材を擁した前古未曾有の戰略態勢のもとに〝うちてしやまむ〟の氣魄をもつて米英撃滅の大進軍をつゞけるのだ。現在のわれ〳〵が赫々たる戰果を誇る必要はさらにない。それはわれ〳〵の子供が、孫が自ら顯彰してくれよう、われ〳〵はたゞ石に嚙りついても持てる力のすべてを捧げて戰ひ抜かう」と堂々一時間四十分にわたる大獅子吼を行つた。

大東亞戰爭緒戰の戰果を擴大するためにわが軍は息もつかずビルマ、スマトラ、ニューギニヤ、ソロモン群島の線に向つて一大追撃戰を實施した。これは遥かに南方の戰略據點を確保するためと重要資源地域を占領しようといふ目的であつた。したがつてその追撃がすこぶる急であつたので後方の要點要域にいはゆる陸上の基地、すなはち飛行場を中心とする立體的な防禦施設を完了してこれに兵力を配置し、もつて攻防何れの場合においても自由勝手な作戰が出來るといふ態勢を整へるだけの暇がなかつた。アメリカは開戰以來國内外の情勢に基づいてなるべく速かに樞軸側に一大打撃を與へることを決心して一九四三年、すなはち今年を決戰の年と定めて昨年の夏以來反攻的態勢をとゝのへてこれに着手した。すなはち昨年の八月上旬ニューギニヤ、ソロモン群島方面に對し、また昨年の十一月上旬北アフリカに對して行つたところの上陸作戰はその第一着手であつた。この南太平洋方面の反攻は陸上基地を推進することによつて逐次南方の地域を奪回しようといふやり方で、陸上基地の設定に着手するや進捗程度も迅速であつた。このまゝに放置するならばわが方の後方要域における戰略據點の設定、陸上基地の建設といふものは非常なる妨害を受けてある種の危險にまで立ち至るやうな狀況が判斷された。したがつてこの戰略據點を設定するためにその後方勝閑を掩護するために一部隊を敵中深く突進せしめ、これを掩護せしめる必要が起つた。ニューギニヤ島のブナ附近およびソロモン群島ガダルカナル島附近に派遣せられた部隊は後方における基地設定に時間の餘裕を與へるために攻撃の任務をもつて突進した掩護部隊であつた。これらの部隊の勇戰奮鬪の結果昨年八月から今年の二月まで敵をニューギニヤ島の一角、ソロモン群島ガダルカナル島の一角に壓迫粉碎して、その目的たる後方基地が完全に出來上つたのに伴ひ新しき任務に轉進した。すなはち南太平洋方面は現在磐石不動の戰略態勢が出來上つた。チモールからニューギニヤを經てソロモン群島にわたる線には連續せる陸上飛行要塞が完備して、こゝを根據として今後攻防いづれの場合においても有利なる新作戰を展開することが出來るやうになつた。

敵の重圍、微笑して自決

この南太平洋方面における皇軍の勇戰奮鬪の狀況はすでに御存じのことゝ思ふが發

表されてをらない若干のことを申上げる。某所から歐米において新聞、雜誌に現れた記事を報告して來た。その一つに――ニューギニヤ島で敵の大部隊が日本の數名の斥候を完全に包圍した。さうすると日本兵はこれはとても射らんと思つたか、手を擧げて降伏の合圖をした。しかも三回手を擧げた。さすがの勇敢な日本軍も降伏したと思つた譯間、彼らはバタ〳〵と相ついで倒れた。そこで敵は不審に思つて近寄つて見ると、ある日本將校はピストルの銃口を口に咥へて引金を引き、腦天を射ち貫き、ある日本兵は銃劍をもつて咽喉を割つさばいてゐる。しかもその顏に微笑さへうかべて倒れてをつた。一體これはどうしたことか、降伏の合圖をしたことは確實である。濠洲兵の一隊はいろ〳〵研究した結果つぎの結論に達した。

すなはち日本の將兵は降伏よりも死を選ぶのである。そして彼らが死なんとするときは　天皇陛下に對し奉つて最後のお別れを申上げる。この儀式は手を三度高く擧げることによつて萬歲を叫ぶのである。三回手を擧げたのは　陛下に對し奉るお別れの禮であつたと結論したといふのである。そしてその死態を檢めると胸の奥深くには、新聞か何かに出てゐた　陛下の御眞影を收め、遺髮まで持つてをつたさうである。「われ〳〵白人はこの嚴肅なる事實の前に脫帽の敬意を表しなければならない。日本兵の忠誠心、死をみることを歸するがごときこの氣持こそわれ〳〵が打ても叩けども永遠に日本を屈服せしめることの出來ない原因であつた」といふことをいつてゐる。そして濠洲兵の一隊はこの數名の斥候兵の態を取り囲んで、國境を超越し、人種を超越し、その忠誠と勇武のために祈りをさゝげたといふことが書き綴られてゐる。この記事が新聞に現れたときにイギリス首相チャーチルは議會において つぎのやうな自國民に對する警告を發した「われ〳〵はヨーロッパにおいてドイツ兵を破ることは出來るかも知れぬ、しかしアジアにおいて日本兵を破ることは出來ないぞ、歐洲の戰局は拾收することがあつても、アジアの問題は永く〳〵子々孫々にまで負擔しなければならぬ、われ〳〵はこの强大なる日本を控へてゐる」といふ警告である。またニューギニヤ戰線に從軍したアメリカの飛行士が戰慄すべき體驗談を發表した。それによると「日本軍と空中戰を交へると自殺的體當り戰法をもつて突進して來るので何とも手に負へぬ、われ〳〵はたゞ戰慄を覺えて逃げ廻らんとするのみである」とある。ところがその記事が新聞に現れると航空隊に志願する青年が減少し、その後の情報によれば第一線で我に襲撃する飛行機がなくなり、減つたのである。いはゆるたゞ一機もしくは二機の肉彈的體當り戰法がいかにニューギニヤの上空において米國側の飛行士を戰慄せしめたか、これはあらゆる情報を檢討して明確になるのであるといふことの報告が某所から參つてゐる。なほガダルカナル島の戰鬪は敵の飛行機の跳梁下に長い〳〵海を渡つて兵器、彈藥、糧食を運ばなければならない不利があつたので給與の點では非常に苦勞した。眞暗闇の晩に海軍の驅逐艦あるひは潛水艇により島の近くまで運び海岸に投げ下したのち、夜の明けないうちに敵

の飛行機の威力圏外に下つてをらないと危險であつた。しかも叺に入れたお米をうち揚げる海岸にはなんらの設備もない。南方特有の激浪が叺を洗ふ、暑さのために三、時間經てばすぐにこれが腐敗する。捨てるわけにはいかぬので各隊に分配をする。それを三度々々炊襲することも出來ない。もし煙が見えるとたゞちに敵の飛行機が銃爆擊する。そこで敵の眼を盜んで一寸の間に三日分、四日分の御飯を炊かなければならぬ、はげしいスコールがくるから熱と水とのために御飯も三、四時間で腐敗する、捨てるわけにはいかぬので水洗ひして食べる。副食物としては僅かばかりの粉味噌があつたゞけである。あの方面には一日に三、四回スコールがきて全身濡鼠になるが濡れた軍服を天日に干すとそれを目標に敵の飛行機が銃爆擊をやる。全身濡鼠の兵隊が陽のあたらないシャンダルの中で三回も四回も腐敗した米を水洗ひして僅かの粉味噌をふりかけて食べ永い間日を送つた。

內地のためにこの苦勞

その時兵隊はどんな會話をしたか――最近同方面から歸つた大本營の參謀の報告によると「どうも生れてはじめてこんなひどい目をみた、かういふ辛い思ひをするのもアメリカやイギリスといふやつらがをるためだ。こんどこそ前線命令があつたら上官殿がなんといはうが俺はやつらを撃殺してやる――しかし敵機のもと、萬里の波濤を越えて食糧を運んでくれる後方部隊の苦心は感謝に堪へない。これを掩護してくれる海軍さんもどれぐらゐの犧牲を拂つてゐるかしれない。誠にかたじけない」そして「われ〳〵はこの南太平洋までやつて來たんだ、どんな苦勞も覺悟の前だ。われ〳〵が苦勞してゐるため、內地では、女房、子供が滿足に樂しく暮してをられるのだ。苦勞の仕甲斐がある。內地の人の幸福を考へたらわれ〳〵は死ならが、死ぬほどの苦しみをしようが何のこともない」と話してゐたさうである。いはゆるすべての憎しみ、すべての不平不滿も米英に叩きつけ米英に結集して眞に戰友同士はお互に慰め合ひ、勵まし合ひ、感謝し合つて暮してゐるのが戰場の風景である。しかるに同參謀は「內地では物資が不足だ、生活が窮屈になつた、これも爲政者が惡いからだ、法令、規則が惡いからだ、人が何人か集ればいはゆる〝ブツ〳〵交換〟をやつてをる。一體われ〳〵の生活がかくのごとく窮迫狀態にあり、不愉快なその日〳〵があつたとしたならばそれは一體誰のためか、みな米英のためである。東洋に對して非望を遂げんとした米英のためだ。われ〳〵のすべての不滿を米英に結集し、これを憎しみ、勵まし合ひ、お互に手をとつて戰ひ拔かねばならないのに兄弟同士を呪つてゐるのは何事か、これが前線と銃後の區別か」といつてゐるが、これらの點に對してもどうか御參考として胸にをさめておいていたゞきたい。

四日三晩一物も食べず

ある潛伏斥候は、潛伏斥候とは敵陣近くまで潛んで行き敵狀を搜つて來る兵であるが、これは四日三晩、何も食べずに敵陣近

くに潜みかくれて敵狀を立派に搜つて歸つて來た。どうして四日三晩何も食はずに生きてをつたか、蔦を銃劍で切り、その切口を水筒の口の中へ押し込んでおくと、そこから水がしたゝり一日のうちに水筒に半分ぐらゐ溜る、それを飲みながら苦勞してゐた。しかし敵は時々陣中ではあるがチョコレートやコーン・ビーフや時にはサンドウイッチなどを配給してをるやうだ。これを間近に眺めながらこちらは蔦の水ばかり飲んでゐるのではやりきれない。それにも增してやり切れないのは後になると敵の陣營から優しい女の嬌聲が聽えることだつた。

また最初ガダルカナル島にアメリカの糧食を誇る海兵二個師團をひきつれて來た司令官があつたが、この二個師團がほとんど大部分損傷を受けて役に立たなくなつたので陸軍部隊と交代して歸つて行つた。そして彼は歸る單々新聞記者に對し彼の武勇傳を發表した。ジャングルの中から日本の將校一名、兵二名が俄然飛び出してわが高等司令部に斬り込んで來た。斬られ叩かれ、數十人の犧牲者を一瞬にして生じた。そこでこれらの三名を射撃でもつて射止めることに決めて、小銃、輕機、重機まで待ち出し早く射止めよといふ命令を下した。ところがこの三人の日本兵はわれ〳〵の手元に斬込んでをるため日本兵一人を射止めるためにはどうしても味方十數名が傷残を食ふといふ狀況であつた。この三名を仆すためにまた六十餘名もの犧牲を出すことは忍びないので、三十六計逃げるにしかずと考へ、全部にジャングルの中へ退散しろと命令した。かういふ武勇傳である。これに對して新聞記者たちは〝閣下の適宜なる處置はまことに迅速であり見上げたものである〟かとお世辭を述べた。すると「有難う」といつて葉巻を咥へたといふことである。

後方部隊、血涙の活躍

いまゝでお話したのは主として軍事關係であるがとゝに後方勤務の活躍も涙ぐましい。ニューギニヤ戰線においてオーエン・スタンレー山脈といふ富士山ぐらゐの山を越えて進擊した。その後方から糧食、彈藥を運んで行つたのは朝鮮の義勇軍であり臺灣の高砂族である。彼らはわが軍と一體となつてこの深山幽谷、密林の間にその後方勤務を完全に果したのである。またあの方面には無數の珊瑚礁があり、こゝに全部兵隊を配置してある。しかしこの方面はとくに敵の飛行機の跳梁下にあり、高速魚雷艇の跳梁下にあるので、糧食運搬は容易でない、運んでゆく船は全部その都度うち沈められてゐる。ある島を守備してゐる部隊のごときは餓死するのではなからうかといふ狀況に立至つた。その時二名の船員が「どうぞあの島に、糧食を船で運搬させて下さい」といふ「しかし萬が一にも生きて還ることが出來ない」――かういふと「それだからやらして下さい、いやしくも日本男子が、戰友が餓死するのを知つてゐながら萬が一にも生還できないからといつて糧食の運搬が出來ないといふことは恥辱である。自分が今日まで生きてゐるのは日本男子の意氣を示すためである」といふので、この二人に、いはゆる海上トラックを運搬させた。そしてこの二人は所期の如く船と運命

をともにしてゐる。日本男子の意氣を示し南溟の藻屑と露足して消えて行つた。

ガダルカナル島に派遣の部隊出身地方では前線支援のために銃後が燃え上つた。ある國民學校の生徒は霰の降る日に厚氷を割つて空瓶を拾ひ、この鐵を献納するから早く鐵砲玉にして南の方にゐるうちのあんちやんに届けてやつてくれと先生へ持つて來た。また先祖代々持つてゐる一町歩足らずの杉林をガ島方面船舶用材として伐り出した、値段はわづか二、三百圓、運賃を差引くともつと僅かなものにしかならない。先祖代々勤勞と節約とをもつてこの杉林を唯一の財産と特んだものを、戰爭に勝つ爲ならばと一家總がゝりで雪氷を開いて伐り拂ひ、樵にのせて運び出した。明治維新の際には、朝敵の汚名をきて無念の涙を呑んだが、この杉林伐採で先祖もさぞ墓場で喜んでくれるだらうといつてゐた。ある鑛山に働いてゐた青年は自分の病弱で一日缺勤することは前線の戰力をそれだけ減らすこと、である。自分の職場は戰場に連なつてゐる、といふことを自覺するや忽ち鑛山に駈けつけ、數十米下の坑に入り血を吐きながらハンマーを揮つたといふ、諸君は花々しい戰果に拍手喝采するときその蔭には必ずかくのごとき聳き麗しき犧牲があることを考へられたい。

骨身にこたへた米軍

南太平洋方面において日本軍の忠誠勇武を骨にこたへるほど體驗したアメリカは、日本を敵とすることがいかに恐ろしいかといふことをつゞ〳〵悟つたやうだ。こゝにアメリカが日本に降伏するところの心理的原因が孕まれてゐる。一將兵、一產業戰士の犧牲がアメリカをしてつひにわが軍門に降らしむる原因を作りつゝあることを南太平洋の戰鬪の經過に鑑みしみ〳〵悟る。アメリカの戰のやり方は陸上基地を推進することによつて逐次南方のわが占領地を奪回して行かうといふのであるが、これではとても犠牲が多く暇がかゝつて駄目だ。ガ島は四國の半分ぐらゐの珊瑚島である。これに對しアメリカは太平洋の全艦隊、大西洋艦隊の一部を加へ最も精鋭を誇つてゐる海兵師團をもつて衝擊して來た。アメリカの全艦隊が精鋭無比の海軍によつて大部分損傷を受け、海兵師團は大部を殲滅されて陸軍部隊と立替りのやむなきにいたつた。

しかも昨年の八月から今年の二月まで、飛行場を中心とする三里四方ぐらゐの小さな土地に桑螟のやうに、じつとそこに潜んでをつたといふに過ぎない。この調子で行けば太平洋上に、あるひは大陸に無數に設定された陸上基地を奪回して行くには、一體どれだけの年月がかゝるかを悟つた。十二月十二日のリンカーン記念日に際しルーズヴェルトはホワイト・ハウスにおいて新聞記者と會見「アメリカは太平洋上の孤絶たる地域に點在してゐる島から島へジリ押しに攻撃する事によつて時間を費さうとは思つてをらない」といつたのもこの邊の消息である、すなはち南洋を基地として陸上基地の推進による逐次奪回戰法を改めて、日本に近い大陸に根據地を占め一擧日本の心臟部に攻撃を加へ、瞬間にして日本國民の戰意を挫折せしめよう

と戰法を變へて來た。大陸の根據地はどこか、これは沿海洲と支那大陸の重慶蟠踞區域とである。しかしアメリカがあの手この手で誘惑してもソ聯はヨーロッパ戰線の狀況によつて中立條約を守り、日本に對し事を構へるといふことは得策でないと考へてゐる。油斷はならないがまづ沿海州方面のことはしばらく預りたいと思ふ。また蔣の蟠踞する區域に根據をおき、そこから航空兵力をもつて一擧に日本に迫らんとする作戰について申上げる。ルーズヴエルトのリンカーン記念日における談話において、日本を支那から驅逐すめため、われ／＼は大規模な決定的な行動を取るであらう、支那の上空はもちろん日本本土の上空においても、重要なる行動を取るであらうといつてゐる。またカサブランカ會談において取極めた諸問題は米陸軍航空司令官アーノルド代將を重慶に派し、蔣介石と協議を遂げさせた結果重要なる攻作戰に關し意見の一致をみたといふ、これは支那大陸を根據に日本の心臟部に空中攻撃すると仄かしたものと判斷してまづ間違ひない。

近來の戰爭は戰爭前に蓄積した軍事力ではない、ストックではない、戰爭中に生產するところの物資によつて前線の消耗を補塡しこゝに戰爭の運命がかゝつてゐる。すなはち生產力が戰爭を推進し、培養する要素である。これが近代戰爭の特色である。しかるにこの生產力は一體なにかといふに人と物とを掛合はしたもの、人と物との相乘積である。この點からすると過般議會において東條總理大臣閣下がお述べになつたごとくアジアには十億の民衆がゐる。かくの如き人口を包容した國家ブロックは世界廣しと雖もない。アメリカにおいても、ソ聯においても、ドイツにおいても、イギリスにおいても、十億の民衆を包容した國家群といふものは構成できない。しかもアジアには重要な資源が必要とする種類において、また必要とする數量を完全にもつてゐる。アジア十億の人とアジアの完全な物資とを掛合はしたものが大東亞戰爭の培養生產力となる。これくらゐ強力な生產力はないのである。ちやうどヒットラー總統が、ヨーロッパの新秩序を建設する時に「われ／＼のドイツ國防軍の求めるものは土地ではない、その土地に住んでゐる人である。人の心である。またドイツ國防軍の獲得せんとするものは物資ではない、その物資を生產し活用する人、その人の魂である」といふことを申した。われ／＼は大東亞戰爭を完遂するためにその働く人の心を掴ることが一番大切である。

大東亞戰爭の現段階において何が一番大切かといふに戰爭に敗けたら一體どうなるか、このごろアメリカでは國民の士氣を鼓舞するため決戰第二年において國民を引摺つて行くため、いかにもこの戰爭に大勝利を得たごとく戰後の講和條件を發表してゐる。これを讀んでをる時は戰爭に勝ち講和になつたやうな錯覺を覺える。そこがアメリカの狙ふところだ、この講和條件によると日本が戰爭に敗れた時は、滿洲は支那に返せ、臺灣も支那に返せ、朝鮮は獨立させる、樺太の南半分はロシアに返せ、日本の陸海軍はアメリカと支那と山分けする。六大都市は保障占領する。日本の指導者斷殺はもちろん實業家、敎師、軍人、新聞記者

は銃殺、また監禁だといふことを發表してゐる。戰爭に敗けた場合大東亞は完全に彼らの領土となり、搾取地域となつて大東亞十億の民衆は永遠に彼らの奴隷となる。だからわれ／＼は石にかぢりついても勝たねばならぬ。そのためにわれ／＼はアジア十億の民衆の魂をしつかり日本に結びつけるといふことである。これが大東亞戰爭を勝拔く道である。この點に考へ及ぶとき國民政府參戰を契機として、日本が本來の日支の委にかへつて、大乘的見地において政策の轉向をなしたことはまことに感激に堪へない。これこそ本當の大東亞戰爭の勝利、大東亞共榮圏確立の基礎を得たものと信ずる。したがつてこの政策を實行する上において、今までの利權の一部をはき出すこともあらう、また政治經濟部門に入つてゐる日本人の失業者を出すこともあらう、しかしこの一部の利權、何萬人の失業者の如きは國家の永遠の生命と大東亞戰爭の勝利の前には誠に小さいのである。われ／＼はこの政府の方針を末稍神經にまで徹底させて本當の日支の委を現したいと思ふ。我々はこの氣持を過去において蒋洲に對し現した。今中華民國に對してこれを行つたのである。今年中にビルマに對してこれを行ひ、やがて比島に、濠洲に、印度に對して、大東亞全部に對して日本の力と德をおよぼすのである。これが日本の必勝不敗の態勢と申さなければならぬ。現在敵はカサブランカ會談を宣傳に利用してゐるが彼らがいつてをるやうな積極的なものを有する會議でない。すなはち東においては日本、西においては獨伊、これが緊密な提携を取つて全地球上を戰場とするところの大作戰をしながらおの／＼最後の目的に向つて一歩々々軍事的に、政治的に、經濟的に、文化的に相策應して進んでゐるのが現在である。この戰爭は地球上を戰場とし世界の二大國家群が決戰をする戰であるから容易なことではない。

大戰果に陶醉するな

しかし赫々たる戰果をもつて民心を鼓舞し、操縱することはこの大戰爭における輿論指導の方針ではない。われ／＼は大東亞戰爭の現段階に直面し今日の戰果に陶醉し安逸なる氣持になることは許されない。われ／＼の戰友が倒てた赫々たる功績はしばらく語ることを遠慮せねばならない。しかしながら大東亞戰爭に天壌とともに窮りないわが日本が勝利を得ることは確實であり今日の功績、戰果はわれ／＼の子々孫々が語り繼いでくれるに違ひない。したがつてわれ／＼はこの際涙を呑んで過去の戰果を語ることなく一意敵愾心を米英に叩きつけて、大東亞戰爭を勝利に導くべく努力せねばならぬのである。神武天皇御東遷は今日の大東亞戰に髣髴としてゐる。當時の交通狀態においては瀬戸内海は萬里波濤以上であり、浪速上陸は深山幽谷密林の中に行はれた。神武天皇は常に討ちてしやまんの御言葉をもつて、士氣を鼓舞され將兵もまた瀬戸内海に臨んでは「海征かば水漬く屍」深山密林に臨んでは「山征かば草むす屍」「大君の邊にこそ死なめかへりみはせじ」と叫び困難なる建設戰を遂行されたのである。われ／＼は斷じて米英を撃滅せずんばやまず、殲滅せずんばやまずの確固たる心構へを固めねばならぬ。

叩き潰せ！傲慢の米兵

泉海軍報道班員

（一八・一・三〇朝日新聞掲載）

ソロモン群島方面に敵が反撃の火蓋を切つた昨年八月初旬以來、同方面海軍部隊に從軍して言語に絶する死闘を戰ふ皇軍將兵とともに、私が直接肉體に叩き込まれるやうに切なる實感として肝に銘じてきたのは、敵アメリカに對する沸々たぎるばかりの憤怒と燃え上る火のやうに激しい敵愾心であつた。緒戰の相次ぐ敗戰によつて決定的な敗北を喫しようとする土壇場に追ひつめられた敵は、永年かぶり續けてきた自由と平等といふ美しき文化の假面も、ソロモンにおいては遠慮なく脱ぎ捨てた。そして文字通り狂氣のやうにその獸的本性を餘すところなく露出してゐるのである。

ソロモン方面の基地で、私は撃墜され、落下傘で飛び下りたアメリカ飛行士の陳述を何度かきいた。第一次ソロモン海戰以來あれほど大量の艦艇、飛行機を喪失しながらやられても〳〵出撃して來る奴らの〝旺盛な〟戰意の實體を知りたかつたのである。捕虜飛行士は口を揃へて〝必ず最後にはアメリカが勝つ〟と答へた。その理由としてはいづれも一應、先づ軍艦や特に飛行機の生産量の豐富なことをいふのである。だがさらに立ち入つて戰爭は單に數の多寡だけで決るものではあるまい。眞珠灣はいふまでもなくアメリカ人はその實例を現にソロモンにおいても、幾度かまざ〳〵とみせつけられ、身にしみて日本軍の強さを味はつたはずではないか――と突つ込んでゆくと、奴らは困つたやうにもぢ〳〵とするのである。そして既に捕へられた以上、下手な返答をして、日本軍の心證を害しては……といふやうな卑屈なお世辭笑ひでごまかさうとする。それでもなほ返答を迫られると窮した擧句にいふのが、どいつも同じやうに一しかしアメリカ人が日本人に負けるわけがないと思ふ一といふ意味の言葉であつた。奴らの肚の底には、このやうな徹底的に思ひ上つた、アングロサクソンの民族的優越感があるのだ。

つまり奴らの〝旺盛な〟戰意は直接は豐富な資源と強大な工業力に對する自信に由來する。しかしさらに一歩突つこんでその根本に遡つてみれば、アングロサクソンは絶對に日本人に負けるはずがない――といふ傲慢不遜な自惚れに外ならないのだ。もつとあらはにいふならば、ソロモンの敵アメリカ人は日本人なんか猿同然な劣等民族だと思ひ上つてゐるのである。結局は優れたアングロサクソンが猿同然の劣等民族に勝つといふのだ。

日本民族に對するこの許し難い侮蔑感こそ奴らをしてソロモンにおいてあれほど執拗な出撃を繰返させる戰意の實體であつた。

「奴らのさういふ思ひ上つた根性は今に始つたことではないが、よし！　奴らがその氣でくるならかまふことはないぞ、ソロモンの敵兵は何萬ゐようが、全部生膽を抜きとつてやるのだ！」と、ある參謀が軍艦〇〇でいつてゐた。これが現地皇軍將兵肚の底からの憤怒の最も端的な表現であり、生々しい實感をもつていはれる敵愾心であつた。敵にしてみれば獸より少しはましな動物ぐらゐだと思ひこんでゐた日本軍のためにあれほど慘めな敗北に次ぐ敗北を重ねてきた。だから奴らの日本に對する憎しみは想像以上のものがあるだらう〟日本民族を地球上から抹殺する〟とまでいきまいてゐるのだ。敵兵の生膽を抜りとらねば反對にこつちが生膽を抜られるだけである。

生やさしいことをいつてゐたのではソロモンの皇軍將兵をはじめとして、日本人全部が本當に奴らの考へる〟動物同然〟になぶり殺されるだけだ。日本人を〟猿同樣だ〟と考へてゐる敵に對してはもはや〟大國の襟度〟もましてや〟武士道の情〟などかけてやる必要は毫もない。それがわかる相手ではないのだ。

力をもつて、實力をもつて奴らの戰意の根柢をなす不遜極まる民族的優越感をグウの音も出ぬまで徹底的に叩き潰さぬ限りはこの戰爭の勝利はないのだ〟ソロモンの敵兵は一人殘らず生膽を抜りとつてやるのだ〟といふ參謀の言葉は、ソロモンの全皇軍將兵の身内からほとばしる悲壯な決意をいつてゐるのみではない。

いさゝかの妥協もあり得ない對米戰爭の文字通り〟食ふか食はれるか〟といふ慘烈な實相をいつてゐるに外ならないと私は思つた。

ソロモンの敵は陸上飛行基地を持ち、制空權においては、一應有利な立場にある。少しでも自分の方が有利で、強いとなると、まるで番犬のない羊の群を襲ふ狼のやうに、或は殺戮を累しむ獅のやうに、奴らは鼻唄まじりで襲ひかゝつて來た。

私も陸戰隊の將兵とともに身にしみてそれを體驗した。地上からの應戰はかへつて數において壓倒的な敵機にいゝ目標を與へるので、口惜しかつたが、射てなかつた。敵機はそれをいゝことにして、三十分ないし一時間毎にくりかへし〳〵やつて來た。

海岸に並行して道路があつた。敵機は代る〳〵道に沿つた兩側のジヤングルをダダダダと掃射して飛んだ、それがすむと道路に直角に流れる河の兩岸に沿つて同じやうに機銃弾の雨を降らした。じめ〳〵と散り敷いた腐葉土にもぐりこむやうに椰子の根を楯に打ち伏してゐる頭のすぐ先でバリ〳〵バリ〳〵と一列に機銃弾の火花が散つた。一機づゝの飽くなき亂舞がすむと、今度は全部が海岸の上空に一列横隊に並んだ、そして我々のゐると覺しいジヤングル一帶をなめるやうに掃射しつゝ山に向つて飛んだ、もちろん機銃弾ばかりではなかつた。その間に爆弾も滅茶々々に落すのである。戰鬪

機の文字通りのアクロバットが濟むと今度は爆撃機がやつて來た。そして何と機銃を眞下に向けて射ちながら我々の上空をブン〳〵といつまでも飛び廻つた。眞にある青丸に白い星の敵機のマークを、我々は眼に血がにじむほどの怒りをこめて、歯がみをしながら睨みつけたのを覺えてゐる。

「畜生め、こちらの飛行機が一機でも來るとてんでよりつきもしないくせに、この時だといふ調子で、いゝ気になつてやりやがる。しやうがないから今日はお手並を拜見するか……」と不敵につぶやきながら椰子の根元に仰向けに寢ころんでボリ〳〵と干麵麭を噛る兵隊さんの頼もしい姿に、私も午後になると同じやうに仰向けにひつくりかへつた。

朝 から繰返された飽くなき銃爆撃下に精も根も盡き果てた思ひであつた。午後四時ごろから約四十分間戰鬪機、爆撃機合せて十數機が入れ代り立ち代り行つた銃爆撃が最も猛烈であつた。ジヤングルの梢を飛んでゐた名も知らぬ鳥が、機銃弾の餘りの物凄さにすくんでしまつて下枝の間を低くチチチ〳〵と飛ぶのがやつとといふほど猛烈でしつこかつた。パツサ〳〵と弾にはねとばされた木の葉が顔の上に降ひ落ちて來た。夜に入るとさすがに敵機は來なくなつた。

ジ ヤングルを出て、ジヤブ〳〵と河を渡渉し道路上に集結しようとしてゐると、突然近くでドカンと爆弾が炸裂した。敵は何と時遅爆弾を落して行つたのだ。十數回に及ぶ銃爆撃であつたが、道路上に集合してみると死傷は案外に少かつたが、弱いと見るとこの際に乘り、かさにかゝつて來る敵の砲くまで殘酷でしぶとい獣的根性に對する全將兵の怒と敵愾心は本當に火のやうなものがあつた。十三時間餘も銃爆撃下に曝された緊張から解かれて、ホツとした眼に椰子の葉の間を飛び交ふ螢の丸く大きな青白い光の明滅の快く映つたのを、今でもまざ〳〵と思出す。私はソロモンの現地將兵の口から敵に對する怒りの言葉は數限りなくきいたが、弱音と愚しいことは一度も聞かなかつた。

ジ ヤングルの耐へ難い濕氣と、マラリアによる體力消耗、加ふるに十分に米の食へない榮養不足のために、ジヤングル内に自分で掘つて身をひそめてゐる銃爆撃除けの穴の中で、そのまゝ死んで行つた兵隊も最後まで叫び續けるのは、

「一日も早く敵をみな殺しにしてくれ、俺の墓にはアメリカ兵の生膽を供へてくれよ……」

といふ言葉であるときいた。この烈々たる敵愾心の氣魄こそ、ソロモンに戰ふ皇軍將兵の紅顔たる士氣の象徴なのだ。ソロモンにおける悲烈な死闘をまざ〳〵と體驗し、現地皇軍將兵の敵愾心と憤怒を、そつくりそのまゝ心に刻みつけて內地に歸還して以來、かれこれ一ケ月餘の間に私は機會あるごとに現地將兵の敵愾心を人々に說いた。一億國民全部が今こそ、ソロモンの將兵の敵愾心をそのまゝに肚の底から聲を大にして叫ばずにはゐられなかつた。

緒 戰以來の壓倒的な戰果に、國民の怒がうすらいでゐるのではないか、日本の息の根

がまさにとめられ、文字通り締め殺される一歩手前まで追ひつめられてゐた戰爭直前の飽くなき對日壓迫に對する國民の一致した激怒、宣戰の大詔を拜して堅く心に期した敵愾心と決意が少しゆるんでゐるのではないか、遙にソロモンに戰ひ續ける將兵を偲ぶにつけてしみ〴〵思つたのだ。海軍の現地の暮僚が、

か つて日清・日露の時には、國民は〝チヤンコロ〟或は〝露助〟といふ合言葉をもつて當時の敵に對する憎惡を端的に表現した、いや國民に燃えるやうな敵愾心があつたからこそ、かういふ言葉も自づと生れたのだらう。ところが大東亞戰爭が始つて、一年にならうとしてゐるのに、アメリカに對する憎しみの稱呼がないのはどういふわけだ。

といつてゐた。內地でも識者の間に同樣の意味のことがいはれてゐるときいた。國民のごく一部にでも、依然として米英人に對する劣等感——とまではゆかなくとも、奴らを日本人より少し上等の文化人だ——と考へてゐる者があるのではないか、ソロモンにおいて、今や人道主義の假面を脫ぎ捨て、日本人を猿同然だと考へてゐる敵アメリカ人は、こちらが弱いとみれば飽くなき殘虐をこととするしぶとい獣類の本性を現してゐるのだ。

敗 けてはならぬ、毛ほどのたぢろぎもみせてはならぬ、生優しいことをいつてゐたのでは、日本が地球上から抹殺されるのである。いさゝかの言葉の誇張でもなしに〝勝利か死か〟である。力をもつて骨身に徹する恐怖の中に叩き潰さぬ限りはわからぬ敵なのだ。今年こそ決戰の年だといはれる。しかしその眞の意味は勝つか負けるかなどといふ生優しいものではないのだ。勝つか、日本民族が死滅するか——の二つに一つだといふ意味である。飽くまで勝たねばならない。銃後に今こそ必要なものは〝チヤンコロ〟或は〝露助〟にあたる言葉が自ら生れてくるほどに、たぎるばかりの敵に對する憎惡の昂揚なのだ。

第二部　血戰篇

壯烈!! ガ島血戰記

○○中佐談（一八・四・二九中部日本新聞掲載）

海行かば水漬く屍……あの大合唱を背に浴びガダルカナル島敵重圍下に血戰の突擊路を開いた中澤挺進隊の奮戰記ならびに中澤挺進隊の敵飛行場および軍事施設爆破などの壯烈鬼神を哭かしむる行動は國民に深き感銘を與へた。南海の孤島にあつて文字通りの木の實、草の根、蜥蜴、蟻の巣を食し死闘を續けた結果あの戰略展開が無言の裡に成し遂げられたのである。敵の空陸からする風の如き熾烈な銃砲火を冒して活躍したこれら勇士の奮戰こそ皇軍將兵でなければ成し遂げられぬ業である。ガ島第一線兵闘にあつて直接作戰に參畫し、この程內地に歸還した○○中佐は二十八日陸軍省記者會に於て「ガ島血戰記」を次の如く語つた。

敵前・咽ぶ御親拜の報

私が體驗したことならびに見聞して來たことに私個人の所見を付け加へてお話したいと思ふ。たゞ私の所見といふのは第一線で前の方ばかり見てをつたから全局的にみて當らない點も多々あると思ふが、その點豫めご諒承を願ふ。第一に作戰間最も感激を覺えたことをお話したい。

それは既に皆さんもご承知のとほり、去年の冬　天皇陛下が戰勝御祈願のため、伊勢の神宮に御親拜あらせられたといふ報道を聞いたときである。このことはガ島で敵と相對時中上司から傳達せられたそのときの狀況をありのまゝに申上げると、われ〳〵がいまゝで經驗した會報とか、命令下達とかは通常大きな講堂とかあるひは樓まりのいゝ廣場だとかであつた。ところが、ガ島ではさういふことは出來なかつた。といふのは到るところ間斷なく敵の砲彈が凄じい唸りを立てゝ落ちて來る。朝から晩まで敵の飛行機が飛んでゐる。したがつて皆を集めて會報を實施することは出來ない。

それで會報を實施のときは、命令する者も受ける者も壕の中へ入つて頭だけ出して行ふ、飛行機が飛んで來ると頭を引つこめる。受ける方もジャングルの樹の根元等少しの間でも利用して身を伏せて聞く、それでも危いので壕を掘つてその壕の中で聞いてゐる。

會　報を受領するときはちやんと鉛筆で紙に書くのだが、飛行機から見ると白く見

えるといふので、木の藤で書くといふやうな狀況のもとに、會報を行つてをつたが、その御親拜の報は、さういふ狀況下において、副官が砲彈と爆彈の相交錯する中で、大きな聲で、

「天皇陛下におかせられては今般……」といふふうに傳へられたのであるが大聲をあげて會報を傳へてゐる副官の最後の言葉は全く喝喝で消えてしまふ、これを受領に第一線から來てゐる將校或ひは下士官の命令受領者等も思はず鉛筆も紙も落してしまつてジャングルの樹の根本にひれ伏して、感激の涙にくれるといふ狀況を私は眼の前にみて頭のテツペンから足の先までジーンとする感激を覺えたのである。恐らくこれが敵と三、四十米の距離で相對峙してゐる將兵の間に傳へられたとき、いかにこれらの將兵の士氣を、鼓舞昂揚したかといふことは、會報の一場面でも想像がつくと思ふ。

これに關聯してわれ〳〵は有難い國に生れたといふことがどんなに困難な作戰の間でも常に將兵の心の中に生きてをつて、それが非常に力になつたのである。あれだけの激戰の中にありながら將兵は時には歌などを作つて心の餘裕のあるところをみせてゐるが、そのときの感激を「大君のみ光あればこのいくさ必ず勝たん勝たでおくべき」と詠んでゐる。またもう駄目かも知れぬといふ狀況でも、お互に何の日本は神國だ、われ〳〵のいまゝで習つて來た歷史を見ろ、われ〳〵の先輩を見ろ、戰ひは必ず勝つと必勝の信念で「わが國は神國なればこのいくさ必ず勝つと勵まし合へり」といふ歌も出來た。すなはちあゝいふ困難な戰をやりながらも、この立派な國柄に生れ、この立派な　大君を仰いで最後まで必勝の信念を持ちつゞけたといふことを第一に申上げたい。

日本軍の强さ

第二によく敎育し、よく訓練された日本軍は、眞に世界最精鋭であるといふ確信を深めたことである。

何らの該張なしに世界最精鋭であるといふ自覺を得た「何をいまさらさういふことをいふ、日本軍の强いことはわかりきつたことではないか」から考へる方もをられると思ふが、大體今まで日本軍の强みを計る尺度がなかつた。水の深さに例ふれば日露戰爭では一メートル足らずの戰さ、水深計を一メートル突込んで見たがまだ底にはつかない、一メートルのところには耐へ得る日本軍であると判つた。滿洲事變、支那事變、ノモンハンの戰さで一メートル五〇まだ底には達しない、だから日本軍の强さは一メートル五〇位の精鋭であつたと思はれたかも知れぬ。今度はガ島の戰を經驗した。それは慘烈をきはめた、深さでいへば二メートル、三メートルの計りが出來た。しかし日本軍の精鋭の度はなほ底に達してゐない。日本軍の精鋭であることは、計るべからざるものであるといふ自覺を得た。抽象的に申上げてもおわかりにならぬと思ふが、實例を申上げる。

ガ島の戰況はいくら私が口で申上げても一緒に體驗した人でなければ到底その凄慘さは判らぬと思ふ。我々の部隊はどういふやうな狀況で上陸したかといふと敵が調

子に乘つて飛行場の守備線から出てきた。そこへわれ〳〵の部隊は上陸して行つた。敵が調子に乘つて伸び切つたところをジャングルの中で徹底的に叩いた、叩かれた敵は潮の退くやうに退いた、それを追つかけていつてそのまゝ後方基地が出來るまでの持久態勢を取つた。持久態勢といつても、簡單な防禦ではない、防禦といふものは立派な陣地が出來る、資材を集める、いろいろな物を持つて來てやるといふ風に考へられるが、ガ島の持久戰は初めから敵との距離は二百メートル、あるひはそれ以内といふやうなくつついた狀況ではじめられた。

したがつてそこへ行つて材料を集めて堅固な陣地を構築するとか、いろ〳〵な障碍物を構築するといふことは、到底出來ない。いはゆる對峙のまゝ持久態勢になつたのである。陣地の構築も出來るだけのことはしたが完全にベトンで陣地を作るとか、トーチカを作るといふやうなことはもちろん出來ない。敵にくつついてこれを追つかけて行つたので、一番最初は二百メートル位離れてをつたが、二、三日もするとすぐ敵は迫つて來た。爾後近いところでは彼我の距離は、三十メートル乃至五十メートル位、言葉ではピンと來ないが、すぐ目の前鼻の先へ敵が來てゐる。しかも絕對優勢な敵である。それと常に相對峙してゐるのである。

その上敵の火力が優勢である關係上我々の部隊としては一番よい稜線の頂上を占領するわけにはゆかない。稜線上では敵に暴露し、飛行機、砲彈にやられる。したがつて稜線から少し下つたジャングルの中に陣をとる。二、三十メートルの高い、見下されるところに敵がゐる。しかし將兵は頑として頑張つてをつた。たゞジャングルの中では展望がきかない。實際は敵の方がよく見える所に出たい、しかしさうすればのべつ飛行機にやられる、砲彈でやられる、仕方がないからジャングルを利用する、敵は三、四十メートル前方の稜線上でわが軍を見下してゐる。わが軍はこれに對し、上を向いて頑張つてをるといふやうな狀況をつゞけてゐた。

たゞ數を恃む敵

指揮をとつてゐる高等司令部の位置はその第一線陣地から大體四、五十メートルのところであるが、敵の銃砲火が盛んに來る、飛行機などしよつちゆう頭の上に來る、そこに最高指揮官以下が生活してをつた。これに對し敵は優勢な兵力、優秀な裝備をもつて前進のやうに有利な陣地を占領し、しかも敵飛行機は朝から晩まで飛んで來るが友軍の飛行機が來る二十分位前からビシヤツととまる、友軍機が歸ると三十分位用心して飛ばない、即ち友軍機の來る前後一時間、それと敵には晝休みの時間があるらしく晝に二十分程休みがある。あとは瞬時も休みなく無茶苦茶に飛んでゐる。

天候の如何を問はない。雨の中暴風雨のときでも飛んで來る、雨の日は飛行機は飛んで來ないだらうなどゝ思ふ人があつたら認識不足も甚しいものである。暴風雨でも來る、雨風一切の惡天候を排し、晝夜の明暗を度外視して朝から晩まで敵の飛行機

が來る。そしてその飛行機の來てゐる間、夜ならば螢火程度の光でも見つけたらすぐ爆擊する。晝間ならば兵一人でも見つけたら爆擊する。ジャングルのなかから陽の當るところに一寸出てをると追ひかけ廻す、一本の木の藤にかくれてゐる兵をも追ひかけるので兵は木の周圍をグル〳〵廻るといふこともある。それでも執拗に追ひ廻すので仕方がないから死んだふりをする、それでも念のために擊つ、それほど執拗な敵の飛行機である。

そ れは到底常識では考へられないことである。つぎに敵の砲擊、これはまた無盡藏に彈丸を射つ。よく我々は彈丸の激しく來ることを雨あられのごとく彈丸が來るといつてゐるが、雨あられといふやうな形容詞では追ひつかない、濁の如く――である。私は香港その他あつちこつち相當激しい戰さをやつて來たが砲彈はドーン、ドーンといふのが今まで聞いた音であるが、ガダルカナル島ではそんな音ではない。ドドドドーと來る、兵隊はこれを稱してドンドロ射擊といつてをつた。彼らが無闇矢鱈に物資を費ふことは全くわれ〳〵の想像外である。

ま た軍艦は友軍の海軍がゐない時はしよつちゆう遊弋してこちらの補給を妨害してゐた。海岸の補給道路を兵一人通つても軍艦が射擊する。人間一人に對してもでかい砲彈を食はすといふことはわれ〳〵の常識では到底考へられない。それが晝間ならまだわかる、夜でもやる、非常に大きな眼鏡で見てゐると見え煙草の火一つ見つけても軍艦からドカンと擊つて來るといふ調子である。それほど惜しみなく彈丸を射つ、惜しみなく物を費ふ、日本軍がいかに精鋭であるかを納得するためにさういふ狀況を頭に描いてをつていたゞきたい。

鹽水が命の綱

さういふ狀況において日本軍はどうであつたかといふと、さういふ狀況下にさらに補給の問題がある。これはすでに十分新聞には書かれてゐるが、全く想像の埒かである。

實 際いま考へても涙が出るが、大體あの間で一番兵隊が餘計食つた日が、一日僅か一合で、それが三日とつゞいてゐない。三勺四勺といふ日が何日も續いた。それはまだいゝ方で、何日も食はずにやつてゐるといふ部隊が澤山ある。そして本當に草を食つてゐる。いくら南海の孤島であつても椰子があるぢやないか、何か食べものはあるに違ひない、とお考へになるかも知れぬが、海岸近くにはなるほど椰子がある。しかし今いうたやうな狀況で高い椰子に登つて椰子の實を取ることは出來ない。したがつて木の實、草の根、蜥蜴、蟻の巣、食へるものはあらゆるものを食つた。さらに鹽氣が何もない、何とかして鹽氣が欲しい、海岸付近の部隊の者は海水で何とかなるが、山の中の部隊の者は三、四日もかゝつて海岸に出て來て飯盒一杯に海水を汲む、大體ものを炊くのが大變なのだが、一晩中かゝつてどうにか蒸溜させて飯盒の底に指でさはつて見てはじめて鹽があるといふことが判る程度の鹽を、さらに三日も四日も歩いてそれだけを部隊に持ち歸り、何千人

といふものが少しづゝなめるといふ狀況である。

な ほこんどは、陽の光――日光といふものに殆んどあたる譯にゆかない。いくら南海の孤島でも陽の惠みはあるが、何しろ一度太陽の光を仰ぐと敵飛行機に狙はれるといふので、みんな朝から晩までジメ〳〵したジャングルの木蔭に住んでゐる。そこへ毎日スコールが必ず一、二回あり、したがつて下はグチャ〳〵の膝を沒するといふ日が毎日つゞいてをる。さういふところで後方の者も第一線の者も壕をほり、あるひは山の中腹に横穴をあけたりして入つてゐる。この壕の中は水浸しである。之は人間の住むところではない、爬虫類――蛇か蛙の棲むやうなところに住んでをる。中には泳いで上つた者もあるから濡れたまゝ着たきり雀で長い間過した。マラリア、デング熱といふ惡疫でほとんど全部が發熱する。何日かすると骨と皮で兵隊はみんなヒョロ〳〵してゐる。

た ゞ豐かなものといへば空氣と水、水は割合いゝのがあつた。今いうたジメ〳〵した爬虫類でなければ、棲めぬといふやうな壕の中に蜴がをる、眞夜中蜴にやられた〳〵というても燈をつけて手當するわけには行かない、朝迄我慢するより仕方がない。

兵が僅かばかりの米と水を入れた飯盒の中に、そこらの何でもない葉をとつて――葉といつてもそこらの普通の木の葉ですよ――飯盒の中に入れてゐるのを見てどうしてさういふことをしてをるかと訊くと、これを入れて量を增やして食べるのです。といつた。さういふふうにそこらのものは何でも食べた。これは決して誇張でも何でもない。むしろ私はこれだけ話してもまだいひつくせないやうな氣がする。

彈雨下米鬼と死闘

上級指揮官から一兵に至るまで悉くさういふ困苦の中にあつた。さて兵はどうであつたか、砲彈が炸裂する中で各地形や地物に據り、毎朝聲高らかに五箇條の　御勅諭を奉誦してゐる。どんな場合でもこの奉誦を忘ることはない。

骨 と皮ばかりになつて、眞蒼な顏をして全く人間でないやうな顏をしてゐても、眼だけは爛々と光らして腹の底から、

一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし…

と奉誦してゐるのである。われ〳〵が今いうたやうなジメ〳〵したやうなところで、一晩中まんぢりともせずに夜明けを待つ、その中に夜明けの冷たい風の中から兵の奉誦する「一ッ軍人は……」といふ聲を聞くと「よし、これなら大丈夫だ」といふ氣がしみ〴〵と湧いて來た。この一つでも日本軍が如何に精鋭であるかといふことがおわかりになると思ふ。

今 のやうな狀況において日本軍は一日として攻勢を怠つたことはない。常に積極的に敵を攻擊してゐる。例の中澤、寺澤の挺進隊、聞く人はあの中であゝいふことが一體出來るか、と思ふかも知れぬがそれをすべて見事にやりのけてゐる。新聞に出たあの通りやつてゐる。少しもうそはない。

十重、二十重に敵が圍んでゐる飛行場の中にもぐり込んで行つて、敵と一緒に友軍

の飛行機が爆撃に來てゐるのを見ながら、各飛行機に爆藥を裝塡し敵の巡察の後について行きながら、爆藥を檢し、用意はよしで爆破して歸つて來てゐる。彼らは晝間は大雨にうたれながらジヤングルにもぐり、夜ばかり行動してゐる。稻妻のパツと光る瞬間を利用して行動してゐる。寺澤挺進隊もまた同じである。寺澤が狙つたのはルンガ岬の敵の砲兵である。この砲兵がこちらは非常に痛かつた。だからルンガ岬の砲兵陣地にもぐり込み、その砲身に爆藥を入れて砲身を爆破して砲の射撃を不能にしようといふのが目的であつた。

嘘・還らぬ斥候

とんでもないことを思ひついたものだ。けれども實際それは出來るといふ信念をもつて遂行した。寺澤も中澤も愛重となく讃まれた障碍地帶を突破して、見事やり遂げた。寺澤、中澤挺進隊はあれほど有名になつたが、こゝにもう一組還らない斥候がある。

それは寺澤、中澤と一緒にやるつもりであつたが、いろ〳〵の都合で正月にやらうといふことになつた。その斥候長は十二月二十五日兵二人を連れて敵中にもぐり込んで行つた。そのころ敵の司令部の位置が大體見當がついてゐたので、敵の司令部に單身躍り込んで直に敵の指揮官に迫つて斬つて來るといふ計畫である。之は必ず出來るといふので出掛けて行つた。一月六日にやるから十日までに還らなければ歸りません」と言殘して行つた。それで一月六日をいまか、いまかと待つてゐたところ、敵司令部とおぼしきところに一月六日朝から夜まで黑煙が二條あがつてゐた。でこれは成功したのではないかと思つたが、つひにこの斥候は歸つて來なかつた。我々は遺憾なんかあるといふことを知らなかつた。後で本人の所持品の中から、

閣下始め各位、○○中尉は良き死場所を與へられ喜んでをります。必死必成誓つて聖慮を安んじ奉ります。長期間にわたる御指導御鞭撻を厚く感謝致しますといふ遺書が出て來た。中尉はまだ二十四五歳の若い豫備將校であつた。

敵要所へ斬込み

若林中隊長は士官學校の五十二期を一番で出た人で、その勇敢なことは香港攻略戰において、例の二五〇高地に對する西山隊の攻撃に參加して眞ッ先に敵陣に飛び込んで行つた。西山隊の攻撃の成果はこの若林の奮闘に俟つことが多い。

士官學校を一番で出てをるから、頭は非常によく勇敢だといふことは全軍が認めてゐた。それがガ島の戰線でもやはり立派な働きをやつてをる。すなはちこちらは兵力は少いしやゝもすれば敵が攻勢に出ようとする氣配が見える。その機先を制して兵僅かに三名を連れてマタニカウ河の一本橋を襲撃した。こゝは非常に大事なところでこゝを取られると敵は非常に痛いので有力な哨所を出してゐた。

それに僅かに三人を連れて斬込んで行つて、敵を何名か斬殺して輕機關銃をぶらさげてお土産に持つて歸つて來た。

壯烈・全員戰死

さうしたらその部下の中野といふ中尉が翌日また今度は兵を二、三名連れて哨所の先の分哨に斬込みまた機關銃を持つて歸つて來た。とにかく敵の中に僅かの兵を連れて斬込んで行くのを何とも思つてゐない。自分の生命がどうなるとか、自分の將來といふやうなことは夢にも考へてゐない。遂次兵力が消耗し最後には僅か二名となり、遂に全員壯烈な戰死を遂げた。中隊長はまづ腕を一本やられた、それをくゝりつけて大隊長のところに連絡に來て、まだやります、といつて陣地に踏ん張りまだやりますといつて後方に下るをきかず、最後は身體がズタ〳〵になるまで頑張つて壯烈な戰死を遂げてをる。

手足失へど突撃

なほまたかういふこともあつた。第二據點といふ一つの重要據點があつた。この據點に士官學校五十三期の、年なんかまだ二十三、四といふ若い中隊長が、死ぬまでやるといふ覺悟で、十一月の初め頃守備についた。この據點はさつきいうたジヤングル中の陣地で、距離三十米位のところに約百日頑張つた。敵は晝間は絶對優勢な火力を擁し、飛行機、戰車を繰り出す、夜になると、こちらが銃晩敵陣地に斬り込む、そこで敵は夜になると恐いのでずつと二百米位後に逃げ、晝間になるとまたもとの位置に歸つて來る。これを毎日繰り返してをつたが、つひにこちらが防禦陣地をとつてゐるにも拘らず、敵の方が恐くなつて、自分の陣地の前方に障碍物を作つた。

たうとう敵は毎日一時間位、飛行機の上から手榴彈を落すやうになつた。その中でよく頑張つて今日十名、明日十名、そのつぎ何名といふふうに逐次死傷がふえ最後は僅か四名になつてしまつた。中隊長もまた最初頭を怪我した。大隊本部まで連絡に來た時、大隊長が後に下つて養生しろといふても傷なんか大隊長とお話してをれば治りますといつて下らうとせぬ。また第一線に歸つて行く。次は足をやられてゐる、頭をやられ、足をやられ、何日か頑張つてをる、最後に敵は陣地の上にダイナマイトを並べて爆破してしまつた。それまで一人として下つてゐない、最後まで頑張つてゐる

決死の連絡兵

まだある、敵から圍まれた部隊から命がけで、決死の連絡斥候が部隊本部に出される。千仞の谷底を藤蔓にぶら下り敵がすつかり圍んでゐる中を縫つて傳令が來る。兵は死ぬ覺悟を決めてゐるから何とも思つてゐない。その部隊はすつかり敵に圍まれてゐて風前の燈、いつ潰れるかわからない。折角こつちまで來て任務が終つたのだから此處で休んで行け、明日の朝歸れ、あるひは此處に殘れといふと、その傳令に來た兵はいや向うでは私の歸りを待つてゐます。部隊は皆死ぬつもりでをるのです。我々の上官を見殺しにして、自分だけ安閑としてゐるわけに行かぬから向うへ歸りますといふ、飯も食つてをらぬ兵が報告を終るとみ

んな全部歸つて行く。これらも日本軍でなければ出來ないことである。

稻垣部隊の主計が糧秣の關係で後に殘つてをつた。稻垣部隊が重圍に陷つて危險となるやその主計が殘備の中尉であるから地方にをる時は靠靠でも彈いてをつた人ではなかつたかと思ふが、我々の處に來てオイ〳〵泣く、どうしても稻垣部隊の位置に歸してくれといふ。「主計が行つたつて仕樣がない、絶對歸ることは相成らぬ、お前はこゝに任務がある」といはれても、いや何とかしてくれといつて半日泣かれた。なるべくなら樂なことをしたい、命を長らへたいといふ一般の人の氣持に反して、とにかく戰友上官とともに死にたいといふのである。見榮のためでも何でもない。將兵は皆そんな氣持であつた。

米俵背に餓死

つぎに糧秣補給のことをお話すると、糧秣は四十キロかもつと遠くの方で揚げる、その間のたつた一本の道は毎日雨が降るので泥濘膝を沒し、人一人が通つても飛行機が襲ひかゝる、飛行機が遊覽バスにでも乘つた恰好で椰子よりも低く飛んで横から薙いで行く、或ひは上から薙いで行く、砲彈は絶えずやつて來る、その一本の道を傳つて一日として缺かさず物を運んでをる。

その運ぶ兵隊は、さつき申したやうな衆蠢狀態で、ほとんど全部が發熱で骨と皮の幽靈みたいな兵隊です。それが危險な中を任務だといふので一日として缺かさず通つてをる。自分が擔いでゐるのであるからそれを食へば何とかなるのに、それを食はずに前線の者にやりたいといふ一念だけで、米俵を擔いだまゝ餓死してゐる者も所々に見受けられた。これらのことは到底他所の國には見られぬ狀況であらうと思ふ。

轟沈見屆け自爆

なほ各兵種についていへばまづ歩兵、とにかく日本軍の歩兵が四人か五人をれば絶對敵は突込んで來ない、恐くて手も足も出ない、あれだけ澤山の兵力を持ちながら、どうして出て來ないのかと思ふ位出て來ない、白刃が恐いのである。四人か五人さへあれば敵を近付けない、これも歩兵の强さを證明するものである。つぎは砲兵であるが、敵は豊かな彈丸を射ちつゞけてゐるがこちらは乏しい、一日十發射つのに大變である。今日は十發にしようか、十五發にしようかと心配しながら、僅かな彈丸を射つてゐる。少い彈丸を如何に有効に使用しようかと心配してゐる。

これは有名な話であるが、右翼の丸山といふところの戰況が日に〳〵に具合が惡くなつた。是非擊つて貰ひたいといつて來た。之は砲兵の最大の射程のところで射擊の困難なところである。砲兵といへどもほとんど倒れてしまつて、拉繩を將校が引いて射擊する、一發射つとダーツと潰のやうな敵の砲彈が來る。そのためにこちらが擊てばすぐやられる、本當にたゞ一發擊つのが命がけである。さういふ狀況下にあつて丸山はどうしても擊たなければならぬ、第一線の兵隊が皆見てをつた。丸山を隔んでをる敵は外に出て壕を掘つてゐた、二杯蛸

集してをる。

彈丸にも目玉

その眞中に第一發がドカンと的つた。何十人の人間が吹飛んで幾りの者は後の幕舍に逃込んだ。二發目は逃込んだ幕舍の眞中にボカリと的つた、たつた二發で何十人かを擊ち殺すやうな効果を擧げてゐる。そこで第一線の兵隊は曰く「日本の彈丸には目玉が付いてをる」敵はのべつ擊つが日本の砲兵となるとビシヤリ〳〵要點を擊つといふことを、第一線の兵隊は眼の邊りに見せられてをる。日本の彈丸には目玉がついてをるといふやうに砲兵は優秀である。工兵は寺澤、中澤で御承知のとほり。

見事な海戰

つぎは海軍について、私は直接海軍の戰さを見たが、實に見事なものである。ルンガ岬の夜戰を見たのであるが、眞暗の中にドン、ドン、ドン、ドンとやると、いつの間にか六箇所ばかり火が上つてゐる。後で聞くとそれが皆敵の快速艇だつたらしい、本當に瞬間の出來事である、全く大したものだと感心した。また十一月の末の話であるが、私が第一線の左翼に行つた時の狀況である。毎日輸送船でルンガ岬に、多い時は十何隻、少い時でも三隻位來てゐる、それを巡洋艦、驅逐艦が取卷いてゐる、そこへ日本の飛行機――例の○○機が來た。

轟沈　沈した後に我々は行つたがその○○機は巡洋艦を狙つたらしい、一機巡洋艦を爆擊して巡洋艦は瞬間に轟沈された。その○○機もその後岸近くに自爆して海中にまさに沒せんとしてをつたらしいが、その○○機に乘つてをつた海軍の人が翼の上に出て轟沈して行く巡洋艦を見てをつた。そしてもう大丈夫だと見た時に火の中に飛込んだ、それを見て皆感心した。自分の身體を捨てゝ巡洋艦一隻をやつて、最後に飛行機の外に出て確認して、もう大丈夫だと見たら、身を翻へして火中に飛込む、これはなか〳〵出來るものでない。

また一月末、エスペラス付近に敵の驅逐艦が二隻をつた。そこへ海軍の爆擊機がやつて來て爆擊すると、二隻の驅逐艦がジヤーツ〳〵と沈んでしまつた。

精强我が荒鷲

空中戰鬪も幾度か見たが下から見てると實に勇壯なものである。我々は空中戰となると安心してをつた。落ちるのは皆敵機である。さういふことも日本軍が精鋭である一例である。

なほこれも海軍の話であるがわれ〳〵は驅逐艦に便乘してをる時、澤山の敵の飛行機に追掛けられた。急降下でブンブンかゝつて來る、驅逐艦の艦長自ら舵を操縱してゐるらしいが、艦長はわれ〳〵より一寸上の年配の方であつた。爆彈が落ちて來るその中を巧い具合に爆彈を避け乍ら艦を運動させてをる。見ながらやつてをるのですかと訊くと、さうではありませんといつてゐたが實に神技で、われ〳〵はほと〳〵と感心した。それらの點を全部とにかく見た結果、よく教育し

訓練された日本軍は世界最精鋭である。どれだけ強いか測り知ることが出來ないこれは絶對間違ひない、それが第二に感じたことである。

心を配る上官

第三に感じたことは敬上憐下である。これも日本軍の特色であらうが上を敬ひ下を憐むといふことが困難になればなるほど現はれてをる。あの皆が食へなかつた時は、上は最高指揮官から下は一兵までほとんど同じ狀況で飢を忍んでをる。中澤、寺澤兩斥候の成功の蔭には、岩淵部隊長と直接の隊長である岸、齋藤兩中隊長ら上官の何ともいへない細かい心配りと綿密な指導があつたのである。何しろ五名の部下を死地に投ずるのだから、輕々にやつてはならない約一ヶ月に亘つて部隊長らが夜も眠らずにあらゆる情報を蒐めて來て教育指導した。

あゝいふところに行くのだから腹を先づこしらへなければといふので、一日三合の米を食はせた。その三合を食はせるためには、苗大抵ではない、全部の兵隊が飯を減らす、部隊長、中隊長はほとんど食はずに、その斥候に與へた。

この仇を取らん

そしていよ／＼大丈夫成功するだらうといふ確信を得て、いよ／＼出發といふときに、たつた二組の斥候を、行つて來いというてやるのが普通であるが、岸中隊長は中澤を高いところに連れて行つて、お前のやるところはあの飛行場だぞと指さして教へた。その時、よしあの飛行場ならば必ずやれるといふ確信を得たといふ、そこまで三日位かゝつて行つたのだが、そこまで連れて行くには自分の部下を疲れさせまいとして荷物を中澤には擔がせずに中隊長が擔いで「おいあれをやるんだぞ」とはつきり示して、そこで荷物を渡した。

尚 ある砲兵中隊では病人が出、疲勞患者が出て後には十人位の兵隊しか殘つてゐない。糧秣を取りに行く時に高崎といふこれも五十三期の二十二三歳の中隊長が自ら四、五人の兵隊を引張つて、糧秣を取りに出て行く、自身も榮養不良で頬を蒼ぶくれにしながら、米俵を擔いで歸つて、下の者に食べさしてをる。私はそれを見て「何だお前まで擔がなくてもいゝではないか」といふと高崎は「いや中隊では動ける者はをりませんから私は少しでもと思つて手傳つてをります」と答へた。

第四に陸海軍の緊密な協力であるソロモン方面の戰さの特色として、非常に長期にわたつて海軍と密接な協同作戰をやつてをる。この陸軍、海軍の關係であるが、これは實に見事なものである。實に巧く行つてをる、海軍はとにかく命賭けで、我々に物を持つて來てくれるし、我々が戰闘して船に引揚げた場合など、實によくやつてくれた。

米兵を侮るな

第五番目に米英軍に對する感想とその殘虐性について述べる。アメリカ兵について我々の見たところを申上げる。結局アメリ

カ兵は決して恐るゝには足らない、しかし侮つてはいけない、といふ結論になると思ふ。我々がぶつゝかつて感じたアメリカ陸軍といふものに對して特に用心せねばならぬ、警戒せねばならぬと感じたことは、アメリカは一番日本が強いといふことを知つてゐる。アメリカほど日本の強いことを知つてゐるものはをらぬと思ふ、現に彼等はさういふことをいうてをる。

我々が相對した兵はアメリカでも精鋭だつたといふが、これらの死骸や手紙、捕虜の言動に現れたアメリカ銃後の片鱗を窺つて見るとかういふ手紙が來てをる「貴方は御出征の時に五年程は辛抱しろ、というて征かれましたが、五年は愚か十年でも二十年でもしつかりして待つてゐますから、しつかりやつて下さい」といふ手紙をよこしてをる。だからさういふ連中もをるといふことは考へられる。

敵兵の野獣性

アメリカのみならずイギリスもさうであるが彼等の動物性、野獣性はわれ／＼の想像外である。彼等は全く眼色が違ひ、皮膚の色の違つた日本人を人間と見てゐない。今まで人間として扱はれてをつたと思つたらお目出度い話である、全く殘虐である。これは香港作戰の時であつたがスタンレー半島といふ所に私共の部隊が敵中深く突込んだ、この時にこちらの小隊長が戰死し、一部隊が全滅した。その部隊の兵は全部蹟を揃茶々々に割られ、實に殘虐を極め、誰の死體か識別がつきかねた。今度もさうだ、ある斥候が見て來た話によると腕は切り、鼻はそぎ、睾丸はとつてしまふ。今まで重慶軍は殘虐だといはれてをつたが、それどころではない、初めから人間と見てゐない、無茶苦茶だ。

彼 等こそ見付け次第頸喉笛に食ひついて仇を取りたい、骨までしやぶつてやらねばならぬ、實に癪にさはつて仕方がない。敵中深く入り負傷して歸つて來た者の話によると敵の中で負傷したり、病氣で動けないでをる者を全部並べて戰車で轢殺してしまつた。それを彼等は煙草をくはへ手を拱きながら見てをつた。われ／＼は塹を掘るにさへ骨の折れるやうな時でも、敵の死體を大きな穴を掘つて埋めやうとしてをる、負傷した者には繃帶をしてやらうとしてをる。

香港攻略戰のとき、香港島と九龍半島との敵前渡河をやつた直後の事であつたが、その中に敵の快速艇が飛込んで來た。ザーツと掃き廻して船に乘つてをつた者は二十名程撃ち殺された。流石は英國の海軍は違ふといふ感じを我々は持つてをつた。この敵の快速艇が二隻、こちらの山砲で撃ち沈められ乘員は泳いで岸に上つた。私はそいつを司令部に連れて來いといつた。下士官と兵隊が四、五名それを連れて來るのに日本軍は日本軍として立派な態度で連れて來てゐる。繃帶で負傷したところを巻いてやる、疲勞した者は。葡萄酒を飲ます、歩けない者には肩を貸してやる。

私 はそいつらに「お前等は非常に勇敢に見えたが、どうだ日本軍は最後まで死ぬまで敵と闘ふのだが」と訊くと「冗談ぢやない、私は死ぬとは夢にも思つてをりませ

ん。日本兵を二十名程やつたのだから後はどうぞ捕虜にして下さい」日本兵を二十名程殺したからもう任務は濟んだ、後は捕虜として扱つてくれと虫のいゝことをいふ。私は怒り心頭に發し、何をいひやがるといふので軍刀の鞘で叩き付けて遣はしたのだが、彼等は絶對死ぬつもりはない。私は呑驚した。彼等はやるだけの事はやるんだ、相手のものに損傷を與へ、目的を遂して後は手を擧げて捕虜になればいゝといふ虫のいゝ考へ、恐らく今までもさういふ虫のいゝ考へに日本は操られて來たのではないかと考へるのだが敵はかういふ野獣性、動物性をもつてゐる。

我 々も子供の時から敵に鑑を送つた、上杉謙信の立派なところを發へられたものだ。しかしあれは同じ同胞の戰さだつたからさうでせう。民族と民族の戰さは話が違ふといふことを、今度の戰でしみ〴〵味はつた。第一線の將兵は覚を決してアメリカの喉笛に喰ひついてやらねばならぬ、敵は女、子供が可哀想だといふ氣なんか毛頭ない、病院を爆撃したり、國民學校の子供を銃撃したりといふがもつと〳〵以上のことをやる、彼等の戰さの仕ぶり、彼等の日本軍に加へてゐる惡逆な態度を、眞に私は此の目で見て來てそのまゝを話してをるのであるが、第一線では怒り心頭に發してをる。しみ〴〵この氣持だけは何とかして皆さんにわかつて貰ひたい。女、子供の末に至るまでアメリカ人、イギリス人を見つけたら目玉までくり拔いてやるといふ氣持である。

最 後に申上げたいことは、第一線の將兵は如何なる生活をし、如何なる心理狀態にあるかといふ點である。ガダルカナルの激戰酣で、非常な慘烈な戰さを續けてをつたその最中に、したがつて新聞なんか夢にも見ない、ラジオなんかも全然聞かない、我々が第一線に行つて各部隊の狀況を見る時、兵隊が異口同音に訴くことは、

内地は四月十八日以來空襲は受けてゐないだらうか、東京あたりもう十遍くらゐやられてをりはせぬだらうか。

といふことである「我々がこゝで頑張つてをるから東京邊り空襲は大丈夫だ」と答へてをつたが、實際は我々もう五、六回やられてをりはせんかと心配してをつた。しかしこゝでこれだけの大戰をやつてをるから大丈夫だといふと、兵は非常に安心する、また段々食ふ物がなくなつて、國民學校の子供が腹を減らして校庭でバタ〳〵倒れてをるといふやうな「デマ」が何處からか傳はつて來る。さうすると内地の人は氣の毒ですと、自分が一日に三匁か四匁しか飯の食へぬ兵隊が心配してをる。大丈夫だ、そんなことはないからといふと、

さうですか、國民が飢ゑもせず爆撃も受けずに安泰ならば、我々は死んでもいゝ。

といつてゐる。

第 一線の將兵は實際さういふ氣持でをりますぞ。ガ島の作戰に參加した將兵は、全部が全部、今までのやうに偶には慰問袋を貰つたり、慰問團が來り、白衣の勇士になれるのだといふことは夢にも考へてゐない。全部が全部死ぬ、後は後方の人に立派にやつて貰はうといふ氣持を持つてをる。さうやらねばこの戰さは勝てぬといふことをよく知つてゐる。十年でも二十年でもやらねばならぬといふことを知つてゐる。

銃後も頑張れ

私は東京に來てさういふことを皆様御存じかと痛切に感ずる。東京は孤なんかなくて下駄を履いてゐると思つてをつたが、來て見ると靴も履いてゐるし、芝居などは一杯だ。それを見て私は安心するとともに妙な氣持がする、とても食ふ物が足らぬ、甘い物が足らぬ、それこそ何もない、風呂にも入れぬぞといふものだから、われ〳〵は全く東京あたり一箇月に一遍、風呂に入つてゐるかどうかと思つてゐた。いはんや温泉に行つてゐるなんか夢にも考へてゐなかつた。兵隊なんかと違つた立場だからといふかも知らんがそれでは相濟まぬと思ふ。

兵 團長以下の一般の御馳走が芋の味噌汁——芋といへば莖や葉は食はないものと思つてゐたが、我々が食ふ芋の莖や葉を味噌汁にして閣下に持つて行くと非常に喜んで召上る、味噌は粉の味噌です、それが一番の御馳走だ。それでも決して不平にも不滿にも思つてをらぬ。かうしなければ勝てぬといふことを十分知つてをる、十分その點御安心下さい。第一線の將兵は益々士氣旺盛である、櫻雞に譬へば遺ふほど益々士氣旺盛である。

芋の莖、葉が一番の御馳走だといふことは、喰ふ野菜がないからである。そのため に青物の冷凍船が偶に野菜を持つて來る、さうすると、來た生野菜は食はないで植ゑる、これから花を咲かせ種子を取つてそれを殖やす、そして今から二年、三年後の食糧にする。今喰へと渡される生野菜を食はない、さういふうな考へで第一線はやつてゐる。

苦闘の中に閑日月

ガ島から轉進して十日目位には各部隊長はもうジャングルの中の戰闘法を研究してゐた。師團では若い將校を集めて戰闘法を研究する。下士官は、例へば兵隊の敬禮の仕方が悪ければ敬禮法を直してゐた。とにかく第一線の將兵は士氣旺盛である。戰闘が本當に慘烈の極にあつても、上下相和して和やかに、何の樂しみもないが、お互ひに和樂してゐる。我々の間では歌を作つたり、詩を作つたりしてゐた、歌を作るほど暢氣だつたのではない。どんな困難な場合でも、日本武士は餘裕綽々として最後の決戰をやつたといふことをおわかりになつていたゞきたい。いはゆるガ島吟を御紹介しよう。

○大谷のみ光あればこのいくさ必ず勝たん勝たであるべき

○わが國は神國なればこのいくさ必ず勝つと謂ましあへり

大分腹の減つた歌で歌になつてをるかどうかわからぬが、

○草を食みて既に十日餘兵らなほ勝もいくさ信じて健氣にも戰ふ

と歌つた若い中隊長もあつた。ある部隊で、それこそ本當に十日間草を食つてをつたが、偶に兵隊が海岸から手に入れた椰子を、兵隊は決して自分では喰はぬ。すぐ上

官のところへ持つて行く、小隊長、中隊長のところへ持つて行く、それを貰つた將校の歌であるが、

○捜せば探そる兵のもたらす椰子一つおしいたゞきて共に味はふ

といふ歌もあつた。南の空は夜になると非常に奇麗だ、晝の間は壕に入つてゐるので、夜になると外に出て天を仰ぐ、さうすると星が光つてをる、海岸に椰子が黒々としてをる。

星月夜たゞ椰子の葉の黒々と

といふやうな句もあつた。或幕僚は策つきし間にほたるの二つ三つ

去年の年末、東から今に曙光が射すのだといふ氣分になつた時、

夜明け待つ空のくらさや年の暮

さういふ詩歌を作つたりよんだりしてゐる。敵は喰はんでも敵彈射飛の中に、さういふ餘裕がある。さういふ意味合ひで見ていたゞきたい。最後に稻垣部隊長の果樣から來た御手紙の一節に、

南海の孤島にて内地の樣子も分らず、米英撃滅を信じつゝ後に續く者を信じて散りましたことゝ思ひます。私どもに負はされました責任の重大なことを、ひしひ〳〵と感じます。

と書かれてあつた。恐らく南方ソロモンの第一線で死んだ人達は、みんな後の人を信じて後は大丈夫だらう、後の人に御願ひする、といふ氣持で死んで行つた事と思ふ。

壯烈!! 那須・古宮部隊の奮戰

陸軍報道班員　森川賢司記　（一八・六・三〇中部日本新聞掲載）

大東亞戰爭は苛烈なる決戰の段階に入り、わが前線將兵は凡ゆる惡條件を克服して敵の執拗なる反攻に對し勇猛果敢なる奮戰を續け、米英撃滅に邁進しつゝあるが、こゝに昭和十七年十月ガダルカナル島北岸タサワロンゲに敵前上陸を敢行したわが古宮部隊將兵、殊に那須・古宮兩部隊長の奮戰の模樣が森川陸軍報道班員によつて齎された。同部隊はルンガ河畔の敵飛行場を叩き潰すため優勢なる敵と交戰しつゝ、人跡未踏の密林地帶と闘ひよく頑敵を粉碎し皇軍の威武を發揮した。特に那須部隊長は敵の包圍下に奮闘を續けるわが軍の士氣と團結をいよ〳〵強烈ならしめつゝあつたが、遂に悪性マラリアのため陣中にたふれ、古宮部隊長は軍旗を奉じて將兵と共に敵陣へ斬り込みその使命を全うして日本武士道の精華を遺憾なく發揮したもので、その壯烈鬼神をも哭かしむる勇戰はアッツ島守備隊勇士の玉碎振りにも劣らぬものがある。

軍旗を奉じ突撃

人跡未踏密生してゐる大木が亭々と天を衝き、大蛇のやうな太い蔓が幹から枝へ枝から地上へ匍ひ廻り、名も知らぬ寄生木が縱横にからみつき針のやうな鋭い棘を持つた茨が隙間もなく地上をのたうつてゐるこの密林地帶は千古の謎を秘め、何となく神秘的な空氣が靜寂な中に漂つてゐた。

前も後も、左も右も、大木と大木、蔓と蔓に蔽はれて薄暗く見上ぐれば一點の青空さへ見えない。物凄さといはうか、恐ろしさといはうか、無言の大自然がヒタ〳〵と全身を襲うて思はず肌に粟立たしめる。

さらにまた地上には巨大な樹の根が蛸の足のやうに八方に擴がり、無氣味なことは夥しかつた。畫なほ暗いこの大密林地帶に斧を入れ千古の秘壇を焚きつゝ前進してゐるのはわが陸の精鋭古宮部隊で、かつては陸軍士官學校の教官として多くの有爲なる青年將校を創育し、一方劍道の達人としてその偉名を謳はれた部隊長古宮大佐は二十何貫の堂々たる巨軀を陣頭に進め、磁石と地圖、空中寫眞とを睨み合はせて方角を定めて自ら指揮をとつてゐた。昭和十七年十月

○日拂曉、古宮部隊はソロモン群島の一島ガダルカナル島の北岸タサワロンゲへ敵前强行上陸を敢行するや、ルンガ河流域地帶にある敵の飛行場を叩き潰すため道なき密林地帶を切り拓き敵の背後にせまりつゝあつた。日本軍の上陸を極度に怖れた敵は拂曉時から薄暮時にかけて間斷なく飛行機を飛ばし、米戰艦と協力して海岸線一帶を猛重に警戒してゐたのだ。

背後より敵陣へ迫る

當時の敵情はルンガ河の西クマ高地（日本軍が名づけたもの）からヒョウ高地（日本軍が名づけたもの）にかけて堅固なる陣地を構築し、擬装網を張りめぐらし、さらに彼等の主要陣地は飛行場の東、北流する中川の左岸に沿うて飛行場を包圍するやうに構築されてゐた。碇兵陣地は飛行場の北側つまり海岸に沿うて占領し、高射砲陣地はヒョウ高地の東北部と西海岸付近にあるらしかつた。

敵は刻々と兵力を增し物材を揚陸し、密林地帶や椰子林を焼き拂ひ陣地構築に狂奔してゐた。かうして彼等は近代科學兵器の多數に依存し火力發揚に全力を傾注し豊富なる彈藥の使用によつて、我が軍の攻撃力を破碎せんと企圖してゐるらしく思はれた。從つて敵は我が軍の揚陸や繼續彈藥の揚陸を極度に怖れ、グラマンP39等の戰闘をもつて海岸線を飛び廻り揚陸地と思はれる箇所には盲彈の雨を降らせ、少しでも怪しいと思はれる密林地帶にも惜しげなく爆彈を叩きつけた。又ツラギ方面にはコンソリデーテッドの双發或は四發の航空機が着陸してこれ又毎日毎夜、密林上スレ〳〵に飛び廻つて我を脅やかした。敵飛行場付近は、ガーゲルゆ將の指揮する海兵隊で警備してゐたが、最近日一日と陸兵が上陸してその兵力二萬五千といはれてゐた。古宮部隊は今、この大敵をアウステン山の峻嶮を迂回して背後より突入、撃滅せんと進撃を

續けてゐるのであつた。

豪雨を衝いて前進

時には部隊長自ら斧をふるつて太い蔓を切り、鎌をとつて茨を刈り取つて道を切り拓いて行つた。夜の密林地帶は一寸先も見えない闇機に發見される惧れがあるので燈は全然點けられない。兵隊達は一列縱隊となつて前の兵隊の背嚢を摑み、木の根につまづき、或は濕地へ轉んで泥まみれになつて進んだ。時は南海の雨季である。白い雲が密林地帶を風のやうな速さで包むと見る間に天地をくつがへしたやうな物凄い大豪雨が暴風雨を思はせる音をたてゝ密林地帶を叩きつけた。泥水は忽ち川となつて滔々と地上を流れる、この大豪雨は一日二、三回必ず襲つて來た。部隊長始め將兵達の軍服は上陸以來乾いたことがない、ビショ濡れでズボンの膝あたりは茨のため殆ど破れ半ズボンのやうになつてゐた。

「日本の軍人だッ！ 東北健兒だッ！ こんなことにへこたれるな！」

部隊長自ら斥候

部　隊長は自ら部下を激勵し、相變らず陣頭に立つて茨の道を切り拓いた。顏や手足は傷だらけになり、そこから血潮が噴き出してゐる。部隊長のこの苦闘振りを目擊してゐる部下達は幾度となく交代をせまつたが「大丈夫ぢや、心配するな」と豪快に笑つて相變らず密林と戰ひ續けてゐた。部隊長のこの率先躬行する神々しい姿と無言の中の敎訓は、部下將兵の士氣を昂揚させ米撃滅の信念を燈え立たせたこと勿論である。「この部隊長と共に死地へ飛び込む」ことを將兵達は非常な名譽と考へ、男に生れた光榮と感じてゐたのであつた。

十月○日、部隊は衝く通川の畔りに達した。いよ〳〵敵の眞正面である。背後を衝く部隊の行動を敵に察知されては上陸以來不眠不休の苦心も水泡になると考へた部隊長は中隊長勝股大尉を呼んで地點を示し、前面の高地占領を命じた。勝股大尉は部下と共に地圖を唯一の頼りとして密林地帶を通り、苦心の結果、草原高地を占領し、それ〳〵兵を配置して警戒に任じてゐた。暫くすると杖を持つた部隊長が單身ヒョッコリこの陣地に姿を現はした。

「勝股大尉、この高地は一寸をかしいぞ」

部隊長の頭では闇上の草原高地を占領すれば、敵の陣地が一望の下に見下せるものとのみ思つてゐたのに、前も左右も草原の高地が起伏して、靑空以外に何も見えなかつた。

「勝股大尉、やはりこゝは遮ふぞ」

暫く地圖を見つめてゐた部隊長はかういつて大尉を振り返つた。

「前面のあの高地ぢやよ、」然に來てみい。

部隊長殿、勝股が參ります。部隊長殿は大切な御身體……」

大　尉は自分の見當違ひを深く悔ゆると共に部隊長自身を頼はすことは憚ばに堪へなかつた。

「何の、わしは將校斥候ぢやよ」

と愉快さうに大きく笑ふと大尉を從へて密林の谷へ下り、又登つて目的の草原高地へ出た。

「こゝぢや〳〵」

この高地から見れば敵の陣地は一望の下に展けてゐた。殆ど波狀の丘陵地帶で、山頂は草原となり、谷間は黑い密林地帶となつて、マタニカウ河、ルンガ河がその間を帶のやうに北流してゐた。この地區は所謂アウステン山麓、北方は丁度富士の裾野の駱駝山付近の地形と似てゐるやうに思はれた。振返れば通川のほとりも眼下に展けわが陣地まで手にとるやうに見えた。

「喃、勝股大尉、この高地さへ押へれば」

部　隊長は滿足さうに笑ひ「なほ、あの高地も一つ」と右手の草原高地を指した。部隊長の軍服は胸のあたり、背中のあたり等ボロ〳〵に破れて餅のやうに脹つた肌から血がにじんでゐる。再び部隊長は草を掻き分け、礫石と地圖を頼りに第二の目的高地へ進んだ。後に從つてゐる勝股大尉は有難いやら、勿體ないやらで幾度も喉を鳴らし、この部隊長の生きた敎訓をしつかと頭の中へ叩き込んだ。この二つの高地は九〇三、九九〇の高地と稱し、その後味方の作戰にとつて非常に有利な地點となつたのである。

髭を剃る武士の心

○日、部隊は通川上流に集結した。いよ〳〵部隊は戰鬪隊形をとつてアウステン山の背後を廻り一擧に敵陣へ突入するのだ。その夕刻、部隊長は幹部以下各中隊長達を呼び集めた。

「部隊はいよ〳〵明拂曉を期し戰鬪隊形をとつて前進する。各隊は夫々任務を自覺し勇往邁進せよ。誓つて先鞭が躍かした部隊の歷史を汚してはならぬ。東北健兒の本領を十分に發揮すべし」

最後の乾杯として取つて置きのウヰスキーの栓が拔かれた。暑氣の多い地面に木の葉等を敷いて一同車座になり、水筒の蓋を手にとつた。今日の部隊長は髭を美しく剃つて若返つてゐる。相變らずいつもの溫顏であつた。

「あゝ髭か？　俺は何時戰死しても心殘りのないやうに髭を剃つたのぢやよ、無精髭を生やした醜い面を戰地にさらしたくない、地獄へ行つて閻魔大王の前に立つても幅をきかすやうに、喃」

と、部隊長は朗々した頬から顎を撫で廻しこれで十位若返つたらうと一同を笑はせ、自分も又をかしさうにカラ〳〵と笑つた。

それから「俺のない後はこゝにゐる渡邊中佐が部隊長代理である」傍でチビリ〳〵ウヰスキーを舐めてゐた渡邊中佐の肩を叩いた。部隊長が何の屈託もなく愉快さうに話してゐる一言一句が、中隊長達の頭に、胸にキリ〳〵と沁み込み腸の奥がカッ〳〵と熱してきた。

「みんな神妙な顏をしてゐるぢやないか、どうだ、わしの髭し姿、金比羅舟を、このジャンダルの中で踊らうか、あはははは……」

古　宮大佐は既に死を決してゐるが一方敵兵を呑んでかゝつてゐた。明けて翌日、戰鬪行動を開始した長蛇の如き部隊は、部隊長を先頭に高橋工兵部隊が未だ完了してゐない丸山道を、アウステン山の背後に向つて意氣揚々進撃を續けた。

「古宮部隊長は？」

折から部隊へ追ひついたのは杖を右手に攝み、左手を野村副官の肩にかけた那須部隊長であつた。

「部隊長殿は先頭に立つてをられます」

「さうか、みんなもご苦勞千萬ぢや、しつかり頑張つてくれよ」

と兵隊達に犒ひの言葉を投げて走るやうに先頭へ進んだ。那須部隊長は鉢卷をキリリッと結んでゐたが顏は眞赤に、目の中は生氣なく濁り、熱つぽい顏のやうに見受けられた。

病軀進む那須少將

當時、那須少將は惡性マラリアに冒され四十度以上の高熱が續き身體は極度に衰弱してゐた。だが古宮部隊前進の報告を受けるや責任感の旺盛なる少將の頭に「人間は死生を超越して任務に邁進せよ」といふ座右の銘がグッと浮び上つて來た。

「俺は古宮と共に前線に立つ」

副官や軍醫はその無謀を極力止めたが少將は頑として應じなかつた。

「不肖、那須弓雄　陛下より部隊指揮を一任されてゐる、最後の倒れるまで指揮をとるのが、わしの任務である」

進擊阻む密林地帶

少將は割れる程痛み出す頭に鉢卷をなし、高熱と疲勞にフラつく身體を一本の杖で支へ、野村副官の肩を借りて部隊の後を追うたのであつた。元來、少將は世の中の酸いも甘いも嚙み分けた典型的な武人肌の人で、謠曲を最も好み、時に杯を手にすると、陶然として日頃の美聲を張り上げて端唄、長唄、常磐津等を歌ひ四隣の耳を奪つてゐた。また繪は素人の域を脱し、文學、詩歌等も玄人をしのいでゐた。

男子我れ防人となる甲斐ぞあれ
東半球の果てに死ぬれば

これは少將がガ島へ上陸し轉戰激闘のち自己の心境を現はした歌である。私達はこの悲壯な歌を口誦む時、目頭の熱くなるのを禁じ得ないのである。この歌が結局少將辭世の歌となつてしまつたのだ。また少將の容貌は魁偉で、一見恐ろしいやうであつたが人一倍涙もろく部下思ひだつた。最も少將の頭を惱まし、日夜心を痛めたことは部下部隊に戰死者、マラリア患者、下痢患者の續出したことである〃陛下の赤子を多く失ひ奉つたその罪、萬死にあたる〃と少將は暇さへあれば遙か宮城を伏拜み不德の罪を詫びてゐた。いつも少將の頭にまつはりついて離れないのは去る九月敵陣深く突入して敵の心臓を寒からしめて華々しく散つた部下將士の英靈のことであつた。

部下將兵の追想

九月〇日の未明敵飛行場の遙か東、タイボ岬へ突如敵前彈行上陸を敢行した部下部隊（青葉部隊）は海岸傳ひに敵陣地に向つて進擊し、八日の拂曉にはレンゴへ到着した。いよ〳〵敵陣間近である。部隊は密林や椰子林の中へもぐり込み東と南から敵陣へ突入する作戰をとつた。將兵の意氣正に天を衝く、山と川との合言葉で十二日夜半を期して一齊突擊を敢行し敵を殲滅するの

だ。六日目には〇〇支隊と出會つて糧秣を一日分貰ひ受け、川口部隊長から前進する地形敵情等詳細な注意を與へられた。

翌　日、明夜こそ白兵戰をもつて敵を擊滅すると兵隊達は銃や劍を磨き、衛生兵などは堅い木を伐つて、手頃の檜を作つてゐた。八日目の夜半、突擊命令が下つた。雨雲のやうな黑い塊りになつた各隊は、天地をひつくり返すやうな喚聲とともに東南に在る敵の第一線を突破した。慌てた敵はこの地點に全兵力を集中し、迫擊砲、機關銃を間斷なく射ち出し防戰これ努めた。敵の飛行機は頭上を飛び廻り、時折照明彈を落して地上を眞晝のやうに照し爆彈を滅茶苦茶に投下した。

「己れッ！　ヤンキー奴」

「日本刀の斬れ味を見よッ！」

將兵は血達磨となつて奮戰し、猛烈なる敵の銃砲彈を冒し第二線を突破した。敵の銃砲火は十字火となつて飛んでくる。味方の將兵はバタ〳〵と倒れて行く。この激戰中或る中隊長の如きは部下二十七名を提げ、迂回して敵の幕舍を奇襲、百何十名近くの米兵を斬り殺し、或は突き殺し壯烈鬼神も哭く戰死を遂げてゐる。

げつそり痩せた少將

この戰闘を考へて來ると少將には何かしら重い責任が身體全體を壓へつけ、寢ても起きても頭から去らなかつた。一方古宮部隊の將兵は瘴癘の密林地帶を進み、マラリアに冒され激しい下痢にかゝりながら高熱と腹痛を耐へて默々と前進を續けてゐるのだ〃部下將兵の苦勞を察すればこの位の苦勞など何のその〃と少將は自ら自身を鞭うち、古宮部隊と共に進擊したのであつた。丸山道とは名ばかり、アウステン山の南麓重疊たる峻嶮を、やゝ直線に切拓いたもので、胸つくやうな坂を蔓にすがつて登り、又千仞の谷底へ藤蔓を傳はつて猿のやうに下りて行く。何しろ言語に絶する惡路であつた。ましてや時は雨季、午後になると盆をくつがへしたやうなドシャ降りである。何處までも續く泥濘の道、將兵は雨に叩かれ泥にまみれ、ひたむきに進擊また進擊を續けた。那須少將と古宮大佐はビショ濡れになつて先頭を進み、方角を定め、密林を切り拓いてゐた。〇日漸くルンガ河上流に達したが濁流滔々として無氣味な渦を卷いてゐた。

「閣下、ご無理をなすつてはいけません」

大　佐は時折、少將の顏をのぞき込み、その無謀なることを諫止すると共に後退して療養に努めるやう切に進言したが、

「古宮、部下の苦痛を思へ、部下の苦痛を」

とそんな時には、大粒の涙が頬に光つてゐた。ルンガ河口の濁流も少將自ら先頭を切り胸まで浸つて進んだのである。少將の頬はゲッソリこけて、目は日一日と生氣を失つてくる。それでも相變らず鉢卷をし、杖にすがり副官の肩を借りて古宮大佐と共に方角を定めては密林地帶を切拓きながら進んでゐた。少將のこの痛々しい姿を目擊し倒れて後已むの神々しい姿を目のあたりに見た兵隊達は〃閣下でさへもあのやうな御苦勞をなされてゐる、俺達なんか、何だッこれしき〃と互に勵まし合ひ元氣づけ合つてゐた。

かくして、五日後の拂曉、敵に察知されずして飛行場の南端六百米のジャングル地帶へ到着したのである。「今夜の二十二時を期して敵陣地へ突入する」と決し、兵隊達を一時休養せしめ、又病魔に襲はれた兵隊達を後送せしめることにした。やがてジャングルの夜は來た。その夜雨雲が低く雲足が速い、一寸先も見えない眞の闇、古宮部隊長は自ら礎石を持つて先頭を進み兵隊達は一列縱隊となつて續いた。いよ／＼敵前に近づいた時、大スコールが下界を押流すやうに降つて來た。好機逸すべからず、

〃突擊ッ〃

の命令一下、部隊長自ら軍刀を閃かして敵の第一線へ飛び込んだ。

屍を越えて進擊

この思ひがけぬ奇襲に慌てふためいた敵は、迫擊砲陣地の砲口を一齊に開いて、滅茶苦茶に射ち出した。砲彈は前後左右に炸裂し、泥と石ころは雨と共に降りしきる、味方はバタリ／＼と倒れて行くらしい。

「軍旗と共に死ねッ！」

聯隊旗手犬塚少尉は大聲で叫びながら部隊長に續いた〃軍旗と共に、軍旗と共に〃兵隊達は眞ッ暗な中で、聲をたよりに殆ど手探りで續いたのである。

「あッ！」

犬塚少尉は一聲叫んで泥へめめつた。直ぐさま駈け寄つた大野少尉は軍旗を捧持し、

「軍旗と共に死ねッ！」

と叫び續けた。兵隊達は戰友の屍を乘越えて進擊する。雨の激しくなるに從つて敵彈いよ／＼猛烈だ。

「軍旗は暫く後退せよ」

部隊長は砲煙彈雨の中で叫んだ。

「軍旗は此處まで進んでをります。士氣昂揚の上からも後退することは絕對出來ません」

と大野少尉は敢然と進擊を續けたのである。だが然し、敵の曳彈と暗さのため連絡は切れてしまつた。雨ははれた。敵の第二線と百米位の距離にある死角を利用した古宮大佐は吉井少佐以下を集めて、軍旗を拜し終つて、

「詔書」

古宮部隊長の口から嚴かな言葉が流れると居並ぶ將兵は襟を正し身を緊張に硬ばらせた。

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ盡テ交戰ニ從事シ……

音 吐朗々と奉唱し、部下をして決死の覺悟を促さしめた。

「部隊長は敵中にあつても大丈夫ぢや、お前達は軍旗を奉じて那須閣下の下へ歸つてくれ」

と勸めたが、誰一人歸らうとはしない。遂に命令を以て指名し、拂曉時、再び第一線を突破し味方陣地まで後退せしめた。殘るは古宮大佐以下僅かに〇〇名、丁度古宮部隊が敵陣へ突擊した時、那須少將の病狀は惡化し、目はくらみ、手足の自由さへも失つてゐた。明け方近く敵陣地方面の猛烈なる銃砲聲に、フト意識を取戻した少將は、暫く耳を傾けてゐたが、ムックと半身を起し、

「古宮はどうしたッ！」

「大佐殿は昨夜から今朝がたにかけて敵陣へ突入致しました」

「突入したか、部隊全員一丸となつて突入したか」

「それが、暗さのため連絡が絕えてしまつたのであります」

副官は申譯ないやうに答へた。

「連絡が絕えた、連絡が絕えた！　副官、ウキスキーをくれ」

少 將はウキスキーをグッと飲み干すとスックと立上り（いよ／＼靖國の社へ行く時が來た）と杖と軍刀を兩手に杖つき、

「本部は前進せよ！」

夜はしら〻と明けてくる。敵の第一線近くまで進んだ少將は、まなじりを釣上げ、牆を喰ひしばつて、ヂッと敵陣を睨んでゐる、銃砲聲は激しい。

「敵中へ入つた古宮は苦境に陷つてゐる、全力を擧げて救出しなければならぬ」

少將の瘠せこけた頰には二線が朝露のやうに光つてゐた。敵彈は前後左右に炸裂する。

「閣下、危險であります。暫く掩壕へ御入りになりましては……」

副官は切に勸めたが、少將は首を横に振つて應じなかつた。四邊の部下はバタ／＼と倒れて行く、その度毎に少將の顏は雲り、ゆがんだのである。突如、敵の一彈が少將と野村副官との中間に炸裂し、土煙は濛々と立上つた。

「うむ」

「閣下ッ」

副官始め將校たちが駈寄つて抱き起した。

「何ともない／＼」

と平氣でいつてはゐるものゝ破片創を受けた左足からは、ドク／＼と眞赤な血を噴き出し黑い地上をドス赤くいろどつてゐた。

「閣下ッ、古宮部隊報告ッ」

轉るやうに駈け込んで來たのは勝股大尉であつた。左顳顬を貫傷したらしく血潮は顏から胸にかけて流れてゐた。

「古宮部隊ッ」

少將はスックと立ち、

「軍旗は、軍旗はどうしたッ！」

と息苦しい程激しく突込んで來た。

「捧持して只今到着致しました」

「さうか／＼、古宮大佐は？」

「益々士氣旺盛、孤軍奮鬪を續けてをられます」

「部下は何名か？」

「〇〇名と思ひました」

「うーむ」

（古宮をこのまゝ敵中に置くことは斷じて出來ない。將兵も少く、苦勞も多く、疲勞も激しからう、古宮よ、暫く頑張つてをれ那須自身が手兵を提げ、必ず救出に行くぞ）

「勝股大尉、報告に來る早々御苦勞ぢやがもう一ッ骨折つて貰ひたい。それは那須が今宵殘りの部隊を纏めて敵陣へ突込むといふことゝ、左翼にある齋安部隊をして、古宮部隊を救出せしむるやう、この二ッを本部へ連絡して貰ひたいのぢや」

「はいッ」

「頓むぞッ、急げよ」

死の唇に突擊々々

目まひするやうな痛さと苦しさをヂッと

耐へて大尉はジャングル内の小徑を走り續けた。走り續けてゐる大尉の頭に昨夜突擊の際の事がフト浮び上つて來た。暗さは暗し、雨は激しく横なぐりに叩きつける、敵の迫擊砲彈はあたかも小銃彈の如く飛散してくる、幾回ともなく突擊を敢行し、漸く第一線を突破した。續く兵は何名か少しも分らない。

「突擊だッ、突擊だッ」

突 然、大尉の足許から呻くやうな聲が洩れた。

「誰だッ」

「突擊だ〳〵」

答へは同じ突擊の聲であつた、不審に思つた大尉は近づいて顏をすかしてみた、隊の越智政夫伍長である。

「越智伍長ッ」

大尉は呼んだが、彼の耳へは入らぬらしく、鐵條網の線にすがつてにじり匐ひながら突擊だ〳〵と叫んでゐる。迫擊砲彈で胸から足にかけて致命傷を負うてゐた。彼は殆ど失神狀態で、痛さと苦しさに唸りながらも「突擊だ〳〵」と叫び續けてゐたのである。

大尉は眞赤に燒けたゞれた鐵棒を呑み込んだ時のやうな苦痛を受けた。

「中隊長だッ、勝股大尉だッ」

彼は意識朦朧としてゐる伍長の耳許で叫んだ。伍長にはその言葉が通じたのか、どうか。

「中隊長殿の所へ行かう、突擊だ〳〵」

聲は次第に細くかすれてくる（今頃越智はどうしたらう、あの時は突擊の眞最中なので、どうすることも出來なかつたが）大尉は部下の悲壯なことを思ひ出し、又勇敢に戰ひ續けて、不幸負傷して自ら後方へ引き下るこの兵隊達の健氣な有樣を見て、涙を止める事が出來なかつた（これでこそ、日本は强いのだ）

「中隊長殿ッ」

大尉は足下から呼び止められた。昨夜の夜襲の際、左足貫通、骨折して歩行困難な西牧三郎兵長であつた。彼はいざりのやうにずりながら後方へ下つてゐた。

「おゝ西牧兵長か」

「隊長殿申譯ありません」

「戰ひはこれからだ、後方で十分傷の手當をせ、俺は今重大な命を受けて急いでゐるのだ、何れ又會ふぞ」

「中隊長殿、待つて下さい、自分は夜襲の際、にぎり飯一つと乾パン一袋頂きました。だが、握り飯は途中落してしまつたのです、乾パンは少し殘つてゐます、自分は後方へ下るので必要ありませんから隊長殿へ差上げます。これを食べて元氣をつけ、憎い米兵をやつつけて下さい」

西牧は大切さうにしまつてゐた袋を大尉へ渡した。袋の中には小型乾パンが四ツ入つてゐた。大尉はいぢらしい部下の心情に泣いた。

那須少將の阿修羅

勝股大尉の連絡によつて、部隊の左翼にある廣安部隊が、那須少將の指揮下に入り明日拂曉を期して一擧に突擊を決行することになつた。この日といふ日は、少將には長い日であつた。殘りの將兵を提げて雌雄を決する、少將の顏には會心の笑みが浮んだ。夕刻より銃砲擊は猛烈である。少將に

はまたマラリアが發熱して來た。身體は燒けたゞれるやうに熱く、頭は氣狂ひになる程痛かつた。少將は軍醫を呼んで注射をさせ、再び副官の肩を借りて最前線に立つたのである。目は霞んで何も見えない、身體は崩るやうなけだるさだ、その拂曉前、少將の命令は廣安部隊へ飛んだ。味方の喊聲が響く、少將は手許部隊へ突擊前進の命を下すと、自ら高熱と疲勞と負傷の身體に鞭ち、軍刀を引拔いて陣頭に立つた（古宮よ救援に行くぞ）敵は我が攻擊を豫想し、刻々と科學兵器を增加し、準備を整へてゐたので、時來れりとばかり、猛烈な反擊に出て來た。

「畜ッ！ 鶴ヶ岡健兒だッ！ 一歩も退くな

得統を誇る軍旗の下で死ねッ！」

敵の砲彈は少將の前方で炸裂し、四邊一面濛々たる土煙に包まれた。

「無念だッ！」

少將の悲痛な叫び聲を土煙の中に聞いた。その頃本隊より一時後退の命令が來た。人事不省に陷つた少將を、二百米後方まで運び應急手當を施した。

「古宮はどうした、古宮はどうした、廣安部隊は？」

多くの部下を失ひ、上は　陛下に對し奉り下は國民に對して申譯がない。弓雄の不德の罪、萬死にあたる……と、うはごとをいひながら十一時、聖靜の萬歲を三唱して壯烈極まりなき戰死を遂げた。

重圍下の古宮部隊

少將の心配の種であつた古宮部隊はどうしたか？ 敵の第二線を突破し、第三線との中間死角に、古宮大佐以下〇〇名、敵に包圍されながら、日夜孤軍奮鬪を續けてゐた。彈藥は少くなる、糧食は夜襲の際の、にぎり飯一個と乾パン一袋持つてゐただけだ。丁度あの夜平隊長と殆ど同時に別方面から敵の第一線を突破したのは、鹽川中尉の指揮する〇〇名であつた。暗夜のため連絡は途絶え、中尉は部隊長を極力探し廻つたが見當らず（部隊の突擊不成功であらう）と信じ切つた中尉は、自ら軍刀を揮つて敵陣へ斬り込み、胸部に貫通銃創を受けて壯烈なる戰死を遂げた。かくて敵の中にゐるのは古宮大佐以下〇〇名のみとなつたのである。その日も過ぎ翌日も暮れさらに次の日、その日も銃砲聲の中で夜になつた。四日間一食も口に入らぬ、水筒の水は底に飲み干し、誰の喉もカラ〳〵ひつついてゐる（このまゝでは餓死を待つのみだ。潔く敵の中へ斬り込で、日本武士道の最後の散り際を、ヤンキー共に示してやれッ）覺悟した部隊長は、其夜は敵彈を友に、車座になつて最後の會議をなし、拂曉を待つて故國の空を伏し拜み聖壽萬歲を三唱した（那須閣下、古宮は只今から敵陣へ突擊致します）

「突擊ッ！」

の命令一下、天地も轟く喊聲と共に第三陣へ斬り込んだ。迫擊砲彈、手榴彈の炸裂が濛々たる土煙を卷き上げ、その間を大佐の軍刀はキラリ〳〵と閃いた。どの位血を吸うたかその光は鈍い、突擊喊聲は鋭い、日本軍の强さを、始めて米兵も感じたらう、壯烈鬼神も哭かしむる勇戰奮鬪振りであつた。敵機は威壓するやうに頭上を飛び廻つてゐる。

凄壯!! 稲垣部隊のガ島死闘記

陸軍報道班員　森川賢司記

（一八・四・三朝日新聞掲載）

大東亞戰下北に南に赫々たる戰果をあげて大東亞共榮圏の基礎磐石の固きを加へつゝあるとき、けふ三日神武天皇祭を迎へて偲びまつるのはまつろはぬものどもを撃ち平げんと　畏くも思召されて日向より御東征の途に上らせられた　神武天皇の御遺業である。〃撃ちてし止まむ〃〃撃ちてし止まむ〃久米の子らが勇壯な合唱の聲は今新しく一億國民の胸に響く、神武の御聖業をそのまゝに海に陸に勇戰奮闘する皇軍勇士の死闘の姿は、相ついで前線からもたらされて銃後國民を感奮せしめてゐるが、ことにソロモン群島ガダルカナル島、ニューギニヤ島ブナ方面に挺身、南太平洋方面における戰略輸送の掩護に任じた前衛部隊の奮戰ぶりについては、先には中澤挺身斥候の敵飛行場爆破の鬼神を哭かしむる壯烈な戰闘記がもたらされ國民を感激せしめたが、今回またも昨年十一月五日ガ島に强行上陸、優勢なる敵を相手に死闘の限りをつくした稲垣部隊の血戰記が陸軍報道班員によつて傳へられて來た。

雨雲低く垂れて四邊は眞の闇、海は黑い油を溶かしたやうにドロリと滅んでゐる。凄いほど恐しい暗闇と死のやうに靜寂なガダルカナル島北岸、タサリロングの海岸へ突如現れた眞黑な塊がある。その黑い塊から黑の一線が南へ伸びて暗闇の中へ消えると、ちやうど黑い塊が糸玉をほぐすやうに次第々々に小さくなり、果ては一つの黑線となつて闇の中へ吸ひ込まれてしまつた。

これは米撃滅のため、萬里の波濤を蹴つて敵前强行上陸を敢行した陸の精鋭稲垣部隊である。時は昭和十七年十一月五日、拂曉前のことであつた。部隊の任務は速かにルンガ河上流アウステン山北麓、最前線の最右翼に陣地を布き、時機來たらば一擧に敵の背後を衝くと云ふ重大なものであつた。

南　海の夜が明けた。深い密林地帶には鳥の鳴聲はおろか、羽ばたきさへも聞えない。遙か東方からは彼我交戰してゐるのであらう、銃砲聲は殷々として絶間もなく遠雷のやうに轟き渡つてゐる。爆音が大空一杯に響き渡ると、曇天無比なる敵の飛行機は二機、三機と密林上すれ〳〵に飛びまはり、怪しいと見た箇所には五、六發の爆彈を連續的に投下し、その他の箇所は機關銃で盲滅法に掃射した。密林内は砲煙がのたうち廻り、大木は物凄い大音響とともにぶ

つ倒れた。部隊は幾度となく爆風をかぶり土砂を浴び、ある時は歩行しある時は匍匐し爆彈と機銃彈の間を縫ひながら磐石を唯一の頼りとして東へ〳〵と進撃した。この邊の密林地帶は人跡未踏、千古の大森林で二十米以上の大木が亭々と天を衝き、それに纏五センチから十センチ以上もある藤の蔓や寄生木が無數にからみつき、あたかも籠を張つたやうになり通行殆ど不可能といふ狀態であつた。仰げば僅か上方に枝葉が茂り、僅かの青空さへも見えない。地上には曲りくねつた大木の根が大蛇のやうな不氣味な姿を現し、三抱へも四抱へもある大木は敵の盲爆のために倒れ、いたるところに横たはつてゐた。部隊はこのやうな畫なほ暗い密林地帶を切開き〳〵進んだが、行程は遲々として捗らない。敵機は間斷なく頭上を唸りつゞけ、海上からは艦砲を雨の目のやうに密林地帶へ射ち込んで來る。

「何のこれしき、日本男兒だッ」

部隊長稲垣少佐の激勵の言葉に兵隊たちは勇氣百倍一致協力して、この猛爆下を晝夜兼行ほとんど言語に絶した苦難を嘗めて進撃し、漸くコカンボナの東方二キロを起點として、アウステン山の背後を通る丸山道へ辿り着いた。

四十二キロ、拓く丸山道

この丸山道は完全な地圖も機械もなく、簡單な羅針機一個で、わが高橋工兵部隊は十月十三日から二十一日まで約一週間、不眠不休あらゆる困難と戰つて四十二キロの密林地帶を切り開いた道である。それだけに道とは名のみで柚道よりも、もつとひどい道であつた。時はちやうどガ島の雨季、毎日午後になれば猛つくやうな豪雨があり丸山道は何處までも續く泥濘の道である。しかも重疊たる峻嶮を一直線に切開いた道なので、時には藤蔓にすがつて斷崖をよぢ登り、時には藤蔓を唯一の頼りとして千仞の谷底へ下つて行く、糧秣、彈藥を背負ひ銃を肩にしてこの難路を行軍する兵隊たちの勞苦は、言語に絶するものであつた。しかし、あくまでも米國を叩きつけ東亞の盤を除かんとする信念に燃えた、わが稲垣部隊はズブ濡れになり、泥にまみれながらも元氣旺盛、任地へ向つて進んだのである。

ア　ウステン山の南麓を迂回して北麓に現れた部隊は、敵の陣地や飛行場を一望の下に展望し得る絶好な密林地帶に陣地を布いた。敵は當時アウステン山以西、海岸沿ひにのみ全主力を注ぎ、ありあまる機械力を總動員し、海陸空一體となつて我に對抗してゐた時なので、稲垣部隊がアウステン山の峰續を越えて、後背方に陣を構築し、機の熟するのを待つてゐるなどといふことは、彼は夢にも知らなかつたらしい。部隊の前方にある第一展望點から見下せば、ルンガ河は南から北へ帶のやうに流れ、その河を挾んで東飛行場、西飛行場があり、その周圍の小丘には堅固なる砲臺を築き道路は四方八方に通じて兵員、糧食、彈藥等を滿載した自動車は、水の流れるやうに走つてゐた。飛行機は毎日十機、二十機と着陸し、また味方を爆撃に行く飛行機の數さへハツキリと讀みとられた。部隊の陣地は敵の空爆もなく、艦砲射撃もうけなかつたので、兵隊たちは毎日刻々と增加されて行く

敵の兵器と兵員を見つめ、無念の齒がみをしながら突擊命令を今か〳〵と待つてゐた「われ〳〵は間もなくあの敵陣地へ突擊するのだ。わが陣地はなるべく簡單でよいだらう」といふ機運が將校はじめ兵隊たちの全體に流れてゐるやうに部隊長には思はれた。すでに命を投げ出して敵地へ突入するといふその決心は頼もしくも嬉しかつた。だが、冷靜に考へ、さらに戰局を判斷する時、敵と正面に對峙してゐるわが軍の攻擊を容易ならしめるためには、時に敵の全主力をこの地へ引きつけるやうになるかも知れぬ。その際敵は航空機は勿論野砲、山砲、迫擊砲等あらゆる兵器を持つて迫つてくるだらう。われは僅に機關銃と小銃のみだ。これは今のうちに將兵の考を改めて置かねばならぬと考へた部隊長は全員を集め「わが部隊は最右翼にあつて敵の背後を衝く最も重要な位置にある。下命次第わが部隊は敵の背後に突入すること勿論であるが、或は情況によつて敵の全兵力を引きつけ、本隊の攻擊前進を容易ならしめなければならぬ時もあるだらう。敵の兵力を過小視することは、兵家の最も慎しむべきことである」が、さりとて恐れる必要もない。見よ、敵の飛行場附近には野砲、山砲が山積し、飛行機は毎日十機、二十機と着陸してゐる。米兵は弱い、だが彼らは多數の兵器を持つてわれに對抗するだらう。われ〳〵には大和魂があるといつて、素裸のまゝで彼らの精鋭なる兵器にぶつつかることは不可能事である。今は幸なことに、われ〳〵がこゝにゐるといふことを敵は察知してゐない。われ〳〵はこの機會を利用して堅固な陣地を構築しなければならぬ。部隊長は命令する、全員で陣地を作れッ」と、命令した。兵隊たちはその日から全力を擧げて陣地の構築に努力したのである。

涙を呑んで決死輸送

突擊の命令も敵を牽制する命令もまだ來ない。正面部隊の戰鬪は毎日猛烈に展開し轟々たる銃砲聲は天地もひつくり返るやうだ。兵隊たちはいら〳〵し出し、銃を持つて立つたり坐つたりして敵陣地を睨んでゐる「今に思ひ切り働いて貰ふぞ、慌てるなゆつくり英氣を養へ」部隊長は兵隊たちの肩を叩いて笑つた。部隊の雜事は糧秣、彈藥の補給であつた。輸送機關も、輸送道路も完備しないこの最前線は、すべて兵隊たちの肩をかりて補給しなければならなかつた。彈藥、糧秣の交付所は數里離れたタサロンゲにある。數里といへば簡單であるがその間丸山道の險路あり、密林地帶あり、また敵の空襲、艦砲射擊圏内を通過しなければならぬといふ命懸けの仕事であつた。兵隊たちはこの危險な仕事を進んで志願して糧秣補給に努めたのである。しかし朝出かけた兵隊の大半は途中敵彈に倒れ或は傷ついて、夕方には血みどろな戰友たちをひつかついで、僅かに歸つてくる有樣であつた。

この危險を冒して莫大な犧牲を拂つた補給も決して滿足なものではなかつた。しかし兵隊たちは、進んでこの仕事を引受けた。當時敵の航空機、潜水艦の跳梁によつて後方よりの輸送が途絶え、遠くまで兵隊たちは足を伸ばして運んだ。部隊長稻垣少

佐の額に、暗い影が日增しにかざして來た。熱湯を飲込むやうな苦しさと辛さである。けれども部隊全員を救ふためには涙を呑んで決死の輸送隊を組織しなければならなかつたのである。この決死的な兵隊たちが、目的地のタサロンゲなり、エスペランスなりへ到着しても、持ち歸つて來る糧秣は極く僅少で、兵隊一人一日分の米は一合足らずに粉味噌ひとつまみといふ悲慘な有樣であつた。ことに甚だしいのは十日から二十四日まで一粒の米もなく、折角意氣込んで行つた兵隊たちもすご〳〵と毎日歸つて來た。兵隊たちは密林地帶を跋廻つて食物を捜したが、この島にはバナナ、パパイヤといふやうな果物は一つもなく、たゞ海岸地帶に、僅かな椰子林があるに過ぎなかつた。したがつて兵隊たちは色を見、匂ひを嗅ぎ、味を味はつて凡そ毒でないと見當をつけた木の葉や草の根などほとんど食糧になつた。この食糧不足と相俟つて濕氣が多く、氣候不順、瘴癘の土地なので、マラリア、榮養失調、脚氣、下痢などの患者が續出した。兵隊たちは四十度以上の高熱を冒し脚氣や下痢をひた隠しに隠して、糧秣受領の使役を志願し、多くの戰友たちのためと、ふら〳〵しながら出かけたのである。糧秣受領も意のごとくならなかつた兵隊たちは「せめて部隊長殿や戰友たちに」と空爆と艦砲射擊の眞只中にある海岸の椰子の木に登り、疲勞と空腹のため目まひする身體に鞭うち、危險を冒して僅かな椰子の實を取つて歸つて來た「俺たちは欲しくない、みんなで須けてくれ」上官は部下へ、部下は上官へ一つの椰子の實を讓り合つてゐる美しい情景は各所に見られた。部隊長は何時も賊をうるませ、藤で目頭を人知れず拭いてゐた。(申譯がない、申譯がない)部隊長は 聖上陛下に對し奉り、また國家に、部下の肉親に、そして部下に、心の中で手を合せてお詫びをしてゐた。

敵發見、我を包圍す

敵は稻垣部隊の陣地をどうして嗅ぎつけたのか、昭和十八年一月二日の拂曉から、多數の兵力と迫擊砲とをもつて包圍隊形に進んで來た。敵の飛行機は地上部隊と協力し、無數の爆彈と迫擊砲彈で稻垣部隊の陣地を叩きつけた。砲聲は物凄く轟々し、砲彈は陣地の前後左右で炸裂した。濛々たる土煙のなかで大木は横倒しに地響打つて次々と倒れた。敵の砲聲は暫時の休みもない「稻垣部隊は一丸となつてこの陣地を死守せよッ、一歩も退くなッ」部隊長の悲痛な命令は傳令の口から各陣地へ傳へられた。病に倒れてゐた兵隊もはひながら銃をとり土煙を蹈から浴びて勇敢に戰つた。敵は盲滅法に砲彈を浴せつゝ、一方わが陣地を中心に鐵條網を張りめぐらし、鉄卷きの包圍陣地を布いてしまつた。そのうち彼らはトーチカを築きはじめ、我を袋の鼠として持久作戰をとつたのである。敵の砲彈は一分間何百發となく炸裂し、さしもの密林もたちまち草原と變り、果ては陣地そのものがむき出しになつて敵前に姿を現した。

糧 食はいよ〳〵缺乏した。兵隊たちは敵彈をくゞつて附近の草の葉や蔓の葉をとつて來てそれを食ひながら戰ひつゞけた。頭も上げ得ない猛彈の雨き、敵は鐵條網を

グン〳〵とせばめ、トーチカを中へ〳〵と築いて來る。兵力は刻々と增加して、その數、千數百、稻垣部隊は完全に包圍されたので友軍との連絡も出來なければ情況報告することも出來ない。敵も持久戰に入つたので食糧に困つたらしく、とき折飛行機で糧食を投下し補給してゐた。投下された糧食が鐵條網内に落ちた時などは、敵味方入亂れて奪ひ合ひの光景さへも演じた。その後敵は優秀な機械力を利用して、後方との自動車道路を作り、兵隊はもちろん糧秣、彈藥、兵器ならびに陣地構築の機材などをどん〳〵送つて來た。彼らは相變らずじわり〳〵と包圍陣をせばめてくる。味方の彈藥は次第に殘り少くなり、食糧とする木の芽、草の根も附近にはなくなり、遂には蟻の巣さへ嚙つたのである「畜ッ、ヤンキー」などに負けるものかッ」兵隊たちの士氣だけは日一日と昂まつて行くが、身體は極度に疲勞し、衰弱して氣のやうには進まない。それだけに兵隊たちはいらだつた。どの顏もどの顏も一樣に蒼白く、痩の肉はゲッソリと落ち、唇は白ちやけて、目だけが物凄いほど血走り輝いてゐた。敵の包圍陣はます〳〵接近し、時には迫擊砲彈とミルク鑵などをわが陣地へ放り投げ「俺たちはこんな優秀なものを毎日食べてゐるのだ」と嘲笑した「武士にわが軍の疲勞困憊ぶりを嘲笑した「武士は食はねど高楊枝だッ、ふざけやがるな、ヤンキー奴ッ」喉から手が出るほどほしいミルク鑵ではあつたけれども、兵隊たちはこれを踏み潰してしまつた。ドロリとした眞白な煉乳が、濕つた黑い地上を生きたものゝやうに卿ひ廻つてゐる。兵隊たちは慢めしげな目でそれを眺め、幾度となく生唾を飲み込んだ（さすがは日本兵だ、日本軍の强さはこゝにある）稻垣少佐には、見るもの、聞くものすべて涙の種であつた。

小癪なり降伏勸告文

頑張り通すこと約二週間、一月十四日になつて、砲聲は一時止んだ。

〃親愛なる日本軍の將校、兵隊の皆さん、皆さんは彈藥や糧秣の不足のなかで、最も勇敢に戰ひつゞけ、日本兵として立派な働きをなさいました。私たちは勇敢なる皆さんに對し心から敬意し、感服いたしてをります。皆さんはこれ以上戰ふ必要はありません。國家に對し立派に義務を果してをります。ことに現況は米軍の完全包圍下にあるといふことは、賢明なる皆さんにはすでにお分りのことゝ思ひます。このまゝ戰ひつゞけるならば、皆さんを待つものはたゞ無死あるのみです。速かに米軍の許へ御出でなさい。私たちは勇敢な皆さんを兩手を差しのべて歡迎いたします。私たちのところには皆さんも知つての通りおいしいパンもミルクもチョコレートも澤山あります。これらの食糧を私達は喜んで皆さんへ差上げませう〃

流 暢な日本語の放送が散兵壕の隅々まで流れて來た。それと同時に降伏勸告文が陣地附近一面にバラ撒かれた「ヤンキー奴何の寢言を吐かしやがるんだい、俺たち日本兵はな、畜生ッ、降參する前には死んでるワイ」「おいッ、こらッ、毛唐の兵六玉ッ、手前らとな、俺たちの心は置場所が違ふワイ、面を洗つて出直して來やがれッ、馬鹿野郎ッ」兵隊たちは次々と壕から首を出して大聲でがなり立てた。だが大聲をあげると、腹の皮が背中へひつつき、ぴん〳〵と響いて痛かつた「ちり紙のない時だ、こりやいゝ」勸告文や宣傳文は、すべて拾ひとり、便所に使はれた「ルーズヴェルトが顏をしぼつて作り出した文章も、俺達の尻を嘗めるに持つて來いだ」兵隊達は笑つた。

時には空腹と疲勞のため目まひさへ感じながらも二、三人組んで敵のトーチカへ夜襲を敢行し、敵の兵器や背嚢をかつ拂つて來た「これはルーズヴェルトの給與で戰利品だ、遠慮はいらぬ」と敵の携帶口糧や罐詰、チョコレートなどをみんなにわけ合ひその空罐や空背嚢は敵の陣地へ手榴彈代りに放り投げた「身體はどうぢや」部隊長は戰ふ兵隊の一人々々を見廻つて靜かに肩を叩き激勵してゐた。筆や言葉でいひ表し、書き表し得ないあらゆる困苦を征服し、敢然として銃をとり戰ひつゞけてゐる兵隊たちの神々しい姿、「正に神だ、生きた神樣だ」部隊長は思はず頭を下げてゐた。

斬死の突擊命令下る

一月二十二日、戰ふ彈藥はほとんど缺乏した。敵はます〳〵增加する一方だが、味方は日一日と減つて今では二百足らずになつてしまつた。稻垣少佐は、佐藤中尉、鶴田中尉、堀中尉、村瀨中尉の各隊長と、機關銃隊長の關田大尉とを集めて、最後の處置を相談した。

「この儘では飢死を待つのみであります。この際潔く敵の本陣へ斬込んで、花々しく斬死いたしませう」「日本の眞の武士道をヤンキー共に、見せてやりたいのであります」「日本刀の斬れ味を彼らの目に見せてやりませう」各隊長の意見は斬死と一致した。しかし部隊長としては、わが子同樣な部下をみす〳〵斬死させたくはなかつた。出來得るならば自分一人こゝに踏み止まつて部下全員を助けたい。と思つたが、それも出來ない今の狀況である「今宵夜半を期して部隊は全滅しよう」悲壯な決心を固めた稻垣少佐は、重要書類を全部燒き捨て一同を集めた。「わが稻垣部隊は、昭和十八年一月二十二日夜半、全滅を賭して敵の本陣へ突擊を敢行する」兵隊たちが待ちに待つた突擊の命令が今發せられた。緊張の色が一同の顏に、全身にサッと流れる。すでに覺悟の色である。部隊長には兵隊たちの顏を見ることがたまらなく苦しかつた。やゝもすれば目頭が熱して來て、四邊は霧がたゞよつたやうにぼやけてくる。

敵中突破の十二傳令

やがて、宮城を遙拜し、續いて關田大尉の指揮で「海行かば、水漬くかばね、山行かば、草むすかばね……」の歌が嚴かに、しかもゆるやかに、南海の天地をゆすぶつた。終つて　聖謨の萬歲を奉唱しこの世の別れに水筒の水を頒け合つて飲み干した。（部隊長となり、部下となつて南海の孤島において戰死するのも前世からの因緣であらう。みんな帝國軍人として花々しく笑つて死んでくれ、靖國の杜で酒交を溫めることにしよう）少佐は心のなかでかう叫びながら、幾度も〳〵ゴクリ〳〵と生唾を飲み込

んだ。敵はわが軍の合唱や萬歳奉唱に驚き慌て盛んに迫撃砲弾、手榴弾を射ち込んで來た。わが軍は沈默を守つてゐる。それだけに敵は薄氣味悪く感じたのであらう。銃砲聲は間斷なく轟き砲弾は炸裂し、土煙は濛々として四邊は薄暗くさへなつて來た。

「貝沼軍曹以下十二名は傳令として、敵陣地を突破し、本部に至り敵情ならびに部隊の行動狀況をつぶさに報告すべし」部隊長に呼び出された貝沼壽代次郎軍曹以下十二名は、部隊長の意外な命令に驚くと共に互に顔見合せて呆れたやうな表情をした。貝沼としては、今宵は突擊の先登を切つて突込め、といふ命令を期待して來たのであつた。したがつて傳令は不平であつた「部隊長殿、貝沼をぜひ今宵の突擊に參加させて下さい。傳令は他の誰かに命じて頂きます」「貝沼軍曹」少佐の溫顔には微笑が浮び、目は眞劍なこの頼母しい部下の顔に注がれた「貝沼軍曹、お前の氣持は部隊長にはよく分るぞ、部隊長は心から感謝する。だがこんどの傳令は最も重大な傳令である。その傳令の任務達成如何は部隊の死活問題であるのだ。部隊長は各中隊長とも相談の上人選を重ねて選び出したお前たち十二名である。お前も知つての通り部隊は今敵のため十重二十重に包圍されて身動きさへ出來ぬ有樣だ、もちろんこゝだけではない。本隊と通ずる道々はすでに敵が充滿してゐることと必定であらう。

その中を切拔けて本隊へ辿りつき、部隊の行動を報告するといふことはなか〳〵容易なことでなく、難中の難事である。みんなよく考へてくれ、部隊は今宵敵中へ突込み全滅する覺悟である。この二百名の勇敢な行動を誰が報告する。見よ、病に倒れてゐる兵隊も、みんな銃を執つて國家に對する最後の御奉公と、起ち上つてゐるではないか、部隊長は部下のこの健氣な行動に幾度泣いたか分らない。この勇敢な部下をして犬死や行方不明といふやうなことには斷じてさせたくないのだ。お前たちの傳令はお前たちの戰友二百名の働を生かす最も重大なる任務である。どうだ貝沼軍曹、部隊長の氣持、お前たちの任務、それで分つたらうが」部隊長は懇々と傳令任務の重大性を說明した。

「部隊長殿、よく分りました。貝沼以下十二名、どんなことがあつても、必ず、必ず」貝沼は右手の甲で、目を横なぐりに拭つた「引受けてくれるか、さうか、感謝する。戰塵の中でお前たちに何も與へる物がない。部隊長最後の言葉を與へよう〃死あつて生あるを知れ〃といふ一言である〃死あつて生あるを知れ〃」貝沼軍曹以下十二名は部隊長の言葉を靜かに繰返し〳〵しつかと心の中へ叩き込んだ。そしてこれが部隊長と最後の別れであるかと思ふと部隊長の溫顔の特徴が貝沼たちの頭へ一つ〳〵錐で突刺されるやうに突刺さつてくる。兩頰はしつとり濡れてゐた「任務は重いぞ、長い間、えらい苦勞をかけたのう、空腹でもあらう、疲勞もしてゐるだらう、だが先刻もいふやうに戰友たちのためだ、しつかり頼むぞ」部隊長は一人々々の手を固く握つて激勵した（部隊長殿と一緒に死ねぬのが殘念だ）人一倍涙もろい貝沼軍曹は、手離しでボロ〳〵涙をこぼした。

その夜は月もなく、金砂をばらまいたやうな星夜である。敵は相變らず猛烈な迫擊砲弾、手榴弾を浴びせかけて來た。わが軍は一弾も應戰せず、じつと機の熟するのを待つてゐる。しばらく射ち續けた敵はこんどは降伏勸告の放送を行ひ、さらに朗かな合唱や歌などを放送してきた。

全員火の玉、敵陣へ

機は熟し、時は來た「突擊に……突込めッ」部隊長の命令一下、部隊全員火の玉となつて、喉も張り裂けるばかりの喊聲と共に、眞正面の敵へ突ッ込んだ。疲勞も空腹も何のその、こゝが命の捨てどころと、將兵が劍身一致、捨身の肉弾で突入したのである。

敵中旬餘・閃く短劍

「集合場所は勇川河谷の壕の中、各個躍進だ」この喊聲と砲煙弾雨の眞只中、一方の血路を開いた貝沼軍曹以下十二名は、各個にかねて室內知つてゐる丸山道へ密林地帶をつゝ走つた。背後では物凄い味方の喊聲と、炸裂する迫擊砲弾、手榴弾の響きが、ゴー〳〵と耳へ突刺さゝる。不氣味な唸りをあげた弾は何回となく耳先をかすつた。突破された敵陣からは滅茶苦茶に射つて來る。密林のなかは鼻をつままれても分らぬほどの眞の闇である「あッ」といふ斷末魔の聲を貝沼は幾度も耳にした。しかし退はれるやうなあわたゞしさで猶豫は少しもなかつた。ある時は轉び、ある時はつまづき血みどろになつて夜の密林と戰ひ、アウステン山の背後を廻り勇川の河谷、壕のなかへ飛び込んだ。誰もまだ來てゐない、そのうち一人飛び込み、また一人飛び込み、三人目が飛び込むと、後はパッタリと途絶えてしまつた。夜が明け、晝になつても四人以外の姿は見えなかつた「十二人のうち、こゝまで安着したのはたつた四人か」貝沼は淋しさうにつぶやいた。部下の三人とは高木弘上等兵、加藤良雄上等兵と丹羽幼三衛生兵長である「分隊長殿、八名は途中敵弾のため、やられたのではないでせうか」「それとも道を間違へて……」「間違ふはずはない、この壕はみんな知つてゐるはずだ。やられたかな」半信半疑、砲弾炸裂する合間々々に首を出して見廻したが、これぞと思はれる人影さへ見えなかつた。敵の飛行機は絶えず頭上を飛び廻り、機銃掃射を浴びせかけてゐた。

夜が來た。暗い夜である。「俺たち四人は、重大な任務を擔うてゐる。決して敵弾などに倒れるな、死あつて生あるを知れだ」貝沼の言葉に一同の頭には昨夜決死全滅を期して敵千數百の中へ斬り込んだ部隊長以下戰友たちの悲壯な顔が一つ〳〵浮んで來た。四人は闇のなかを海岸道路へ向つて歩いた。敵が新設したらしい自動車道路が右に、左に、十本以上も蜿蜒と闇のなかへ消えてゐる。「はてな」貝沼たちには全然記憶にない新しい道路である。傍らの凹地に身を伏せて暗をすかし四邊を見廻すと、幾十となく重砲が列をなしてゐた（これやいかぬ、こゝが敵の重砲陣地だ、放列を布いてゐるぞ）引返した貝沼は、四人を二手に分け、高木上等兵と加藤上等兵を一組とし、貝沼軍曹と丹羽兵長を一組とし、一は

左側密林地帶を、一は海岸に沿うてタサワロングに向ひ、敵陣を突破することにした「では十分注意して行け、任務は重いぞ。お互に命があつたら、タサワロングか、エスベランスで會はうぜ」四人は互に手を握り合ひ、暗闇の中を左と右へ別れた。

敵歩哨斬つて海中へ

海は濁つた灰色に光り、闇をすかせば海岸の白砂と波打ち際がハッキリと見え、歩哨らしい敵兵の姿が幽かに浮び上つてゐる「丹羽、陸地はどうも危險だ。海の中を行かう」貝沼は丹羽の耳へさゝやくと丹羽をその場へ伏せ、右手に短劍を拔きとり腹ばひになつて歩哨へ近づいて行つた。歩哨は貧ひ革で銃を肩からぶら下げ口笛吹きながらダンスのやうな足どりで砂地をサク〳〵音をたてゝ歩いてゐた。貝沼の短劍術は部隊でも彼の右に出る者がなく、出征前まで各聯技會に參加し、いつも優秀なる技術をあらはし、賞狀だけでも十數枚を持つてゐる。彼に短劍を握らせれば、百擊百中、小銃以上の自信を持つてゐた「やッ」低いが殺氣のこもつた貝沼の氣合と共に右手の短劍が稻妻のやうにキラリと閃いた「があッ」蛙を踏み潰した時のやうな異樣な聲をあげて黑い影は大きく砂上へ橫たふしに倒れた。「丹羽、海へ入れ」二人は海へ飛び込むと、首だけ出して、海岸沿ひに西へ〳〵と泳ぎ出した。

海岸近くは珊瑚礁が多く時々足をすりむき、あるひは深みへ轉り込んだ「珊瑚礁だらけだ、怪我をする、沖へ行かう」「分隊長殿自分は金鎖で駄目であります」「お前金鎖だつたためか、ぢや海岸へ上らう」二人は四邊の樣子を窺つて海岸へ上り、ズブ濡れのまゝ手探りで道路へ出で、一休みする場所を探した。折よく凹地があつたのでこれは屈强の隱れ場所と飛び込み、ホッと一息ついてゐた。ところが豈計らんや、その凹地は敵の高射砲陣地で歩哨はその周圍を蝟氣さうに警戒してゐた「しまつた、敵陣地だつた」ウカ〳〵してゐれば見つけられる、見付けられたら最後、殘虐なる彼らは嬲り殺しにするのが必定だ〟死あつて生あるを知れ〟部隊長の言葉がピンと響いて來た。先手を打つて敵を倒してやれ、貝沼の右手に再び短劍が光つた「丹羽、俺の姿を見失ふな、行く先はジャングルだぞ」靜かに注意を與へるとやもりのやうにピタリと地上にへばりつき、歩哨の近づくのを待つた。こんな危險人物が隱れてゐるとは夢にも知らぬ敵の歩哨は、輝く星を仰ぎながらブラリ〳〵近づいて來た「えッ」ブスリ……鈍い音と共に「グワッ」と斯末魔の悲鳴をあげ、倒れる瞬間銃の引金を引いた。

あゝ、部下一名自決す

ズドン――彈は貝沼の肩先をかすつて、後にゐた丹羽の左大腿部へグッとめり込んだ「あッ」「丹羽、やられたかッ」貝沼は突差に丹羽の身體を輕々と引ッかつぐと左側の密林地帶へ走つた。彼は多くの亂れた足音と騷聲を背後で聞いた「丹羽、しつかりせい、こんな傷は何だ」眞暗な密林の凹地へ丹羽を橫にし、手探りで貝沼は應急手

當をした。近くで射たれた彈だつたので、傷口はさほどでもないらしいが、彈の出口はざくろのやうに炸裂してゐるらしい。生温く粘ッこい血潮は、丹羽のズボンを濡らし貝沼の手を眞赤に染めてゐるやうだ。丹羽はグッと歯を喰ひしばつて、痛さを耐へてゐるらしく、時折歯ぎしりをしてゐた。

夜が明けると貝沼は血の氣のない顏をした丹羽をひつかついで密林の中を歩き廻つたが、行く先が敵陣地で結局同じ道をどう〳〵めぐりをしてゐた。任務がある、俺に構はず一人で行つてくれと、丹羽は貝沼の背中で幾度も〳〵賴んだが、その都度「馬鹿野郎ッ、ふざけるな」と叱り飛ばされた叱られながらも貝沼の戰友愛に丹羽は泣きながら感謝し、じつと不自由な身體を委せてゐた。二日過ぎ三日經つても密林内を脫し得ない。夜になると貝沼は敵の陣地へもぐり込み、パンやミルク、罐詰などを奪つて來ては二人の食糧にあてゝゐた「分隊長殿」丹羽の傷口は化膿し出し、身體もめつきり弱つて來た「何だい」「水が欲しい」「水か、よし〳〵」貝沼は罐詰の空罐を持つて氣輕に立上り小川の方へ雜草を掻き分け水汲みに出かけた。その後姿に手を合せた丹羽は〈分隊長殿、御迷惑をかけ通しで濟みませんでした。任務は重大であります。手足まとひになる自分がゐるばかりに、分隊長殿は自由な働きも出來ないことを、自分はよく知つてをります。分隊長殿いろ〳〵御親切有難うございました。一日も早く任務達成の日を豫ながら祈つてをります〉と心で叫び、肌身離さぬ短刀を引拔き、じつと刄先を見つめ、左手で豎の動脈を撫で廻した。あれほどまで親身になり、眞劍になつて看護してくれる分隊長に濟まない。と思ふと、決心が又にぶり出し、止め度もなく涙が流れた。

かくてはなにじと、遙かに故國の方に向つて端坐し「天皇陛下萬歲！」と叫ぶと同時に、ザサッと突き刺した。「丹羽、水を持つて來たぞ」水を汲んで來た貝沼が、丹羽のそばへ近づいた「丹羽ッ、貴樣は、貴樣は」水を入れた空罐をおつ放り出すと丹羽の身體に手をかけてゆすぶつた。どす黑い血が地上をのたうち、その臭氣に無數の蠅が群り集つてゐた「丹羽ッ、馬鹿野郎、馬鹿野郎ッ」貝沼は丹羽の死體を抱へながらあらゆる罵倒を浴せかけた。涙と鼻汁が一しよくたになつて、貝沼の顏を穢くちやにさせた「貴樣のやうな大馬鹿者は世の中にあるか、この阿呆野郎ッ」貝沼は木ぎれを探して丹羽を埋葬する穴を掘り始めた。自決して任務を果させようとする丹羽のいぢらしい戰友愛が、貝沼の胸に鋭いメスで抉り取るやうな痛さと苦しさを與へた。貝沼はたまらなかつた。彼はどういひ表してよいか分らない。たゞ無暗に泣きじやくりながら大聲で丹羽を罵り叱りつけた「丹羽貴樣の仇は俺が討つてやるぞ、畜生ッ、惡魔のヤンキー奴ッ、どうするか見てやがれッ」丹羽の死體を埋め終つた貝沼は短劍の柄も碎けよと强く握り締めた。彼の目は恐しいほど殺氣に燃え、全身の血は復讐のためふつ〳〵と沸ぎり立つた。

着いて見れば本隊は

日が暮れると、彼は待つてゐたやうに單

身敵の中へもぐり込んだ。空には雨雲低く垂れて星の影さへ見えない眞の闇である。道路だけは薄ら白く、闇から闇へ消えてゐる。貝沼の目は夜目にも妖しいほど凄く光つた。彼は黒い影を見つけるとやもりのやうに地上へへばりついて近づき「やつ」と突刺した。グーの音も出させぬ貝沼の手練のひと突きである。彼は自分の行手において、巡察將校を見つければ巡察將校を、歩哨を見れば歩哨を、兵隊を見れば兵隊を、手當り次當に突き殺し、その都度「丹羽、見てゐたか」と叫んだ。晝は密林の中へ隱れ、夜だけの行動であるから、道程は遲々として進まない「ヤンキーなんて弱い者さ」時には機關銃座へ飛び込んで三人四人と突き殺し、彼らの食糧を奪ひ、機關銃を叩きこはして來た。また或夜のごときは、道路上にある自動車に乘つて西へ飛ばしたが、自動車で追跡され、途中飛び下りて密林の中へもぐり込んだこともあつた。

彼は幾度歩哨線を突破したか分らない。彼が默つてゆつくり通過すると、だれも誰何もしなかつた。もし誰何された時は無言のまゝゆつたりと歩哨の傍に近づき、目と鼻とを合せた時、彼の短劍は銀蛇のやうに躍つたのである。部隊を出發してから十一日間、その間敵を刺し殺すこと十有六人、二月三日三時ごろ、漸くタサワロングへ到着した。そこには友軍の矢野部隊が敵と睨み合ひ猛攻の中に儼然としてゐた。しかし貝沼の本隊はエスペランスへ轉出したとのことで、さすが剛毅の貝沼も力が拔けたやうにがつかりした。エスペランスまで十里近くある。今までの疲勞で全身の節々はうづき腰を下せばたちまち深い眠りに落ちる程である。「高木や加藤はどうしたらう」貝沼は矢野部隊本部を訪れて、食糧を仰いだ。しかし矢野部隊にも食糧はほとんどなく、椰子や草の根、木の芽で辛うじて戰鬪をつゞけてゐる有樣であつた。貝沼の顔に米兵の贅澤さが苦々しいほどハツキリ浮んで來た（よしッ最後に友軍部隊の復讐に）彼は今來た道を引返し、再び敵の陣へ入り込んだ。彼は十一日間敵陣地内でウロ〳〵してゐた關係上、非常な氣安さを感じてゐた。それにその間の體驗は、すでに米兵共を苦め切つてゐたし、自分の腕に對しては自信滿々たるものがあつた。彼は一つの幕舍へ入つた。八人の米兵たちは鼾氣さうに口を開け鼾をかいて泥のやうに眠りこけてゐた。（畜生ッ、部隊長殿や戰友たちの仇の片割れだ）彼はまづ端の兵隊の腹をグサッと突刺した。グーと奇妙な音を上げて唸つたが、誰一人氣がつかない（音を上げさせずに刺殺する方法は）彼はとつさに口から突刺してみた。これはウンとも唸らなかつたので、七人とも口から突刺して皆殺しにし、彼らの背嚢の中味を全部奪ひとり、それを背負うて、再び友軍陣地へ悠々と引上げて來た。二十四人叩き殺したことによつて、貝沼の溜飲は幾分下つたやうな氣がした。夜はほの〴〵と明けて、敵の射ち出す銃砲聲は、間拔けたやうに貝沼の耳へ響いて來た。

電話線を唯一の頼りに

一方、高木上等兵と加藤上等兵は密林の中へもぐり込んだが、鼻をつまされても分

らぬやうな密林の中は、どうしても歩けなかつた「おい、加藤、俺たちも海岸傳ひに歩かう」彼らは日中密林内にひそみ、夜になるとゴソ〳〵と匍ひ出し、大膽にも自動車道を五米の間隔を置いて歩いた。その間歩哨線にさしかゝること五回、幸ひにも一度の誰何も受けず悠々と通過した。敵の歩哨は背後から來るものすべてを味方と思つてゐるらしい。それだけに彼らには油斷があり、警戒心に怠つてゐるのである。二人は歩哨の口笛を幾度も背後で聞きハラ〳〵しながら追はれるやうに歩いた「分隊長殿や丹羽はどうしたらう」「無事であればよいがなア」時折、懐中電燈を明滅させて歩いてくる巡察將校を見かけた。發見された時は百年且であり、生きては歸れない。彼らは用心に用心を重ね百米ぐらゐ自動車道を歩けば、次の百米ぐらゐを椰子林か密林の中を歩いた。そして漸くボハ川まで辿り着いた。椰子リンゴをかじつたりして歩きつゞけたのである。何しろ夜間、しかも暗夜だけの歩行なので、一日の行程千米か千五百米であつた。

ボハ川附近は敵の迫撃砲陣地らしく、ズラリと放列をしき、圍をすかせば、點々と人影が見える、相當嚴重な警戒網らしい。（これはいけない）そこから二人は川沿ひに山へ入り密林地帶へ飛び込んだ。幸ひにも電話線が手に觸れた、「天佑だ、この線を傳つて行けば、きつと味方の陣地へ行けるかも知れない」喜び勇んだ二人はこの線を唯一の頼りとして荊の中、蔓の間を通り、幾度かつまづき轉んで、一つの平坦地へ現れた。道路上に一つの黑い歩哨の影が見える「あッ、しまつた敵の陣地だつた」「えッ、まゝよ、度胸をきめて、いまゝでの式で突破してやれ、高木はまづ悠々と歩哨の前を通過し、續いてまた加藤が通過しようとした。突如、誰何された、加藤はハッとし、胸は早鐘のやうに高鳴つた、彼は少しも英語は解らない、それかといつて何とか返事しなければ射たれてしまふ。彼の頭は渦卷のやうにクル〳〵まはつた「オーライ」突差に口から飛び出した加藤の答へである。不審に思つた歩哨は再び誰何した「オーライ」彼は無我夢中だつた。ドドンッ……その瞬間、加藤はパッと横ッ飛びに飛ぶや密林目がけて走りつゞけた。盲射ちの銃聲は響く。

「加藤、道路は危險だ。苦勞してもジャングルの中を歩かう」二人は道なき密林を、切開き〳〵西へ進み、二月四日、貝沼より一日遲れてタサワロングへ到着した「分隊長殿も無事に着いたらしい」二人は友軍から貝沼の話を聞いて、ホッと安堵の胸を撫で下し、何か知ら重大任務を果したやうな氣彈さを感じた。二人は折から來かゝつた海軍部隊から糧秣を貰つて海岸をエスペランスへ向つて歩いたのである。

死あつて生を知れ

この決死的な傳令によつて稻垣部隊の勇敢なる行動が本隊へ報告された「死あつて生あるを知れ」稻垣部隊長のこの哲學的な教訓が貝沼軍曹や高木、加藤兩上等兵の羅針盤となつた事もちろんである。三人は部隊長はじめ戰友達の英靈を弔ひつゝ米撃滅の信念に燃え默々と軍務に努力してゐる。

ガ島・中澤挺身隊の決死行

陸軍報道班員　森川賢司記

（〝遅らざる挺身隊〟抄録）

一、中澤挺身隊

靜岡縣引佐郡三ヶ日町本坂七九
隊長　陸軍少尉　中澤勳
愛知縣丹羽郡丹陽村大字五日市場
伍長　湯淺義行
愛知縣幡豆郡寺津町巨海西脇
兵長　筒井金市
愛知縣碧海郡六ツ美村大字坂左右
兵長　村上政明
愛知縣丹羽郡槃田村裏ノ門
上等兵　高木清隆

二、戰友愛に感泣す

ジメ〳〵する薄暗いジャングル内の、物凄い程根の張つた大木と大木との間に組合せた襯降り小屋の狹い中に、神妙な顏と態度をした七八人がかしこまつてゐた。何れも元氣潑剌とした二十三四の將兵である。敵の飛行機は相も變らず頭上スレ〳〵に、無氣味な唸りをあげて飛んでゐた。

「中澤少尉、湯淺伍長、筒井兵長、村上兵長、高木上等兵、御目出度う。今日重大命令を受けたことは、軍人の最上の名譽であり、又隊としても此の上もない榮譽なことである。何しろ未知の敵地へ乘込むのであるから、中澤少尉を中心に一丸となり、みんな神をしつかりしめて、此の重大任務を達成して貰ひたい」

童顏の岸隊長は、ジツと部下の顏を見廻はした。丸顏の少尉は圓滿な頬を幾分紅潮させ目を細めてゐたし、湯淺、筒井、村上、高木も幾分緊張眸を漂はせてゐたが、恐怖とか、不安といふ色は少しも現はれてゐなかつた。流石は自分が人選しただけある。膽力といひ、默々として死地へ飛び込む氣力といひ、體内にみなぎる壯勁たる勇氣といひ、矢つ張り此の五人は自分の目違ひではなかつたと、隊長は心から滿足な微笑を洩らした。

「誓つて、目的達成に邁進致します」

と、少尉は一同を代表して答へた。

「御目出度う。しつかり頼みます」

戰友達は我がことのやうに喜び、次々と顏を出しては、お祝ひの言葉を述べ、成功を心から祈つてゐた。

昭和十七年十二月〇日である。

「…中澤少尉以下五名、敵の西飛行場を奇襲し、軍事施設を破壞すべし……」

といふ、實に血湧き肉躍る命令を受けたのは今日の午前中であつた。日本男兒としてこんな痛快な仕事があらうか。殊に憎みても餘りある米兵の中へ飛び込んで、縱横無盡に暴れ廻はり、日頃の溜飲を下げる機會を、天が與へてくれたのだと、少尉は全身の血が逆流する程嬉しかつた。

（先づ、周到な計畫をたてゝ）

と、はやる心をグツと壓へて、默々として戰友達の挨拶を、たゞ笑顏を以て受けてゐた。此の命令を聞いて、喜び、はしやいだのは岸隊の將兵である。もぐらのやうな陰氣な生活を續けてゐた此の隊にも、何か知ら急に花咲く春が訪づれたやうに、ざわめき立ち、兵隊達は朝から四方八方へ飛び立つた。

やがて、五人の前に運ばれたのは、珍らしくも定食二合の御飯である。五人は呆然として目を白黑し、お互に顏見合はせた。勿論、今日まで一人一合足らずの米を渡され、それを粥にしてすゝり込んでゐた。然るに今、目の前に並べられた御飯一食分は二日の食糧に相當してゐるのだ。

（意外だ）

と、いふ感じより

（どうして我々に）

と、いふ感じが強く響いて來た。

「兵隊はな、我が隊から挺身隊を出したといふことは、我々の名譽だと心から喜んでのう。我々はどんなに我慢しても、挺身隊には相當な給養をなし、體力をつけて、我々の爲めに働いて貰はねばと言つて、みんな米を僅かづゝ出し合つたのぢや。兵隊達の氣持もくんで、まアユックリ食べてくれい」

隊長の說明に、始めて此の定食の意味が分つた。少尉はうつむき、湯淺は横を向いて汗とも涙ともつかぬものを拭き、筒井、村上、高木は手離しで、ボロ〳〵涙を落した。

「シンミリし過ぎるぞ。戰地に於ける兵隊達の心からなる贈物だ。喜んで受けてくれい」

嗚、一ヶ月振りの定食だ。腹の鐘がグー〳〵と鳴つた。

（戰友よ、戴きます）

飯盒を取上げてみたものゝ、有難いやら、勿體ないやらで、箸をつける勇氣さへなかつた。

戰友なればこそ……

自分の食ふ大切な米を減らしてまで、我々の爲めに盡してくれる。我々は何を以て酬いよう。さうだ、我々は與へられたる任務を完全に果すことによつて、此の涙ぐましい戰友愛に酬ゆることが出來るのだ。

一口入れると、胸の中から熱い塊りが、喉佛まで込上げて來て、容易に胃の腑の中へ飲み込めなかつた。

村上は、シク〳〵と鼻をならしながら、高木の如きは大粒の涙を頰に流しながら一口々々と運んでゐた。

おかずとしては、芋の葉のおひたし、コブラの鹽揚げ、椰子の木の芯等で、ガダルカナル島に於ける我軍の最上飛切の料理品であつた。これも兵隊達がジャングル地帶を駈け廻はり、或は艦砲射撃、空爆の燼んな海岸地帶へ、命懸けに飛び込んで集めたものばかりである。

（戰友よ、お前達の爲めにも、我々は斷乎として勝ち拔くぞ）

戰友達の心盡しを味はつてゐる間にも、敵の艦砲射撃は、左から十米おきの間隔で

射込んで來た。それに和するやうに敵の飛行機は所嫌はず盲彈を投下してゐる。

ジャングル内はドカンとか、ヅシンといふ單純な音でなく、大暴風雨襲來のやうな、ゴウ〳〵といふ大音響で充滿してゐた。

「中澤少尉、何か言ひ遺して置くことはないかな」

隊長岸大尉は思ひ出したやうに少尉の顏を見た。

「何もありません。もう既に覺悟して居りますから」

「では、隊として今日の感想を聞いて置かう」

「感想でありますか。自分は、本望！この一言であります」

「湯淺伍長は」

「工兵精神、であります」

「筒井兵長は」

「血遺腸、であります」

「村上兵長は」

「忠孝、であります」

「高木上等兵は」

「深夜の鬼、であります」

隊長は一人々々の言葉をノートへ書き納めた。

「若いだけに、みんな奇拔な感想だ。其の意氣、其の氣持でやつてくれい。其の意氣だけでも、既に八分通りの成功だ。隊全員協力して榮養物を集めるから、充分に英氣を養ひながら準備をしてくれい」

自分達のみ滿足な食事をとることは、申譯ないやうな、勿體ないやうな、ごつちやな感情に責められて苦しかつた。

「隊長殿」

村上兵長は叫んだ。

「おゝ」

「村上は筆不精で、兩親へ此方へ來てから一回も手紙を出して居りません。で、一筆書いて、遺髮と共に御願ひしたいのであります」

「おゝ、そりや結構な事だ。是非さうした方がよい。どうだ、書く紙があるか」

「ありません」

隊長は直ぐさま圖囊から報告用紙と鉛筆を取出して村上へ與へた。

村上は腹ばひになつて走り書し始めた。

書き終へた村上は、ポケットから遺髮を取出し、それを手紙の中へ入れ、小さくたゝんで隊長へ預けた。

「確かに預かつた」隊長は更にそれを封筒に入れ、圖囊の中へ納めた。

陸軍兵長　村上政明

父母樣

海行かば、水づくかばね
山行かば、草むすかばね
大君の　邊にこそ死なめ
かへりみはせじ

父母樣、御達者でお暮しですか。政明にも愈々最期の日が參りました。及はずながらも軍人として本分をはたし、笑つて死んだ政明を御想像下さい。

今まで何一つ孝行も致しませんでしたが今度の御奉公によつて總べてを御許し下さる事と存じます。

此の後については何も申上げる事はありません。只御身體を御大切になさいまして一日も生き長らへて下さい。それが最後の御願ひであります。

さようなら

「ソロ〳〵噛くなる、みんな、大切な身體だ。宿舍へ歸つてユックリ休んでくれい」

ジャングルの中は、目に見えて噛くなつてくる。螢はピカリ〳〵と呑氣に飛んでゐた。

三、ガ島の情況と當時の敵情

ガダルカナル島に於ける彼我の作戰地區は北岸の海岸地帶であつて、一部海岸地帶の椰子林を除いては、殆ど人跡未踏のジャングルと丈餘の草原地帶である。山岳は重疊として何れも屏風を思はせる峻嶮で、道路は彼我作戰上、海岸に沿うて切開いたもの以外に一つもない。草木は密生してゐるけれども、海岸地帶にある椰子の實以外、バナナ、パパイヤ等全然なく、それに氣候は不順、濕氣は馬鹿に多く、瘴癘の氣、全島に漂ふ所である。

ジャングル地帶と言つても、ガ島のジャングル地帶は獨特のジャングルである。千古斧鉞を入れざるの大木が密生し、それが亭々として天を蔽き、一丈位の幹の所から二寸板のやうな根が、風車のやうに八方に伸び、それが大蛇のやうになつて他の根と入り亂れ地上をのた打つてゐる。太い蔓、針のやうな鋭い刺をもつ蔓が、大木の幹から枝へ、枝から地上へはひ廻はり、名も知らぬ寄生木が、縱横にからみつき、苔が垣根のやうに隙間もなく張りめぐらしてゐる。千古の謎を秘め、神秘な空氣が漲れてゐるやうな氣がして、物凄い程、空恐ろしさを感ずる。前も後も、左も右も、薄暗く見上ぐれば一點の青空さへも見えない。

此のジャングル地帶には果物も何もなければ、鳥も獸も棲まない。從つて猛獸毒蛇の類は全然見當らず、たゞ一尺位もある百足と蜥蜴が、我が物顏にジャングル内を跋扈はつてゐた。

時は南海の雨期にあたつてゐたので、毎日二三回の、猛烈なる大スコールが襲ひ來り、一度白雲がジャングルを包むと、濁流が滔々として四地へのた打ち廻はり、地上は忽ち泥濘の海と變化する。恐らく開闢以來、乾いた事のない此の地上は、あらゆる病原菌や毒蟲等の發生の地であり、又蟯蟲地でもあつたのだ。

此のガ島へ、突如、强行上陸を敢行した我が陸の精鋭は、敵の空爆と艦砲射擊を避けるために、ジャングル地帶を、言語に絶する苦難と戰ひ、此の大自然を征服しつゝ進擊し、マタニカゆ河左岸の高地を占領して、陣地を構築したのである。

何しろ、敵はガ島に、二三ケ所の航空基地を有し、刻々と航空兵力を增强し、其の常備機は百數十機、常に交互に哨戒して、ガ島を中心とする制空權は、完全に彼が握つてゐた。

之に反して我が軍の航空基地は千キロ以上も離れた場所に在り、時折、敵航空擊滅のため、威風堂々、銀翼を連ねて飛翔して來るが、迅早く察知する彼等は、忽ち逃げ出し、引返して、再び鞭ひ戻つてくるといふ卑怯極まる作戰をとつてゐた。

米國は、ガ島こそ日米決戰地であると、鉦や太鼓を叩いて自國民に宣傳し、あらゆる近代科學兵器をガ島へ揚陸し、飛行場を中心とする周圍の高地へ、堅固なる陣地を

構築し始めた。

我が軍は常に敵の戰鬪力を破碎する爲めに、戰艦、航空機のみを目標としてゐるに反し、敵は非戰鬪船である輸送船のみを目標として攻擊してゐた。彼は我が軍の揚陸地點のみを目がけて空爆し、常に海岸線を飛び廻はつては、こゝぞと思はれる個所には、十發二十發の爆彈を投下してゐたのである。從つて我が軍には兵器、彈藥、糧秣の揚陸なく、たゞ僅かに持つてゐる彈藥と糧秣のみで、

「暴戾なる米を撃滅せよ」

と、日本精神を發揮し、ひたすら、ジャングルを征し、病魔を克服し、日夜力戰奮鬪を續けてゐた。

暴戾なる敵は、先づ糧道を絶つて、ガ島に於ける我が軍を袋の鼠とし、そしてあり餘る彈藥を濫用し、ジャングル地帶に、空爆の盲彈を降らせ、海上よりは艦砲射撃を所嫌はず射込んだのである。

敵機は終日終夜、ジャングルすれ〳〵に飛び廻はるけれども、我軍の陣地を察知し得ず、河の附近か、道路の近くと見當をつけ、道路の兩側は勿論、河といふ河の兩岸ジャングル内に、爆彈と機銃の雨を降らせてゐた。又海上戰艦からはジャングル目がけて、二十米か、三十米おき位に、左から右へ、これも盲彈を射込んでゐた。

ジャングル内の我が軍は、大木の根本に壕を掘り、或は適當な死角に潜隆りと名づけた屋根だけの小屋を建てゝ、ジッと敵を睨み、機の熱するのを待つてゐた。太陽の光は一切見えない、まるでもぐらのやうな生活だ。

スコールの時などは、泥水が壕内へ流れ込み兵隊達はズブ濡れになつた。一旦濡れた軍服は三日經つても四日經つても乾かない。體温で乾かすより外に道がなかつた。

若し、外へ乾かして、敵機にでも發見されたなら最後、其の地點目がけて百發以上の爆彈を投下するのである。姿さへも見せることが出來ない。河へ水を汲みに行くにも、木にかくれ、或は匍匐して漸く河岸に至り、慌てゝ汲んでくるといふ、實に命懸けの仕事であつた。

一番苦勞するのは飯盒炊事で、若し僅かの煙りでも立上つたなら、忽ち敵機飛來し數百の爆彈を附近一帶にまき散らし、あまつさへ海上からは艦砲で猛烈な砲撃を浴せかけたのである。こんな譯で、飯さへも滿足に炊けない、二日も三日も生米を噛じつてゐた。

敵機は縱横無盡に、然も小憎らしい程、悠々と頭上を間斷なく飛び廻はつてゐる。それが小銃でさへ射てる距離であつた。

「畜生ッ〳〵」

兵隊達は銃を握り、歯噛みして口惜しがつたが、これ又一弾でも射てば、忽ち附近は炸裂の巷と化し、千古の密林は草原と變り果てるのである。ジッと、發見されないやうに、隠れ忍んでゐるのが、今の最上の策であつた。

糧秣は次第に不足を告げ、多い時で兵隊一人、一日分一合の米と、ひとつまみの粉味噌であつて、其の他副食物は何もなかつた。

兵隊達はジャングルの中を駈け廻つて、これぞと思ふ木の芽や草の根を、凡そ毒ならざるものは總べて副食物にあて、代用食

にあてた。

兵隊達は空爆と艦砲射撃の中を縫うて、糧秣受領の爲め、數里乃至十數里の山坂道やジャングル中を通過して糧秣交付所へ出かけたが、渡される糧秣は一人前一合足らずはよい方で、時には全然渡されないことさへあつた。

此の糧秣の受領は、難事中の難事で、受領者の大半は途中敵弾に倒れ、或は隊伍早々、疲勞と空腹に參る者が續出した。

又ジャングル内の氣候不順と榮養不足、濕氣から來る脚氣、榮養失調、マラリヤ、下痢等の患者が續出したが、兵隊達は四十度の高熱を冒し、下痢の爲めフラ〳〵する身體に鞭つて、糧秣受領に、代用食の採集に、時には銃を執つて敵を一歩も入れぬと頑張つてゐた。

「武士は食はねど高揚子だ」

「たとへ木の根をかじり、岩を噛んでも、ヤンキーなどに負けるものか」

兵隊達はあらゆる困苦に打突かれば、打突かる程、敵愾心が熾えに燃え、志氣が昂つて上官の險をうるました。

（煙草や砂糖は贅澤品）

せめて鹽が欲しかつたが、それすら思ふやうに手に入らない。兵隊達は危險を冒して海水を汲みに行き、それを鹽代用に使用してゐた。

かゝる困苦と戰ひ、日夜間斷なき敵の空爆と艦砲射撃を受けながら、一歩も退かず毅然と陣地を固守してゐたのである。

敵は此の間、科學兵器、機材等ドシ〳〵揚陸し、陣地から陣地へと、構築に狂奔してゐた。

四、恩賜の酒と煙草を戴き感激す

十二月二日凹凸激しい泥濘の道を、中澤挺身隊と寺澤挺身隊の十名は、岩淵部隊長に引率されて、九〇三高地に在る本部へ向つた。幾度かすべり込み、木の根につまづき、歩き悪いこと夥しい。靴から卷脚絆にかけて泥だらけである。

部隊長の瀧降り前に整列した十名は、重い任務に幾分頬を紅潮させ、緊張に心の中が震へてゐた。

風は少しもない、ムン〳〵する蒸暑さは自ら全身を汗ばませた。

やがて、十名の前に現はれたのは正式の軍服に着換へた〇〇兵團長閣下である。

「陸軍少尉、中澤勳以下五名、敵の西飛行場へ突入、軍事施設の破壊を命ぜられました。茲に謹んで御申告申上げます」

「陸軍少尉、寺澤孔一以下五名、敵のトラ陣地へ突入、砲臺爆破を命ぜられました。茲に謹んで御申告申上げます」

デップリ肥つた温顔の〇〇兵團長は、死地へ笑つて飛び込む、此の逞ましい部下の顔を頼もしさうに一人々々見廻はした。

「御苦勞々々々。諸子の元氣發剌たる顔を見て部隊長は滿足ぢや。任務は重い。自重自愛、周到なる計畫の下に邁進せよ。諸子の行動によつて、我が軍の志氣を昂揚させ、敵の心臓を寒からしむるのである。成功を切に祈る。終リッ」

中澤少尉の全身の血潮が逆流し、何とも言ひ知れぬ感激が、ヒタ〳〵と潮の如く押し寄せて、ブル〳〵と震へ始めた。彼は震

度となく生唾を飲み込み、全身の震へを止めようとあせつた。然しあせればあせる程膝頭がガク〳〵と鳴つてどうすることも出來なかつた。部隊長の一言は、一同の心に強い暗示を與へたこと事實である。

終つて、中澤少尉と寺澤少尉は、部隊長室へ呼ばれた。立木を利用して作つた瀟洒でである。

「御苦勞々々々。上れ」

「泥だらけでありますので」

「構はぬ〳〵。戰地ぢや」

兩人は恐る〳〵部隊長の近くへ進むと、部隊長は茶碗を與へ、

「恩賜の御酒ぢや」

と、自らなみ〳〵と酌された。

二人の手はガク〳〵と震へ、茶碗のふちが齒にふれてカチ〳〵と鳴つた。

（恩賜の御酒）

男子と此の世に生れて、此のやうな感激又とあらうか。一口、ジツと全身に沁み渡り、盡忠報國の念が澎湃と湧いてくる。我が日本へ生れた有難さ、勿體なさに、どつちやになり汗ともつかぬ、涙ともつかぬ鹽からいものが幾度か口の中へ流れ込んだ。

「身體はどうぢや」

「はいッ、丈夫であります」

「此の地は氣候が惡い。病氣は多い。充分に身體に留意せねばならぬぞ」

「はい」

「今度は始めての試みだ。何しろ警戒嚴しい敵の中へ飛び込むのであるから、充分な計畫を樹て、部下をしつかと掌握して行動せねばならぬ。總べて行動は、頭腦を緻密にして、沈着、大膽なるを宜しとしてゐる」

部隊長は立上つて、恩賜の煙草を一本づゝ頒け與へた。

重ね〳〵の此の感激、二人は押戴き、天恩の無窮に、男泣きに泣いた。

（これで、これで、何時死んでも心殘りはない）

と、心の中で泣いて叫んだのである。

「現在の戰況、敵情は參謀室で聞いて行つた方がよい」

一から十まで手の届く部隊長は、親泊參謀を呼んで戰況、敵情の說明を依頼した。

「成功を祈つて居るぞ」

といふ部隊長の温い言葉を受けて二人は親泊參謀に案内され參謀室に入つた。

其處には蒼白い痩せ型の細川參謀と圓顔な黑崎參謀とが地圖をかこんで策をねつてゐた。何れも年は若いが、剃刀のやうな切味を持つてゐるタイプだ。

「御苦勞々々々。まア、掛け給へ」

黑崎參謀は、とつて置きのキヤラメルを出して接待した。

「敵はあらゆる近代科學兵器を網羅して、目下盛に堅固な陣地を構築してゐる。彼等は總べて機械力依存である。然し、我には我國傳統の大和魂がある。世界に誇る日本精神力がある。機械力が勝つか、精神力が勝つか。貴官等によつて試驗して貰はう」

と、黑崎參謀は笑はつた。二人は肩のこらない朗らかな氣分になつて、氣安く腰を下したのである。

親泊參謀は地圖と空中寫眞を取出して、敵情と地形とを說明した。

「此の空中寫眞でも分るやうに、マタニカウ河からルンガ河に亘る地區、即ちアウステン山麓北方は、富士の裾野の駱駝山附近

の地形と似て、波狀丘陵地をなし、頂上附近は草原で、谷地は相當に深いジヤングルである。飛行場を中心とする道路網は相當に發達してゐるらしい。鐵條網は屋根型、低鐵條網にして、電流鐵條網はないやうだ。然し、彼等はどんな仕掛けをしてゐるか、計り難い。注意が肝要である」

二人は自分の地圖に、必要と思はれる點を記載した。

聞けば聞く程、任務が重大であり、其の實行は困難であることが分つて來た。果して、經驗の淺い自分に、此の目的完遂が出來るであらうか、といふ淡い疑念が中澤少尉の心に渦卷いた。發しては萬朶の櫻と咲き、潔くパツと散るこそ日本軍人の精華である。といふことは百も承知である。命は既に國家に捧げてゐる。死は物の數でない。だが死んではならぬのだ。死んでも尙ほ生きて目的を遂行せねばならぬのである。

（最大の人事を盡して天命を待たう）

中澤少尉は深く決心した。

歸隊すると、湯淺伍長達が、携帶品等を準備してゐた。

「隊長殿、携帶品を準備しましたから見て下さい」

其處には、乾パン十日分、米三日分、爆藥（〇〇キロ）〇個、黃色藥（〇〇瓦）〇個、鐵條鋏二、磁石五個、手榴彈〇個、鎌一、鉈一、手袋五組、クレオソート一瓶等が、キチンと並べられてゐた。

「みんな私物などは整理したかな」

「全部整理致しました。何時でも出發出來るやうになつてゐます」

「どうだ、今度の俺達の任務は」

「痛快です。ヤンキー共をアツと言はしてやる。こんな痛快なことはありません。村上や高木などは、歌をうたつて、はしやぎ廻はつて居ります」

「よい死に場所を與へられた俺達は、天下一の幸福者だつた」

少尉は大きく笑つた。砲煙彈雨の中に暮れて、明くれば十二月三日。

いよ〳〵出發の朝だ。

輕裝、帶劍に拳銃。各自分配した携帶品。張切つた五人は、隊長室へ現はれた。

「萬歲、成功を祈る」

岸隊長始め隊員達が集つた。

「出發に際してみんなで、寄せ書をやらう」

いざ寄せ書と言つても、紙も墨も筆もなかつた。あり合はせの紙にペンで書き始める。

盡忠鬼（挺身工兵隊長）
工兵精神（挺身工兵班長）
血達磨の奮闘（筒井兵長）
三河男の熱と意氣（村上兵長）
深夜の鬼（高木上等兵）

中澤挺身工兵隊ノ成功ヲ祈ル
（中隊長　岸　秋正）

中澤、寺澤挺身隊ニ贈ル（鈴木見習士官）

ガ島柳木殘月黑
白鳥杉稻空求食
天不識十勇士之快擧
鳴呼潛入爆破挺身隊
半歲鍊武技ヲ磨キ
今破天荒ノ大業ノ途ニ就ク

中澤挺身工兵隊ノ成功ヲ祈ル
（永井曹長）

書き終つた中澤少尉は自分の手帖に最後の言葉を書綴つた。

天皇陛下萬歳！

（靈思鬼）

散り起はの名こそ惜しめよ櫻花

ルンガ岬の　玉と碎けむ

陸軍少尉　中澤　勳

昭和十七年十二月〇日三時五〇分

「あはゝゝ、ルンガ岬の玉と碎けむ……まづい文句だ。何とか名文句はないものかなア」

「どれ〳〵」

隊長は手帖を借りて、

「仲々よいぢやないか」

と、稱めた。

「隊長殿、始めはよいとして、後のルンガ岬の、玉と碎けむ、それが氣に入らないのです」

「何、俺達は軍人で歌讀みぢやないんだ。自分の意志さへ表はせばそれでよいのだ。結構だ、立派なものだ」

「あはゝゝゝ」

少尉は頭をかいて笑つた。

四時、

戰友達の萬歳の聲に送られて、中澤挺身隊は、「必ずやる」といふ自信漲々たる態度で宿舍を出發した。

見送りには岸隊長、渡邊中尉、携帶品を途中まで運ぶ兵隊二人である。

岩淵部隊本部で、寺澤挺身隊と一緒になり、岩淵部隊長の激勵の挨拶を受け、更に一同より成功を祈られて、感激に胸躍らせながら、二挺身隊は出發した。

「わしも前線まで」

岩淵部隊長は此の壯途を見送りに出た。

十勇士は此の無上の光榮に、感激の涙を光らせてゐた。

五、地形を調査し、敵地へ突入

マタニカウ河左岸上流、見晴し臺に陣地を占領して、對岸敵のイヌ陣地を睨み、機の熟するのを待つてゐるのは、伊東部隊である。

敵は見晴し臺附近に我が陣地のあることを察知し、終日終夜、猛烈な空爆、艦砲射擊を續行し、更にイヌ陣地よりは間斷なく重砲彈を浴せかけてゐた。砲彈はジャングル内で炸裂し、大木は片端しから倒潰して草原と變りつゝあつた。然し我が軍はジッとして應戰しない。たゞ、敵の將校斥候と味方の斥候が、ジャングル内で遭遇して、各所にこぜり合ひを演じてゐただけであつた。

中澤、寺澤の兩挺身隊は、三日の夜伊東部隊に一泊し、正面の敵情について、詳しく說明を聞いた。

（思つたより困難な敵情だ）

中澤少尉は幾分心に不安を感じ始めた。

明けて四日、

ルンガ河からマタニカウ河かけて、敵のシヽ陣地、リス、ネコ高地を突破し、其の附近の地形に詳しい岡部隊に立寄り、部隊長始め、幹部の人々から地形を詳しく聞いた。

「ジャングル内を進めば、決して敵に發見される虞れがない。第一、ヤンキーは臆病

で弱い。彼等はジャングルへ飛び込む勇氣などはありやしない。殊に夜襲ときたら、から意氣地がない。晝はジャングル内で睡り、夜さへ行動すれば、平氣なものだ。

經驗者の話で、幾分自信をつける事が出來た。其の夜は、最右翼に在る稻垣部隊に泊つた。

五日、稻垣部隊より將校以下十名の案内によつて、前線よりもズッと敵中に在る第一展望點に行つた。

遙か東北方、ルンガ河附近が一望の下に眼下に開け、ジャングル、草原、道路等手にとるやうに見える。中澤少尉はむさぼるやうに現地を圖上と對照した。

ビッタリと合つてゐる。

（ようし、これならやれる、必ずやれる）

と、今までの不安は一掃され、強い必勝の確信を持つことが出來たのである。

「此の附近一帶は敵の斥候が出沒します。此の第一展望點にも時々敵が現はれるのです」

と、案内の將校は說明した。

中澤少尉は、敵の飛行場に突入する道順目標、草原等を圖上に記入すると共に頭の中へ深く叩き込んだ。

（これならば、兵團長閣下始め隊長、戰友達の期待に沿ふ事が出來る）

安堵に似た溜息をホッと吐いた。何か知ら嬉しさが、グッ〳〵とこみ上げ來り、それが熱い塊りとなつて、ジーンと腹の裏へしみ込んで來た。

「南無、八幡、御照覽あれ、中澤勳、敵飛行場へ突入爆破決行致します」

彼は心で念じた。彼は神の加護は人事を盡して始めて得られるもので、始めから神助を得べきものでないと信じてゐた。故に彼は常に加護を垂れ給へと念じる代りに、照覽あれと念じてゐるのである。

六日、五時、見送りに來てくれた岩淵部隊長や岸隊長、齋藤隊長、稻垣部隊長と共に形ばかりの會食を共にした。

「しつかりやつてくれい」

「成功を祈るぞ」

「誓つて……」

中澤少尉は自信あり氣な、シッカリした口調で返事した。

八時、アウステン山北麓まで送つて來た岸隊長に、

「隊長殿有難うございました。中澤少尉以下五名、只今から行きます。敵の西飛行場で待つてゐます」

と、キッパリ挨拶した。彼は生きて還らうなどゝ斷じて思つてゐない。生死は既に超越してゐた。だが彼も人の子である。今迄敎育され、軍人精神を叩き込まれた恩師であり、隊の父であつた隊長と、これが此の世での最後であるかと思ふと、涙の溢れ出るをどうすることも出來なかつた。

「身體を大切にしてな」

隊長は目を横なぐりになぐつた。

「隊長殿にも御身體を御大切に、益々御武運長久の程を」

「湯淺伍長、筒井兵長、村上兵長、高木上等兵。みんなも身體に注意して、中澤少尉を中心に一丸となつて進まねばならぬぞ」

「はいッ」

此の世で部下となり、隊長となり、父となり、子となつて苦樂を俱にし、死ぬ時は一緒と極めて居たのに今は逆となり、我子

に死んで來いといふ隊長としての辛さ、苦しさ、岸隊長は耐らなかつた。

折しも追ひついて來た寺澤挺身隊に促がされて、隊長と別れ、ジャングル内を第一展望點へ向つた。十時に着いて、今一度ユツクリ地形を調べようと思つたが、丁度稻垣部隊の將校斥候と敵の斥候とが、此の展望點近くで遭遇し銃火を交へてゐたので、着いたのが既に十六時であつた。

「中澤、腹が空つては戰が出來ぬといふからどうだ、腹ごしらへをしようぢやないか」

寺澤少尉は草むらに腰を下して言つた。

「よからう」

「俺運は幸運な男だつたな。何しろ千載一遇の此の大快擧をふりあてられたのだから」

「男子の本望さ」

「貴樣のやうな色男に、此の大役をふりあてる、正に天の配剤よろしきだのう」

「馬鹿野郎ッ」

兩挺身隊員は朗らかに笑ひながら乾パンをかじつた。

「寺澤、貴樣の影が薄いぞ、それ見ろ」

「薄いのぢやない、おれは痩せてゐるから細いのだ」

「ちよん切れさうだぞ」

「阿呆吐かせ」

「あはゝゝゝゝ」

食事が終ると、一同故國の空に向つて整列し、中澤、寺澤兩少尉は出發の際同僚から頂けて戴いた恩賜の煙草五本づゝを、各部下に一本づゝ頂けた。

其の恩賜の煙草を押戴き、遙か皇居を伏し拜み聖壽の萬歲を三唱し、故國に最後の別れを告げた。

どの顏も、どの顏も、眞劍に引締つてゐるが、暮のあたりは幽かに瘧擧してゐた。

紫の煙は幽に流れる。

（最後の煙草は、恐れ多くも恩賜の煙草である）

軍人なればこそ、此の無上の光榮に浴する事が出來るのだ。中澤少尉は幾度生唾を飲み込んだか分らない。

今迄照つてゐた陽は、にはかにかげり、薄墨色の雨雲が、見る〳〵中に大空一杯に擴がり、彼方のジャングル地帶から白い煙とも靄ともつかぬものが、異常な速さで襲つて來、忽ち地上を黑く色どつた。

「寺澤、決行は十五日前だな。成功を祈るぞ」

「ようしッ、貴樣もしッかりやれッ」

二人はガッキと手を握り、お互に顏見合はせ、

「貴樣、案外不敵な面構へをしてやがるぞッ」

「貴樣の面こそ、靄太さがアリ〳〵と現はれてゐる」

カラ〳〵と笑つた。

かくて二組の挺身隊は、右と左へ別れ、雨を衝いて、互に目標點へ進んだ。

時に十二月〇日十六時二十分である。

六、危險を冒して敵陣突破

中澤挺身隊の一行は、かねて偵察し頭の中へ叩き込んで置いた第一羅進地の「ネコ」陣地の草原を目當てに、ジャングルの中へ飛び込んだ。眞暗である。鼻をつまゝれても分らない。大粒の雨は痛い程、横なぐり

に叩きつける。

筒井兵長は鉈を振つて蔓を叩き切れば、高木上等兵は鎌を持つて茨を刈り取る、何しろ手探りの仕事であるから遲々として捗らない。蟲のずるやうな進行である。中澤少尉は地圖と磁石を頼りに方向を定めた。

「夜間作業は駄目だ。明るくなつたら始めよう」

其の夜は大木の根本に天幕を頭からかぶつて、雨に叩かれながら夜を明かすことにした。

「隊長殿、深いジャングルだと聞いたが、ひどいジャングルですねエ」

高木は思ひ出したやうにつぶやいた。

「夜だからひどいやうに見えるんぢやないのかな」

湯淺伍長は口を入れた。

「百足に噛まれるな。蝎に刺されるな」

村上は話の半ばに茶々を入れた。

「みんな、此處も敵の中だが、明日からは絶對口を利いてはならぬ。敵にさとられる虞れがある。若し、是が非でも利かねばならぬ時は耳に口をつけて話すやう。いゝか合圖は總べて手眞似」

少尉は注意した。

「困つたなア。唖の旅行ぢや」

と、湯淺伍長は笑つた。

「今の中に大聲を出して置かうぜ」

高木上等兵はコリヤ〳〵と歌ひ出し、一同を笑はせた。

夜が明けると、雨もはれた。

再びジャングルを切開き〳〵目標地へ進み漸く草原地帶へ出た。太陽はギラ〳〵と光つて、碧空はまぶしい程青い。今迄もぐら生活してゐた五人には、眞實の世界へ出たやうに嬉しかつた。

稻垣部隊の話に依れば、此の邊一帶敵の斥候の出沒が激しいといふので、彼等と遭遇をさける爲め、朝は未明から五時まで、夜は十五時から行動を開始する事にした。晝間はジャングル内にもぐり込み、時折飛び出して敵情や地形を調査する事にした。

七日も暮れて、四圍に夕靄がかる頃、或る草原に獨立した珍らしい一本の樹が、傘のやうに茂つてゐるのを發見した。

「屈强な場所だ。あそこなら敵情は寢てゐても分るし、夜露にもあたらぬ。今夜はあの樹の下で野宿だ」

此の地の草原は、芒や雜草が二米以上も伸びて密生し、所々に熊笹なども茂つてゐた。五人は天幕を敷いてしとねとし、木の根を枕として、疲れた身體を横へた。然し緊張してゐた精神は、當に起き上つて、耳と目は絶えず微妙に活動してゐた。

靄な月が、中天に懸つて、雲の足並みが速い。少尉は月を見てゐる中に、故郷の月を思ひ出し、長閑な山河、黑く煙る彼方の部落、犬の遠吠する有樣など夢見てゐた。

「月はいゝなア」

月の世界には兎が餅をついてゐるといふが、と思ひながらジッと見詰めてゐると、黑い影は兎が鉢卷して餅をついてゐるやうにも見えて來た。

フト、少尉の耳に幽かな人聲が聞えて來た。現實に立歸つた少尉の神經はピンと張り、靜かに軍刀を引つけた。

「敵の斥候らしいぞ。俺が命令するまで手を出してはならぬ」

高らかな話聲が次第に近づいてくる、三

四人らしい。此の草原に彼等の歩く小道があるらしく、勝手知つた道のやうに草を掻き分けて上つてくるのだ。

「畜生ッ、ヤンキー奴ッ。日本刀の斬れ味を見せてやる」

少尉は居合の構へで、軍刀の鯉口を切つた。彼等は挺身隊が此處に居ようなどゝは知らう筈もなく、二三米先の草むらを通り過ぎてしまつた。

「隊長殿ッ」

湯淺伍長は拳銃を射たうとしたが、

「待て、大事の前の小事だ」

少尉は止めた。

「畜生ッ、畜生ッ、畜生ッ」

兵隊達は歯を噛み、地團太踏んで口惜しがつた。

夜が明けると早々ネコ陣地前のジャングルへもぐり込んだ。何しろ敵の斥候の通り道で、何時發見されるとも計り知れないからである。

味方陣地の方面で、昨夜から今朝にかけて敵の陣地から射ち出す銃砲聲は猛烈で、連續射撃の其の響きは、此のジャングル地帶へも大豪雨のやうに響いて來た。

「あゝ、今日は十二月八日だつた。彼等の敗戰記念日である。道理で、景氣よく無駄彈を射つてやがる」

と、少尉は部下を振り返つて、面白をかしさうに笑つた。

「日本には戰勝記念日はあるが、米國には敗戰記念日といふのがあるのですね」

と、村上が言へば、

「今に、ルーズベルト生捕記念日などが出來てくるよ」

と、筒井は茶々を入れて笑はせた。

此處のジャングル内には珍らしい清冽な小川が流れてゐた。南の國では、水は最大の貴重品である。五人は喜んで此の美しい水を飲み、汗と泥にまみれた身體を洗ひ、生返つた氣持で、日中此處で過ごすことにした。然し敵地だ。油斷がならぬ。

少尉は小川に沿うて調査してみると、敵の幕舎を張つた跡があり、其處、此處には罐詰の空罐などが轉つてゐたし、斥候か、巡察でも通過したらしい生々しい足跡さへあつた。

「氣をゆるしてはならぬ」

警戒の目を八方に光らせたが、これぞと思はれる何物も見かけなかつた。

敵の警戒網内へ飛び込んでまる二日、まだ敵らしい敵にも遭遇せず、發見もせず、又陣地へも打つ突つからぬ。

（これも隣部隊長殿や、稻垣部隊長殿の賜だ）

と、感謝する反面少尉の心は既に落着き、本來の大膽性がムク〳〵と躍動して來た。

其の日の十五時、赤味を帶びた太陽の光を全身に浴び、大膽不敵にも草原地帶を眞一文字に進んだのである。

「隊長殿、敵が見えます」

突如、湯淺伍長は少尉の上着を引っ張つてさゝやいた。其の聲に五人は無意識に地上へへばりついた。

湯淺の指す斜右手背後の草原には、十軒の幕舎が張られ、頂上には陣地を構築してゐるらしく、半裸の米兵（ヤンキー）達が二三十人働いてゐた。流石、少尉の胸もドキ〳〵とし、背中に冷汗さへも流れてゐた。

（あゝ、油斷は大敵だ。血氣にはやつて斥

候の警戒や警戒心を忘れてゐた）

「おい、ジャングルへ入れッ」

五人は匍匐して、ジャングルへもぐり込み、眞暗な中を磁石を頼りに、再び道なき道を切開きながら、堅實な方法で、次の目標である草原地へ進んだ。

九日の未明。

朝露で全身濡れながら、丈より高い雜草を掻き分け、シシ陣地と思はれる草原へ向つた。

此處には又草に蔽はれてゐる美しい小川が流れてゐた。

「天佑といふものだ。俺達の行手には必ず清水がある。任務遂成疑ひなし」

斯ういふ豫感から、天佑我に在り、必ずやれるといふ自信が、誰の胸にも燃え上つて來た。五人は小川のほとりで悠々と寢轉び、水を飲みながら、乾パンを噛り、駄辯を弄してゐた。深い青空は限りなく澄み渡つて、敵機は二機三機と飛んでゐる。味方の陣地では恐らくこんなことは夢にも出來ない。

敵地に居るだけに、空に對する不安もなく、至極呑氣なものであつた。

「極樂だ。據にゐる戰友達にも此の氣分を味はせたいなア」

「せめて太陽の光だけでも」

と、太平樂を喋べてゐるが、知らぬが佛で此處は敵陣地前、四五百米の地點で、危險千萬な所であるとは誰一人知らなかつた。

綿のやうに疲れ切つた兵隊からは、高鼾さへも洩れてゐる。

薄暮と共に行動を起した五人は、先づ少尉を先頭に、草原を匍匐して北へ進んだ。四五百米も進むと、ジャングルを切開いたやうな隙間地に打つ突かつた。

「おやッ、こんな所に何だらう」

少尉は部下を殘して、たゞ一人匍匐して近づいた。大木を根元から五尺位、或は二尺位に切つた木の幹が、幅五十米位で、東西へズッと林立してゐた。

「陣地らしいが」

少尉は警戒の目を八方に光らせたが、敵の歩哨らしい姿も、目に止らなかつた。

（いよ〳〵をかしい）

と、思つた瞬間、工兵としての第六感がサッと頭腦に閃いた。少尉は匍ほも近づき、草の中を手探りに探すと、鐵線が低く、縱横に張りめぐらしてある。

「案の定、係蹄地雷だ」

係蹄地雷とは、手榴彈或は爆藥を木の幹に結びつけ、それから鐵線を低く張りめぐらし、一度其の鐵線につまづけば、忽ち五六發の爆藥が爆發するといふ仕掛けである。

「危い〳〵。うかつに進めぬ。係蹄地雷を仕かけてゐる。隱密作業だ」

引返した少尉は、作業開始を命じた。工兵には最も得意な作業である。村上兵長と高木上等兵は、鐵條鋏を持つて匍匐前進した。鐵線は切斷し、爆藥は取り外づし、僅かの時間で、五十米の隙間地の通路を開いた。

「作業終リッ」

此の隙間地を突破すると、雜草の茂つた疎らな林となり、其の先は暗夜にも分る程廣々と開けてゐた。

丁度林の切れ目あたりに、第二の鐵條網

が置くズッと張りめぐらされてゐた。然も其の線には見事な程、空罐の鈴成りであつた。

空はドンヨリと曇つて、ムシ〳〵する蒸し暑さだ。風はソヨともない。汗は全身から玉となつて噴き出し、背筋を音して流れてゐる。遠くの空には物凄い電光が閃き、雷鳴が轟いてゐた。誰の喉もカラ〳〵と乾き切つて、生唾さへも出ない。水筒は既に空である。

「喉が乾いた」

「水が欲しいなア」

林の中を歩き廻はつてゐた筒井兵長が、

「川があつた」

と、報告に來た。

「おゝ、此處にも天佑があつたのか」

一同は小川のほとりにうづくまり、心行くまで、水を飲み、乾パンを嚙つて、腹ごしらへをした。

「天の助けだ」

だが、困つた事には此の鐵條網である。これには流石の少尉もハッタと迷つてしまつた。

此の鐵條網は幅二百米位で、倒木を縱横に轉がし、更に立木の幹から幹へ鐵線を張り、無數の空罐を吊したもので、一寸でも觸るれば、忽ち罐が鳴り響くといふ仕掛けである。それだけに、流石の工兵も手を下す術がなかつた。

「何とかよい方法がないだらうか」

「畜生ッ、ヤンキー奴、味なことをやりあがる」

「あいつ等贅澤な奴等だ。こんなに澤山罐詰を食ひやがつて」

筒井兵長と湯淺伍長は、一日一合足らずの米で戰つてゐる戰友達のことを思ひ、米兵の此の贅澤三昧の生活を、憎らしく腹立たゝしく思はれてならなかつた。

「兎に角、突破する方法を考へよう」

空は眞暗になり、電光は斜に走り、雷鳴は物凄く轟き出した。

間もなく大雷雨が襲つて來た。

「幸先よしッ。此の好機を逸してはならぬ」

少尉は叫んだ。

「天佑だ」

「我々の行手には神助あり」

前進……

命令一下、少尉を先頭に續く四勇士、大粒の雨に叩かれて、頭からビショ濡れになりながら、

「注意しろ」

「轉ぶなよ」

「大事な服をやぶくんぢやない」

と、口々に叫び合ひながら、二百米に亘る困難な鐵條網陣地を突破した。

七、目的地飛行場へ突入

雷鳴は物凄く、大粒の雨は痛い程全身を叩きつける。四邊は眞暗で、一寸先も見えない。五人は、夜のジャングル地帶を進む爲めに用意してゐた杖を、唯一の連りとして、少尉を先頭に、爪先探りで一歩々々と進んだのである。だが、或者はぬかるみの中へ轉び、或者は穴の中へ飛び込んだ。

「猫の目のやうに、夜見えないものかなア」

高木上等兵はつぶやいた。フト、少尉の目に白いものが、幽かに目に入つた。少尉は一同に停止を命じ、一人靜かに近づいて

調べてみた。それは、繃帶、袴下、サルマタ等の洗濯物を吊してゐたものであつた。

「洗濯物だ。宿舍が近いらしいぞ。注意をせ。警戒を怠るなッ」

引返した少尉は、斯う言つて部下に注意を與へ、拔き足、忍び足で、尙ほも進むと敵の幕舍へ突當つた。

（しまつたッ）

立止まつて、息の音を殺し、ジッと中の樣子をうかゞふと、米兵（ヤンキー）達は未だ起きて居り、闇の中でガヤ〳〵と話合ひ、煙草の火がピカリ〳〵と點滅してゐた。

幕舍は小さな携帶用天幕らしく、一つの幕舍に三人か、四人づゝ寢起きしてゐるらしく思はれた。此の幕舍は、左右、背後とズラリと並んでゐた。此の附近は馥郁たる香水の匂ひが漂ひ、それに混じつて、コーヒーの香ばしい匂ひさへも流れてゐる。

「畜生ッ、ヤンキー奴」

何か知ら腹立たしい感じが、ムク〳〵と湧き、

（今に見ろ、今に見ろ）

と、心の中で叫んだのである。雨は益々降り頻る。米兵（ヤンキー）のせき拂ひに、幾度ハッとしたか分らない。五人は再び杖で連絡をとり電光を巧に利用して、幕舍と幕舍の間を縫ひ、米兵（ヤンキー）達の頭の前を、或は彼等の足下を通つて、漸く自動車道路らしい道へ出た。磁石を見ると、此の道は北へ走つてゐるらしい。

「あッ、外被を落して來た」

今迄羽織つてゐた筈の少尉の肩に外被がない。若し敵の幕舍あたりにでも落して、敵に發見され、日本兵の侵入と、警戒されては、九仞の功を一簣に缺くやうなものである。

「俺は探してくる」

責任感の強い少尉は、杖の先でドシャ降りの中、今來た道を搔き廻はしながら、再び幕舍地帶へ入つた。

米兵（ヤンキー）共の咳や鼾が異常に耳につく。

（未だ起きてやがる、いやな奴等だ）

少尉は全神經を杖先に集めて、眞暗な道を進んだ。突如、杖先が物につまづき、幕舍の横に在つたドラム罐を思ひ切り、叩きつけてしまつた。

カーン……。

（しまつた）

慌てた少尉は、其の音響を止める爲めに手を出したが、暗さの爲め距離を誤り、手で又罐を叩きつけたので、再びカーンと響いた。度胸を極めた少尉は、ジッと立止まつて、聞き耳をたて、四圍の樣子をうかゞつたが、米兵（ヤンキー）共は誰一人氣付かぬらしく、依然としてざわめく聲が洩れてゐた。

（諦めよう）

引返した少尉は、部下を顧めて道路を北へ進んだ。道路は新しく作つたものらしく丸太を敷詰めてあつたが、所々に丸太がなく膝を沒する泥濘地であつた。

前方は何處までも續いてゐる。大分行動して時間もたつた。夜明けも間近らしい。マゴ〳〵して居れば、敵に發見される虞れがある。五人は道路から五米ばかり離れた雜草地の凹地で夜明けを待つことにした。

雨は相變らずドシャ降りである。夜明けの寒い空氣はヒシ〳〵と濡れた身體に突刺さつて來た。五人は身を固くし、互に身體を寄り添うて暖をとつてゐる中に、何時と

はなしに泥のやうに睡りこけてしまつた。

フト、目をさました時には、夜は既に明け、雨も止み、凹地には泥水が溜つて、五人は腰までつかつてゐた。何となく、身體は重苦しくだるい。

（寢過ぎた。こりやいけない）

と、首をもたげて四邊を見廻はすと、右手近くに雜草の茂つた林があつた。米兵達はまだ起きないらしく、人影さへ見えない。

「右手の林の中へ各個躍進」

五人は蟇のやうに、林の中へ飛び込んだ。そして、熊笹の茂つた中を一時の宿として、ホッと安堵の息を吐いた。身體の節々がメリ〳〵と痛い。

（一體、此處はどの邊であらう）

朝日はカッと射して來た。寢不足のドンヨリした目には痛い程、まぶしい。

米兵共は口笛を吹きながら小鳥射ちに、或は合唱しながら散歩に、此の林の中を歩き廻はつた。然し、それも朝の一時で、日中はてんで姿を見せなかつた。五人は悠々と濡れた服などを乾かして寢轉んだ。

「敵の中に居るのは呑氣なものだ。空爆もなければ艦砲射撃もない」

簡井兵長などは、寢轉がつて青天井を仰ぎ口笛を吹いてゐた。

薄暗くなるのを待つて少尉はたゞ一人、偵察と附近の情況調査の爲め、熊笹のねぐらを飛び出した。死角を利用し、時には匍匐して暫く北へ進むと、東から西へ張られてある有刺鐵條網に突き當つた。姿を隱して內部をうかゞふと、半裸の米兵共が、口笛を吹き、或は鼻唄を歌つて歩き廻つてゐた。東を見ても西を見ても歩哨らしい姿がない。

今夜も又空はドンヨリと濁つてゐた。少尉は鐵條網に沿うて、右に、左に歩いたが矢つ張り歩哨の姿が見當らなかつた。

（よしッ、此の邊を突破してやれ）

再び少尉は熊笹のねぐらに引返し、四人の部下を引つさげて、目印の鐵條網を乘り越え中へ飛び込んだ。そして方角を北にとつて進んだ。此の邊は一面の草原地で、ゆるやかな波のうねりのやうな感じだ。總べての行動は匍匐である。從つて遲々として進まない。闇はグン〳〵とせまつてくる。

少尉は次のうねりから次のうねりに進む中富士の裾野の駿河山あたりで、夜間演習をしてゐるやうな錯覺に陷つてゐた。

暫く進むと、又敵の幕舍があり、相變らず米兵共の歌ふ聲、笑ふ聲、話す聲が聞え煙草の火は螢のやうに右に、左に點滅してゐた。彼等も燈火管制を實施してゐるらしく、どの幕舍も眞暗であつた。

又雨がショボ〳〵降り出して來た。敵の幕舍を右にして、更に前進すると、目の前に白く横はる河か沼のやうなものに突當つた。

（をかしいぞ。こんな所に、蹴上には河もなければ沼もない筈だつたが）

然し、どうすかして見ても河である。少尉は狐にでもつまゝれたやうな感じで、暫く考へてゐた時、左手にパッと電燈の光がさして草の中へ打伏してゐる五人の姿を薄淡く照し出した。

（見付けられた）

少尉は軍刀の鯉口切つて、虎のやうに目だけをギラ〳〵光らせ、四人は拳銃を握りしめてゐた。

「俺が命令するまで、射つてはならぬぞ」

入り亂れたやうな靴音が近づき、高らかな話聲さへもする。

（氣付かぬらしい）

五人は息の音を殺して、目だけ物凄い程光らせてゐた。

「巡察將校と兵隊らしく、何か面白さうに笑ひながら、五人のゐる草むらの五六歩前を悠々と通り過ぎ、時々懐中電燈を明滅させながら歩いてゐた。

「驚かしやがる畜生ッ」

高木上等兵がつぶやいた時、少尉の頭に何かピンと閃くものがあつた。彼は巡察將校の後をジッと見詰めてゐる。電燈はピカリ〳〵と後を追つてゐた。

「あの、河のやうなものゝ正體を摑んでやる」

少尉はたゞ一人、足許に充分注意して、恐る〳〵手を伸ばし觸つてみた。

「あッ」

それはコンクリートで固めた滑走路であつた。

（さうすれば此處は飛行場か知ら）

夢のやうな氣がする。夢か？　夢でない現實だ。敵地へ入つた事は確かであるが、斯うやす〳〵と飛行場まで來るとは思はなかつた。

（眞實に飛行場だらうか）

少尉の頭には未だ疑問が渦卷いてゐる。彼は再び觸つてみた。足を入れて歩いてみた。正しく滑走路である。

「あッ、飛行場だ、飛行場だッ」

（ようしッ、中を調べてやれ）

彼は先刻見てゐた巡察將校を眞似て、懐中電燈を明滅させて、滑走路の中へ飛び込み、調べ始めた。

滑走路は稍西から東へ走り、更に北へ伸びて、丁度鍵形になつて居り、其處には我軍を毎日惱ます、兵隊達が鶴とか、首長とか呼んでゐる飛行機が三機あつた。鮮やかにあの憎々しい、米國のマークが附いてゐる。

「こん畜生奴ッ。俺達戰友を毎日毎夜、惱ましし、苦しめ、傷つけ、殺し、暴虐の限りをつくして來た憎い奴だッ。八ッ裂きにしても飽き足らぬ。今こそ思ひ知れッ。戰友の恨みだッ。呪ひだッ」

少尉は日頃の敵愾心が、敵飛行機を見た瞬間、カッと燃え上り、思はず手榴彈を握り占めた。

（俺達はこんな飛行機の三機や四機をやつつけても溜飲が下らぬ。何かもつと、どえらいものを見付けて）

と、はやる胸を壓へて、部下の許へ引返して來た。

「おい、みんな喜べ、此處が俺達の目的地である飛行場だッ」

「えッ、眞實ですか」

四人も意外さうに聞き返した。

「眞實だとも。あの白く見えるのは滑走路だ」

「うわッ」

村上兵長は嬉しさの餘り飛び上つた。

目的地に着いた。目的地に着いた。

五分通りの成功だ。

「あの滑走路に敵の首長の奴三機あつた。お前等も、あの憎い飛行機と金平糖のマークでものぞいて來い。幾分清涼劑になるぞ」

少尉は笑つた。

四人は滑走路へ走つたのである。

八、敵の飛行場爆破

一人殘つた中澤少尉は腕を組んだ。

（あんな飛行機などに爆藥を使ふのは勿體ない。あんなものは手榴彈で澤山だ。それよりも味方を惱まし、多大の死傷者を出させた十五榴陣地（口徑十五珊の榴彈砲陣地）は此の附近にあつた筈だ。今日か明日中に此の陣地を見付け出し、砲口に爆藥を叩き込んで破壞し、戰友達の恨みを晴らしてやらねばならぬ。よしッ、さうしよう）

と、少尉は決心した。

間もなく敵愾心を燃え上らせた部下が歸つて來た。

「あん畜生だッ！　毎日俺達を苦しめたのは」

「俺は爆破してやらうと、ブル〳〵震へたぞ」

「おらァ蹴飛ばして、たんを引っかけて來た」

彼等は拳を握り、齒を喰ひしばつて口惜しがつてゐる。

「隊長殿、何時爆破するのでありますか」

「待て〳〵、急いではいかぬ。沈着、然して大膽に行動しなければならぬのだ」

「時機を逸しては」

「慌てるな。兎に角引上げよう」

再び元來た道を引返し、鐵條網を乘越えて熊笹の我が家へ歸つて來た。

雨は相變らず、シト〳〵と降り續いてゐる。

明くれば十一日、約束でもしたやうに、朝になつて雨がはれた。だが今日も日の目を見ることの出來ないやうなドンヨリと濁つた日である。敵は根氣よく無駄彈を我が陣地へばらまいてゐるやうだ。日中、少尉は林の中を徊徊しながら、附近の地形を偵察し、尙十五榴砲陣地を確めようと、全神經を耳に集中してゐたが、何故か、とうとう射ち出さなかつた。其夜は少尉たゞ一人飛行場へ飛び込んで、爆破すべき物件を探し求めた。

十二日。

今迄の雨雲は拭つたやうに飛散して、珍らしく南國特有のチカ〳〵する太陽が顏を出した。

「爆藥やマッチが濕つてゐては、いざといふ時に間に合はぬ。今日の天氣を幸に、乾かして置かう」

五人は携帶品や濡れた服などを、ガ島上陸以來始めて日光に乾かした。

「隊長殿、何時も言ふやうに敵の中は呑氣でありますなア。第一、洗濯物を乾かしてゐても敵彈が飛んで來ません。空爆の心配も、機銃掃射も受けません。至極太平であります」

「確かに呑氣だな。まさか、ヤンキー共は日本兵が此處にとぐろを卷いてゐるなんて恐らく夢にも知らぬからなァ」

呑氣に寢轉んで、笑ひ合ひ、語り合つた。

いよ〳〵今夜決行する。

十六時、萬端の用意をとゝのへた五名は宮城を遙拜し、水筒の水を口傳てに飲み合つて、

「俺達は日本男兒だ。いざといふ時にはお互に笑つて死なう」

と、固く誓ひ合つた。

「命令、湯淺伍長は筒井兵長と高木上等兵を指揮し、通信線の切斷、退路時の鐵條網を破壞すべし。村上兵長は隊長と共に飛行場へ突入破壞物件を物色すべし。集合場所は連絡を以て示す」

かくて、重い任務を持つた五名の挺身隊は、熊笹の家を出發、乾坤一擲の壯途についた。

鋭い利鎌のやうな下弦の月は、西空低く懸り、滿天、金砂をばらまいたやうな星月夜である。

村上兵長を伴つた少尉は、鐵條網を乘越え、先づ、西から東へ走る道路上の一點を第一據點と定め、此處に兵長を一人殘して少尉は奥深く突入した。

折しも敵の監視將校が兵隊を連れて、飛行場内の機燈や機材等を、一つ〳〵懷中電燈で照らし、點檢しながら歩いてゐた。

（これ〳〵）

少尉は大膽にも監視將校の直ぐ後から、やはり、懷中電燈を明滅させながら、機燈機材等を調べて歩いた。

丁度、少尉の前に、横の暗がりから現はれた二人の米兵（ヤンキー）が、大きな鏈を持ち、何か大聲で談笑しながら歩いてゐる。

（をかしな奴等だ。今頃、何處へ何しに行くのだらう）

少尉は彼等の後をつけた。そんな事とは知らない二人は相變らず話し合ひながら林のそばへ歩いて行く。

其處には小屋のやうに大きな黑い物が横たはつてゐる。其處からザアッと水のやうなものを罐に移してゐた。プーンと鼻を刺すガソリンの臭氣だ。

（ガソリンタンクだ。馬鹿に大きなものだなア）

少尉は感心すると共に、二人の米兵の歸るを待つて、調べ始めた。

恐ろしく大きなガソリンタンクが二本、これ又少尉が見たこともない大きな六車輪の大自動車へ積んであつた。

電燈の光りで、車を調べると、インターナショナルのマークも鮮やかな新車である。

（これだ〳〵。これも爆破目的の一つ）

更に、探照燈、飛行機と、今夜の爆破すべき物件を、次々と見廻はつてゐる中に、東の營舍近くで、前同樣なガソリンタンクを發見した。少尉は落ちかゝる利鎌のやうな月を仰いで、滿足な微笑を洩らしたのである。

二十時。月は全く西へ落ちて、四邊は稍薄暗くなり、星は數を增し、其の光りは一段と冴えて來た。

第一據點へ戻ると、村上兵長は待ちあぐんでゐた。

「村上、湯淺達を此處へ誘導して來い」

と、命じ、彼は再び、照空燈のある個所に足を向けた。彼等の照空燈は日本の三倍もある大きなもので、これを完全爆破せしめる爲めには、何處に爆藥を裝置すべきかを、調べてゐたのである。大膽と言へば大膽、不敵と言へば、不敵の振舞だ。任務を完全遂行しようとする旺盛なる責任感と、熱心にして沈着なる其の動作は、正に軍人精神の發露である。

此の時、各營舍が、ざわめき出し、亂れる足音が各方面へ飛んで行く。

（さては、發見されたか。しまつたッ）

少尉の心は極度に動搖した。

然し、それは空襲であつた。

（悪い時に友軍機の空襲だ）

と、つぶやきながら、照空燈の近くにピタリッと打伏した。

照空燈のそばには二人の米兵が、高らかに雑談しながら、ブカ〳〵と煙草をふかしてゐる。少尉の伏せてゐる所と、五米と離れてゐない。間もなく、發電機が唸り出した。

（さうだ、發電機を爆破すべきだつた）

と、思ひ付いたが、今の場合、身動きさへ出來ない狀態である。

五六分の後友軍機の爆音が聞えて來た。米兵は二人、三人と照空燈のそばへ走つてくる。煙草を吸うてゐた一人の米兵は、煙草をポイと放り出し、照空燈で空中を探し始めた。友軍機が二機悠々と飛んでゐた。各所に在る高射砲は、突如猛烈な火を吐いた。米兵共は空を仰いで、光芒を追つてゐる。

少尉の目の前に落ちた煙草は、香ばしい煙を上げて、食慾をそゝるやうに少尉の鼻先を流れた。六日に恩賜の煙草を戴いて以來、僅かの煙草も吸はなかつた煙草好きな少尉には耐らない程苦しかつた。

彼は手早く其の煙草を拾ふと、口にくはへ、軍刀を小脇にかい込み、スツクと立上り、腕組みをして米兵共の仲間に入り、スパ〳〵と煙草をふかしながら、米兵と共に大空を仰いで、友軍機を眺めてゐた。誰一人氣付かない。

其の時のことを少尉は、

「自分はどんな氣持で立上り、米兵達と一所に空を仰いでゐたか、未だに分らない」

と、言つてゐた。

然し、彼が軍刀を小脇にかい込み、腕組して軍刀を隠して立つたことは、彼が無意識でやつたことではない。彼は米兵共を呑んでかゝつてゐるのだ。彼は其のまゝ伏して居れば發見される虞れがある。敢然、虎穴へ入つて一か八かの危險なる大腹藝を演じたのだ。彼本來の大膽性と沈着性が、かくせしめたのであらう。

友軍機は悠々と飛びながら獲物を探し求めてゐる。

ズシン、ズシン。

地響きをして、爆彈は海岸線に近い敵の高射砲陣地へ投下された。

（早く歸つてくれないかなア）

少尉は内心イラ〳〵しながら空を仰いでゐた。

空襲は約四十分にして終つた。

二十一時三十分、再び第一據點に引つ返し、部下四名の張切つた顔を見ながら乾パンを噛り、米兵共の寢靜まるを待つた。此の第一據點は、敵の幕舍と十米も離れてゐない、危險な場所のやうであるが、むしろ安全地帶であつた。

丁度此の時、トラ陣地方面にあたつて、轟然たる音響が空氣を振動させた。間もなく銃砲聲のつるべ射ちが耳に入る。

（あッ、寺澤達がやつたらしいぞ）

若し、寺澤達の行動によつて、自分達の行動を敵に察知されてはと、ハラ〳〵したが、それは單なる杞憂に過ぎなかつた。

空襲で興奮した米兵達は、ガヤ〳〵と談笑し、果てはコーヒーをわかし、レコードをかけて、合唱し、笑ひさんざめき、暗ら

うとはしない。時間は刻々と經つて行く。

「畜生ッ、早く寢やがれッ」

大なる任務を目の前に控へた五名は、腹立たしさを通り越してイラ〳〵し出した。

「今に見ろ、今に見ろ畜生ッ。貴様等の共の歡樂境を一瞬にして、阿鼻叫喚の巷に化して見せるぞ」

「地獄へ行つてから、ユツクリ歌やあがれ」

待つ身は長い。漸く二十二時になつて靜かになつた。

「命令ッ」

立上つた少尉は微かに口を切つた。

「湯淺伍長は飛行場の西に在るガソリンタンク、筒井兵長は入口にある照空燈、村上兵長は東滑走路にある飛行機、高木上等兵は南滑走路にある飛行機を爆破すべし。自分は東端にある、ガソリンタンクを爆破する。總べて行動は、機敏にそして沈着して決行せよ。

合圖は懐中電燈を横に振つたなら用意、縦に振つて消した時は點火である。完全點火を見届けたならば、出來るだけ早く、破壞鐵條網個所に集合すべし。爆破の確認は自分がやる。終り」

「復唱、湯淺伍長は飛行場西端のガソリンタンクを爆破します」

「復唱、筒井兵長は入口に在る照空燈を爆破します」

「復唱、村上兵長は東滑走路の飛行機を爆破します」

「復唱、高木上等兵は南滑走路にある飛行機を爆破します」

部下の復唱を靜かに受けた少尉は、一人々々の手を握り、

「各自、配置につけッ」

と、命令した。

二十二時二十分である。

少尉は例によつて、悠々と懐中電燈を灯しながら、部下の一人々々を見廻はつて、爆藥裝置を點檢し、

「慌てちやいかぬ。結び目を厳重にせよ」

と、一々注意を與へて歩いた。彼の頭は敵陣地などといふ事は既に何處かへ吹ッ飛んで、任務といふ責任感だけで充ちてゐた。生もなければ死もない、むしろ神に近い心境になつてゐる。

少尉は最後に、自分の持場である、ガソリンタンクの所へ來り、梯子をかけて登り爆藥をくゝりつけた。

「言ふに言はれぬ感激が、ヒタ〳〵と全身に押寄せて、ワク〳〵し出した。

「部隊長殿、中澤少尉以下五名只今、決行致します」

遙かに部隊長へ報告し、用意の電燈を横に振つた。全身がガク〳〵と震へてゐる。

（點火）

電燈を大きく縦に振つてパッと消した。

二十三時六分であつた。

黒い影は走つた。一つ、二つ、三つ。だが、どうしたことか、筒井兵長の照空燈は仲々點火しない。少尉は兵長と協力し、漸く點火して、附近の凹地に身を伏せ、爆破の確認をすることにした。

シュウ、シュウ、〳〵。

と、いふ導火線の燃ゆる異様な音で、眠りはなの夢破られた米兵共は、各幕舍からゾロ〳〵飛び出して來た。

「奴等に妨げられてはならぬ。若し近づいたならば叩ッ斬るのだッ。筒井、暴れろ」

少尉は軍刀の柄を握り、兵長は手榴彈を
摑んで、飛行場の方を睨んだ。
米兵共は次第に近づいてくる。
ドドッダーンッ
大音響と共に、先づ飛行機二機は木葉微
塵となつて吹ッ飛び、續いて兩ガソリンタ
ンクが、轟然と爆發し、黑煙濛々と噴き出
し、紅蓮の火柱が中天高く舞ひ上つた。
驚き怖れた米兵共は、頭をかゝへて林の
方へ一目散に逃げ出し、折角築れる心算で
意氣込んでゐる少尉達をガッカリさせた。
最後に照空燈が、これ又大音響と共に吹
ッ飛んだ。
「萬歲ッ〳〵」
少尉も兵長も思はず立上り、兩手を高く
擧げ萬歲を叫んだのである。
任務を完全に達成した少尉の兩頰は、火
炎に照されながら、雨に濡れた時のやうに
光つてゐた。

九、歸路の苦心

破壞鐵條網個所に集合した五名は、互に
顏見はせて無事を祝し合ひ、嬉し泣きに泣
き出した。
「隊長殿、お目出度うございました」
「みんなの努力の賜だ」
任務を果した今は心にかゝる雲もない。
カラリとはれた大空のやうな、清々しい氣
持である。痛快味がゾク〳〵と身體中をう
づく。
「痛快だつたな、おい」
「溜飲が一時に下つたよ」
少尉は十五榴砲陣地を爆破せぬのが、ど
うしても心殘りであり、殘念で耐らなかつ
た。黃色藥はまだ持つてゐる。其のまゝ持
つて歸るのも勿體ない。それかと言つて、
再び飛行場へ突入して、他の物件を爆破す
るだけの餘裕がない。
(よしッ、歸りの土產に敵の幕舍へ叩きつ
けて行かう)
と、決心した少尉は、一同の黃色藥を集め
て二つに分け、一つを湯淺伍長に與へ、二
人は右と左の幕舍目がけて闇に消えた。
ダアーン、ダアーン。
音響が左右から轟き渡つた。米兵共の金
切聲や泣き聲が雜然と聞える。
(やつたな)
三人は暗闇の中で聞耳を立ててゐた。銃
聲は一發もしない。たゞざわめく聲のみが
風に乘つてくるばかりだ。
スタ〳〵と走る足音が近づくと、
「湯淺伍長は」
と、聲かけたのは少尉である。
間もなく又足音がして、
「米兵つて、怪我をするとオイ〳〵聲をあ
げて泣くんぢやな」
と、如何にも大發見でもしたやうな口振り
で、湯淺伍長が歸つて來た。
「ほんとかい」
高木は聞いた。
「ほんとだとも、俺は暫く立つて聞いて來
た」
「米國の兵隊は、イタイヨー〳〵と泣くの
か。はッ、はッ、はッ」
筒井は面白さうに笑つた。
五人は再び磁石を頼りに、南へ〳〵と進
んだ。滿天、金砂のやうな星空である。四
邊は相變らず暗い。小川のほとりに出た。

思ひ出したやうに喉が渴く。五人は暫く休
んで水を飲み、又水筒に詰めて準備した。
時計は三時を指してゐる。五人は更に小
川に沿うて南へ進んだ。
「伏せッ」
突如、先頭に立つて進んでゐる少尉の力
強い、低い聲が響いた。
寢ぼけ眼をこすりつゝ米兵共が、口笛を
吹きながら小川へ水汲みに來たのである。
近くに敵の陣地があるらしい。
(奴等がこんなに早く起きた事を思ふと、
きつと、警戒網を固めてゐるに違ひない。
油斷は禁物だ)
少尉は更に警戒の目を光らせ、兎に角夜
明け前に、ジャングルへもぐり込まう、と
思つた。水汲みの米兵共をやり過してから
再び南へ進んだ。暗い、足下が分らない。
鐵條網を乘り越えて更に進んだ時、少尉は
つまづいて轉んだ。
「あッ」
といふ間もなく、
ダアン、ダアン、ダアン、ダアン。
轟然たる大音響と共に、土煙は濛々に立
ち上り、土砂は雨のやうに降つて來た。
係蹈地雷に引つかゝつたのだ。
「湯淺伍長ッ」
「はッ」
「筒井兵長ッ」
「はッ」
「村上兵長ッ」
「はッ」
「高木上等兵ッ」
「はッ」
「みんな無事かッ」
「無事であります」
少尉はホッと安堵の胸を撫で下した。不
覺だ、不覺だ。緊張を缺いてゐる結果だ。
口は砂埃を噛んでザリ〳〵してゐる。敵
は追擊もして來なければ、銃も射つて來な
い。
「用心せッ」
兩足に全神經を集めて、此の障礙地帶を
通過することにした。
「あッ」
湯淺伍長は引かゝつた。
ダアン、ダアン、ダアン。
一同は土砂を頭から浴びただけで、今度
も全員無事だつた。
大空の星は一つ消えて、東の空が稍々白
みかゝつて來る頃、ジャングル地帶へもぐ
り込んだ。
敵の斥候や巡察兵に發見されないやうな
個所を選んで、天幕を敷き、腰を下した。
「係蹈地雷に引つかゝつた時、敵に追擊さ
れたなら全滅だつた」
「敵も案外、警戒が緩やかだ」
「ナーニ、奴等恐ろしいのだよ」
「兎に角、任務が終つたと思つて氣をゆる
したのはいけなかつた。油斷は大敵だ」
疲勞の爲めか、全身の節々がうづくやう
に痛い。そして腰を下せば上下の瞼が伸よ
くなつて、今話してゐたと思ふと、何時の
間にか泥のやうに眠りこけてしまつた。
目がさめた時は、陽は西へ沈みかけて、
大木の葉が赤くそまつてゐた。
(みんなまだ、手榴彈を持つてゐる。敵の
陣地を見付け出し、全滅してやらう)
少尉の闘志は又燃えた。
十三日の夜もジャングル內で夜を明かし

拂曉になつて行動を起し、南へ〳〵進んだ。

「あッ、敵の陣地らしいものが」

付上兵長の指す草原地に、新しい土を積み上げたものが見える。

「確かに陣地だ」

暫く監視を續けてゐたが、人影さへ見えない。

「をかしいぞ」

少尉は偵察の爲め雜草を掻き分け登つてみた。陣地は陣地であるが、慌てて撤退したらしく、糧詰などがゴロ〳〵轉つてゐた。

「敵さんの贈り物だア」

少尉は糧詰を高くさしあげて叫んだ。四人は大急ぎで陣地へ登り、敵の贈物を拾ひ、

「今日からルーズベルト給與か」

と、笑つた。

敵の斥候にも會はなければ、敵の巡察兵の姿さへ見かけない。

何か氣拔けしたやうに五人はジャングルの中を南へ〳〵と進んだ。進めば進む程、重疊たる山岳地帶になり、出發點の第一展望點は少しも分らない。ジャングル地帶に迷ひ込んでしまつたのである。

十五日になつても尙ほこれぞと思ふ場所へ着かぬ。右を見ても、左を見ても、深いジャングルだけである。

ガ島・寺澤挺身隊の決死行

陸軍報道班員　森川賢司記　（一八・四・二六朝日新聞掲載）

寺澤挺身隊はアメリカ軍陣地深く潛入、敵の重砲陣地ならびに飛行場施設爆破の決死的作戰を完うして全員生還したのである。隊長寺澤孔一少尉以下加藤京一伍長、高橋三郎兵長、古田正也、木下正光兩上等兵の五勇士よりなる寺澤挺身隊はあらゆる苦難と危險を乘越えて米軍のトラ重砲兵陣地に接近、幾重た鐵條網を破壞して三門の重砲と二つの幕舍に迫り爆破に成功した。その大膽不敵の奮鬪振りは中澤挺身隊のそれにも劣らず世界に比類なきわが陸軍魂の顯現として南太平洋米軍の心膽を寒からしむる皇軍の精華を宣揚したものである。

「萬事休す。手榴彈はまだ持つてゐる。今一度敵の陣地へ飛び込んで、叩き壞はして來よう」

少尉は叫んだ。

「賛成ッ」

五人は南へ行くのを止めて、敵陣地目ざして、北へ〳〵と進んだ。

十六時三十分。

意外にも稻垣部隊の裏口へヒョッコリと現はれた。天佑である。

「萬歲々々」

一同は天地も動搖せよと、大きな萬歲を唱へたのであつた。

寺澤挺身隊五勇士

愛知縣一宮市大字淺野字山王

隊長　陸軍少尉　寺澤孔一

靜岡縣志太郡豐田村保福島

陸軍伍長　加藤京一

岐阜縣本巢郡土貴野村早野

陸軍兵長　高橋三郎

岐阜縣加茂郡八百津町

陸軍上等兵　古田正也

愛知縣八名郡石卷村大字三輪

陸軍上等兵　木下正光

寺澤挺身隊の征途

「……貴官らの行動によつて、延いては南太平洋全米軍の心膽を寒からしむるのである……」と、○○兵團長閣下から激勵されなほその上、恩賜の御酒、煙草を戴き感謝と感激の涙にむせんだ寺澤少尉は未だにその興奮はさめきらない（中澤はどうしてゐるだらう）彼は若いが縝密な男だ。計畫を練つてゐるかも知れない。「寺澤少尉殿」と隊長の當番兵が迎へに來た。隊長室にはすでに携帶品は準備され、齋藤大尉自ら何かと世話を燒いてゐた。

「寺澤少尉、しつかり頼むぞ。我が隊から挺身隊を出したといふことは、隊の名譽である。成功を祈るぞ」

大尉は嬉しさうに少尉の肩を叩いた。

「隊長殿、御安心下さい。寺澤の命のある限り……」

少尉は元氣に自信滿々たる聲で答へた。

五人を圍みガ島料理

やがて、挺身隊五人を中心に會食が始つた。兵隊達の誠心誠意めたガ島料理である。御飯を見るたびに五人の目頭が熱くなる。隊全員が擧つて五人の成功を祈るため水のやうなお粥をすゝつて、自分達にのみ定量の食を與へてゐる（涙ぐましい戰友愛のためにも、是が非でも成功を期さなければならない）

「いよ〳〵明朝出發、敵の警戒嚴しい中を進むのであるから、みんなも十分に注意しなければならない。敵はあり餘る物資をもつて、堅固に構築した陣地である。もぐり込むにもなか〳〵容易なことではあるまいと思ふ。隊長が選び出したみんなである。萬ぬかりはあるまいと思ふけれども、なほ一層の注意と警戒心を發揮して目的へ邁進するやう」

と、いつて齋藤隊長は一同の決死の顏を見廻した。

「隊長殿、自分はよい死場所を與へられまして、こんな嬉しいことはありません。日本陸軍傳統の攻擊精神を、十分に發揮します」と、加藤伍長はいつた「痛快な仕事ですね少尉殿」隣にゐた木下上等兵は顏を寺澤少尉の方に向け「いざとなれば爆藥とともに敵の砲臺へ飛び込みますよ」と、さも暢氣さうにカラ〳〵と笑つた。

目的地砲臺へ

「十五日までに決行だぞ」雨の中、第一展望點で中澤挺身隊と別れた寺澤挺身隊は少尉を先登にジャングル地帶へ飛び込んだ。眞暗である、雨は雷のやうに轟いて横なぐ

に叩きつける。茨の道は一歩も進めない。

「今夜は雨の中で野宿だ」少尉は大木の根元を見つけてそこに陣取つた。雨は益々降り頻るばかりで止みさうに見えない。頭から天幕をかぶつたが全身はズブ濡れである。

兵隊達は慌めしげに雨を睨んでゐた。ダアン、銃聲が一發、ジャングル内にこだまし青白い懐中電燈の光が、遙か彼方でパッと照つた「敵の斥候だッ」加藤伍長が叫ぶと一同は拳銃を握り占めた。

「射つてはならぬ、斷じて射つな、發見された時は奴らを皆殺しにするが、さうでない限り、我々が敵の警戒線内に飛び込んだことを奴らに知らせてはならぬ」

注意深い少尉は、部下をたしなめて、闇の中に目を光らせた。こんなに早く、しかも豪雨の中で、敵の斥候と遭遇するなどとは夢にも思はなかつた（やつぱり戰地だ、敵地だ）

聽える敵の話聲！

少尉は十分に意識しながらも、何かしら遠い所のやうな氣がしてゐたが、間近に銃聲を聞き、懐中電燈の光を見て、初めて俺は戰爭をしてゐるのだといふ氣になつた。ダアン、また射つた。近い、懐中電燈の光は雨を銀色に光らせてゐる。次第に近づいてくる、話聲さへ聞えて來た（敵の斥候かしら）少尉にはいぶかしげに思はれた。發砲をしたり、懐中電燈をつけたり、話し合つたりすれば斥候の位置も人數もハッキリ分つてしまふではないか、これが米國流斥候かしら、ダアン、少尉達の横で射ち、電燈で前方を照して進んでゐる。將校一人と兵隊三人らしい。彼らはしつきりなしに話し合ひ、笑ひ合つてゐた。横の木の根元にゐる挺身隊を見つける事が出來ない。何のための斥候か、少尉はをかしくなつた。そして、ジャングル内には彼ら專用の道路があり、彼らはその道路だけを歩いてゐるのだ。といふことが分つた。ダアン、また發砲した「馬鹿野郎ッ」高橋兵長はクス〳〵笑へば「ありや何だ、斥候か、巡察か」と古田上等兵は聞いた。

「あれはルーズヴェルト式斥候といふ。その斥候は相手方の狀況を探るのでなく、自分の身を守る斥候なのだ。そして自分の位置を敬へ、進む方向を敬へて全滅を待つてゐる。これ世界に誇るべき米軍斥候なり」

加藤伍長は眞面目に說明して、四人を笑はせた。夜が明けるに從つて雨はやんだ。敵の道路を避け磯石をたよりに道なき道を切り開きながら目的地へ進んだ。

トラ陣地脚下に見ゆ

ジャングル内の進擊は困難だ、遲々として進まない。然し八方を警戒しながら、大自然と戰ひ、道路を作りつゝ進んだのである。その間幾回となく敵の斥候を見かけては姿を隱した「行動は拂曉と薄暮時だ」折角こゝまで進んで、敵に發見されては水泡に歸する。それは自分達の問題ばかりでなく中澤挺身隊にも影響を與へる。少尉は四方八方を考へ愼重に行動したのであつた。

「鐵條網がある」木下上等兵の報告に、近くに敵陣地があるに違ひないといふ感じがサッと閃いた。少尉は部下を木の下に隱し、

自ら大木に隱れ或は匍匐して鐵條網に近づき、右から左と綿密に調査したが、敵の陣地らしい箇所はなく、歩哨らしい姿さへ見えなかつた「をかしい」注意深い少尉はなほも調査を進めて行くと、小川のほとりに幕舍を張つた跡があり、よほど慌てゝ撤收したと見え草原の中に繃帶が靡つも〳〵轉がつてゐた「敵は撤退して一人もゐない」と、ハッキリ見極めをつけた少尉は、小川のほとりに部下を誘導して來た「これは有難い、ルーズヴェルト給與だ」と、繃帶を開けて牛肉を食ひ、あるひはミルクを飲みコーヒーを飲んで英氣を養つた。何しろが島上陸以來の榮養分だ。かくて、幾度かスコールに叩かれ、敵斥候に脅かされて十日の八時ごろ、漸くトラ陣地の見える草原の脚下に現れた「いよ〳〵近づいた」少尉は丈なす雜草を掻き分け匍匐して頂上に登りトラ陣地を監視した。敵陣地は直ぐ目の前にある。三門砲口が無氣味に此方を向き、その撞壺に敵の歩哨が口笛を吹きながら警戒してゐた。何を警戒してゐるのか、ブラリ〳〵と歩き廻つてゐる「米兵つて暢氣なものだなア」少尉は感心して眺めてゐた。

引返した少尉は、部下を一人々々草原地帶へ上げて、敵の陣地を彼らの頭へ沁み込ませたのである。

愈々決行を言渡す

その日は草原の脚下にあるジャングル地帶に休養し、夕刻から少尉は古田上等兵を伴つてジャングルを左に廻り、敵陣地近くまで偵察に出かけた。係蹄地雷の鐵條網を張りめぐらし、さらにその先は空罐を吊るした鐵條網が、グルリと張られてゐる「なか〳〵嚴重なものだ」十一日三時、また夜明前に行動を起して、砲壘の眞下、ジャングル内の大木の下に陣をとり、裝具を解いた「みんな、一人々々敵にさとられぬやうに、陣地とその附近の狀況を偵察して來い」少尉は部下を交互に敵陣地偵察に派遣した「みんな、わかつたか」「向つて右手に砲が三門、左手に幕舍が二つあり、前に鐵條網と係蹄地雷を仕掛けてあります」今日は朔からショボ〳〵と雨が降つてゐる。敵の歩哨の姿が見えない、部下は完全に敵情を頭の中へ叩き込んでゐる。しかもみんな張切つてゐる。今のうちだ、少尉は決心した「明十二日夜半いよ〳〵決行する。各自愼重に大膽に、行動せねばならぬ」と、いひ渡した。

敵の砲兵陣地爆破

明くれば十二日、雨は止んで近來にない上天氣だ。南海の太陽はまぶしいほどチカ〳〵と身體に突刺さる、痛いほどの熱さである。濕氣を含んだ草いきれが、ムン〳〵と四邊を包み、ジッとしてさへ汗が背筋を普して流れる。五人は爆藥、導火線、マッチなどを乾かした「日中は濡れた軍服でも乾かしながらユックリ休まう」風に叩かれ雨になぐられ、殆ど不眠不休の疲れた身體は、太陽を浴びて横になると、直ぐ高鼾にかはつた。寺澤少尉も動もすれば、ウツラ〳〵したが睡れなかつた。目をつむれば、敵の陣地がハッキリと瞼の裏に浮び上つて來る。敵の飛行機は、未明から何機も何機

も西へ飛んで行く、銃砲聲は遠雷のやうに轟いてゐた。澄んだ大空はあくまで碧く、そして深い。少尉はムッとする草の中を匍匐して、鐵條網に近づきどこを切開くかを調査した。煙硝下暗しといふか、敵の歩哨が眞上にをりながら氣づかない。十六時、四邊には夕闇がせまり、陣地は夕日を浴びて赤く映えてゐる「命令を達する」少尉は低いが力強い聲で呼んだ四人の顏にサッと緊張の色が流れる。

「加藤伍長は向つて右の砲を、高橋兵長は中央の砲を、古田上等兵は左の砲を、木下上等兵は左端の幕舎を爆破すべし。自分は中央幕舎を爆破する。行動はすべて絶密にそして大膽にやれ、點火の合圖は口笛をもつてする。集合場所はこの大木の下、完全點火し終らば、速かにこの地點に集合すべし。終り」

復唱が終ると一同は宮城を遙拜し、水筒の水を飲み合つた。少尉はさらにわが陣地の方を向き「寺澤少尉以下五名、只今より決行致します」と、一同を代表して部隊長に對しはるかに挨拶をした。五人は不必要な裝具を一切大木の根元にまとめ、身輕いでたちで出發した。十七時三十分「隱密作業開始、なるべく道を開け」と、少尉はかねて偵察して置いた地點を指示した。四人は草の中を匍匐して鐵條網に近づいた。仰向きに寢轉んでは鐵線鋏で鐵線を切斷し匍匐しては爆藥や手榴彈を取つて、五十米位の隙間地帶にやゝ廣い道をつけた。四邊は暗く、星の瞬きが激しい、利鎌のやうな下弦の月が陣地の西の空低く懸つてゐる。幕舎からは陽氣なレコードのメロデーが流れ、米兵共の笑ひさんざめく聲さへも聞えて來た。「奴等浮かれてゐる」「奴等の寢靜まるのを待たねばならぬ」五人はやもりのやうに地上へへばりついて待機した。長い時間だ、誰の心もジリ〳〵してゐる。と、遙に爆音が大空に響き渡つた。照空燈の光芒は大空を掻き廻してゐる。「友軍機だ」

折から來る二友軍機

加藤伍長がつぶやくと「おーさうだ〳〵友軍機が二機だ。悠々と飛んでゐる」と、古田上等兵は答へた。大空に爆音一杯を響かした友軍機は、光芒の中を悠々と飛び廻つて、獲物をねらつてゐる。敵の高射砲陣地から一齊に火を吐いた「次の鐵條網を今の中に破壞せよ」突如、少尉の命により、四人は直ちに次の鐵條網破壞に取りかゝつた。この鐵條網は空罐を吊した苦手の鐵條網であつたけれども、爆音と高射砲の音響に消されて、敵に發見されることなく、完全に切斷し終つた。敵の歩哨の姿が見えない「今の中だッ」五人は雜草の中をそれ〴〵目的物に向つて進んだ。天佑か、敵兵の姿もなく、陣地は眠つたやうに靜かだ。「幕舎をやるに爆藥は勿體ない、黃色藥と手榴彈で澤山だ」少尉は途中まで一緒に來た木下上等兵にさゝやいた。「隊長殿、さうします」五つの黑い影が、敵陣地へ現れた。砲の掩蓋に、幕舎の近くに、やがて口笛が高らかに響くと、五つの黑い影は脫兎の如く草原へもぐり込んだ。ダアン、ダアン、ダアン、大音響とともに、濛々たる土煙が敵の陣地を包み、幕舎のあたりからは、メラ〳〵と赤い炎が地上をのた打つてゐる。鐵

條網の箇所に打伏して爆破を確認してゐた少尉は、滿足さうな笑みを洩らした「やつた、やつた」少尉は土砂を頭から浴びて立上つた。何の涙か、止め度もなく頰を流れる。時計は二十三時ちよつと前であつた。大木の下には四人の部下が待つてゐた「隊長殿、やりました。やりました」彼らもみんな泣いてゐる「有難う、有難う」

挺進隊萬歲、全員生還

少尉はこの決死斷行した部下を何といつてねぎらつてよいか分らない。たゞ、有難う〳〵と同じことを繰返しながら、一人々々の手を固く握り占めた。やがて大木の下から出發して、最初に休憩した草原地へ來た時、右手敵の陣地から思ひ出したやうに猛烈な銃砲火を浴びせて來た。だが、それは暗夜の鐵砲で、見當違ひの方向に射つてゐた「先づ、よかつた」と、ホッと安堵に似た吐息を洩らした時遙か西飛行場方面で大音響が續けざまに響いて來た「あッ中澤もやつたらしいぞ」「中澤挺身隊、萬歲ッ」五人は我事のやうに喜んで、萬歲を叫んだのである「隊長殿」加藤伍長は鼻をつまらせてゐる「何だ」「挺身隊は、挺身隊は、萬歲、萬歲ですなア」と、目を横なぐりにぬぐつた。少尉の胸にグッと來た、痛いやうな、熱いやうな塊りである「日本の兵隊は強い〳〵、世界一強い兵隊だ」歸りのジャングルは往きに遲〻として進んだせゐか、目標その他に間違ひなく、敵の斥候とも遭遇せず、十四日五時、第一集點へ到着した。そして稻垣部隊へ着いたのは、その日の九時であつた。

爆破！の快報に合掌

石川隊長手記（一八・七・五朝日新聞掲載）

豪膽が島の花として重砲陣地やルンガ飛行場爆砕の中澤、寺澤兩工兵挺身隊の壯烈鬼神も哭く奮戰ぶりは當時詳報され一億國民を感奮興起せしめたが、そのかげには本隊にあつて血を分けた親子以上に部下を思ふ部隊長の親心と兄弟以上の戰友愛とを忘れてはならない。以下は當時が島の司令にあつて兩挺身隊の敵地潛入に協力し奇蹟の生還をした前後の模樣を克明に綴つた石川兵作隊長（豐橋市守下町出身）の手記である。同隊長は最近前線から歸還し目下○○にゐるが、この手記は挺身隊員を送り出した後、部隊長以下の戰友が來る日も來る日も如何に快報を待ちわび、與へられた重大使命の完遂と生還を神かけて祈つてゐたかを物語るもので、血涙の一句々々には眞に人の胸をうつものがある。

○月○日　一萬數千の思想眠るが島の最前線は決戰死闘の連續である。○日以來敵トラ重砲陣地から擊ちまくる十字砲火はいよ〳〵熾烈さを增し耳を聾する囂音は間斷なく續き砲彈が鬱蒼たる密林を嵐のごとく狂つてゐる。時折り愛嬌ものの猿があへなく鬼畜の犧牲になるのも苛烈な戰爭の一斷面だ。

○月○日　けふは朝から敵機が絶え間なく頭上を旋回、盲爆を繰返した。わが方は彈藥、食糧の補給意のごとくならず全く不利な態勢に地團太踏んで口惜しがつた。このまゝでは全滅を待つばかりである。この日夕刻わが中澤、寺澤兩挺身隊に出動命令が下つた。

○月○日　灼熱の太陽が水平線を離れた五時半、岩淵部隊長殿は出發の準備成つた兩挺身隊員に、

「全軍の安危今や諸君の双肩にある。一死もつて君國に報ずる秋は來た。俺達も諸君らの屍を乘越えて突擊する。しつかりやれ」

の訓示の一句々々は肺腑をゑぐる。肅然と居並ぶ隊員らに岩淵部隊長から眞鶴の煙草と酒を贈れば中澤、寺澤兩隊長が謹んでこれを拜受する。聖恩の無邊なるに感激しつゝ煙草に點火、一息吸つて順次隊員に廻した後、恩賜の酒を押戴き部隊長殿が駈寄つて一人々々肩を叩いて激勵されると、寺澤隊の木下正光上等兵（愛知縣八名郡石巻村）は最早感涙を押へ切れずワッと男泣きに泣き崩れた。勿論未練の涙ではない。帝國軍人として立派な死場所を得た喜びからである「唯今より行きます」「行」とのみで「きます」といへぬ語尾のなかに生還を期せぬ覺悟のほどが窺はれる。

先頭に立つは中澤勳少尉（靜岡縣引佐郡三ケ日町）だ。がつしりした體軀、たしか柔道二段のはずだ。謹厳寡默所信を堂々貫く鋭さを持ち部下の信望特に厚い彼としての大役はけだし最適任だ。續くは湯淺義行伍長（愛知縣丹羽郡丹陽村）ではないか、湯淺は隊長の輔佐役としてうつてつけの人物だ。五尺の體軀これ膽といふ銃劍道の達人だ。筒井金市兵長（愛知縣幡豆郡寺津町）村上政明兵長（愛知縣碧海郡六ッ美村）の二人は部隊中の模範兵だつた。ともに香港（ホンコン）攻略戰のベンネッ山攻撃に武勳をたてゝゐる寺澤孔一少尉（一宮市大字淺野）は溫厚無口な、それ故平常はあまり目だたぬ方だが部下をよく可愛がつた。寺澤隊の加藤京一伍長（靜岡縣志太郡豐田村）は部隊中の元氣者で何事も積極的に行動する工兵魂の權化、古田正也上等兵（岐阜縣加茂郡八百津町）も率先苦難を買つて出る兵隊だ。拳銃と銃劍のほか手榴彈その他武器がぎつしり腰を取卷いてゐる。いよ〳〵出發だ。見送る戰友たちとの間に惜別の握手を交され「やつて來るぞ」「頑り翻む」中澤隊の先頭はもう漆黑の密林に吸込まれてゐる。

○月○日　決死隊一行が出發したあとのけふの部隊の空寂さはどうだ、たとひ任務は果しても生還は夢にも期し難い。だが彼らは部隊の安危を擔つて選拔されたのだ。勝算を胸中深く秘め闘志彌々出發して行つたので、きつと成功するに違ひない。是非とも成功させねばならない。錯綜した感情が漂つてゐるが、それは飽くまで底流で感

動の波は少しも表面に現はれず全員默々として與へられた任務に挺身する。敵陣地爆破の快報はいつ來るか。

○月○日　けふも爆音と涌然たるスコールのうちに過ぎた。

○月○日　焦躁の夜が明けた、もうぼつ〳〵第一報が入るころだと部隊長以下指折り數へて待つ。二十三時になつても誰一人として寢るものもない。快報なし。

○月○日　空は朝から拔けるほど靑い。彌たされぬ心の空寂さをどうすることも出來ない。誰いふとなく道を踏み違へたのではないかといふ、淡い不安が拂へども〳〵執拗に纏はる。

○月○日　ゐても立つてもをれない氣持だ。司令部への命令受領が待ち遠しい。事の成否は第一線挺進隊からまづ司令部へ通報があるからだ。

○月○日　十二時過ぎ傳令の彦坂近人軍曹（愛知縣渥美郡神戸村）ほか一名の兵が轉ぶやうに駈込んで來た。吉報だと直感する、軍曹は興奮にうはずつてゐる「報告！敵トラ重砲陣地の方角に當り○時○分爆音を聞き黑煙天に沖するを認むの報告あり。報告終り！」「オウやつたか」思はず體がブル〳〵ふるへる「オーイ、皆んな聞け、爆破成功らしいぞ」「やつたか〳〵」と興奮に沸き返る。南十字星が輝きはじめた。どうして今宵は眠れないのか。

○月○日　快晴「この具合だと案外いゝ報告があるかも知れないぞ」と張切つて出て行つた川口茂雄軍曹（清水市）が果して橫飛びになつて歸つて來た。快報の連續だ「報告！ルンガ飛行場方面に爆音とともに火焰のあがるを認む。終り！」「よくやつてくれた。この上は願はくばどうか無事であつてくれ」戰友の安否を氣遣つて、はるか空の彼方に合掌する餘い兵の姿もあつた。

○月○日「本日無事第一線部隊に到着所定の任務を完遂す傳令終り」挺身隊全員が第一線部隊に堂々生還したのだ。寢もやらず安否を氣遣つてゐた自分のところへこの傳令の叫びである「御苦勞さん」一刻も早くこのことを部隊長殿へと傳令兵を導く。

早くもそれと察せられた部隊長殿は寢床から列ね起き、傳令の報告を聞き終られるや「やあ、それはよかつた。それはよかつた」と、子供のやうに喜ぶ。そして自分を見られ「早速みんなに知らしてやるんだな……」と、言葉はやさしいが兩眼からは白いものが燭燭の光に浮彫されてゐた。

○月○日　部隊本部（寺澤隊還るの日、朝から今か〳〵と待ち倦びる十六時「おい來たぞ來たぞ」に默々と作業を續ける兵隊達がバラ〳〵と集つて來る。見まもれば生還を期せずと出發した同じ方向にまづ寺澤少尉の凱奏たる姿が、續いて一人、二人……五人隊に叩かれ、泥んこでつくられたズタ〳〵の戎衣、靴古に穿くせぬ勞苦が一目でわかる。少尉は「唯今還りました」と無量の感慨をこめて申告すれば同じ思ひの部隊長も「御苦勞、御苦勞、えらかつたらう。よくやつてくれた」と司令官から戴かれた羊羹を一切々々づゝ渡し「ゆつくり休むやうに……」と懇しく勞を勞はれる。

待ち構へた戰友達がやにはに走り寄り手をとり肩を叩いて「御苦勞さん」「よく還つて來た」と、相擁して男泣きに泣いて

ゐる。手ばなしでみんな聲をあげて泣いてゐるのだ。地上にこれ以上の感激があらうか。

○月○日　中澤隊還る。朝から何度もスコールに見舞はれる。二度と會へないと思つた戰友達に會へる「うんと綺麗になつておかうぜ……」とスコールに全身を洗はせる兵隊もある微笑しさだ。十八時、待ちに待つた一行が還つて來た。虎の子のやうにしてゐた罐詰や乾麵麭が五人の前に惜氣もなく投げ出される。一行のめざましい働きぶりを根掘り葉掘りたづねたい氣持は誰しも一緒だつたが、綿のやうに疲れた身體を一刻も早く休ませようと寢につかせると、十日間にわたる超人的努力は、疲れが一時に起つたであらう。間もなく高いびきに變つた。

これがつい先刻まで敵の心臓を寒からしめた兵隊の姿とはどうしても思へない。安らかな寢顔である。

○月○日　感激の夜は明けた。早くも土產話を聞かうと各隊員の宿舍に戰友の突擊がはじまつた。甘い物など全くないこゝ最前線では、手を握り肩を叩くくらゐが最上の慰勞の表現である。あちこちの圓陣から期せずして爆笑が湧る。

○月○日　挺身隊のこの一擧が如何に全米軍の心臓を寒からしめたか、があれほど熾烈を極めた敵銃砲火がけふは朝から氣息奄々だが、兵隊は彈の音が聞えないと何だかものの寂しい」由里は松の音のみ聞き馴れて風吹かぬ日は淋しかりけり」の蓮月尼の歌がふと思ひ出され思はず微笑する。敵陣營の沈默にひきかへて友軍の士氣はいやが上にも奮ひたつた。

○月○日　あと二三日で樂しい正月だ。內地の正月のやうに別にこれといふ準備はないが、それでもやはり氣忙しい。

一月一日　南海の涯で昭和十八年の元旦を迎へた。心にかゝる雲もない、何といふおほらかな朝ぼらけだ。お年玉は一人當り煙草三本、榮養食一粒、砂糖五グラム、鯨か鰯の罐詰四百五十グラム一個のほかに中澤挺身隊武勳の土產物の罐詰や乾麵麭が分配され、ルーズヴェルト給與の正月も乙だ……と、米英を一息で吹き飛ばす爆笑が湧く。八時全員整列、はるかに　宮城を拜し聖壽の萬歲を奉唱、心ばかりの酒で乾杯し今年こそ敵擊滅の決意を新たにした。

盡忠・還らぬ大野挺身隊

陸軍報道班員　森川賢司記（一八・八・七　朝日新聞掲載）

八月七日は緒戰の相次ぐ敗戰の混亂から脫し、やうやく陣容を建直したアメリカが、その精鋭を誇る海兵隊をガダルカナル島に揚陸せしめ、對日反攻の第一歩を踏み出してより滿一年の銘記すべき日である。先に寺澤、中澤兩挺身隊の壯擧が報ぜられたが、今回明らかにされた大野中尉以下三名より成る大野挺身隊が、敢然敵司令部の眞つ唯中に突入し、これを潰亂せしめ、つひに壯烈な戰死をとげた鬼神を哭かしむる勇壯無比なる行動は、まさに戰史不滅の光を放つものであり、ガ島戰場の華と謳はれるものである。

大野挺身隊

岐阜縣惠那郡中津町駒場字崎
隊長　陸軍中尉　大野廣志
靜岡縣濱名郡神久呂村神ケ谷
陸軍伍長　井島佐千雄
愛知縣碧海郡安城町里ノ池
陸軍上等兵　杉山勝次

決死敵地突入

アメリカ軍の暴虐にいつも鬱がみして憤激してゐた大野中尉は、ガダルカナル島における中澤、寺澤挺身隊のことを耳にするや、ゐても立つてもをられず「日本軍人として最大の痛快事だ。敵の司令部邊りに飛込んで、敵の司令官を叩き斬つたら、この溜飲がぐつとさがるだらう」と熱烈な志願をした。「大野を長とする挺身隊をぜひ命令して下さい」中尉は部隊長に願願した。部隊長は中尉の熱烈なこの軍人精神に胸打たれたが、どうすることもできなかつた。「第一回挺身隊はすでに決定したのであるから、第二回を待つやうに」と慰められ、また勵まされて中尉は殘念だつたが劍を撫して次回を待つ。

壯擧に參加を祈る

「日本軍人としてこの壯擧に參加しなければ男子と生れた甲斐がない」中尉は是非命令が自分にくるやうにと毎日神に祈つてゐた。中尉の兵科は步兵で、司令部で勤務してをり、劍道は三段の猛者で、劍の鋭さと素早さは同僚の感嘆の的であつた。敵の空爆と艦砲射擊は日增しに激烈になり、彼ら

の幾度性は日とともにその野獣性を發揮した。「畜生ッ、米兵ッ」双片つぱしから叫き斬つてやる」中尉は自信あるだけに腕は唸り、軍刀は夜泣きした。

十二月二十一日……陸軍中尉大野廣志以下三名はルンガ河三角洲にある敵の高等司令部を奇襲し、重要軍事物件を破壊すべし……といふ命令が中尉の手に渡された。中尉の喜びはどんなであつたらう。

「神は自分の心情を憐れみ給ひ、この命令をお下し賜はれた。有難や、有難や」

彼は泣いて神に感謝し、自分の幸福を感ずるとともにその成功を誓つたのである。

部下井島伍長と杉山上等兵は、寺澤挺身隊の出身隊である岩淵部隊の齋藤隊から選拔された下士官と兵であつた。

三人三様の性格

大野中尉は歩兵科で司令部勤務特樣であるが、剛直の達人で豪膽無比、烈々たる氣慨の持主である。井島伍長は常に明朗な下士官で、上下の信頼も厚く、責任觀念の旺盛な、そして沈着豪膽な男であつた。また杉山上等兵はむつゝり屋で、一日でも二日でも無駄な口はきかぬといふ性質であつたが、仕事は非常に實直で、一度與へられたものは、どんなむつかしいことでもきつとやり通すといふ意思の强固な兵隊であつた。三人ともその性格が、一風變つてゐたが、いろ〳〵打合せのため三日間いつしよに起居してゐた。その間三人は十年の知己のごとき親密さになつたのには驚いた。

「もちろん井島にしろ杉山にしろ、隊長である自分が選拔した優秀な下士官と兵であるから間違ひのあるべきはずがない。當時井島は二十三歳、杉山は二十五歳であつた」齋藤隊長は當時のことをかう話してゐた。

無上の光榮に感激した中尉は兵團長に申告した。「隊員勞ぢや、しつかりたのむぞ」兵團長は笑つて死地へ飛び込む部下の顔を眺めて激勵した。中尉、寺澤挺身隊といひ敢然と死地へ飛び込み、死すること歸するがごとき感をもつてゐる日本兵の强さは測りしれない。「儂はよい部下をもつて幸福だ」兵團長は心の中で部下を褒め感謝してゐた。やがて兵團長手づから恩賜の御酒と煙草を贈つた。無窮の　皇恩に感泣した中尉は「誓つて、誓つて　聖恩に報じ奉ります」と誓つたのであつた。

壕で壯途への會食

二十四日夜戰友達の奔走で、中尉の壯途を祝する會食を暗い壕内で開いた。敵彈の炸裂する音は物凄い。「大野中尉、念願が叶つて嬉しいだらうな」と部隊長は中尉の肩を叩いて笑つた。軍人としてこんな名譽なことはありません」

「敵の警戒はます〳〵嚴重になつてゐるらしい、十分なる警戒心を發揮して突入しなければならない」「成功を祈るぞ」「大野しつかりやつて來い」例の夜泣きする寶刀で快刀亂麻の勇を揮つて來い」

同僚はそれ〴〵激勵の言葉を與へた。中尉は終始莞々として微笑みをうかべてゐた。あけて二十五日八時、一同に送られて

中尉は露營地を出發した。その際一通の手紙を部隊長の手に殘して行つた。封筒の表には〝閣下各位〟と書き、裏面に〝十二月二十五日出發に際し大野廣志〟と書いてあり、內部の便箋には「閣下初メ各位、大野中尉ニヨキ死場所ヲ與ヘラレ、感謝シ喜ンデ死ンデユキマス。必死必成誓ッテ、榮譽ヲ安ンジ奉リマス。長期間ニ亘ル御指導御鞭撻ヲ感謝シ厚ク御禮申上ゲマス」

と書翰筆で走り書きをしてゐた。そして「部隊長殿、決行の豫定は一月六日の夜半であります」と自信あり げに咬いて行つた。大野挺身隊の成功疑ひなしと誰もが思つてゐたし、さう念じてゐた。齋藤隊では井島伍長と杉山上等兵が帶劍、拳銃を身につけて支度をなし、爆薬、黃色藥、手榴彈、鐵條網、鋸、鉈、手袋など、萬端の準備を整へて待つてゐた。「大野挺身隊萬歲ッ」「成功を祈ります」中尉は岩淵部隊長に、

「一月六日夜半決行、十五日ごろ歸る豫定であります」

と豫定日取を報告し、部下を借りたことを感謝した。一行は岩淵部隊全員に送られて丸山街道をアウステン山に向つて、飛燕彈雨の中の悪道を進んだ。そしてアウステン山の北麓に陣地を占領し、敵の背後を窺んでゐる稻垣部隊に到着した。

稻垣部隊の善戰

稻垣部隊の前面には敵が三、四百、陣地を占領して日夜激戰を繰返してゐる時であつた。稻垣部隊は當時糧食缺乏し、彈藥は日に〳〵不足を告げるといふ有樣で、兵隊達はあらゆる困苦を忍び、隊長を中心に一丸となつて戰つてゐる時であつた。部隊長は中尉に敵情、地形など詳細に說明し、

「前面から突入することが目下のところ容易なことでない。それより斷崖絕壁を進む道は非常に困難ではあるがルンガ河に沿うて突入する方がよいかと思はれる」と結んだ。その夜中尉は地圖を膝に浮べて進むべき道を考へた。明けて十二月二十七日四時三十分、稻垣部隊に別れを告げて、畫なほ暗いジャングル地帶へ飛込んだ。

その後の挺身隊

その後大野挺身隊の消息は杳として絕えた。嘗これ全身の大野中尉はどうしたらう。工兵として爆破に任じた井島伍長や杉山上等兵はどうしたらう。その成否を確認することが出來ないけれども、山本軍醫大佐は

「一月六日夜半ルンガ河三角洲邊りに凄々たる二條の黑煙が立ち昇り、紅蓮の焰さへ見え、ルンガ河方面の敵の砲は一時鳴りを潛めた」

と話した。またわが陣地でも「一月六日の夜半、ルンガ河下流に當つて二條の黑煙をはつきりみた」と報告してゐる。

この烈々たる氣魄

われ〳〵は大野中尉が出發の際、一月六日夜半決行する豫定であるといふ言葉から目的を達したものであると信じなければならない。われ〳〵は大野中尉の熱ゆるやう

な愛國心と、敵を撃たずんば止まずといふ烈々たる氣魄とを想像する時、必ずや任務を決行したものと思はれる。またわれ〳〵は蔓に傳はつて斷崖を攀ぢ登り、あるひは藤蔓に縋つて千仞の谷底へ下り、あるひは曲りくねつたルンガ河を幾度か横ぎり、あるひは千古斧鉞を知らぬジャングル内を伐り開き伐り開き、時には敵の斥候と遭遇しそれを一刀兩斷のもとに叩き斬りながら、北へ〳〵と進む大野挺身隊を想像することが出來る。

挺身隊は一月六日敵司令部に潜入、その夜井島伍長と杉山上等兵とが手分けして二ヶ所を爆破し、敵の司令官はじめ幕僚連中のうろたへ騒ぐ中へ「おのれッ、恨みかさなる米兵奴ッ、日本刀の斬れ味を見ろッ、戰友の仇だッ」と、あるひは袈裟がけに、あるひは唐竹割に、血刀揮つて阿修羅のごとく暴れ廻る大野中尉の姿が髣髴として浮んで來る。

私のこの想像はおそらく、あたらずとも遠からずであると信じて疑はない。すでに警戒嚴重な敵地へ突入するだけでも人間わざでなく神である。およそ神國に生を享け死生を超越して、ひたすら君のため國のため、人事を盡くすとき天佑神助がないと誰がいへよう。

大野挺身隊は必ずや天佑神助をうけて目的を達してゐる。ルンガ河下流敵の高等司令部あたりに二條の黑煙があがつたといふことは、これを裏書するものであらう。大野中尉の豪膽、井島伍長の沈着、杉山上等兵の眞面目から推しても、われ〳〵は斷じて疑はない。

米軍の氣狂ひ放送

大野挺身隊の三勇士が、肅々として味方の陣地を去つてから、その行衛は杳として知れなくなつて了つた。

敵の本部へ僅か三名で斬り込むと言つて出て行つたものゝ、果して其の壯志を遂げ得たであらうか。——長い間の饑乏した陣中生活、日に夜を次ぐ激戰に疲れ果てた身、これが尋常なら我が身一つを動かし得るのが精々であらう。この上はよく敵の第一線に肉薄し得ても偉とすべきである。

かうした悪念の中に、大野挺身隊の消息は敵陣の中に杜絶えて、友軍苦戰の日は徒らに經つて行つた。その挺隊の戰友達も打續く血戰死闘の彼等挺身隊のことを忘れるともなく忘れてゐた。

某日、我が軍は次の如き米軍内のラジオ放送を傍受したのである。

○月○日夜、某部隊本部の宿舍に何を血迷つたのか、日本軍の氣狂ひ兵が三名飛び込んで來た。何分狹い室内のことで、拳銃を發射すれば味方同志傷つけることになるので、目前に味方の者が斬り殺されるのを見ても手の下し様がなかつた。ところが、味方の一士官が咄嗟に「窓より逃げろ！」と叫び、居合せた者全部身を以つて遁れたので、やうやく難を防ぎ、到頭この氣狂ひ兵共を自滅させることが出來た。この場合、一士官の號令は、實に機宜を得たものであり、最大の賞讃に價するものである。

と、米軍の放送員は誇らかに、この一士官の機智を全軍に放送したのである。窓より

逃げろ——戰場に出て敵に刃を擬せられた者が、よく吐き得る號令であらうか。この米國流の機智に富んだ一號令が叫ばれるまで、三勇士の獅子奮迅の凄じさに呆然なすところを知らなかつた米兵の狼狽振りが、目に見えるやうであり、また笑止の極ではないか。

この放送に於ける月日、場所から考へて米軍放送員の謂ふ所の氣狂ひ兵は、大野挺身隊の勇士達なのである。壯絶鬼神を泣かしむる大野挺身隊の決闘の詳細は本文によられたい。同挺身隊の絶倫の仕業は米兵共には、常人でなく氣狂ひとよりほか考へられなかつたのであらう。それほどの勇猛さであつたことを傳へたく、この米軍放送譚を掲出した次第である。

ガ島死守・銃を握り起上る病兵

佐々木挺身隊長談（一八・七・六　帝日新聞掲載）

寒害と凄烈な氣候の自然の忍苦から育まれた東北健兒、わけても冑葉健兒の精強さは、瘴癘の孤島ガダルカナルに半歲に亘つてよく皇軍必勝の眞價を發揮したのであつた。血をもつて敵大軍を一點に引きつけ、南太平洋皇軍磐石の布陣をなしめた偉大な使命を完遂した冑葉健兒。その壯烈なる血戰の模様を、いまだ報道されなかつた冑葉挺身支隊佐々木部隊長に聽くことを得た。

われ〳〵は先遣隊となつて本隊に先行、ルンガ河の敵陣地掌制の目的をもつて敵艦の出沒するなかを深夜エスペランス岬附近から强行上陸を敢行したのである。名も知らぬ身の丈以上もある南海の孤島特有の雜草地帶を、海岸沿ひに增强されつゝあつたルンガの敵陣へ進擊を續けたのである。敵機は或は高く、或はジャングルの樹上すれ〳〵に、夜となく晝となくわれ〳〵の一兵をも逸さじとつけ狙つてゐるのである。從つて晝間は殆ど行動せず、薄暮を利して雜草をふみわけ鼎進を續け、十五里を何日かの行軍によつて、九月十三日マタニカウ河に達し、そこを渡河し、しばらく前進するや、翌十四日早朝遂にガレゴ北麓で敵機銃陣地にぶつかつた。敵は椰子林の山麓に我と五十米の近距離に陣取つて、めくら射ちに我が方へ亂射を始め、敵機もバッフアロ

ー、四發のボーイングなど、終日我がもの顔に我々の上空をキーンと爆音をたてゝ飛び廻つた。味方は平地の椰子林に

急造の壕で應戰

した。我が方も重機部隊でお互が重機關銃の決戰をやつたわけである。この日の戰鬪はわが青葉支隊としては初め戰鬪で、どのやうな働きが出來るかと、兵隊たちの試しともなつた。應召の下士官で小野寺龍（宮城縣栗原郡澤邊村姉崎）といふ軍曹があつたが、これは實に沈着勇敢で、敵が頭を一寸もあげられぬほど亂射亂撃のなかに、瞬間彈倉を換へる機を狙つてダツ〳〵〳〵……と猛射を浴びせ、前後數回の射撃で敵數十をたふし、大戰果をあげた。

この正確沈着な射撃には敵もへこたれたと見え、今度は迫撃砲や十五糎の應援射撃を加へて來たが、我が方はこれで初めてわが歴戰の青葉健兒の精強さを先づ十分敵に見せ、重機戰は自分らの勝利となり、幸先よしと前後十四時間にわたる最初のガ島戰に、青葉部隊の意氣を大いに示したのである。

このころ敵は數隻の驅逐艦をルンガ沖に游弋させ、盛んに我が陣隊に艦砲射撃を食はせ、うるさくて仕方がなかつた。さうして歩行の斥候の報告で、敵は後續の別なく戰車をはじめ重火砲兵器、および兵員を續々上陸させてゐるのであつた。敵機はこのルンガの背後の山嶺の飛行場から盛んに戰鬪機を飛ばして、上陸掩護と我が軍の妨害に狂奔してゐたのである。キーンといふ金屬的な澄んだ音がすると、兵隊たちは「なか〳〵元氣に來やがるなア」と、しやくに障つた口ぶりで戰友に話してゐる。十數メートルの椰子のジャングルの中であるから、敵機は樹と葉との間に瞬間的にしか見えない。爆音で敵機を聞きわけて喜んだり、むかつ腹を立てゝゐるのである。こんな風に敵機のうるさく飛び交ふのに「この野郎！　畜生め」と憎憎してゐる時、突然遠くで底力のある「ドドド……」といふ音がして來ると、

「おや？　オイ貴樣、耳をピンと立てゝ見い、それ聞えるだらう。あれだ！　あれだ!!　友軍機ぢやよ！」

と、おあてゝ壕から飛び出し、ほうーれ見ろ、あれだ〳〵」と連呼しながら空を仰いで、時々かすかにキラリ〳〵と光る機影に滿身の歡喜をぶちまけるのである。かうなると、もう

殆ど糧食不足で

榮養不良になり、動くのも嫌だといふ兵隊が「なんだ」とむつくり起き上り、壕から出て友軍機を見ようとするのである。敵機はたつた一機の日本機が現れても、あわてゝ一齊にルンガの飛行場を飛び立ち、殆ど死の大小無數の小島へ飛翔退避するのだ。それだからこの時を利用して友軍は初めて、伸び〳〵とするのだ。

我が軍の飛行機の優秀さは敵機とまつたく比べものにならなかつた。「ホラ見ろ、どうだ、速いだらう」瞬間椰子の葉蔭を飛び去る友軍機に、兵隊たちの喜びは爆發する。まつたく壞滅するのは敵機ばかりだつた。

ガレゴ北麓の戰鬪後、任務を達成し本隊も上陸したので後退し、マタニカウ河の西岸に陣地を布き敵襲を正面から防ぎ、本部

隊の側面防禦に任じた。敵は盛んにこの陣地に迫撃砲と十五糎をふんだんにぶち込んで、攻勢に出ようと盛んにあせつてゐた。この時われ〳〵のゐた河口の海岸沖合に敵四發のボーイング一機が不時着、機體は海底に沒したが將校以下六名の乘員が、そろつて救命袋で部隊の守備する海岸へ上陸して來たので、直ちに捕虜として取調べた。彼らはハワイから軍艦に守られて飛石傳ひに南下ガ島にやつて來たといふ。少尉の將校捕虜の足を見ると、何とスリツパを穿いてゐる。「きさま、それは何だ!!」と聞くと、爆撃は日課になつてゐるが、友軍に急襲され、あわてゝ休憩室から飛び出し、機を操縦して退避したまではよかつたが、ガソリンが十分積んでなかつたため、基地にもどらうとするところで不時着したのだといふ。まつたく戰ふといふ意思はなく、命があぶなくなれば手を揚げればいゝ。それで任務は足りたと考へてゐる。〃死〃を殆ど考へない兵隊なのである。「出ろ」といはれゝば出て爆撃し、あとは何をして遊んでもいゝといふ式なのである。

マタニカウ河の陣地戰は二旬近くに亘つたが、こゝから敵の飛行場が見えた。われ〳〵が見たときはボーイング四發は一機ゐたきりで、後は戰鬪機である。時々敵はジャングルを縫つて割合勇敢に爆撃して來るが、これを知るや、すでに十日以上も壕に入つたきりで、食べるものといへば草の根ばかり食つて、口をきくのも嫌だといふ疲勞し切つた、骨と皮の裸の兵隊までがだまりこくつて銃を持ちひよろ〳〵と起き上り、敵に突き込む委勢をするのだ。然しとても戰鬪に參加できないのだが、それが「殘念だ」と云ふやうな眼つきをする。「畜生、われ〳〵郷土の兵隊たちをこんな目によくもしたな」と比較的元氣な兵隊たちがバタ〳〵と、牛蒡劍たつた一つを武器として突込んで行くのだ。すると敵の奴六尺豐かな軀をして「ヒーヒー」と

異樣な泣き聲を

立てゝ逃げ廻る。〃青葉健兒の意氣を見たかッ!!〃十日間草を食つても、魂の牛蒡劍は六尺男の大山猿を一四々々やつゝけて行くのだ。榮養不良は殆どの兵隊で、マラリアに罹らない兵隊はないくらゐであつたが、青葉健兒といふ誇りが最後まで士氣をにぶらせなかつたのだ。

連絡の兵隊にAといふのがゐたが、無數にあたりかまはず落下する敵砲彈の中を十數回往復し、いつもにこ〳〵と、ハキ〳〵したロをきく愉快な兵隊で、これが本部隊との連絡に最高の記録を示した。

事實上敵彈がダーン〳〵と雜草をふき飛ばし、砂煙をあげてゐるなかを、のんびりとはどうしても歩けるものではないが、この兵隊（宮城縣出身）は、自分らの前の河へ部隊本部の水を汲みに平氣で、この彈のなかをやつてくる。或時は「ガチヤ〳〵」と異樣な雜音がするので見ると、例の兵隊が十二、三の水筒を縱横にかけてゆつくりと歩いて來るのだ。東北健兒の強さが今さらのやうに考へられるのである。

倒れて、なほ魂の進撃

同盟特派員（一八・四・一三　中部日本新聞掲載）

「わが國は神國なればこの戰必ず勝つと勵まし合へり」人類の宿敵アメリカが制空、制海權を欲に物いはせて、ソロモン群島の一角ガダルカナル島を掌握してより、惡逆非道の限りを忠烈な皇軍將兵に加へたのであつたが、寡兵よく攻擊に次ぐ攻擊をもつて半歲にわたつて難鬪苦戰しつゝも、烈々たる皇軍將兵の戰鬪力は毫も鈍ることなく、かへつて必勝の信念と鬪魂は沸々と滾り、期せずして冒頭の歌に凝固したのだ。ガ島上陸部隊は誰彼の別なくすべてが神兵の如く行動した。中でも唯一の戰車隊として上陸當初から犧牲的精神を遺憾なく發揮し、戰車兵の本領を全うした前田戰車隊の數々の武勳が、このほど○○に到着した隊長原田中尉によつて明らかにされた。

率先垂範の前田大尉

「緒戰必勝敬上慈下」を座右の銘とし、海ゆかば、山ゆかばの萬葉古歌の精神を常日頃部下への精神訓育の糧となし、上下渾然一體の鐵獅子部隊を率ゐ、昨年○月○日ガダルカナル島に上陸した前田大尉は、日頃の敎へそのまゝを率先垂範して、昭和十七年十月二十三日のルンガ飛行場による敵陣地總攻擊の際、マタニカウ河畔において友軍歩兵を渡河進擊さすべく、一身に敵銃砲火を集めて同河を眞紅に染め、壯烈な戰死を遂げた。

その前日、前田大尉は○隊長として部下の鐵獅子群を率ゐ、ルンガ飛行場西側を流れるマタニカウ河畔の線に進出、對岸に砲列を布く敵陣地攻擊の命を受けたが、この間各隊との連絡時間が極めて少く、刺へ敵機は雲霞の如く頭上を舞ひ、砲擊も熾烈でともすれば連絡不能に陷りがちだつた。いよ〳〵翌二十三日總攻擊の命が一度下るや敢然としてその任につき、午後二時過ぎ漸く敵の打ちまくる砲擊が盛んとなり、歩兵○隊の友軍前進が困難となつて行く情勢を目擊するや、逸早く部下の鐵獅子隊に攻擊前進命令を下した。隱蔽するジャングルとてない極めて不利な地形の砂上を、前田○隊長車を先頭にカタビラの轟音も凄じく、マタニカウ河口の敵陣目がけて前進を敢行した。午後四時近くになると漸く黄昏の長い島には夜の帳りが下り始め、彼我の火砲が薄暮の邊り一帶を全く修羅場と化した。

この時敵の對戰車砲はじめ海上近く碇泊の敵驅逐艦からの艦砲射擊を浴び、敵砲火は悉く前田戰車隊に集中して來た。これぞ思ふ壺であると莞爾としたのは一人前田隊長ばかりではなかつた。隊長は全火力を擧げて對岸敵陣地目がけ猛射を浴びせかけた。この間友軍歩兵はマタニカウ河畔まで進出、漸く攻擊態勢が整ふや再び敵の銃砲擊集中して、戰鬪は苦況に陷つて來た。擱坐した友軍の戰車も出て來た。○隊長の山路見習士官車も擱坐したため隊長車に移乘して來た。

マタニカウ河は河巾約五十メートル、水深二メートル、渡河には絶好の地點だつたが、夜間に入つては地形いよ〳〵困難を加へ、砂上での行動容易ならず、しかも敵火力は激しくなつた。今は一刻も猶豫はできない。隊長の腦裡を去來するものは、こゝで全戰車をもつて强行渡河を決行し、歩兵を對岸に進出するの措置を講じなければ成功し得ずといふことだつた。心中深く決する所あつた前田隊長は、同夜六時を期し敵彈の熾烈な眞只中にそれ〴〵命を下し、隊長車まづ先頭を切つて渡河敵陣の一角を蹂躪し、思ふ存分敵兵を蹴散らした。この時敵砲彈を眞正面から胸部に受けた隊長は、しばし戰鬪室に昏倒してゐたが、再び立上つて戰鬪指揮を續行した。その後飛來した砲彈はまたも隊長に命中遂に擱坐した。隊長は致命的な深傷を受け、最後の指揮を原田○隊長に命じて、同夜八時三十分遥かに宮城を拜し、從容として死についた。前田隊長の遺骸を身をもつて守るべく、隊長車を離れた山路見習士官は、連絡を原田○隊長車に送ると、隊長の遺骸を戰車から壕に移し守り續けたが、同見習士官も不幸にして敵彈を受け、折り重なるやうにして壯烈な戰死を遂げたのであつた。

遺書天晴れ茂木軍曹

第○回少年戰車兵出身の茂木軍曹は、十月二十日敵前百メートルにおける敵狀偵察を命ぜられると、○隊長車の砲手として晝間堂々と敵基地に乘り込み偵察中、敵砲彈を眞向から受けて砲塔は破壞され、頭部に破片を受け負傷したが、聊かも怯むところなく、砲か壞れるまで打ちまくり任務を遂行した。基地に歸つてからも、攻擊の日までに戰車を修理しようと、文字通り不眠不休で修理を急いだが、一週間もかゝつて完成したといふので、日頃の無口に似あはずそれを殘念がつてゐた。

その後新春早々海岸警備の任を帶びて敵前百メートルの地點に迫つた際、敵掩護壕から射ちまくる三十ミリの機關砲の一齊射擊の的となつて、砲塔に○發の直擊彈を受けると同時に、海上からの艦砲射擊を浴びて壯烈な戰死を遂げた。生前の茂木軍曹の覺悟のほどは三枚の便箋に細々としたためられた遺書によつてもはつきり判るが、起居を共にしてゐた中林准尉は遺書を前に次の如く語つた。

「茂木軍曹は平常無口で、不言實行の模範的な若い士官だつた。戰死する前日なども、十里餘先の○○まで食糧を運び、その際自分の分を一日二合にへらし、そ

の殘餘の分まで前線部隊に運搬してゆくといふ、責任感の極めて强い男だつた。しかも當時マラリアに罹つてゐたからその勞苦も察するに餘りがある。茂木は砲手だつたが、輸送船の中でも絶えず砲の手入れに餘念なく、戰車を愛すること肉身に接するやうな態度だつた」

茂木軍曹遺書（全文）海ゆかばみづく屍山ゆかば草むす屍大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ。大伴家持の有名な古歌の如く、武人として戰車に死する本懷これに過ぎず。われは軍人なり、國家防衛のためには一死何かあらん。死をもつて大君の寶に死するを喜びとす。大東亞建設の一礎石としてこゝに散る。父母、兄弟、姉、肉親一同喜んで下さい。微力たりとも大君のために國のために役に立つたと思ひます。喜んで死にます。思ひ殘すことは更にありません。黒師大尉伊藤喜久殿、同中尉伊藤博邦殿、われは第〇期少年戰車兵と共に死にます。入校以來君恩膽に命じ、必ず國師を辱しめず、少年戰車兵を辱しめず、死してもつて篤恩に應へ奉ります。

父母、祖母へ

大東亞建設に死にます。生前の孝養一つ出來ず、心配ばかりかけ申したゞ殘念に思ひます。祖母よ、父母よ喜んで死にます。私のやうな者でも立派に國のために死ねますのは、軍人なればこそであります。悲しみ給ふな、喜んで下さい。

最後迄操縱桿離さず

前田鐵鄉子線の攻撃に從つて、車長渡邊軍曹の戰車に同乘した操縱手田村軍曹は、十月二十三日夜マタニカウ河口渡河直前敵の熾烈な銃砲火の下を巧みに潜けつゝ、前進に次ぐ前進を續けてゐたが、敵の猛射の一彈は不幸にして田村軍曹の胸部を貫き、遂に操縱不能に陥つたが、鬪魂火と燃える田村軍曹の不屈な精神は、操縱桿をしつかと握つて離さず、體て再び鐵鄉子は前進して行つた。これを見てゐた渡邊軍曹は「お前は重傷の身だから操縱手を交代せよ」と命じたけれど、田村軍曹は頑として操縱桿を離さず、「大丈夫です」と連呼しつゝ突進した。最早精神力だけが田村軍曹を操縱させてゆくのであらう。再三にわたる渡邊軍曹の奬めを退けて、雨と降る敵砲彈の中を雄叫を立てつゝ驀進を續けた。そのうち田村軍曹は「目が見えなくなつたから誘導せよ」と渡邊軍曹に叫び續けるのだつた。「後退せよ」「誘導せよ」の押問答が彼我飛彈の中に續いたが、渡邊軍曹も意を決したのか戰車からひらり飛び下りると、操縱桿を握る田村軍曹を誘導しはじめ、マタニカウ河口寸前まで來た時、飛來した敵艦砲射撃の砲彈は渡邊軍曹の右腕と足とを傷つけ、つひに同軍曹は名譽の戰死を遂げた。田村軍曹は最早やこれまでと、單獨で河口を强行渡河し、敵陣に肉薄してこれを擊碎してのち、遂に操縱手を交代したのだつた。

ガ島補給部隊の勞苦

西藤准尉談（一八・四・八　朝日新聞掲載）

組國を遠く距ること三千四百浬、血でぬられた南太平洋ソロモン群島の一角、ガダルカナル島から次期作戰計畫樹立とともに、鮮かな傳統に奉功した藍には、昨年八月上旬の果敢な上陸から今次轉進まで、終始上陸部隊に影の形のやうに附添ひ、最前線將兵と同樣困苦をともにしたわが工兵魂の權化松山部隊の文字通り鬼神も哭く決死の動があるが、わづか〇トンの舟艇を利して〇〇から庭園を組み、ガダルカナル島を目ざして食糧、彈藥、兵を滿載し、晝間は敵ボーイング、潜水艦の眼をかすめるため南海の孤島に身を潜め、夜間海圖も羅針盤もなく、わづかに風とうねりと星を頼りに沈着豪膽、大規模な海上機動戰を敢行、わづか〇日にして幾多の貴い犧牲を拂ひつゝ任務を遂行した兵隊も數多くある。なかでも西藤准尉はガ島作戰の開始された當初から、今年の二月八日まで基地〇〇とガ島間を幾往復となく海上機動をつゞけた海の勇士である。その西藤准尉に第一回海上機動の苦心談を聽く。

〇月〇日　二十時〇〇で艦送船團から離れた自分以下〇〇名は、汽艇〇隻の配屬を命ぜられ、他の汽艇とともに豪雨のなかを漂泊中の本船から二時間で人員、食糧、彈藥の搭載を濟ませた。

〇月〇日　〇時出發、この日は風も波も靜謐を極め、穏かな航行を十四時間つゞけて連絡すべき〇〇島沖に漂泊中の御用船二隻を發見、〇〇時到着した。この日は敵機影を見ず、こゝで舟艇を艤成仕直し、〇〇時に出發、〇〇島に向ふ。

〇月〇日　〇時無事〇〇島に到着した。正午ごろ敵のボーイング17一機が頭上をかすめさつたが發見されずに終つたやうだ。ジャングル内で食事をとり、夜間行動のために睡眠をとる。〇時〇分出發、やうやく風が出て三角波立騷ぎ、舟艇には海水が入り込み、總員が夜通し海水汲み出しに全力をあげた。波の飛沫で目が開けられないほどの風浪が、小艇を木の葉のやうに奔弄しつゞけ、終夜風速十米前後の風が吹きまくつた。

〇月〇日　〇時〇〇分島南岸中央の〇〇に到着。こゝも前日の〇〇同樣水際鬱茂り祕匿するのに絶好の入江だつた。敵一機頭上高く飛去る。二、三時間眠つて〇時〇分出發した。前夜よりもひどい風と波に遭ひ

それに加へて沛然と降りしきるスコールに幾度となく見舞はれた。

○月○日　夜半○○島に到着、しかしこゝは珊瑚礁のため近づき難く、西端に迂回して入江を探す。○時○分入江を發見し、こゝに全舟艇を集結した。○時ごろ敵ボーイング二機頭上を低く飛び、全員偽裝に非常な苦心をした。水際椰の無い代りに海岸に椰子林が密生してゐたので、椰子の葉をもつて舟艇を掩つた。作業中敵「空の要塞」が十三機飛來し、機銃掃射と爆撃を加へ舟艇二隻を喪つた。その後敵機は入代り立代り五、六機の編隊で前後九回にわたつて來襲し、○時ごろまで執拗に爆撃した。全舟艇中航行不能に陥つたのは○割程度で、搭載物件を移した。結局その日の○時に出發した。早くも一時間餘にして艇團を見失つてしまつた。出發の際隊長からいはれた針路「南十五度東」を念頭において、あとは風とうねりと、星を頼りに眞南に向けて走つた。豫定の航路では○時にガダルカナル島に到着するはずだつたが、その時刻になつても島影一つ見えず、針路を誤つたのではないかといふ不安が乘組員のなかから聞えてきた。すると三十分ばかり經つてからはるか風下に小さな舟が○○隻見えたのであるひは敵船ではないかと思つたが、近づくにつれ昨夜見失つた舟艇であることがわかり、一同ほつとした。しかもそれも束の間で、一時間にしてまたもこれを見失つてしまつた。そのとき敵機らしいものが二機はるか南の海面からやつて來るのが見えたが、なんのことはない鵰だつた。漁師仲間で古くからいひ傳へられた迷信に「遭難して鵰を見たら必ず助かる。鵰は金刀比羅さまの使者だ」といふことがあるのを思出し目的のガダルカナル島は必ず近くにあるといふ確信を得た。三十分ぐらゐでガ島が望見された。このときほどの嬉しさがまたとあらうか。終生忘れ難い思ひ出である。

間もなく敵二機が飛來して銃撃の雨を降らしたが、敵機の盲射ちは命中しなかつた。いまゝで曳航してゐた故障艇がやうやく直つて離れ〳〵になつたので、全速力でガ島目ざして走らせた。先着の舟艇に對して敵機が盲爆してゐる樣を目のあたり見ながら突込んだ。みると敵一機は舟艇から勇敢に射ちまくる高射機關銃に火を吐き撃墜され、敵操縦手が兩手を擧げて岸邊から自分らの方に向つてやつてくる。捕虜にしたものかどうかと考へる暇もなく、まづ搭載の物件を揚陸するためにカミンボー岬に向つて進み、無事揚陸し終へたのはその翌の○時だつた。

第三部　盡忠篇

ガ島盡忠錄

（中部日本新聞掲載）

ガ島戰の勇將佐野忠義中將を始め親泊中佐、精鋭を率ゐて陣頭指揮に任じた東海林俊成大佐、鬼塚義信大佐、松本昌次中佐、西山遼少佐等各部隊長の吐露せられた盡忠の大記錄を左に掲げ皇軍の武勳を偲ばう。

★佐野中將談

ガ島を殉忠の血に染めて不滅の殊勳を樹てた我が部隊は、私には血の繋りを持つてゐた。殊に東海林部隊は友人、知己の子弟が多く、土井部隊にもまた全くわが子のやうな愛情を持つてゐたのである。部下將兵も同樣に親のやうに慈つてくれてゐたと思ふ。我々の部隊は部隊長と部下といつた關係以上に、温く強い血のつながりに結ばれてゐたのである。壯烈無比鬼神も哭く惡戰苦鬪のうちに從容死地に突入し得たについては、この血の交流を一素因としてゐることも見逃せない。

私は兵團長として部隊の指揮に任じた當初から「立派な働きをさせたい、不名譽な汚名に唯一人でも傷けたくない」と念じつゞけて來たが、その甲斐あつてか、香港作戰、ジヤワ、スマトラの作戰と轉戰の間、士氣大いに奮ひ感狀を授與されるの武勳を樹てることができた。その間部隊將兵相互の信賴と戰友愛は益々强化された。

かくていよ／＼ソロモンに轉進することになり、兵團全員が同じ船團に起居を共にしつゝ作戰目的地に向つたのであつた。ガ島上陸には東海林部隊は先陣して上陸作戰を行ひ、ガ島の敵飛行場西南に突入し、鐵條網を破り、迫擊砲その他の敵火器を始め、敵將校の拳銃までも鹵獲するの勇戰を示したのであつた。この攻擊は全般の作戰指導の關係から中止せしめられ、兵團司令部以下の上陸までの長期間、東海林部隊は孤立奮戰を續けたのであつた。

兵團主力と連絡がつくまでの東海林部隊の苦心は正に言語に絶するものがあつたと思ふ。原始の密林を縫え、道もない山河を馬もなく、重い砲を肩にして渡るなどの萬難を精神力をもつて征服しつゝ戰ひぬいたのであつた。しかも最後まで軍紀嚴正、士氣旺盛であつたことは部隊の優秀性を示し、感服の外何ものもないのであつた。全く疲勞困憊しつゝもがんばり通したのであつたが、最後まで銃を離さず、武器を守り疲勞の極辛うじて歩行できる兵が上官に會へば直立不動の敬禮を忘れず、また朝毎には平素は話もできぬ程に精根盡きた兵が宮城を遙拜し、軍人勅諭の捧讀を續けるなど軍紀と士氣は毫も衰へず、却つて益々昂揚し、團結は强化するのであつた。

兵團參謀長の當番兵某が非常に元氣がな

くなつたので調べてみると、某は東海林部隊のもので、自分に與へられる糧食の全部を疲勞した戰友に與へその回復を祈り、三日間一食もしないでゐたとか、また東海林部隊が兵團司令部に到着したとき、司令部全員多くもない糧食を節約して東海林部隊に分ち與へたなどは、部隊將兵相互の親愛を語る美しい陣中禪話である。

以 上は例を東海林部隊にとつたまでゝ○○作戰で孫勳を樹てゝ勇名を謳かし、ガ島後半の勇猛部隊たる土井部隊、田中、岩淵部隊その他麾下にあつた兵團各部隊に共通の兵團精神で、各方面軍司令官の激賞するところであつたためである。

この軍紀と團結の下に戰はれたガ島血戰の殊勳は、將兵一體となつた崇高な精神力に基くものである。日本魂と郷土の歴史に培はれたものである。大東亞戰爭の重大性に對する自覺と、更にペルリ來寇以來その祖父母が、そして父母が、米英の横暴にたぎらせた「米鬼討つべし」の痛憤によるものである。この精神の發揮されるところまさに生命などは稼めて輕い。生きることなど念頭にない。如何にして最後までがんばり、任務を達成するかゞ全部隊を支配してゐたのである。「最後まで生き殘つて任務を遂行せよ」と常に訓戒しつゞけて來たがその言葉通り、幾度も踏み込む死地に、死よりなほ困難な活路を求めつゝ敵を打倒することこそ部隊全員の願ひであつた。これは死以上の見々たる忠誠心の發揮である。

兵 達がどんな氣持で戰死して行つたか、また第一線に殘した舊部下の勇戰を思ふとき、心は常に南方に飛んで苛烈な激戰場の苦闘が偲ばれ、私は　皇國完勝の大乘的な見地から、戰死した部下の心をそのまゝ敵撃滅に最後まで戰ひぬく覺悟でゐる。

ガ島もアツツ島もそして現在の第一線も等しく將兵の必要とするものは、優秀な兵器、殊に飛行機の質、量に亘る優勢である。飛行機を一臺でも多く前線に送つて絶對的優位に立つて、一擧敵陣を潰滅せしめねばならない。政府は必勝の國内態勢強化を發表し常に率先挺進を續けてゐる。これに呼應して一億國民は、半分の時間をもつて數倍のものを増産する覺悟――これは第一線將兵の喜兵よく大敵を撃滅する必勝精神であるが、――に徹し戰局の樣相と前線の必勝精神を學んで戰域奉公を期されたい。必勝を誓ふことが、私の責任であると信じてゐる。

★親泊中佐談

○○健兒の精鋭を滿載した船團は、十七年の初秋頃南方○○基地を出發した。海軍と航空部隊との緊密な協力があつたこともちろんである。まづ航空部隊で敵の補給線をねらひ、敵輸送船團に大損害を與へ、○○に銘記され、讃仰されねばならない。

○○健兒の精鋭を滿載した船團は、目的地に上陸作戰を敢行し、後方友軍部隊の作戰が完成するまで孤獨と飢餓を克服しつゝ持久作戰を戰ひぬき、それからあの悲壯なる轉進作戰を行つたのである。

こ のガ島における戰ひと、いまゝでの戰ひを比べてみて、ガ島戰の特色は數へ切れないが、これは既に新聞、雑誌などによつて銃後に傳へ盡されてゐるから、こゝで特に付け加へるものはないが、現に西南太平洋のいたるところで展開されてゐる戰ひと同樣、苛烈な激闘が續いたもので、米英軍の無限な物質力に對して、我々の部隊が實に測り知れぬ大精神力をもつて肉彈對抗し、よく皇軍の神武をはづかしめなかつたところに大きな特色と意義が見出される。敵は限りない物質力を用ひ、その上莫大な兵員をもつて抗戰するに對し、我方は寡兵よく皇軍傳統の精神力を遺憾なく發揮し、○○健兒の名を輝かしたのである。敵は鐵の量、すなはち彈山の彈丸と無數の飛行機をもつて挑戰してくる。それに對し我方はいろ〳〵の關係から、全く第一線將兵の血と肉で對抗してきた。從つてこの方面に戰死した勇士の精神は實に崇高なもので、たとへ自分はこのガ島の土となるとも、後に續くものはきつと自分たち以上によく戰つてくれるであらう、と信じ切つて死んでいつた。事實これから後に續く人達が學ぶべき點が非常に彈山ある。

ガ 島は物質力對精神力のいくさであつた。そのうち特にいくさの特徴として現はれたのは、我方が輸送力の關係から非常に食糧に苦しんだことである。よく昔から、「腹がへつてはいくさができぬ」といはれてゐるが、この點を銃後の人達はよくかみしめて考へねばならない。腹がへつた、いや何も食べなかつたのだ。それにも拘はらず忠勇なる部隊はよく戰つたのである。何も食はないで敵と戰つたのである。いかに徹忠徹底の至誠に徹した將兵であつたかゞ判る。一般の常識が「食はなければ戰へない」といふことになつてゐる點から考へても、その常識を覆へして戰つたガ島戰の特徴は皇軍の偉大な精神力を發揮するところなく立證してゐる。

その壯烈な血戰の實例は、既に中澤、寺澤、大野などの各挺身隊をはじめ、船垣部隊或は若林中尉、○○第二據點隊隊長などの誠々たる戰闘のさまが一般に傳へられてをり、その他にも同樣な戰例がいたるところに殘されてゐるのである。

ガ島に征つた全將兵を通じて、その誰もが生死を超越してゐたのである。しかも、從來考へられてゐたやうに「死ぬことは何でもない、み國のために戰死することは何とも思はぬ」といふ程度……つまり死ぬまで戰ふのだといふ氣持ではなかつた。それをはるかに超越して「死んでもなほ戰ふのだ、死後もいくさを續けるのだ」といふ死を乘り越えた決心であつたのである。

大 楠公のいはゆる「七生報國」の赤心である。またアツツ島における山崎部隊長以下の守備隊と同樣、悠久の大義に徹する氣魄が、上は最高指揮官から下は一兵にいたるまで、全軍に漲つてゐたからこそ、この苛烈ないくさを戰ひぬくことができたのである。「死ぬまでやる」といへば、實に崇高なりとした常識を破つて、ガ島將兵の決

意は「死など念頭にない、死をはるかに超えて、七度生れ變つても、あくまで國に酬ゆる」といふところにあり、これが全將兵の心魂に徹してゐたのである。事實、われ〳〵は多くの將兵が護國の神と散つてゆくさまを目のあたりにみたのであるが、それら全ての人達が安心立命して死んで行つたことを信じてゐる。「自分はこゝまで戰つたのだから、あとに續く人々もよくやつてくれる。必ずやつてくれる」といふことを信じ切つて崇高な氣持で死に突入して行つた。後に續く人達を信頼して、そこに皇國安泰の信念が生れ安心立命してゐるのだ。この點は筆にも言葉にも盡し得たいが、同じ危險に身をさらし、現場に身を投じてゐたものには、それを感じ、それを全身全靈に感ぜしめられてゐる。

腹が減つて辛かつたであらう？苦しんだであらうといふ風に、物質的には察して貰へるが、前線では實にそれ以上――われ〳〵が、こゝでやらなければ日本はどうにもならないのだ。われ〳〵がこゝでがんばることによつて御國は安泰だ。銃後の國民もこれで安心なのだ――といふ氣持が徹底してゐたのだ。だから將兵の死際は實に立派であつた。その例は到るところにある。あの火野挺身隊にしても、どこまでも「必死必成」必ず成功する。自分が戰死する前に必ず達成するといふ、絶對的信念を持つてゐる。

また稻垣部隊の玉碎は、アッツの山崎部隊と一脈相通ずるものがある。やはり所命の地點を守り通して、最後には傳令に肰記を傾倒させて後、部隊長以下が悉く銃劍をとつて敢然敵中に斬り込んで壯烈な戰死をとげてゐる。あの時の情景を綜合してみると、足腰たゝぬ重傷者までがやはり銃劍をとつて立ち上り敵と格闘し、最後までがんばり通した狀況がはつきりと感知される。また若林中尉も全身數ケ所の深傷にも拘らず、最後まで毅然として責任を遂行し、天晴れな武者ぶりを示してゐる。第二據點隊の○○隊長以下全員が、僅かの人員をもつてあれだけのがんばりを示してゐる。

關谷部隊は特に我軍右翼の重要地點を守備してゐたが、之より先すでに非常な激戰を交へて敵に大損害を與へ、その後も引きつゞき同所を守備してゐる情況で、補給も一番困難な地點であつた。十日も二週間も食べるものは草ばかりといふ悲惨な情況であつた。しかし部隊長以下士氣極めて旺盛であつた。辛うじてまだ電話が通じてゐる時期であつたから、毎日一回は連絡してくる。その電話も關谷部隊長自らかけてよこす。こちらから……そちらは淋しいだらう……とねぎらふと、いつも關谷部隊長は非常に元氣な聲で、

……淋しい、けれども必ずやります。大丈夫です。

と返事してくる。

……大丈夫か、頑むぞ……大丈夫です。

大丈夫です。きつとやります。

その元氣な凛然とした聲が今でも耳に殘つて消えない。樣稱や彈藥が極めてか細い情況にありながら、却つて部隊主力のことを心配してくれる有樣で、非常な重將であつた。○○參謀がその部隊へ連絡に行つたときなどは、向ふに食物のないことが判つてゐたから、參謀は自らお土產に樣稱を贈與

つて當番兵と共に、高い山を越え、沼澤を渡り、藤づるでよぢ登つたり、降つたり、難路を越えて連絡をつけた。

ところが關谷隊長は、

大丈夫です。絶對に大丈夫です。必ずやります。

と非常に旺盛な士氣を示してゐた。しかしその實は幾日も食べものを口にしてゐなかつたのだ。それでゐて平然として大丈夫、大丈夫とがんばつてゐる。

この委こそ、日本軍以外には見られない情況である。しかし結局においてはさすがの關谷部隊も、逐次兵力を損耗して遂に部隊長以下殆んどが壯烈な戰死をとげ殘るものは極めて少數に過ぎなかつたのである。かくの如く枚擧にいとまのない壯絶な數々の武勳が一貫して物語るところは、敵の物質的威力に對して、我方は精神力をもつて戰ひぬいたといふことである。

われ〳〵が歸還して痛切に考へることはせめてあの當時、もつと浮山の飛行機を送つたたら、もつと多くの船を送ることができたなら――といふことである。あの當時第一線にあるもの總ての氣持は、

自分らはこゝでかうして戰死する。戰死しても幾度も生れ代つて闘ふ。同時に後方でも完璧の態勢を整へ、勝利は必ずわが方にあることを信じて疑はない。

といふことであつた。

そしてまたこのいくさを通じて感ずることは、飽までも日本軍は世界一の精强であるとの自信である。個々の兵が非常に精強である。部隊長以下一兵まで骨の髓まで悠久の大義に徹してゐる。むづかしい理窟は知らぬが、無意識に本能的に戰ひぬく、み國のために命ぜられたことはどこまでも遂行する。死ぬことは一つのめやすでなくて、自分の仕事を貫徹するための付帶事項にすぎない。任務を達成するために死ぬのは何でもない。死などは盆盆に浮んで來ない。かういふ雄々しい姿が明かに現れてゐる。行けば死ぬに決つてゐる、そこへどうしても自分を遣つてくれといふ。

行かなくてもよい。お前の任務は別にある……

といつても、自分をやつてくれといつてきかない。形は兵隊でも將校でも第一線にあるものは、みんなその決心なのだ。

稻垣部隊所屬の某主計中尉は、初期後方にあつて補給業務に任じてゐたが、稻垣部隊が敵の重圍に陷るや「是非自分も部隊長の膝下にやつて共に死なしてくれ」と涙を流して懇々をこねる始末だ。

お前には他に任務がある。他にやつてもらひたいことがある。

と聲をはげまして叱りつけて、思ひとゞまらせた位である。このやうに日本軍が精神力の高さに基く世界一の精鋭だといふことは絶對的なものだ。禁衛とかといふ外形でなく、一人々々が貴重な精神力に本來の强さ、彈丸にも爆彈にも、火にも水にも冒されない眞實の强さがある。この强味こそ日本の國體に培はれたものである。あれ程の激戰苦戰の中で常に天皇陛下の御爲ならばといふ決意が溢れて、他は介入する餘地がないのだ。その强い氣持のみで動いてゐる。この純一な覺悟の下に與へられた任務を完遂する以外は「無」なのだ。かういふ純粹な死地に身を投じ、萬死の中から歸還

して銃後の生活を眺める時、正直なところ何となく寂然としないものがある。

次にガ島戦で強く感じたことは、長途が非常に聰明であることだ。何事にも理解が早く欣然として働つて任務を遂行してくれる。これも自分らがこゝでやりぬかねば日本はどうにもならない、といふ事態を速かに把握する聰明さが興つて力があると思ふ。この理解力は部隊の特色ではないかと思つた。死に直面して自棄的の氣持でなくその死を見つめてゐる。そして莫劍に仕事のことだけを考へてゐる。この精神力を基調に固結した部隊の强さといふものをしみ〴〵と部隊の上に感じて頼母しかつた。彼らのこの物判りの良さ、理解の正確さによつて死を超える悲壯な心情を思へば、形の上のみでなく益々翻命に敵撃滅を期すべきだと思ふ。

★東海林大佐談

敵英國の東亞侵略の據點香港を一擧に屠り、遠くジャワ、スマトラに轉戰、敵米英闘を鎧袖一觸して士氣益々揚つた我が東海林部隊は、こゝで○○に集結、新作戰に備へて千古斧鉞を入れざる大密林を踏破として皇軍獨特の猛訓練に寧日なかつた。さきに南支軍の敢行した東江作戰に從ひ大いに作戰に寄與する所あり、香港攻略戰では一番乘りの偉功を樹て、長驅ジャワ、スマトラと歴戰數回の我が部隊は、戰爭馴れのした最精鋭として定評あり、その動きは全皇軍の注目するところであつた。

日の丸の御旗いよ〴〵大東亞の戰城を彼ふ秋、部隊は○月○日全將兵の感激の裡に盛大な軍旗祭を擧行、一同廣場に集合して謹んで勅語捧讀、聖謨の無窮を奉唱した。嚴粛な式典には原住民の老幼婦女子も欣喜雀躍して參加、街中を慶祝に色どり、故國を遙かに偲ぶ樂しい一日であつた。

かくて來るべき日に備へてひたすら猛訓練に明け暮れしてゐるうち、○月○日深更突如新しい命令が傳へられた。久しく腕を撫し、彈丸の嚢に堪へなかつた將兵一同は「時こそ到れり」と勇躍、神速機敏な諸準備は翌夕早くも完了次の命令を待つた。○日愈々出動、○○に乘船、○○を目指した。波濤萬里を越えて○○向けの初の船團航行は海軍部隊の警戒の下に敵機、敵潜水艦の眼を掠めつゝ徐々に目的地に近づいて行つた。○月○日初めて○機編隊の敵機の來襲があつた。苦心の航行の日、目的のガダルカナル島に一歩々々しのび寄つた。○月○日未明、遙か地平線上の彼方にぼんやり浮んだ黑い一塊！　これぞ夢にも忘れなかつた目ざすガ島であつた。

刻一刻強行上陸の時は迫つて行く。離岸は眠つた如く一發の銃聲も起らない。船團は依然進行を止めぬ：「陸軍部隊上陸用意！」の號令一下、素早く用意された○○艇は兵員を滿載して本船を離れた。一同たゞ默々、神明の加護を信じて衝き進む。生もなく死もない。息づまる數分であつた。敵の眼を衝いた上陸はかくして成功した。だが間もなく敵はこれを發見、猛烈な銃砲撃と飛行機を繰り出して上陸阻止に來襲した。

た。米濠兵何するものぞの意氣に燃える部隊は、長途の船旅にも怯まず敵機を狙ひ射ち、地上砲火と協力その四機を撃墜するといふ輝かしい第一戰を記錄した。この敵機の降下する彈雨下に各輪送指揮官は泰然揚陸作業を續けた。沈着機敏に行動し殆ど損傷はなかつたが、たゞこの空爆下沈み行く船上で毅然指揮をとりつゝあつた鈴木重巳大尉、士屋中尉が不幸敵彈に殞れたのは殘念であつた。

昭和十七年十月○日拂曉、我が東海林部隊はガダルカナル島北岸、タサリロングの敵前上陸に成功したのだ。一刻も猶豫せず部隊の集結を終るや、直ちに進撃を開始した。

當時の敵狀はルンガの西クマ高地からヒヨウ高地一帶にかけて堅固な陣地を設け、擬装銃座を作つて散兵壕を掘り、幾重にも鐵條網を張りめぐらしてをり、砲兵陣地、高射砲陣地また要線を確保して鐵壁の布陣だ。それに加へて敵は刻々と兵員を增し、資材、機械を揚陸して我が來攻に備へてをり、飛行場また敵の手中にあり、他方近くのツラギ港から來る敵海軍機と協力、制空權を維持してゐた。

前進を開始した部隊は、實なほ暗い大密林を縫うて、夜を日についで進撃を續けた。深い密林は殆ど日の目も見えず、もう一尺先に歩いて行く兵士の姿さへともすれば失はれ勝ちだ。そこで道なき道を一列縱隊で前の兵の背嚢につかまり乎ら甚暗い中を進む。茨のやうな蔓と葉とが一面にからみついてゐる。內地と違つて高かゞら、籐みたいな蔓が、どれも深いとげをもつてゐる。將兵はみな手足を血まみれにして、何千年か積つた枯葉の上を進んだ。密林だけではない。やつと通れる大溪崖あり、千仞の谷ありだ。雨ともなれば特有の物凄い奴だ。樺のやうな雨が瀧となつて打つ。すぐに足がとられさうになる。渴を訴へても水さへない。勝づるから出る水をとつて水筒にためて置き、これでやつと喉をうるほした。こんな辛苦の密林進撃にも兵は一兵と雖も弱音を吐く者はない。或兵は分解した砲に肩をめいらせ乎らも、雜嚢を極める艘嶮を鎖を喰ひしばつて進む。やつと切り開かれた一本の道を古宮、廣安の二部隊と鎬ふやうに前進した。

もと〴〵古宮部隊長とは○○師團で參謀長時代に知己であり、廣安部隊長また幹部演習等でよく顔を合はして、互に相識の間柄であつたので、相互に激勵し合つて前進を續けた。この間敵は三機、五機或は八機の編隊で飛んで來て盲爆をやつて行く。かゝる雖行を續けること○日にして、部隊は漸く所命の地點まで進出した。

十月○日、自分は古宮部隊長といろ〳〵打合せを行つた。明くれば○日、いよ〳〵總攻撃の日となつた。自分はルンガの河谷に各部隊長を集めて最後の訓示をなし、一同恩賜の酒を押し戴き、遙か故國に向つて盃を上げて皇國の彌榮を祈つた。いよ〳〵部隊は戰鬪隊形をとつて敵陣へ突入するのみだ。折柄のスコールは何物をも押し流す豪雨と變つた。道とは名のみ、またゝく間に泥濘と化し、將兵は雨に叩かれ泥にまみれて追撃接敵して行つた。

前進○時間、岩瀬部隊長の長坂信行少尉は、將校斥候として道路の捜索に出で、

先づ敵の電話線を叢林中に發見、これを傳つて前進するや敵へ通ずる道路へ出た。

敵陣地はすぐ目前に開かれた。戰機動くと見るや、年少氣鋭の岡出部隊の淺井大三少尉、鈴木久男少尉は果敢な攻擊の火蓋を切り敵陣深く突入、隨所に白兵戰を展開した。鈴木少尉はと見るや眞先に敵將校と組討ち、自動拳銃を分捕り、迫擊砲二門を奪ひ取るの目覺ましい奮戰の後、壯烈な最後を遂げたのである。右側では伊藤部隊の畠中少尉以下が十數倍に餘る大敵と激闘を續けてゐる。慌てた敵は全兵力を集中して迫擊砲、機關銃を以て防戰に躍起となつた。この戰闘で終始先頭に立づて指揮をとつてゐた伊藤勇中尉は、敵陣へ到達する直前敵迫擊砲で重傷を負ひ、また起つ能はなかつた。

自分は闇をすかして敵狀を偵察すべく五六歩前へ出るや瞬間右前方百米邊りから自動小銃、迫擊砲の猛射を浴びせられた。自分の身を氣遣ひつゝ一人置いて隣りで、地形偵察中の中條寧富副官はこの時飛來した敵彈に右肩から貫通心臟部へ達する重傷を負ひ壯烈な戰死を遂げた。南支以來幾度びかの戰闘に場馴れのした同少佐は氣丈にも「天皇陛下萬歳」を三唱「何もいひ殘すことはない。唯軍旗を守つてくれ！」の語を殘し乍ら從容と息を引き取つた。この間もウアーン、ウアーンと一刻の休みもなく射ち出す敵迫擊砲の物凄い砲彈は前後左右に炸裂する。雨は依然として土砂降りだ…一晩中激戰が續き、死闘〇時間ののち東の空が漸く白んで來たのであつた。

天明と共に、敵は迫擊砲、重砲のほかに飛行機を出動させて滅茶苦茶な爆擊を始めた。そのうちに電話の連絡も出來なくなつてしまつた。かゝる狀況で敵の猛砲爆下敵狀地形の搜索で暮れ始めた。夕闇迫る時棚橋兵長以下四名の通信隊は、後方〇〇本部との通信線の保線に挺身敵火に曝され乍ら、命の綱ともいふべき電話線の確保に當つた。

敵前約百米で開始された果敢な總攻擊は將兵一同の獅子奮迅の活躍物凄く、激戰〇日で雲霞の如き敵軍を見事擊退した。かゝる中に〇日部隊はコリ岬付近に轉進を命ぜられ、新たな任務につくことゝなつた。當時は最早糧食は全く缺乏し、後方からの補給久望み少きなかを、部隊は再び大ジャンゲルと艱難を冒して前進した。どん〳〵前進を續ける。言語に絶する難行軍の後大草原地帶に出る。敵は五機、八機の編隊を以て來襲、無數の爆彈を投下し、次には機銃の掃射を浴びせる。それも入れ代り立ち代り次から次へと現はれる。早い時は午前二時頃から頭上に飛んで、爆彈の雨を降らした。この進擊に際して若林中隊は道路開設隊として先行、要闘一つない未踏の大密林を、たゞ礎石一つを頼りに目的のコリ岬へ〳〵と急いだ。だがこの進擊は勇猛な我部隊にも意に任せず、一日僅か二粁位しか前進出來ない程の難行であつたのだ。

これより先、眞野中尉、神吉部隊の永田義秋中尉は、敵の猛火砲を冒して海上からの友軍艦隊の掩護射擊の下にコリ岬付近に上陸、火砲の揚陸に成功、關谷部隊と協力正面の敵を擊退した。兩部隊は上陸後時を移さず極度に窮迫を告げてゐた彈藥、糧秣を集積、敵の逆襲に備へた。この間も敵

は數回に亘り反復爆擊を繰返し、海上には敵巡洋艦一隻、驅逐艦三隻が游弋して艦砲射擊の一齊射を送り、ヴアーン〳〵と耳に徹する轟音は天地を震憾させた。氣負ふ若武者伊藤少尉、藤井瀧雄見習士官は、果敢な戰闘指揮中重傷を負つたが、最後迄頑張り通し一歩も引き下らなかつた。石鍋軍曹また亂闘の中に銃劍で渡合ひ、敵兵數名を刺殺したが、自らも敵彈のため壯烈な最期を遂げた。

他方〇〇部隊が敵の重圍に陷るや、これが救援に赴かんと反轉した和田中尉指揮の部隊は途中敵戰車を生捕り、手榴彈、背嚢等多數の鹵獲品を得た。この戰車中には敵が後生大事に殘してをつた罐詰類、煙草が山ほど發見され、贅澤な敵產は早速部隊に意外のご馳走となつた。高橋中尉指揮の部隊も反轉で、敵の重機を分捕る殊勳をあげた。

その中に敵はわが部隊の存在を飛行機で發見、爆擊と敵火砲の執拗さは火の雨と降り、岡田大尉以下の貴い犧牲が出た。

ルンガ上流の渡河點に當る右翼據點を占領確保した關谷部隊は、乏しい糧秣でもつて殆ど食ふものも食はず友軍の轉進を掩護、〇月〇日の最後の轉進迄の〇ケ月間、たゞ一回の糧秣、彈藥を要求する事もせず數回の敵反擊に微動だもする事なく、轉進迄持ちこたへた。惜いかな隊長の關谷榮治少佐は轉進中〇〇付近で、敵砲彈により胸部を射たれ名譽の戰死を遂げた。豪快な同部隊長は香港、ジャワと自分の副官として よく輔佐してくれ、ジャワでは頭部と腹部に重傷を負うたのであるが、後病癒えるや隊長としてガ島作戰に從つたのであつた。

一方瀧澤官平少佐の指揮する瀧澤部隊は、〇月〇日上陸するや、間もなく〇〇部隊の增援に急行中、部隊長は艦砲射擊により大腿部を射ぬかれて戰死を遂げた。松永中尉はその代理として部隊を指揮、〇月上旬陶村部隊方面の狀況を告げるや增援を命ぜられ、山本博一郎中尉以下を率ゐて急遽出動、敵陣を攪亂したが自らも玉碎した。

岡島部隊は第一線の守備に任じてゐたが反擊して來た敵を三米近く迄引き寄せ、徹底的な打擊を與へ潰走せしめた。そしてこの戰闘で自分も鐵兜を貫き、左耳から肩胛骨に達する重傷を負つたが絶對後退せず、連日の雨の爲その傷は臭氣を發する程になつたので、後方へ下つて手當せよと命じても、かへつて食つてかゝる程で、たうとう第一線を離れなかつた。

以上のやうに勇猛果敢な我が勇士の生死を超克した働きにより、部隊はよく慘烈な死闘の中に所命の目的を果し、新任務のためのあの歴史的な後方展開の重要な役割を演じたのであつた。

惟ふに熱帶未開の僻地に千古の謎を秘める大密林を背景として、この世で經驗し得るあらゆる困苦缺乏に耐へ、兵力裝備ともに優勢な米軍を對手に〇ケ月の長期間、勇戰奮闘偉大な精神力を發揮して、敵をして心底より恐怖せしめたのであつたが、之は偏へに七生報國の大義に徹した勇士の奮戰と幾多英靈の加護によるものである。この戰闘を通じて特に感じた事を擧げよう。

先づ第一は必ず天佑神助がある。日本は神國なれば我々が出來るだけの事をやればその後は必ず神々の加護があることを信じ

て疑はぬ。一例を擧げると、十一月〇日〇〇付近で宿營中の事だが、丁度その日は我が部隊に辛うじて僅か乍ら糧秣、彈藥の補給を得て士氣ます〳〵昂揚された時、ジャワ戰定作戰におけるわが部隊に對する感狀が畏くも上聞に達した旨の電信を受けた。

部 隊一同は感激の餘り、盃を擧げるにも酒はなく、食ふに飯もなく、〇日一食も食はないことも打ち忘れ、遙かに宮城を伏し拜み一層の奮鬪を固く誓つたのであつたが、この晩敵機が宿營地付近を飛んで行つた。いつになく異な豫感をもつた自分は、機を移さず前進を命じ、大密林を出發したのであつたが、案の定午前三時頃漸く東天がほの明るくなり、やつと次のジャングルについた頃、もとの宿營地付近に艦砲射擊と共に素晴らしい爆音が二回に亘り大音響を發したのを聞いた。引續きその日は一日中敵機が昨日の宿營地上空を飛んでをつたのであつたが、恐らく愚鈍々々してゐたら部隊全部全滅したであらう。本一本、草一本も殘さぬ敵の猛爆を思へば……全く天佑といふほかない。

次 に糧秣の話である。〇〇參謀談にもあつた如く、補給が意に任せぬため、最後の頃は椰子や、草の根、木の芽で辛うじて飢渇を凌いだのである。椰の葉に似た名も知れぬ植物の莖、パパイヤの幹、タロ芋など常食となつてゐた。海岸に出ては小さな蟹を漁山掃へて來て蟹飯を炊いたが、鬱の中に米粒を入れたといふ方が適切ではあつたが、なか〳〵旨かつた。こんなわけで食糧には全く閉口、敵空爆の危險を冒して空腹を抱へ乍ら、〇日がかりで〇〇籽後方の〇〇まで、將校も兵も同樣に米を背負ひに出かけるのだつた。こんな狀況でも兵は扇い顔一つ見せず、鍋を釜ひしばつてゐた。時には敵の艦艇、輸送船の糧秣が泡打際に流れつくことがあつた。すると兵達は自分らは指一本もつけず、皆我々の所に持つて來た。「持つて來ました」と元氣な聲で差出す。受取つて見るとでかいハム、卵の黃昧の罐詰だ。いゝからお前達で食へといつてもなか〳〵きかぬ。後では一日がかりで海岸に出かけ遠くへ泳ぎ出て見付けて闘ることもあつた。そして多少にかゝはらず分け合つて食べた。部隊同士でも少しでも食糧があれば、自分の隊のことは考へずに分けてやり、その情景は實に涙ぐましいものであつた。

第 三は兵器に對する餘重である。齊藤保彥部隊の加藤といふ兵は疲勞困憊の末、コリ河を渡河中機關銃の脚を落したが、責任感の旺盛な同兵は胸まで沒する濁水中でたうとう捜し拔いた。他の兵隊達も皆さうだつた。大切な兵器、銃後國民の粒々辛苦になる兵器だといふので、それは〳〵大事に取扱つてゐた。

最後に陸海軍の協同一致である。〇〇出發以來、乘船中、海軍では總てを自分でやられ、我々はお客樣扱ひだ。あらゆる警戒から何から何までだ。上陸後は敵飛行機の跳梁下に糧秣、資材、兵員の運搬、補給をして貰つたことは一再でなかつた。どうにもならなくなつても米、味噌、ローソク等をドラム罐で運んで貰つた。

以 上のやうに凡ゆる惡條件を克服して崇高熾烈な攻擊精神に皇軍の神髓を發揮、ガ島死守の大目的を果したのであるが、最

精强を誇る我が將兵がガ島作戰〇月中、如何なる不利な狀況下にも、決して希望を捨てず、餘裕綽々内に火と燃ゆる闘魂を湧らしてゐた。この言語に絶した勞苦と不屈の戰闘精神を將兵一同、時にふれ折にふれては次の如き三十一文字に綴つてゐた。自分が千萬言を費すよりも、以下の一首々々によく當時の氣持を述べられてゐる。十分味はつて貰ひたい。

二十里を背に荷負うて糧運ぶ兵の勞苦に涙こぼるゝ

夕立や椰子の葉洩るゝ雨水に五尺の身體置きどころなし

散り行きし戰友の冥福祈りつゝ仇討ち返す日をぞのみ待つ

敵陣を屠つてからのお雜煮と今の苦雜をいふ者もなし

餓死すとも守地を離れず最後迄日本武士の意氣を示さん

昨日は此處今日は彼處と射ち寄する敵の砲爆いとも口惜し

★鬼塚大佐談

わが鬼塚部隊がガ島に上陸したのは昨年十月だつた。最初の豫定では、敵陣地たる犬高地を距る十二里の地點、カミンボ灣に上陸するはずだつたが、增援急を要することゝて敵前最短距離のタサハロングに敢然上陸を決行した。當然敵の爆擊または砲擊をうける覺悟であつたが、敵は遙か遠距離の闇空を探照燈などで警戒するのみで一發の砲聲も聞かずにガ島に第一歩を印した。

二ケ月前からガ島に上陸して飛行場新設などに挺身敢闘を續けてゐた一木部隊長はマラリアその他の疫癘と飢餓に苦しめられ、見るからに痩せ衰へ頭髮髭帶ばう〳〵と伸びちやうど仙人と山賊をまぜ合せたやうな凄い面相で活躍してゐた。上陸早々この氣の毒な姿を見て「よし今度はこの仇を必ず討ちとつてやるぞ」との闘魂に燃えつゝその夜は深い眠りについたのである。かくてタサハロングの山で平穏な一夜を明かした。その翌日からは前夜にうつて變り艦砲射擊をはじめ敵機が入り代り立ち代り頭すれ〳〵の低空を飛び、爆彈を落したり機銃掃射を浴せるなど、物凄い攻擊をつゞけて來るので手も足も出なかつた。

これまでは米兵なんて吹けば飛ぶやうに思つてゐただけに、敵の狂氣じみた銃擊盲爆にはむしろ呆氣にとられた形だつた。やむを得ず晝は鬱蒼たる木蔭に身を伏せたまゝ一歩も動けぬうちにも、足下を流れるボネギ川には一尺五寸から二尺のくきな魚が無數に泳ぎ廻つてゐた。兵たちは「あの魚のやうに前線へ駈け出して行けたらなあ……」と羨しさうに水面を凝視してゐたのだつた。時既に敵は制海權、制空權とも完全に掌握し新手の兵力四萬がルンガ岬を據點として近代的防備施設を逐次增强し猛反擊に出てきた最中だつた。

わが部隊はじり〳〵押寄せる敵の反擊に惡戰苦闘をつゞけてゐる友軍を一刻でも早く掩護せねばならないので、暗夜に乘じて第

一線の勇川へ向つて進撃を開始した。十日には增援の古宮部隊が上陸し、わが部隊の後を追つて來るといふ情報が入つた。しかし何時間經つても古宮部隊の姿が見えないのでどうなつたかと心配してゐる矢先、一日半ぶりに到着した。ジヤングルの中を切り拓いての行軍をやつたため一里の道を一日半も費したといふことだつた。いよ／＼戰鬪配置につくことになり古宮部隊、中隅部隊は九〇三高地を中心に九八六、九九〇高地に陣を布き、わが部隊も同地點に砲列陣を構築した。この間谷を渡つたり山を越えたりしたため、千米の前進が一日もかゝり、空からはどん／＼爆撃銃撃が絶えず作戰は思ふやうには進展しなかつた。そこで十五日各隊長會議を敵の砲爆撃の眞只中に開いた結果、各部隊が一齊に總攻撃を開始し、一擧にルンガ飛行場を陷れることに一決したのである。この決死的總攻撃に兵士たちはいよ／＼敵の本據を衝けばうまいウイスキーが飲めると士氣正に天を衝くの概があつた。わが部隊は敵の後方に迂回してルンガ飛行場へ直接突入することゝなり、一人が二日分の食糧と分解した大砲を擔いで密林地帶を前進また前進を續けた。兵士一人が背負つた重量は米一俵の重量以上だつたが、攻撃第一日は豫定通りに進んだ。しかし第二日目は高さ七百米位の山にぶつかりはたと前進が阻まれたが、ルンガ飛行場裏手より急襲してヤンキーに一泡ふかせてやるんだと鬪志滿々、その夜マタニカル河の敵前渡河を決行し、再びジヤングル內の難行軍に移つた。文字通り千古不滅の大密林內を樹を伐り岩を壞いて道を拓きつゝ連日連夜明けても暮れても默々の行軍がつゞいた。或時の如きは一千米前進しただけで日が暮れんとしたことがあつた。

か ういふ場合後方部隊が道を開放して休息する部隊を追越して、どん／＼前へ／＼進む。今は決死行である。その死出の山地に迎れじと先を爭ふ貴い兵の姿には自ら頭が下つた。行けども／＼密林又密林の連續で圖上に示された一本の川に到着しない。マタニカル河を渡河して以來飯たきは一切禁止されてゐたため、全員はほとんど食はず飲まず、しかも闇夜の行軍なので、心身共に疲勞困憊その極に達した。

八日目のことだつた。敵飛行場間近しと察せられる地點に到達した。されど位置も方向も判定する何等の據るべき基準なく當惑してゐた處、たま／＼圖上に示された小流の線に達したので古宮部隊長の顏がさツと明るくなつた。この古宮部隊はわが部隊と同じく飛行場裏手攻撃に參加した先鋒部隊だけに、同部隊長は不完全な地圖に縋らず今日迄の行程と前進方向とを第六感に訴へ現在の小流の位置を判斷し、やうやくわが部隊はルンガ敵飛行場の僅か南方にあるものと判定した。その後眞北に向ひ密林を拓き、岩山峻斜を乘越えて前進をつゞけたが道いよ／＼峻斜にして想像に餘る難行軍だつた。この日夜十時過ぎ先鋒古宮部隊はかねて待望してゐた鐵條網の線に達し、全部隊の士氣ます／＼あがり「あすは分捕りウイスキーが飲めるぞ、チヨコレートが食べれるぞ」と大した喜びだつた。

待 ちに待つた飛行場攻撃の火蓋を切り古宮部隊は中央より東海林部隊は右翼より

廣安部隊は左翼より包囲殲滅の態勢を整へた。まづ古宮部隊の先頭部隊は鐵條網を爆破して雪崩を打つて敵陣地に躍り込んだ。この間を縫く突入と同時に天地に轟く鐵條網爆破は敵をして震ひあがらせたことゝ思ふ。しかし米軍は日本軍が必ず密林內を潜行し飛行場奪取に來るのを豫期して待ち構へてゐた。重迫撃砲、迫撃砲を一時に集中發射し、第一回突撃部隊は一人殘らず敵前に散華したのである。この盲射亂撃に怯まず一隊散れば又一隊と屍を乘り越え乘り越え突撃につぐ突撃を敢行したが、如何にせん敵の强大な機械化設備に壓倒され勝ちとなつた。わが軍が潜行してゐるジヤングル內はこの敵が射ちまくる砲彈が炸裂して眞書のやうに明るくこの悽愴な修羅場はいまこゝで筆舌に現はし難い。この間にあつて古宮部隊は七度生れて國に殉ずるの攻撃魂に燃えて、潛進につぐ潛進を繰返し一夜のうちに古宮部隊長をはじめとし、同部隊の主力は敵前に恨を呑んで全滅に近い狀態となつた。

か うした友軍の損傷に屈せずなほも決死隊は秋の野を前ふ鹿のやうにジリ／＼ジヤングルから伽羅前進して、飛行場へ突入して行つたが歸つて來る者は皆無だつた。回を重ねるごとに出撃する將兵の委を見一果して幾人歸れるか」との不安に閉ざされその後委を心の中で伏し拜んだものだ。日本人でなくてはやれぬ死鬪だ。

かくて東海林部隊は右から飛行場を拔けて海岸に出で海から上陸する早川部隊と連絡をとる豫定だつたが途に早川部隊は上陸出來ず、海岸に於て西海林部隊は孤立に陷つた。古宮、廣安兩部隊の死鬪は鐵條網の線で屍山血河を描き、今は負傷兵を看護する兵隊すら傷き斃れる苦戰だつた。わが部隊の久那須部隊長も遂に意を決せられジヤングルを拔け草原に出陣された。之と同時に敵は迫撃砲、重榴機の一齊盲射を浴びせ那須部隊長以下全將校が全滅したのである。主力を失つたわが軍はやむを得ず後退命令により涙を呑んで出發地點へ引揚げることになつた。後退するにもいま來た道なき密林をどうして歸るか、負傷兵をどうして後退させるかといふことは前進した時以上にむつかしい行軍だつた。

そ れに兵隊といふ兵隊はマラリアにやられ三十八度以上の高熱だつた。しかしこゝでは三十八度は中熱といつて病人とはいはなかつたものだ。また食糧は僅か二日分しか所持せぬため木の根、草の根を噛つて闘つただけに自分の身體が立つてゐるのか寢てゐるのか判らぬ有樣であつたが、負傷兵を背負つたり擔架で擔つたりして豫定の地點に戻つたのは一ヶ月後のことだつた。

こゝでもつとも想ひ出を新たにするものは戰死された、わが久那須部隊長のことである。ガ島上陸と共に那須將軍のもとで戰鬪することになつたので部隊長に初の申告に行つたところ部隊長は半年ほどの假小屋の中で部下副官三名と共にをられた。戰線とはいへ餘りにもお氣の毒な住居だつた。いよ／＼飛行場攻撃を決した時自分達部下隊長を集めて、

この度の行たるや敗けられない戰である。鄕土部隊たる歷史のために、また武

人の面目にかけても決死で當るべし。

と烈々の訓示をされた。やがて死のジャングル行が續き、いよ／＼展開線も近しと知れた時、再び我ら部隊長五人を集められ有り合せのウイスキーを水筒の口栓につぎ遙か皇居を拜しつゝ乾杯の後、

これが最後の盃である。再び諸君に生きて相まみゆる時はなからう。行け達者で！生のある限り戰へ！次にあふは靖國神社である。諸君の武運長久を祈る。

と決心の程を示し一同を激勵された。斯して最後の日が來た。當日は朝から土破降りの豪雨で、この雨の中を各將兵は前進したのであるが、同行の那須部隊長も濡れ鼠同樣だつた。部隊長は長い月日の勞苦とマラリアに冒されてゐた。四十度以上の高熱に惱まされながらも、垢じみた日本手拭で鉢卷し我か道りの杖にすがり、それでもなほよろめく腰を副官に支へられて、一歩々々と進められる姿は實に痛ましかつた。いかに攻擊心は矢竹とはやるも大思の身は思ふにまかせず、百米行つては立ち止まり二百米進んでは休息された。その間にも篠衝く雨は容赦なしに部隊長の頭から鉢卷を傳うて體内に流れ込み、つくづく決心の程が察せられた。古宮部隊の奮戰中、那須將軍はその直後にある密林内で指揮され、しかも敵砲彈は絶えず部隊長の身邊に破裂しその都度死傷者が續出した。その中にあつて、

物いふな、足音させるな、木の葉を動かすな、敵は到る處にマイクを備へて我が軍の狀況を探知しつゝあるんだぞ。

那須將軍は大樹の根元によられながら注意された。間もなく數發の集中彈をうけ、その一彈は將軍の脚下に落下し付近の一同アッと思つて地に伏した。再び顔をあげた時その彈は奇蹟的にも炸裂せずころりとその場に轉げてゐるではないか、つまり不發彈だつたのだ。かくして部隊長始め我々が命拾ひをしたのだ。之は眞に將軍が神樣だから矛盾に終つたのだと武運目出度きと將軍に申上げたものだつた。しかし前述の如く最後の攻擊だつた二月八日ジャングルから草原に突入され壯烈無比の最期を遂げられたのである。今も時折那須將軍が瘦軀と闘ひながら最後まで活躍されてゐる姿が、眼のあたりに彷彿と描かれ我に歸ることがある。一夜にして玉碎した古宮部隊長らの奮戰も鬼神を哭かす最期だつた。一時は古宮部隊長は何處だ、軍旗は何處だ、といつて血眼になるほどの全滅で、生殘つたのは副官だけだつたと記憶する。この兩部隊長以下各勇士のガ島における最期は死して悔なき壯烈なものであつたが、この實情を故郷の人に誤りなしに傳へたいと思ふ。

★松本中佐談

ガ島に戰つた皇軍は上は指揮官より下は一兵に至るまで烈々たる必勝の信念に透徹してゐたことである。ガ島戰は皇軍にとつて未曾有の特殊戰であつた。敵は航空兵力に於て絶對優勢であり後方補給の點でも制空權下を悠々と輸送船團を連日のごとくルンガ沖に集結して兵員、器材、糧秣の大量揚陸に當るなど至近距離の基地を盛んに利

用して敵において我を壓倒せんとする狀況の下にあの死鬪がつゞけられたのである。この間に處してわが將兵は徹底した必勝の信念に生き、皇軍の威信を傾けつくさなく發揮したのである。必勝の信念に徹するといふことが如何に大切なことであるか、死を決して事に當るといふことが如何に大切なことであるかを私は作戰に參加して第一に痛感した。

特に感銘を深くするものはさきに感狀上聞の光榮に浴した西村部隊の勇戰と若林中尉の壯烈な最期である。私は香港攻略以來終始西村部隊と行動を共にしてをり、同部隊勇戰の模樣をかいつまんでのべる。

私達は十一月〇日敵の猛烈な砲爆擊の眞只中をエスペランス岬付近に上陸、直ちに海岸通り勇川右岸地區陣地を死守してゐた堺部隊の右翼に廻り堺嶺付近アウステン山見附嶺の重要かつ崩壊面の據點に進出して前面の敵に對し攻勢を開始した。新鋭部隊が到着したといふので悪戰苦闘してゐた堺部隊も勇氣百倍攻擊精神はいよ／＼その神髓を發揮しあの中澤、寺澤の挺身隊が十重二十重の敵重圍を突破して神業に等しい孤軍をたてたのも必ずなし遂げる大確信をもつてやつた必勝の信念に基くものであることがお判りのことゝ思ふ。

或る小隊長の如きは手兵數名を率ゐて敵陣を夜襲直擊砲を分捕つたうへに、敵の幕舍から煙草罐詰などを分捕つてくるといふ積極果敢な闘志をみせた。なにぶんにも正面の敵とは至近距離であり、ちよつとでも隙を出せば敵はスコールのやうな砲爆擊を浴せてくるから、後方から陣秣その他を補給することは筆舌に盡せぬ辛苦を要した。加ふるに陰鬱の地であるからマラリアにやられるものが續出する。痛せこけて骨と皮だけといふ兵隊も出たが、皆な一言も不足をいはない。敵をやつつけるまでは斃じて死なんぞ」と胆を決して敵陣を睨んでゐる悲壯な兵の姿が私の眼にいつまでもしつかりと焼きつけられてゐる。

さてアウステン山は天王山にも比すべき重要地點であり、增援部隊として稲垣部隊が十一月〇日ア山最右翼陣地に進出、執拗な敵の攻擊を擊退して陣地の死守に任じてゐた。部隊長は稲に見る豪膽沈勇な武人で、十二月〇日陣豁のため部隊を訪れたとき私の兩手を固り握つて、

松本さん、お願りになつたら部隊長にお傳へ下さい。稲垣部隊は全滅を賭しても必ずこの據點を確保します。どうか稲垣のことは絶對に御心配下さらぬやう安心してお委せ下さい。

と聲涙ともに下る言葉でその決意を語つたが、これが最後の別れであつた。稲垣部隊長が、如何に部下を愛してゐたか、その實例を申上げやう。

私は〇〇部隊長から稲垣部隊長へやつてくれと云れて「金鵄」一個を持參した。當時煙草などは敵の奴を分捕らぬ限り絶對に手に入らない時であつた。稲垣は部隊長の心をこめた「金鵄」を押し戴いてその温情を感謝し、一本を三つに切つて部下に一服づゝ喫はせてやつた程である。

稲垣部隊はご承知の通り貝沼軍曹ら本隊へ報告のため生還したもの數名を除き部隊長以下全員ア山々麓に玉碎したので、實にアッツ島の山崎部隊に比すべくガ島玉碎

部隊として不滅の武勳を青史に刻むものと私は確信する。次に若林中尉のことであるが、佐野中將が〝神の如き武人〟であつたと絶讃してをられる通り若林中尉の如きなにもかもすべてが完備した武人といふものはめつたにあるものでない。香港攻略の時に捕虜となつたイギリスの一大尉を若林中尉が取調べたことがあつた（中尉は英語が頗る堪能であつた（後で捕虜の大尉が〝日本軍にあんな立派な青年將校がゐるとは知らなかつた〟と述懐したといふが、中尉が如何に優れた人であつたかはこのことによつても知られると思ふ。

それだけに若林中隊には中野中尉とか曾根淮尉といふやうな中隊長に劣らぬ沈着剛毅な部下がゐたことも見逃せない。いづれも敵陣深く斬り込んで壯烈な戰死を遂げてゐるが、敵軍を恐怖させたことは大きいものであつた。

話 は元へ戻るが晝夜の別なき敵の攻撃は一月〇日となると全線に亘り大攻勢に轉じてきた。砲爆撃は從來に嘗つてみない猛烈さで新手々々と繰出し優勢な敵軍のためアウステン山、見晴山の據點は全く敵の重囲に陷つてしまひ補給は杜絶、〇日頃まで通信隊員決死の奮闘で辛くも通じてゐた。電話も全く不通となつた。〇〇部隊長は殘存兵力を糾合し最後の一兵まで據點を死守せんことを決意せられた。糧食は殆ど盡きかけてゐる。この糧食が盡きるときには全員敵陣に斬込んで玉砕するのだ、と銘々の心に堅く死の誓ひがたてられたのである。

〇〇部隊長に部隊最後の報告を本部にもたらすべく〇日連絡斥候として石樽曹長に兵二名、翌〇日には可地軍曹に兵一名を付して連絡の任につかせ、最後の進撃を準備されたが、兩連絡斥候は完全に任務を果して歸還、〇〇部隊長に命令を傳へたのである。命令に接せられた時の部隊長のお氣持は到底言葉でいひ現せぬ悲痛極りないものであつた。

結 語として私の所見は第一に必勝の信念に徹することである。一億のすべてが大東亞戰爭を勝ち拔くために玉砕を覺悟して職域に挺身することである。

敵は緒戰のやうな敵ではない。實にガ島戰以後はその總國力を傾け精鋭をすぐつて總反攻の態勢で出撃して來てゐるのだ。この嚴たる事實を國民は今こそ確然と認識しなければならない。端的にいへば〝一機でも一弾でも多く〟前線へ送らねばならぬのだ。

第二、皇軍は絶對に勝つてゐる。困苦缺乏が增せば增す程精强無比な日本軍の强みはいよ〳〵その眞價を發揮してくるのだ。

たゞ飛行機と砲弾とさへ量において敵に敗けないだけのものを持てば、この戰爭は絶對的勝利を獲得することが出來るのである。

第三、日本の苦しい時は敵も亦苦しんでゐるんだといふことをお考へ願ひたい。

現に人的方面でアメリカが如何に苦しんでゐるか、マラリア患者の激增に對する處置の一事についてもお判りと思ふ。キニーネを日本に押へられては敵は手も足も出ないのだ。

最後に申上げたいことは、天佑神助は決して偶然ではないといふことである。國民が一人殘らず全智全能を發揮してこそ、そ

こに始めて天佑神助は顯はれるのである。東條首相がいはれた如く一億戰闘配置についてこそ、天佑はつねに吾れにありとの確信を持つことが出來るのである。

數 ヶ月にわたるわが部隊の奮戰の樣は決して筆に盡し得るものではなく、以上述べたところも意盡つてことば足らず、思ひの半ばをも傳へ得ないもどかしさを感じるが、その激戰の苛烈極まる樣相を少しでもよくわかつてもらふために、最も感銘深く忘れられぬ狀況や、戰闘の記憶をたどつてみたい。或は重複するところがあるかも知れないが、その中から苛烈な決戰の生々しさを掴みとられたい。幾度も、くりかへされるやうに、敵は數において絶對優位を占めてゐた。飛行機の量から制空權は遺憾ながら敵の掌中にあつた。

方 島にある五つの飛行基地から三分か五分で、戰爆機が味方の陣地へ殺到してくる。燃料が盡きると直ぐに後退して新手と代る。新手々々と間隙なく來襲し日本軍とみればそれが一人や二人であつても執拗に喰ひ下つて離れない。敵機の眼をかすめるため、椰子の樹の間間をぐる〳〵と二時間あまりも廻つた兵もあつたほどだ。わが部隊がエスペラン岬東方タサワロンゲに上陸したのは十一月五日で、當時〇〇河口海岸道方面にあつた堺部隊は海岸道より優勢な敵海兵隊の猛攻を突いて激戰中であつたので、部隊長は直ちに陶村部隊をして强行、堺部隊右翼に進出せしめられた。新鋭陶村部隊の戰列參加は友軍を勇氣百倍せしめ、殊にマタニカウ河上流アウステン山の最重要據點死守の岡部隊に陶村部隊から精鋭稲垣部隊を增援したことは、ア山陣地確保に非常な貢獻をなした。陶村部隊は稲垣部隊をア山岡部隊右翼に增援、また若林隊湿田隊の見晴山付近の重要な廣正面の據點を占領せしめ、その主力は堺部隊右翼にあつて部隊長統率下に優勢な敵と至近距離に相對した。

こ の頃敵は海兵隊をもつて海上よりの艦砲射撃と爆撃とを以て海岸邊方面より堺部隊正面に猛攻を繰返してゐたが、陶村部隊が堺攻撃方面マ河左岸近く進出する一方中澤隊挺身隊が彼天定な神機をやり遂げたなど敵陣地の奇襲攪亂が相ついで敢行されるに至り、俄然敵は陶村部隊正面、特に見晴山、ア山方面の我陣地に關心を持ち始め海兵に代ふるに陸兵をもつて逐次兵力を增强し、十一月中旬から日夜熾烈な砲爆撃を反復しつゝ執拗な攻撃に轉じてきた。敵の攻勢はその有り餘る砲弾と爆弾との集中射撃の連續なのである。

こ の砲爆撃を避けるため我方は椰林中に壕を構へて、眼と鼻の先に敵と對峙してゐるのだ。うつかり大聲でも出せば發見されてしまふ。じめ〳〵したジャングルがくる。ジャングル内は忽ち水浸しになる。軍服を乾すこともできない。一寸でも頭を出せば直ぐに爆撃される。それで陽の目をみることもできない。マラリア、デング熱たどに殆んどみんながやられる。それに糧秣は一日一合が段々と減つて八勺になり七勺になり、遂には一日米四勺といふ朕恕に至つた。それも毎日食べられゝばよいが、いろ〳〵工夫して食ひ延ばしてみても數日で無くなつてしまふ。何も食はない日が何日もつゞい

た。このやうにマラリアと飢餓が敵の魂弾以上に皇軍を苦しめたのである。

戰ふために食へるものは何でも食つた。蛇、蜥蜴の爬虫類はジヤングルではご馳走である。椰子、パパイアはいふまでもない山芋、唐辛子、芋の葉と莖、そのほか文字通り木の實、草の根まで食べられるものは何でも食べたのだ。蟻の巣が食べられしかも案外な味であることを知つたのもこのときである

最 重要據點たるアウステン山を死守した稻垣部隊の戰局全般に亘つて推移し貢献した功績は、ガ島歴史に特筆大書さるべきものでこれは前にのべた通りである。稻垣部隊長とはこの戰場での對面が最後の別れとなつたが、稻垣部隊は孤軍奮闘よく最重要據點を確保し彈薬つきるや部隊長以下全員ことごとく敵陣に斬り込み玉碎を遂げたもので、その壯烈無比の行動は皇軍の神髓を發揮し國民に强い感銘を與へたことを信じて疑はない。稻垣部隊長は私とは○○時代から親戚にしてゐた間柄だけに殊のほかその玉碎が惜まれる。然し稻垣にしてみれば武人として最もよき死處を得たといふべく南溟に眠る忠魂は永久に皇國南の鎖護の礎を築いたものである。堀實大尉や石川忠三少尉らはともに稻垣部隊長の下にア山丸山で隊長の片腕となり、最後まで奮戰した勇士で堀大尉は部隊長とともに玉碎、石川少尉は命により敵の重圍を破つて脱出重要任務を完全に果した後、ガ島の華と散つたが共に少壯有爲の武人であつた。熾烈な敵の砲爆撃下に昭和十八年である。熾烈な敵の砲爆撃下に六時全員晴天遥かに東方を拜して厳粛な遙拜式を行ひ、腹の底から發り上がる叫びをおさへて力强く 聖壽の萬歳を唱へ奉つたこのとき南の碧空高く友軍機の編隊をみたが、何ともいへぬ力强さを感じたのであつた。この年頭の感激は終生を通じて忘れ得ぬであらう。

糧 食は將兵の決死的活躍によつてまた僅かばかり補給がついたが、この貴重な食ひ甚ばして次の補給を待つ間に敵は一月十日全戰線に亘つて總攻撃を開始した。既に日本軍寡勢なりと判斷した敵はこの總攻撃で一擧に日本軍陣地を突破すべく、一本一草といへども殺ぎ拂ふ勢をもつて猛攻を浴せかけ、ア山、見晴山、堀壘などの各據點を幾重にも包圍して壓倒攻撃の猛威をいよ〳〵加へてきた。若林東一中尉が三度の重傷に屈せず「私につゞくものと信じます」との一語を遺して見晴山に壯烈な戰死を遂げたのは十四日である。

武專を出た劍道の達人で豪勇無双若林隊の華と謳はれた中野正敏中尉や若林中隊の右翼にあつて、若林中尉に劣らぬ勇戰奮闘を續けた深田敬三中尉ら一騎當千の優秀な青年將校が群敵に突入していづれ劣らぬ壯烈な戰死を遂げたのもこのころである。又左翼陶村部隊東隊方面では若林中尉に次で個人感狀の榮に浴した、大樹松市中尉が同じく十三月堀壘の華と散つてゐる。若林中尉も大樹中尉も譽の感狀で武功を讃へられてゐる通り二人ともに本當に何もかもよく出來た立派過ぎる程立派な青年將校であつた。

ゐ〻した立派な中隊長があつたればこそ部下將兵は直ちに上下相信倚し戮力協心してよくその任務を完遂して來たといへるのだ。

きてこのやうに補給は杜絶し死傷續出する狀況を觀取された○○部隊長は、この上は最後の一兵まで陣地を死守して任務を遂行、然るのち全員敵陣に突入して玉碎せん事を決意せられ、連絡斥候として石樽勝男曹長を十六日、可知軍曹を十七日それ〴〵本隊へ決死連絡の任につかせた。石樽は上海戰の勇士として功七級を嘗つてゐる古强者、可知も石樽に劣らぬ豪膽機敏な男で此兩斥候は孫中あらゆる辛苦をなめて奇蹟的に本隊へ辿りつき、完全に連絡の大任を果したうへ石樽は十八日、可知は十九日敵の重圍を再びくゞつて○○部隊に生還したのである。

然 もこのとき可知軍曹は本隊からの○○命令を受領して○○部隊長に傳達したのである。この命令を受けとられたときの○○部隊長の御氣持は悲痛悲憤そのものであつたと察してゐるが、實に何ともいへぬ悲痛の極みであつた。轉進命令に接した部隊は生殘つた將兵○○名を糾合、○○部隊長を陣頭に全員玉碎の決意そのまゝ首尾よく敵の重圍を突破して轉進を完了したのである。

★西山少佐談

昭和十七年十一月五日、南海の一孤島は嵐のまへの無氣味な靜けさであつた。上弦の月が僅かに潯を照らすかのやうに淡い光を投げてゐた。しかしそれもホンの暫くだつた やがて再び漆黑のとばりの中にとざされてしまつた。○時、突然夜光虫が流星となつて飛んだ。その光りの焦點——○○岬の沖合遥かにポツカリと黑い塊りが浮びだした。それがむく〳〵と動いてくる。一つの塊りではない。二つ三つ……夜光虫の眼はふしぎなものを捉へた。すーつと一直線に——いや時には弧を描いてゐるのもあつたが——しろがねをちりばめた美しい波線それが長く尾を曳いて音もなく近づいてくる。目標は間違ひなく漆黑の孤島がダルカナルだ。しはぶき一つなく音一つない靜寂——だがすべては次の一瞬に瓦解された。

わ が砲臺がめざす○岸○○米の洋上に最初の○艇を下した刺那、凄く寂然と澄んだ上空に金屬性の爆音が聞えてきたのだ。艦内にぎつしり詰つて潮を待つて上陸命令を今か〳〵と待つた兵隊達は——スハこそ！ と戰友の顔を眺め合つた。拳を握つて耳を傾けた。爆音は西かルンガ岬の方向である。海岸は珊瑚礁だ。一刻も早く、重海〳〵の藻屑として假令一兵でもこの場所で死なせてはならない。死んではならないのだ。次々と○艇が下される。艦上から協力する水兵、ロープを傳つて猿のやうに乘り移る陸軍部隊「行くぜ」「たのむよ」聲がかち合ひ、振る手がかち合ふ、○艇から飛び下りると胸までつかる海水を蹴つて兵隊は岸へ〳〵と上陸を敢行した。

折から最前の月が淡い光を投げて來た。芒と椰子の樹が行手を遮つてゐる。夜光虫の光はこゝでも兵隊の蹴る飛沫を美しい畫に捉へた。上陸は迅速約一時間で完了した

だが夜光虫の悪戯は敵にもいくらか幸運を齎したやうであつた。ルンガ岬の方向に聞えた敵機はこの時上陸地點の上空へと殺到して來た「畜生ッ」兵隊は銃口を天に向けて歯ぎしりした。しかし誰も射たない。一發の彈丸でも無駄にしてはいけないのだ。私は直ちに命令を出した「密林へ突入せよ！」爆撃をそらして部隊は巧妙に密林へ飛び込んだ。

我　々がガ島敵前上陸地點が砂濱でなく實に密林であるといふ第一歩において、早くも今後の困難な行軍を豫期せざるを得なかつた。二時間ののち我々は密林の中で部隊々形を整へた「西山部隊は速かに第一線に追及すべし」前進命令はすでに下つてゐる。兵隊の士氣は極めて旺盛、第一線へ、第一線へ駆りたてられる衝動が兵隊たちの心の全部を占領してゐた「何にならぬ中に」一刻も早く前進すべきだと私も嗅覚と鞭のなかでいくらか苛立つ心を感じた。まつたく鬱蒼たる密林内である。木の間からは微かな月の光きへ洩れて來ない。何千年もの齢をかぞへた樹々が暗黙のうちに、しかも冷然と光を拒んでゐるかのやうだ。もちろん地形も判らぬ、道もない。これに散り敷ひた椰子葉の束が濕つぽく地肌を覆ひ綿を踏む感觸だ。夜は益々暗く、時々しい鞭が手、足、顔と、ところ構はず血を噴き出させる。

時　々ヒヤリと顔へ落ちるものがある。「毒虫！」そつとする。マラリア蚊も絶え間なく襲つてくる。行軍に先立つて兵隊はできるだけ多くの米を搗いだ。この孤島では第一線へ行けば行く程補給の困難なことを兵隊はよく知つてゐた。背嚢と銃の上に米俵を重ねて歩くのだつた。一枚の地圖もなかつた。前進への隠はたゞ一個の燈石があるだけだ。ふと椰子林に入ると泥濘のやうな道があつた。道といふほどでないにしても、そこだけは不思議と鞭もなく蚊の群もなかつた。誰かゞ「おいこいつあ前の部隊がつくつた道だぞ」と叫んだ。○月前にこの密林を拓たちと同じ氣持で通つたであらう先遣部隊め長い隊列が暗に浮んだ。ぢーんと熱いものがこみ上げて來た。

ど　れだけ歩いたらう。その中鬱蒼たる樹間から薄明るい曉が洩れ出した。時計をみると四時だ。ガダルカナルの夜明が來たのだ。行軍を起してから既に四時間、だが前進は漸つと一里だ。一寸先が分らない密林では兵隊は前を行く戦友に重なつて足場を失ふまいと必死だつた。薄明りに顔を見合せて感激の握手が交された。私もこの時になつて初めて部下の顔を見ることができた。堀口軍曹がゐる。若林中尉がゐる。渡邊中尉がゐる。中野も、戸崎も、深田も……みんなゐる。汗と血と泥で見違ふばかり、元氣は幾かも衰へてゐない。

だ　が夜明けは我々にとつて一番苦手な時間だ。敵のB24P38が飢ゑた狼のやうに密林の隙から覗つてゐるのだ。夕方部隊は漸く勇川の線に辿りついた。小雨がひつきりなしに降り腰を下す場所もない泥濘だ。態寒が絶えず肉體をはしる。この付近で前線から帰つてくる傷病兵に出くはしたが、彼らは二三歩進んでは休みまた歩くといふ有樣だつたが、士氣は頗る旺盛で「戦友を殘して後退するのは残念だ」といかにも口惜い顔付だつた。「煙草あるか？」とまづ訊

く「煙草ぐらゐ」と肩を叩いて渡すと彼らは涙を流して喜ぶのだつた。「しつかりたのみます」「早く癒つてまた會はう」手を振つて別れる。兵隊たちは無言のうちに容易ならぬ前線の樣相を知つた。川には橋がなかつた。直ちに架橋作業にかゝつたとき、ざあーつとスコールがやつて來た。敵機はひつきりなしに爆音を響かせてくる。突如もの凄い火線が部隊の眞中で炸烈した。○名の兵隊が一瞬空中に刻ね飛ばされた。まさしく敵の艦砲射撃だ。

敵　の艦砲攻撃で貴い犠牲を出した部隊の怒髪は文字どほり天を衝いた「野郎、どうするか見てゐろ！」――部隊の目的地百武臺迄は、十數里の海明りの密林つゞきであるが、敵機の眼をかすめるのは容易でなく、夜に入れば眞の闇だ。兵隊がマッチを擦ると前にゐる部隊が「お前たちは殺されてもいゝのか！」と叫鳴つてくる。蔓に足を奪はれて命から何番目かの米俵を失つた兵隊も相當ゐた。空襲も何週かあつた。飯盒炊爨も一つの難事だ。兵隊が入れる位の穴を掘つてその上に天幕を張り椰子の葉を重ねて屋根の樣に掩ふ。三人の兵隊がその周りに立つて漏火を監視する。ホンの一寸した火が漏れても敵機は容赦しない。忽ち付近一帯は盲爆と機銃の雨で焼野ケ原と化してしまふからだ。上陸してから三日目、部隊は漸く百武臺に到着した。

こゝは○○部隊が死守してゐる地點で士井部隊長特氣のため、私はその日から部隊長代理として指揮をとることゝなつた。前面に敵砲兵臺があつて我部隊は直ちにこの敵陣地撃滅の命令を受けた。煙草の匂ひが早くも訪れてゐた。吸殻を棄てると瞬く間に兵隊が拾つて喫む、一本やるとこんな煙草は見たことがないといつて二人、三人で分けて喫む有樣だ。夜になる前に各自銘々に壕を掘つた。無數の壕が山の中腹邊り一面に出來上つた。壕と壕との間に綱を張り連絡はその綱を傳つてくる。どそつと音がする鯨蝋が飛つてゐる。夜になると必ずといつてもよい程雨が降つた。すると澤山の壕が水溜りとなつた。砲兵臺の敵は野砲、重砲、迫撃砲等優秀な裝備である。とにかく形勢を窺つてからと思ひ敵陣地に集中射撃を浴びせると敵はどつと總退却した。敵の作戦も案外馬鹿にならない。こちらから攻撃すると一度は必ず退くが、こちらが出てこぬと見ると猛烈に攻勢に出るといふ戦法だ。

我　々の部隊は將來の持久態勢を整へるため、稻垣部隊の維持するアウステン山と百武臺の中間にある見晴山を死守することゝなつて、百武臺からさらに密林の溪谷と山を強行した。この間も敵は砲火をスコールの樣に打ちまくつて來た。めくら滅法、密林のありつたけを眼つぱにするつもりらしい。兵隊はガドンドロ射撃ッと稱した。見晴山迄二里の密林がまる二日かゝつた。見晴山には○○本部があつて伊東武夫部隊長がをられた。○砲を据付けるのに一週間陣地構築は容易でなく、敵の射撃は一層熾烈となつた。某日地形偵察に出た若林中尉が悲愴な報告をもつて來た。マタニカウ河の敵陣近くに白骨が三十ほど並んでゐる。その眞中あたりに恐らく指揮官と思はれる一つの白骨が、北方を向き遙か宮城を拜してゐる。嚴肅極まる情景を見て來たといふ

のだ。なほも探索すると付近の岩蔭に白骨と同數の小銃が立てかけてあつて、それには彈がこめてある。何と悲愴な情景であらう。滅多に泣かぬ若林中尉も感極つて慟哭した。

あ の銃は　天皇陛下の銃であります。それを自決に先立つて手入れし敵に奪はれまいと岩蔭に隠した心情、すべてを成し終つて従容死についた先輩の姿！　若林はこの眼で見て來ました。隊長！　自分はきつと〳〵仇をとります。

若林中尉の血を吐く様な報告は全將兵を痛憤の坩堝に投げ込んだ。悠久の大義はいま南海の孤島に嚴として生きてゐる。一片の白骨となつて魂魄はたほが島の戰友を護つてくれるのだ。兵隊の士氣は百倍した。

海岸から飛行場から近くはアウステン山周邊、マタニカウ河方面からする敵の攻撃は十一月二十三日頃から總攻擊的色彩を帶びてきた。砲は敵百門に對し味方は十門、兵力は敵五箇師、われに七、八倍する米軍の最精鋭だ。その中には學生出身者が多く含まれてゐた。戰鬪激烈化と相俟つて糧秣補給は日とともに困難を加へてくる。補給は部隊の上陸地點へ○艦と○艦が輸送してくるのだが、陣地から往復二十里たつぷりあつた。

敵 の爆擊を警戒して補給は月のない夜間に限られ、それも月に多くて四、五回が關の山だ。その上糧秣輸送隊は全部負傷兵や病人である。五體の滿足な兵隊はのしかゝる敵の矢面に立つて奮戰しなければならないからだ。從つて補給隊の苦心は言語に絶するものがあつた。杖をついて出發する。○日經たれば歸らない。途中も補給地點も絶えず敵の曳光彈が待ち受けてゐる。彼らの歸るのがどんなに待ち遠しかつた事か、そして輸送隊の持ち歸る三日分の食糧で兵隊は一週間、或ひは十日間の腹をしのぎ、少しの不平もいはないのだ。一日米二合が一番豊富な時だつた。その中補給は益々困難となり、米が全然口に入らぬ日さへあつた。三人の兵隊に一粒の梅干が渡された。しやぶつた揚句に種子を側つて食ふ。そのうちに鹽、味噌の補給がなくなつて來た。鹽分の缺乏――その割には恐ろしい榮養失調症が牙を磨いて我々を待つてゐるのだ。

十 二月二十六日の夜、○隊本部にゐた私のところへ中野正敏中尉（愛知縣海部郡八開村穂田）が緊張した面持で入つてきた。

「どうしたんだ！　いま頃」叱るやうに訊くと「たゞ今、兵を四名連れて敵の監視線をやつゝけて來ました。我方も一人やられ申譯ありません。その報告に參りました」といふ。色々模樣を訊ねると白兵奇襲で相當敵をやつゝけたらしい。分捕りのチョコレートだといつて土產をくれた。私もとつておきのウヰスキーの栓を出して奬めた。すぐ酔る風だつたので「もう少し緩つくりして行け」と留めたが「いや兵が待つてゐます。すぐ行つてやらにやなりません」と強ひて辭した。これが中野との最後の別れとなつた。翌日彼は見晴山西側の第三陣地で手榴彈を擲げんとした刹那、顎部に敵彈を受けて聲が出なくなつた。豪毅な彼は少しも怯まず紙に字を書いて部下を指揮しつゝ鬼神も哭く最期を遂げた。肉彈散華といゝも過言でない。兵隊の士氣や榮養失調患者が日を逐つて激增した。

鹽 の補給がまつたく絶えたからだ。兵隊たちは自分の汗を舐めて塩分の苦痛を一時的に凌いだが、その中に汗までが水のやうに變化する有樣だつた。川へ行つて鹽を拾つてくる。白土についた鹽をとつてくる。敵前渡河○米のところで兵隊は肉體を保つため血のにじむ離れ技だつた。パパイヤの葉を刻んで紙卷にして喫ふ兵隊。初期にもならぬ一日七勺の米の中から銀指程づゝ割つた飯を集め寄せて一隊長殿、これを食べて下さい。自分たちは十分にありますゝと持つてくる兵隊。感動で胸の塞く日々の連續だ。〝決死死守、不死奮闘〟これが部隊の座右銘であつた。

物 の缺乏とは反對に兵隊の士氣は日一日高まつて行つた。一頃若林中隊の悲觀な働きが話題になつた。業後のこと中尉は常番兵數名を連れて密林の中を敵の足許まで潜入した。歩哨線に十人ばかり、大男の敵兵が鼾聲してゐたが、少しも氣付かぬらしい。「古めた！」中尉は靜かに呼吸をはかりながら機會を狙つて「それいまだ。突つ込め！」と部下へ合圖して眞つ先に「ヤアツ！」と雷鳴の直突一本！　聲も出さずに敵兵の一人がぶつ倒れる。悲鳴、怒號、一人でもやられると米兵はからきし意氣地がない。銃も背嚢も抛り出して逃げるだけが藝だ。鹵獲した背嚢の中にはミルクがある、チョコレートがある、煙草もある、兵隊は業だ、といふのである。若林隊では糧秣分捕りにやつてくれと志願する兵隊が横溢した。若林中尉は微笑して答へる。

「そんなことで大事なお前たちを死なすことはできん」

「いや自分達は敵のヘラ彈に當る心配がありません。第一考へようによつては補給をとりに行くことは一種の後退です。退くよりはむしろ進んで敵の糧秣を奪ふと兵法にちやんと書いてあります」

兵 隊もなかゝ〳〵負けてゐない。中尉も、頑な男でなかつた。士氣昂揚を盡つて暗默のうちに兵隊の心を汲みとつたものとみえて話題はひとしきり敵地潜入と糧秣分捕りで賑はつた。こんな挿話もあつた。ある日戰鬪で若林隊の兵隊が右掌に貫通銃創を受けて軍醫のところへやつて來た。「軍醫殿、どうも手がブラ〳〵して困ります。早く切つて下さい」平然といふのだ。早速止血したがどうしてもやりやうがないので右掌を切り落し、敷料しようとするとその兵隊が肯んじない「お願ひきつぱりしました。戰鬪はこれからです」とさつさと第一線の方へ駆け出して行つた。

敵 の盲爆は日とともに熾烈を加へて來た。飛行場は見晴山後方三、四里の地點にあつて、毎日百機内外の戰爆大編隊がやつて來た。日本兵を一人でも見付けようものなら忽ち急降下して何十回でも機銃の雨を浴びせてきた。一人の日本兵に一機といふ率だ。兵隊は歯を噛ひしばつて日の丸の飛行機がやつてくるのをどんなに待つたことか。

ある夜、ルンガ沖に軍艦の通るのが見えた。といふ報告があつた。さては！　と我々の胸は躍つた。果せるかな數刻後に地軸を搖がす凄絶な海戰が展開された。凄い艦

砲同士の殴り合ひだ。形勢はどう見たつて我が方の優勢だ「いよ／＼友軍機がやつてくるぞ！」尾翼についたあの日の丸――兵隊たちは鼎を押かせて肩を叩き合つた。じつさい我々は海戰の結果をみて戰局は急角度に轉轉するとの希望をもつたのである。

「畏くも　大元帥陛下におかせられては……」まもなく部隊は、

天皇陛下が伊勢の神宮に敵國降伏の御祈願を遊ばされたとの報告を受取つた。遙か宮城の方角を拜しながら必勝の信念が雲のやうに湧き起るのを覺え士氣は百倍した。

宮　爆と窮之に明け暮れる密林の陣中で兵隊の志氣を鼓舞するのは、堀田憲夫副官（岐阜縣岐阜市加納町）の朝の行事だ。彼は眼を醒ますと直ぐ兵隊を集めて勅諭、戰陣訓を音吐爽かに朗讀した「死生を貫くものは崇高なる獻身奉公の精神なり……身心一切の力を盡くし從容として悠久の大義に生くることを悅びとすべし」兵隊は涙さへ浮べて唱和した。知らずに拳をぐつと固めて――これがすむと銃劍術だ。やがて兵隊が待ち焦れてゐた正月――その元旦の朝が來た「もう少しの我慢だ。正月がくれば味方の後方に飛行場ができる」「米もくるし煙草も十分喫める頑張つてくれ」その正月だ。だが友軍機はやつてこなかつた。

二合の米、煙草、これもつひに口に入らなかつた。マタニカウ河の敵陣から迫擊砲と野砲の彈雨がいつにも增して烈しく降りそゝいで來た「元旦や糧なき春の勝ち戰」若林中尉の詠む聲に一同はしばらく憮然だつた。整列して遙かに　宮城を拜んだ。やがて一杯の水で心ばかりの乾杯が上げられた「こいつ、ウイスキーよりうまいぞ」そんな冗談も飛んだが誰も笑はなかつた。

笑　はうともしないでコツプに一杯の水を丹田に疊み込んだ。「やるんだ！」と言はず語らずのうちに兵隊は戰局の益々困難なことを自覺した。戰鬪意識が火のやうに燃え上つた。

敵の十字砲火は、明方と晝間が最も猛烈だ。然も一地點へ火力を集中してくる。無駄彈も多いが狙はれた地點に味方がをれば相當の戰死者が出た。その上敵は部隊の行動を監視してゐる。しかも敵の增援は急だ危機は刻々迫つて來た。一月十日形勢は遂に急迫を告げた。この日、曉を期して展望臺奪取を企てた敵は砲十數門を揃ゑて猛烈に射ちまくつて來た。

展　望臺は深田隊と若林隊の中間要點で深田隊勝野准尉以下十數名が守備してゐた。上からB17、B24、P38が爆彈掃射を雨と降らしてくる。苦戰だ。然し守備隊は屈しなかつた。機銃、小銃を撃ち盡くし全員火の玉となつて、十數倍の敵中に突擊した。この肉彈によつて一旦敵は總崩れとなつたが、味方も勝野准尉以下殆んどが負傷代つて深田敬三大尉（愛知縣東春日井郡志段味村字中志段味）自ら寡兵を率ゐて守備することゝなつた。午後二時ごろ一旦退却した敵は、新たな兵力をもつて展望臺へ雲霞のごとく殺到して來た。

阿　修羅の奮戰が行はれた。深田大尉は群る米鬼に突入、遂に壯烈なる戰死をとげ竹島少尉が指揮をとつた。しかし敵は二十倍に近い兵力だ。少尉は十數名の部下を顧みていつた「俺と一緒に死んでくれ！」兵隊はにつこり頷いた。銃劍も碎けよと握り

しめた。

「私は一少尉の身として苛烈な戰場において中隊長代理を命ぜられた。勇敢な部下○○名とともに敵中に玉碎する。武人の本懷これに過ぎたるはない。隊長殿はあくまで生きてゐて下さい。必ず敵をやつつけて下さい」

通信紙に走り書した少尉の手跡がもたらされたとき私は男泣きに泣いた。悲壯な戰陣訓の顯現に粛然と頭を下げずにはゐられなかつた。守備隊の玉碎により展望臺の高所は敵手に委ねたが、下方にはまだ十數名の友軍が死守してゐる。直ちに勝野准尉が急援に赴いて、彼我手榴彈の投げ合ひとなり。對峙したまゝ夜を迎へた。戰況は不利である。氣をよくした敵は今度は猛然とわが守備第一線○○米の地點にある第二陣地の若林隊に鉾先を轉じて來た。

若　林隊の守備兵力は僅か三十名、○隊本部から急援の傳令が飛んだ「それだけで大丈夫か？」直ちに堀田由太郎兵長（名古屋市中區東田町）が傳令となり返事をもつてきた「若林の生きてゐる限り御安心下さい」戰ひは凄慘を極めた。

三林留一兵長（名古屋市熱田區花表町一）ほか戰死、明くれば十一日、第三陣地を死守してゐた戸崎貂運中尉（岐阜縣稻葉郡鶴沼村）以下○名は最後の機銃が壞れ、最後の一發を撃ちつくした末、機銃を穴に埋め手榴彈と銃劍で肉彈突擊、二之湯光男伍長（名古屋市千種區豐年町）ら一兵も殘らず壯烈な戰死を遂げ、第二陣地では日江井鐐一准尉（岐阜縣加茂郡鮎屋村）らが護國の神となつた。若林中尉はこゝでも敵の陣地に斬り込み戰鬪銃を破壞する殊勲を樹てた。

第　三陣地の沈默は敵の第二陣地に對する總攻擊を意味した。密林は砲火の爲に吹き飛び、赤茶けた肌が露き出しになつた。

十二日、吉田弘之伍長（岐阜縣可兒郡森田利雄伍長（名古屋市西區大金町）伊藤傳七兵長（同熱田區千年町裏畑）ほか戰死した。十三日、第二陣地に對する敵の集中砲火は最高潮に達した。私は若林に盡くす最後の兵力として、兵十名を渡邊日吉中尉（福井市花月上町）に指揮させて增援にやつた。この時は既に電話は杜絶え、第二陣地の樣子は全く判らなくなつた。渡邊中尉はこの重圍の中に奮戰遂に玉碎した。大岩又義軍曹（愛知縣知多郡内海町）日高源造伍長（同幡豆郡平坂町）ほか戰死。

「けふもまた一つふえけり墓標、ペンの細文字いたく眼にしむ」

そ　の夜若林中尉負傷の報告があつた。愕然とした私は、早速後方へ下げる指令を出した。返事がきて「下がる必要はない」といふ、暫くして若林中尉は私のゐる○隊本部へやつて來た。

若林中尉は顔と手をやられてゐたが身には達してゐなかつた。元氣で「隊長殿、若林はこゝで武人の最期を飾る決心です。そのお別れにやつて來ました」――彼の顏には覺悟しきつたものゝ強い決意の色が見えた。私はどんなに留めても駄目だと判斷した。彼は愚鈍の銀時計を三つ載いてゐる部隊の至寶である。しかし武人の死場所――これが軍人の本懷とするものであつてみれば、彼の決意を無にするのも殘酷な仕打でなければならない。だがと私は瞬間躊躇した「自分がをらぬと部下の士氣に影響しま

す。これから歸ります」決然とした若林の聲が、私の遺巡を吹きはらつた「よし、死ね――お前の苦しい氣持がよく判つた」「では――最後を戰ひぬきます」私は世にも寂しさうな彼の顏をみた。とつておきの牛繃で飯も二人分、これが若林への餞けだつた。

夜の十時ごろ彼は陣地へ還つて行つた。

明 けて十四日、敵の爆擊、砲擊、機銃の亂射は全山をゆすぶり、密林を吹き飛ばした。一人の將校が軍刀を背に腹卸ひとなつて○隊本部へ辿りついて來た。眼の前にゐる私の方を見ないで「隊長殿」と呼んでゐる。若林隊の竹內中尉（愛知縣知多郡河和町）だ「どこを見てゐるか！　西山はこゝにゐる」「目が見えません」「なに！」驚いて傷を調べると慘しい出血のため眼が霞んで見えないのだ「中隊長殿が戰死されました」「何ッ若林が」

――激闘、死闘の數十時間、若林隊の生殘りは隊長以下八名となつた。しかも若林中尉は頭、腰、大腿部、肩、いづれも右の方に迫擊砲彈破片創を受けて歩けぬ程の重傷だつたが、剛毅一途の中尉は屈しなかつた。死力をふりしぼつて最後の突擊を敢行仆れては起き、起きては斬りまくりその凄じい形相には鬼神も避けた。逃げる敵を追つてなほも突込む、その姿はもう人間とは思はれなかつた「隊長殿」二三名の部下が前進壕の中尉を傷らの壕へ掴き入れたときは、あゝ豪膽無比の鬼中隊長の玉の緒はつひに絶ち切れてゐた「おのれ、洋鬼！」猛然隊長の屍を越えて敵中へ肉彈を叩きつけた部下の兵隊も傳令堀田兵長はじめ一人として還らなかつた。

こ れが中隊の最期を見届けた竹內中尉の悲壯な報告だつた。若林の部下を愛する心はまた一倍で、この日死線に生き殘つた同隊の曾根正三雀尉（岐阜縣土岐郡土岐津町）は「中隊長殿が戰死されたのなら俺の任務も終りだ」と手榴彈二發を手中に、脱兎のごとく陣地東南の密林に突入、若林中尉戰死と覺しい箇所で腹一文字に割ち切つて自決した。南京一番乘り以來、歴戰に名を轟かし中隊では若林中尉の股肱ともいはれた男だつた。

渡邊年雄曹長（愛知縣中島郡組父江町）

岡崎茂次曹長（岐阜縣土岐郡八百津町）らもこの日の激戰で華と散つた。安達良三少尉（名古屋市東區東魚町）も戰死し部隊の兵力は傷者病者を混へて僅か○○名となつた。

部隊はこゝに最後の復讐彈地となりジャングル內に近づく敵を片端からやつゝけ、我陣前に敵の死骸の山を築いて〳〵若林や深田の仇を取つてくれんと勇戰敢闘した。傷けるもの病みて臥すもの總てが彈のある限り戰つた十九日！　この日こそ全軍玉碎を覺悟した日であつた。最後の彈、最後の米、最後の水、この一發も、一粒も、一滴もなくなる最後の日がやつてきた。

ア ウステン山の砲火は全島を震憾させ稻垣隊は遂に一人も還つて來なかつた。全般の戰況からみれば後方に下つて高地に據れば一時的には有利かも知れなかつたが、部隊全員は見晴山を最期の地と決めてゐたこれより先可知軍曹と伊藤上等兵が最後の傳令となつて○團本部に飛んだ。ところがこの日の正午この二人の傳令は全く意外な命令を持つてきた「軍は大命を拜して後方

に集結する。閣下並びに西山隊長に傳へよ」――仔細はかうだ。敵の重圍をくぐつて可知、伊藤の二人が○團本部に部隊の玉碎決意を報告、直ちに引返さうとすると「いま還つては犬死だ。こゝにをれ」といふ「全員が玉碎するのに還らぬ譯にはいきません自分らは死ぬために還つて行くのです。やらせて下さい」强硬な押問答の末二人はこの重大な命令を携へて來たのである。○團司令部から慰めのドロップと手榴彈をもつて再び敵の重圍の中を潜つて還つた決死の傳令を中にして伊東閣下と二人、辭もなかつた。

玉 碎の決意は牢固と固かつたが、大命の前には我々は轉進の方策を樹てねばならない。まづ三十名の決死隊が敵の一番頑强な包圍網を突破し崩れ立つた隙に一氣に活路を拓く、これ以外に方法はなかつた。

副官が來て「傷病者をどうするか？」と訊れる。その時部隊には立つことも歩くことも出來ぬ戰傷者やマラリア患者が相當にゐた。私は言下に「連れて行け」と命令した。然し敵の重圍を突破することは文字どほり九死に一生だ。兵隊はみな疲れてゐた傷病者を背負つて行くことは敵中突破以上に困難な業であつた「彼等の決意はとても飜りません。傷病者一同はガ島の守神となる覺悟をしてゐます」副官は暗然と答へた。やがて各中隊長から傷病者に手榴彈が二發づゝ渡された。一つは我が身に、一つは敵兵に――魂に通ふ暗示だつた「ガ島の神となつて隊長殿の武運長久を祈ります」傷病兵は笑つていふのだ。我々は聲を呑み類を垂れた。血の涙が溢れるのだつた。夕方六時部隊は夜襲の集結をした。誰も生きるか死ぬとかを考へなかつた。

決 死隊の白兵突擊で敵の重圍を四つ分捕り、つゞいて全員突破に成功、濁水に空腹を補ひ密林を彷徨ひ乍ら更に堅固な敵陣を突破した時、あゝその時、我々はそこに味方の陣地を見出すことができたのだ。全く天佑であつた。わが軍の憂鬱な突擊作戰に恐れて敵は兵力で追尾せず、皆月減法砲彈を浴びせて來た。そして二十日の夕方部隊は目的を達して○○司令部に到着した。

ガ島は文字どほり味方の肉彈と敵の鐵との死闘であつた。敵の飛行機と味方の素手との戰ひであつた。現に戰ひつゝある南太平洋の苛烈な樣相もそれと變らないのだ。「一機」「一發」――前線の兵隊はそれだけを頼みにしてゐる。

★山田中尉記

（毎日新聞掲載）

軍旗に誓ふ敵擊滅

我々の攻擊地ガダルカナルとはどんなところであらう。命令を受けた時私は中學時代の地理教室を思ひ浮べた。だがどうしてもこの島は記憶に出てこなかつた。南溟の一孤島だがこの島は日米決戰の鍵を秘めて嚴然としてあるんだ。

わ が四國の半分位、海岸線のところだけ椰子林、これは植ゑたものらしい。そこは平地で海岸から百米――二百米奥へ續いてゐる。岩石も多い。この二百米の平地をすぎると、中は三百米乃至五百米の山である。山はジャングルで人跡未踏、中へ入るには蜘蛛の巣を拂ふやうにして行かねばどうにもならない。道もない。原始林その儘しかも内地の森林の如き美しさ、優しさといふものが微塵もなく何かかう突つかゝるやうな、キワだつた凄烈な奥深い感じがあるだけだ。こゝで日米兩軍の決戰死闘がすでに展開されてゐる。私はこの島に友軍の急をきいて馳せつけるのだ。

香 港攻略戰一番乘りの土井部隊、その中に小隊長として指揮をとつた自分であつた。あの戰ひにカセイホテルからユニオンジャックの旗を引づり降ろした我々が、その手でまたも星條旗を一本殘らずガ島の島内から引拔いて仕舞ふかと思ふと胸がうづく。香港攻略の及を返しスラバヤに入つた我々は〇月〇日此處を出發することゝなつた。出發に當つて部隊長殿は、

「今度こそ我々は日米決戰場のまつたゞ中に入る。我部隊は生死一如、皇軍魂を思ふ存分發揮することが出來るのだ。それ〳〵持つてゐる力を試めすに最もよき試練の場所でもあると信ずる」

と訓示された。何處へ行くとも決戰場の名稱は明かにされない。だが一同はすでにこれはガ島進軍であることがいはず語らずのうちに判つてゐた。

け ふあるために我々は生き永らへてきたのだ〃やるぞ〃やるぞ〃きびしい兵隊の決意が眉宇に漲つた。千人針を締め直す清潔な下着をつける。すべて出陣の勇士のたしなみである。そしてもう一度部隊長殿の激勵の辭を頭の中で咀嚼してみた。

任務のためには死ぬまで頑張れ
生死の境に迷ふ勿れ

〃ヨシッ〃誰の覺悟も決つた。雨の降る晩である。星がよい、沖には船が待つてゐる。新戰場への首途の船であり夜である。兵馬騰々、船段をふみしめて船艙に入る。靜中動、船は一路南へ〳〵と進航する。誰一人語るものがない。新たなる戰ひに對する闘魂が心内で燃え立つてゐるのだ。

新 部隊を乘せた輸送船は〇日ブーゲンビル島に着いた。ブーゲンビル島の地形はガ島にソックリである。密林の深さもまた同じ、部隊は此處でまづガ島攻略の訓練をやるのである。

攻撃、防禦、準備

これは實戰より骨が折れる。この訓練中にも日米兩軍の血戰の情報が次々に傳へられて來る。氣が氣でない〃いま行くぞ〃それまでの辛棒だ。あと一頑張りたのむ、心の中にさう言ひ乍ら汗にまみれた訓練を重ねた。

ジャングルで炊爨をする方法

日中飯をたけばすぐ敵機に發見される。夜ジャングル内で特殊な溝を掘りこの中で火をたく、その際その上は天幕で蔽ひ、天幕は更に草木で擬裝する。

實地にやつてみる。味方の兵隊が高いところでこれを眺め悪い場合は何回でもやり直しをやる。この炊爨がウマク行かなかつたばかりに敵機に味方の位置を知られ爆撃された例が幾つもある。飯を炊くにもこの

苦勞が要るのである。これが一通り終るとジャングル通過の方法である。敵が制空權を持つてゐる場合大部隊の通過進撃は密林突破以外にない。

千 古斧鍬のジャングルそれを切り拓いて部隊が進むのは莫大低ではない。一本伐つては一歩進む、百本伐つては一車進む、人も馬も砲も戰車もみなこの道を作つて通るのだ。兵隊の顏も手もジャングルの反撃にあつて血しぶきがふく。斧もつ手掌は數十の血豆が出來る。それでも手を休めてはゐられない。豆が潰れる、痛みはいよ〳〵はげしくなる。腹は減る。しかも一刻も爭ふ前線の戰況を手にしつゝ行ふ訓練でありこの訓練でたふれる兵隊は數へ切れない。

これが終れは今度はジャングル内の突撃、接敵動作、連絡方法、毎日々々起床と同時にこの訓練は繰りかへされた。訓練中にも敵機は何回となく頭上を飛んでゐた。部隊の行動を偵察、ガ島本陣へ連絡してゐたのである。夜もなく、晝もない訓練の一ケ月は過ぎた。もう大丈夫我等の前には不可能なる事はなくなつた。

谷あらば梯子、川あらば船、たとへ劍の林、地獄の火山があらうともふみ破つて進む必勝の信念は出來た。

十一月三日、鮮やかしき明治節、花かぐはしい梨の香が南の海を渡つて祖國から訪れてきたやうな日である。日本晴れだ。いつにない天候は南海の空に一片の雲だに認めない。

劍を拔いて宮城を遙拜すれば燦たる朝日はあたりにきらめき兵隊の顏は自信彊々こよなく美しい。

式 典が終るとまづ早川部隊にガ島先行の出發命令が下つた。再び部隊長の訓示を聽いた。

〃部隊はガ島敵陣東側の地點に上陸を敢行する。再生することを思ふな、これが最後である。只今から軍旗に最後の別れをする。

寂として聲のない中を軍旗を迎へるラッパが高らかになつた。嚴肅、莊嚴、兵隊の身體は埋像の如く微動だにしない。少尉に捧持された軍旗は〃いま激戰の庭に立つ〃將兵達の前に進んでピタリと止つた。仰ぎ見る眼に竿頭の金色の御紋章が痛いほど沁みこんで眼があつくなる。この御旗の下誓つて敵を撃滅せん、兵隊の胸の中をこの決意が稻妻のやうに走つて行つた。どの顏もどの顏も撃ちてし止まんの烈々たる信念に滿ちみちてゐた。その顏色、その態度、日本民族ならではの感が一入深い。かくて兵隊は勇みに勇んで、出發の第一歩をふみ出した。

送るものも、送らるゝものも〃白木の箱〃を考へてゐたに違ひない。そして白木の箱の次には最後の任務達成が誓はれてゐた。

いよ〳〵敵前上陸の秋いたる。今までの敵前上陸は味方が制空權を握つてゐた條件のもとに行つたのであるが、今度は敵航空機亂舞下に行はれるのだ。至難中の至難である。

兵 隊達は一人々々米一升づゝを南京袋に入れ、これを繩でしばつて肩にかけ彈藥も同樣持てるだけ持つた。中には一人で千發も背負ひ海へ落ちたらそのまゝ沈んでしまふほど持つた兵隊もゐた。敵前でもし敵

の爆撃により一人がやられても一人でもよいから上る。上つたら直に戰鬪に移る。そして一人でもよいから敵を殺す。これが各自に與へられた命令である。

○日の夜十七時頃だつた。堂々たる帝國○○艦○○隻に兵隊達は分乘した。が島は月の前にある。南十字星が黒い艦艇を一隊黒く波の上に浮彫りしてゐる。星は銀の豆を撒いたやうに、いまにも兵隊達の頭に降つて來るやうな美しき錯覺におそはれる。

〝鐵の雨〟に備ふ防空壕

全速力で波濤を蹴る艦内の動搖ははげしい。立つてはをられない。何かに摑まらねばツツチヘゴロ〳〵、コツチヘゴロ〳〵、大變な騒ぎである。この有標をみた海軍の兵隊さんはみんな自分達の床を陸軍の兵隊さんに提供してくれた。君達には上陸すれば生死を越えた激戰が待つてゐる。いまのうちにからだを休め思ふ存分働いてくれ」と美しい心と逞しい手を陸兵達に差しのべてくれた。あすなき戰爭を續くる兵隊ほど多感なものはない。泣いて海軍の兵士に禮をいふ。陸海渾然一體の情景、これが眞の日本の軍隊なのだ。服こそ違へ、兵種こそ違つてはゐるが任務と軍人精神は只一つである。此處に日本軍隊のよさがあり日本軍人の强さがあるのだ。その上艦内では美味しいおしるこ、サイダー、コーヒーなどの御馳走が陸兵達にはなむけられた。

海 軍ではかうしたものを常に飲み食ひしてゐる譯ではない。敵艦を撃沈した時、敵陣（港）を占領した時などの戰果祝賀用としてのとつときものである。これをあすの戰場に立つ陸のつはものに自分達は食べずに捧げたのだ。

南太平洋上夜の靜寂、星光のもと海のつばものゝ美しい心根に對して二度、三度決意を翻ふ陸のつはものだつた。意氣正に天を衝き最早我を邪魔する何物をも破碎して上陸するといふ氣持が萬人一心となつて燃え上つた。部隊長の精神はその儘一兵隊に傳はり、一兵隊の氣持はその儘部隊長の胸に續いてゐた。

○日二十一日、敵前上陸には絶好の機會である。艦はタサフアロング地點に橫付となつた。敵は氣づかない、航空機も現はれない、東方の方面で敵の重砲聲がしてゐるだけである。いつも波荒く船の停ることなど思ひもよらぬといふこの海岸がこの夜に襲つてさゞなみ一つ立たない。日頃の上陸訓練その儘に一兵も損せず上ることが出來た。私はこの時ほど天佑と神助を胸に聽へたことはなかつた。兵隊達はむしろ强合が拔けたやうな調子部隊長はとみれば天の一角に合掌瞑目してゐる。御稜威と天佑神助に感謝してゐるのであらう。部隊は上陸と同時にジャングル内に入つて行動を秘匿した。

次の瞬間にはいま上陸した地點に敵の照明彈が落されてあたり一杯昼をあざむく明るさとしてゐた。だが上陸は間髪を入れずに行はれたために完全に敵の眼を掠めることが出來た。アンボン、チモールで行はれた二回の上陸演習が此處で實を結んだのである。

戰 爭に休みはない。ジャングル内では

各隊長の〝集れ〟の號令が夜のしゞまを破り、分秒の間に全部隊の集結が行はれた。米、味噌、醬油、さうした糧秣は集積所に委託して身輕になつた兵隊はすぐ第一線に向つて出發だ。時速○○節の艦艇で搖られに搖られた上米、彈藥を背負つて上陸した兵隊の身體は綿のやうに疲れ切つてゐるが休む暇がないのだ。よし休む暇はあつても〝いま第一線は激戰中〟の報告に接しては休んでゐられない兵隊達である。〝ヤツツケロ〟それ行け、それ行け、掛聲も勇く隊列はすゝむ。暗闇の密林は一寸先も見えない。盲目の夜行軍である。誰か、闇を出る時從から負傷の時に使ふやうにと與へられたといふハンケチを取出し、自分の前を歩く兵隊の背中につるさげた。これが行軍の唯一の目じるしとなる。次の兵隊が前に倣ふ、白い背中の兵隊が長蛇の如く進む。更に前線に出よの命令を受ける。海岸道へ出て一路千里の行軍に移る。この頃敵は味方を發見し砲撃と航空機により反撃を加へて來たので、彈道の間斷を計つて前へ〳〵と出る。

百 武臺に到着したのもこの日である。この頃漸く敵機の來襲がはげしくなつた。我々を發見したのだ。イヤにデツカイ空の要塞をはじめカーチス戰鬪機、初めてお目に掛るコンソリデーテッドなど青空せましと頭の上にノシ掛つて來た。ブーンブルーン無氣味な爆音、豆をいるやうな機銃掃射鐵の雨が降るやうな爆彈身の置場がないといふのはこの事であらう。强行軍のあとこの爆聲に備へるため防空壕を掘り始めた。

至近彈がそこ〳〵に落下する。空を仰いでゐる暇もない。決戰だ、これがほんとうの日米血戰なのだ。兵隊は心憎いほど落つき拂つて穴を掘つてゐる。

この地點は、何處を叩いてもみた岩磐である。この穴ほりは全くシンが疲れる。工兵さんの持つ、シヤベルなど全然役に立たない。重い十字鎬をそれこそ一分の休みもなく打ちおろす、十字鎬と岩石と人間力の三巴戰である。怒ちのうちに軍衣が汗でビツショリ、三百匁の服の重さが一貫五百匁になつたといふ。服を脱ぐ、更にシヤツを脱ぐ、裸になつた。もう脱ぐものがない。背中といはず手といはず土と汗でドロンコ、全く泥と兵隊の感がある。

ま た爆撃だ。防空壕はまだ出來ぬか。部隊長の聲がする。氣が氣でない。五百米の百武臺の下を流れる勇川に敵の奴また一トンの盲爆彈をオツコトした。勇川は幅二十米位、水深四米ばかり、そこへこの爆彈が落ちたのだから川がなくなつたかと思はれる程の騒ぎ、この爆聲のあとには無數の名の知れない魚が陸地に打あげられて死んでゐる。敵機魚を殺す、全くその通りだつた。魚はほしいがこの魚を拾つてをれば壕の完成がおそくなる。誰一人として無數の死んでゐる魚、ノドから手が出るほどほしいこの魚を拾はうとしない。それほど壕の完成が急がれてゐたのだ。

夜通し掘つた。最早兵隊達の力は盡きた。そしてヤツと掘りあがる。木を倒して掩蓋を作るもう大丈夫だ。翌て南の朝が來た。

決死の〝モグリ戰術〟

朝のしらせは五機の敵機ではじまる。み

んな壕に入る。爆弾が落ち始まつた。機上から敵は味方の陣營に我が部隊の位置を知らせたらしい。爆撃と共に砲撃が加はつて來た。前大戰には一坪平均一トンの鐵量を使つたといふが、いま私達のゐるこの防備線に敵が打こむ鐵量は一坪最低に見積つて二トンはあつただらう。まるで部隊は敵の飛行機の演習場の下にゐると全く同じ狀況である。一日、二日、三日と連續つた。晝も夜もない爆弾と砲弾、部隊が最初きの丘陵地帶に陣地を構築した時は、付近は見上げるばかりの大木が繁り、地形からみても完全に敵をあざむく作戰要地であつた。それがどうであらう。三日目の朝壕内から首を出すと付近の山には綺麗に草木がなくなり、見渡す限りの廣野と變じ敵陣から丸見えになつてゐた。大木といふ大木、草といふ草、帶で掃いたやうに綺麗になつてゐるではないか。

一分の空間もなく弾列を作つて飛んで來た敵弾が大木をたふし草をないで仕舞つたのだ。それほど敵の反撃は物の多いのをたよりに滅茶苦茶にやつて來るのだ。この中でも、兵隊達は少しも平常と變らなかつた。そしていよ〳〵必勝の信念を練り鍛魂を燃え立たせたのだ。

かくするうちに狀況は一變した。部隊は直に前線に出動すべし、の命令を受けた。つはもの達は一齊に萬歳を叫んだ。うつくつしてゐた防空壕の中の憤りをいまこそ敵の肉體に思ひ切りブツつけられるのだ。服裝は出來るだけ身輕にした。遺書も書いた。そして誰も彼も一人でもよい、敵を突つ殺さぬうちは死なんぞ、敵のヒョロ〳〵弾丸で死んだなら俺は父親にあの世まで勵當される。

私はこの兵隊達の綽々たる餘裕と鐵の如き意志、天を衝く氣魄を知つて〃このいくさ絶對に勝てる〃の覺悟が出來た。

ガ島の激戰で僚友若林中尉は敵弾で兩手兩足を切斷され、胴體だけとなり乍らも部下の兵隊に背負はれて大隊本部に戰況報告に戻つた。その時隊長は中尉に「後方に下つて傷の手當をするやうに」と優しくいはつたが、鮮血にまみれた中尉は、

「お言葉を返して申譯ありませんが、私は生き永らへて偉くならうなど〻決して思つては居りません。私の持つてゐる總てを　天皇陛下に捧げ奉らうとして私は戰つてをります。私は大日本の天壤無窮を信じます。私は私のあとに續くものを信じます。私は私と共に香港攻略以來死生を誓つて來た部下達と一緒に死にます。これが私の武人としての念願であります」

といひながらまた部下の肩におはれて中隊に歸つて行つた。この若林中尉の持つてゐる心が即ちガ島攻略に當つた我々兵隊全部の持てる精神だつた。火のやうな撃敵精神は兵隊達の全身を包んだ。サア行かう〃そしてやつつけよう〃一部は高さ一千米のアウステンサン後方見晴山に敵の背後をやるといふ攻略作戰をとり、主力は百武聯隊方の砲兵隊に陣地を占領、またも迫撃砲と爆撃に備へて掩蓋壕を構築その中へ入つた。

敵は依然として凄い兵力である。歸つて來る將校斥候の報告はいつも我の十倍乃至十五倍の兵力だつた。部隊長の積極果敢な攻撃命令はこの十數倍の敵を撃滅しろといふのだ。不可能を可能とする。この戰法は香港攻略戰以來幾度か經驗ずみである。皇軍一度たてば世界の如何なる軍隊或は要塞、軍港と雖も不落といふことなし〃モグリ戰術〃これが案出されたのもこの戰である。戰爭は昔に還る。日露の役にとられた坑道戰と相似てる。小數とみて我を侮る敵は夜になるとレコードをならしダンスをやる。人を食つてゐること甚だしい。ダンスをやつてゐる幕舍のそばには迫撃砲、機銃、重砲などが圓筒形にまはりを取卷いてズラリと並んでゐる。これがないと彼等はレコードもやれなければダンスもやれない。しかもダンスは好きなことよりも何時日本軍におそはれるかわからないのでオチ〳〵眠れない。眠れないまゝにダンスをして警戒を夜通しやつてゐる。これが敵の正體なのだ。

今宵は月もなければ、星のあかりも晴い。モグリ戰術には絶好だ。○○中隊長以下三十六名の敵陣突入の決死隊がつくられた。

何しろ敵は二萬ゐるんだ。そこへ僅か三十六名で斬りこむ。こんな大膽なことが何の、考へる暇もなく決行されるのだ〃霜は軍營に滿ちて〃隊長は謙信の詩を吟じつゝ靜かに軍刀の柄を握つてゐる。おそらく川中島の戰ひに信玄の陣に單騎ふみ入つて長蛇を逸した、謙信の心境に思ひを馳せてゐるのだらう。しかし隊長はかういつた。我は決して長蛇を逸しない〃遺恨十年長蛇を逸せず〃〃ヨシ行けッ〃サビのある隊長の號令下モグリ隊は晴にまぎれて敵陣へ迫つて行つた。待つこと○時間異樣なざわめきが敵陣から起つたのが手に取るやうに聞える。モグリ隊が拔刀、銃劍で突つこんだのだ。あたるを幸ひの言葉は實にこの時のことをいつたのであらう。

光りを晴幕で遮蔽した中で夢のワルツのステップをふんでゐる米兵のところへ、白鉢卷の日本兵がドヤ〳〵ッと入つたのだからたまらない。帽子を横ちよにかぶり帶劍とつて躍り狂つてゐるところへ踊り込んだのだから格闘する氣魄すらない。

右往左往する米兵共混亂の中を右から左に左から右に斬る、突く、銃の臺尻でひつぱたく、全く無人の境を進むが如く次から次へたふして行つた。夢ならぬこの現實に狼狽して、野砲の射出しをはじめた敵もある。日本軍は足もとにゐるんだ。

頃合をはかつてこの突入部隊は、血のしたゝる軍刀、銃劍を抱へて本陣へ歸つてきた。

一人として敵手にかゝつた兵はゐない。このモグリ戰術は次から次へ夜毎にその數を增して行はれた。夜になると〃日本軍コワイ、コワイ〃と敵がまづい日本語を覺え出したのもこの頃である。十二月に入つた日本軍大部隊上陸の情報を得た敵は、

〃日本軍が一ならこちらは十、十なら百すべて十倍戰法で行け〃の命令を出した。そして濠洲を基地として、島傳ひに急遽火力、兵力の大輸送をオッ初めた。

待てど友軍機來らず

そしてこの輸送のために敵海軍の機體地ツラギ軍港には數隻の戰艦があり、北東の島から毎日糧食、弾藥を巡洋艦、驅逐艦で

三杯――五杯とその補給に狂奔した。

この有樣が我々の陣地から手にとるやうによく見える〃畜生ッ畜生ッ〃兵隊達は地團太をふんで怒つた。

次の瞬間には日本の飛行機は來ないといふことを考へた。

そして日の丸も鮮かな銀翼の友軍機を胸に描いた。だが、たのむ友軍機は姿を見せない。

私 達はこの時ほど飛行機のないのを悲しく思つたことはなかつた。悠々たる敵、小面憎い敵の輸送陣、日本の飛行機が來たなら全部やつゝけられるのだがと思ふと、友軍機の來ることを心の中で祈らずにはゐられなかつた。だが日本機は來ない。敵機は朝から晩まで我等の頭上にあり、しかも日本機のこないことを知る敵機はノンビリ構へて旋回してゐる。〃畜生ッ〃またしてもこの言葉が出た。はぎしりして空をにらむ兵隊の顏をみよ、友軍機はまだか〳〵、この時ほど時間の長く思はれることはなかつた。我等の陣地は高い、脚下に南太平洋の涯なき海が青く澄み切つてゐる。その中にルンガ沖がはろばろと見える。絶景の大景觀であるが、そこには敵の巨艦が浮んでゐるではないか。

〃補給をやつてゐるのだ〃

あの中へ空から必中弾を、だがたのむ航空機がこちらにはない。私は思つた。現に航空機がせめてこの時二十臺もこちらにあつたならあの補給陣を叩き潰せるのだが、敵のやつてゐるのを手を拱いて傍觀してゐるよりほかにすべがない。私は日露の役の常陸丸殉難のことを聯想した。

軍 旗を燒いて敵艦包圍の中、船と共に自沈して行つた須知中佐以下殉忠のつはものを、手に〳〵銃は握れども船その船でない霧に戰はれなかつたあの無念さを、あの胸中を、いま我々はその口惜しさをジッと胸にこらへてゐるんだ。ガ島の敵は敵のほこる海兵隊であつた。しかも交代は頻繁に行はれる。大部分が學生の儘出て來たものが多い。敵が敗走した時私はフェルカリーといふ學生兵が本國の學友にあてた手紙を拾つた。それにはかう書いてある。

我々はシアトルを出發した際に何處へ行くのかわからなかつた。指揮官は我々にかういつた。

「今度はお前達を夢の國へ連れて行つてやる。戰爭ではないのだ。勿論警備も警戒もやるのではない。綺麗な南の國の女性を相手に面白くノンビリと希望にみてる日を送らせてやる。どうだ嬉しいだらう」

だが現地へ着いて僕はビックリした。胸に描いてゐた美しい女もなければ、樂しみもない。あるのは日本軍の砲彈と突擊と夜襲と惡疫だけだつた。本國の生活とはまるで地獄と極樂の相違がある。君にこの便りを認めてゐる僅かのこの時間にも、私の前後左右には日本軍の銃砲彈が無數に炸裂してゐる。我々は一分間でもノウ〳〵と足を思ひ切りのばして眠れたことはない。同じに船のケリー君は遂にマラリヤにやられた。惡寒戰慄高熱四十二度、こんなことが隔日に續く。特効藥のキニーネがない。あるところにはあるのだ。假に○○指揮官の鞄囊をみよ、この中には、澤山のキニーネが入つてゐ

る。だが我々まではその特効藥はこないのだ。飯が食へない、身體が日毎に衰へる。結局こんな僻地で彼は欺かれたる自分の馬鹿さを笑ひつゝ死んでしまつた。

この時一片のキニーネが彼に與へられたなら彼の生命は助かつてゐたであらう。

私はもうこれ以上書けない。書ないことがお國のためであると信ずるから、これは君に後學のため敎へるだけです。

此處で便りは終つてゐる。おそらくこれが本國出發以來最初の便りであり、學友に、欺かれて「戰地へくるな」といふ警告でもあらう。

誰 も彼もこの一文によつて大學生の儘引つ張られてきたことが判る。大體學生兵の大部分はこの學生兵と同じ觀念を持つてゐるが、これと反對には別な便りを書いてゐたものもある。これには日本陸軍の階級とか、日本の軍律、戰陣訓の一節、日本軍の心理などを米英的に勝手に論斷し、日本を認識させようと本國人によびかけてゐるものがあつた。また彼等が幕舍を張つた儘逃げ去つたあとにポスターが多數殘つてゐた。それには、

航空士になれ、航空士こそワシントン精神に生きる愛國の民である。征け大空へ！

また別の青いポスターには、まつかな字で、

航空士！　英雄！　航空士！　救國士

と呼びかけてゐるのがある。敵も必死だ。そして飛行士に無理矢理にかりだてゝゐる空に對する敵國の周章ぶりをハッキリと看取することが出來る。

十二月までは兎に角戰爭は緩慢で敵も我が猛攻には耐へられず防禦、退陣、防禦の連續であつた。ところが旗色の悪い狀況に作戰を一變した敵は驅逐艦、巡洋艦、魚雷艇、快速艇を以て海から攻擊を加へて來た。續いて砲擊と艦砲射擊が減襲をのばして來た。味方の陣地は砲擊、艦砲射擊、爆擊、機銃掃射のまん中にはめられてしまつた。

特に敵機は兵隊よりは糧秣と補給路を目標とした。

敵にいはせるとどんなに强い日本兵でも、糧道を絶たれたならいくさは出來ないといふところをねらつたのだ。

糧秣の補給愈々困難

雨ぞふる。けふもまた戰ひの庭に雨がふる。十月の聲をきくとガダルカナルは雨期に入る。くる日も〳〵雨、雨、雨だ。十二月を迎へてからは殊に雨の反抗はヒドイ、單衣もシャツも皮膚も筋肉も雨が浸透し、これは兵隊にとつては彈丸より恐ろしかつた。これが眼因で肉體を弱めるつはものも數知れなかつた。これが困苦といふものだらう。兵達は雨と戰ひ、敵と戰ひ、そして自分自身の肉體と戰ひを續けた。

烈々たる死ぬまで頑張るといふ精神は全陣地に漲つて士氣は愈々昂まつた。壕の中は土砂降る雨で一寸二寸と水かさを增す兵隊の膝から下は水につかつてゐる。水壕の中でジッと對陣してゐる苦しさほど身にしみるものはない。こちらで一發敵陣をうてば、反射的に敵からは百發のお返しが來る。兵隊達は敵陣に見えるアメリカ兵を發

見、小面憎いその態度に憤慨幾度か機銃の引金に手をかけたが、次の瞬間には引金から手を放した。それは百發のお返しが滅茶苦茶にくるからである。

壕の中からは寸秒の間でも頭を出せない。それほど猛烈に敵彈がくる。小便をするにも彈丸の間斷をねらつて僅かの間にやつてのける。いのちが惜しいのではない。あの憎い敵に一突きでも我が及をつきさゝないうちには死なぬ。あだには死なぬといふのだ。そして突擊の機會を

水一杯の壕の中で待つてゐるのだ。

その上壕の中には内地ではみられない大きな蟻、マラリア、デング熱を媒介する蚊群がワン〳〵するほどゐる。叩き落しても叩き落しても押しよせる〃この米機め〃兵隊達は右に左に叩きおとす。

か うした苦しい戰闘が幾日か續いた。勿論兵站線は絶たれてゐる。糧秣の補給はいよ〳〵困難となつてきた。一握の米でも分け合つて食ひのばしいくさを續けた。だがそれも長くは續かなかつた。當時の狀況はかくの如く糧食なき戰闘を續けざるを得なかつた。兵隊の士氣はます〳〵昂れども肉體はこれと反對に日に〳〵痩せ細つてくる。眼ばかりらん〳〵とむいてゐる。氣ばかり獅子の如く猛つてゐる。だが陣列の兵隊達の横顔は此處へ上陸した頃とは全く違つてゐた。頰をみよ、カン骨ばかり出つばつて恐ろしいようだ。

ゲンなりしたその皮膚にはあり〳〵と食はざるものゝ特色が出てゐる。後からみてみよ、どの兵隊の首筋も頸骨のみ二本出つばつて肉こけたことが一目でわかる。隊長は兵隊の後ろ姿にソッと手を合せた。

〃ありがたう〃よく戰つてくれた〃隊長もまた食はないのだが胸は兵を拜む心で一杯だ。兵隊はどんなことをしてでも米を運んでくる。

第一線陣地から友軍の兵站基地までは二十里ある。往復實に四十里此處へ行かないことには補給はつかない。この補給任務こそ戰闘以上の苦しさがある。第一番に十五名の兵隊が糧秣輸送のため選ばれた。

片 道二十里、勿論坦々たる大道ではない。一時間三千發の大砲、一時間延機數實に二百機、機銃小銃が雨と降つてゐるのだ。かくれる場所は椰子の葉藤、ジャングルの他にはない。我々が主陣地に至るまでに苦心に苦心を重ねて切り開いて設けた新しい道は敵に發見されすでに爆彈と砲彈の大穴で滿足な道ではなくなつてゐる。而もこの道を通らうものなら一人殘らず敵機の餌食となつてしまふ。兵站基地に辿るには道は駄目、大部隊の進行も不可、ジャングルからジャングルの中を山あらしの如くふみ越え潜り拔けて行く方法只一つしかない。兵隊達には戰つてゐる戰友に早く糧秣を持つてきてやりたい。たゞこの一念以外には何物もなかつた。密林から密林を猿の如く傳はりながら進んでゆく。晝はそれでも敵機に發見される。憎いメリケン機、機上から掃射をはじめる。日本兵が居らうが居るまいが密林を射つ、一歩も動けない。彈丸の雨が彼等のカンで山の中へ射ちこむのだ。もつたいない射ち方をする。この無駄彈丸は巨木の幹をうち、椰子の葉を射拔きジャングル内のトカゲまで殺してゐる。

幾度天を仰いで拳をふりあげたか知れやしない〃今にみろ〃〃今にみろ〃山本兵長も木村一等兵も腕を叩いて歯ぎしりを噛む。低空地上僅かに三十米位、色眼鏡をかけた青い眼、白色の顔がハツキリ兵隊達の網膜に映る。そして地上の我々をみては馬鹿にしたやうな飛行態度をとる。勿論我々の方では敵機など眼中にないが、彼等の機銃でやられたなら米は運べない。壕の中では前線の戰友が輸送隊の戻つてくるのを千秋の思ひで待つてゐる。執拗な敵機からのがれるために兵隊達は晝は密林に寢ね夜強行軍した。損害を最小限度にしたいからだ。

美しい武士道精神

二十里の道を進むのにかくの如き困難を突破して行くため、どうしても十日は掛つた。しかもこの十日間は兵隊達にとつて千日にも思はれる長い日だつた。

漸 く兵站基地に着く。これで目的地へ無事着いた譯だが、直ぐ第一線へ今きた無名の道を引き返さねばならぬ。南京袋、俵、風呂敷などに各自入るだけの米、味噌、醤油などをつめこみフラ〳〵する肩に背負つた。あゝこの委この勇士達の尊い委には泣けて〳〵仕方がない。基地では長途敵襲下辿りついた十五名のつはもの達をいたはり隊長は〃暫く休息してから出發する樣に〃と優しい言葉を與へたが兵隊達は、

〃私達は疲れて居りません。第一線には首を長くして私達の戻つて來るのを待つてゐる戰友がありますゝ〃

と答へつゝ休む暇もなく歩路についた。それは丁度母鳥を待つ子鳥の許へ急ぐ委にも似て神々しくもあり、美しい武士道精神もあつた。この美しい精神は、たとへ傍にあらずとも全線全體に通じてゐる。戰友達はこの心を五體に感じて戰つてゐるのだ。隊長は更に可愛い部下が途中で敵にやられたのではないか、不完全な地蹠のため基地——第一線間で方角を間違へたのではないかとそれのみを案じて神に幸を祈るのである。

あゝ陣中に咲く櫻花。

肩 にせる糧秣は道なき道を歩むため肩胛に食ひこんでくる。戰友同士が草の根に休んでシャツを脱げば兩肩に米の重味で荒縄が二本の血のあとをひいて殘つてゐる。腹が減つてきた。でも待つてゐる米には一指も觸れまい。これが輸送兵の申合せであつた。我々がこの米を一粒でも食べれば前線へ行く米が一粒へる。これが兵達の信念だつた。それがのまず食はずの輸送任務となつたのである。

ヤシの實をとつて食べる。が島にはヤシは何處よりも美しく結實してゐた。天を衝くやうな、南の國を表徵するその高い木にのぼつて幾つとなくモギ取り、これを唯一の食糧として米を運んだ。

基 地にくる時は十日間で辿り着いたが歸りは第一線まで十五日かゝつた〃糧秣がきた〃この一事は壕にゐる兵隊達に萬歳！萬歳！をいはせた。誰も彼も喜び勇んだ〃腹が減つてはいくさは出來ぬ〃この古來の言葉を破つて我等は戰つてきた〃我等は米はなくともいくさは出來る〃この氣魄で

戰つてきた。だが米がいま輸送隊によつて持つて來られたのを知ると、矢張り食べたいのが人情である。一粒の米に感謝して兵達の心は躍る。前線は敵の彈丸にたふれる兵隊よりは病で銃を執れなくなつた兵が多い。南國の惡疫は、壕内生活の兵隊を次々におそつた。三十九度——四十度の高熱をおして壕を出ない兵隊。

〃病氣では死なぬぞ〃

この氣持が病兵に銃をはなさせぬのだ。偉なるかな日本兵。

十五日の日子を費して運ばれてきた糧秣は忽ちなくなる。また補給隊が出なければならぬ。だが行く兵隊がゐない。

隊 長は暫く眼を閉ぢてゐたが、タツタ今歸つて來たばかりの輸送兵に再び〃基地に行つて糧秣を〃と命令する。命ずる隊長の眼には熱い涙がにじみ出て頬を傳はつてゐる。悲壮なる兵の顏にも〃何回でも行きます〃といふ決意が漲つてゐる。涙を以て見合す上官と部下、死なば諸共、心と心がピタリ結びつけられる。片道二十里、一斗五升の米を背負つて銃爆撃下輸送に當る兵隊の心はどんなであらう。日本人なればこそだ。そこには不平もなく不闘もない、大君のみ楯となるたゞこの一字があるだけである。だがこの糧秣補給も十二月二十五日以來ピツタリつかなくなつた。二十五日は大正天皇祭である。兵達は壕の上に日章旗をたてゝ、宮城に遙拜、撃滅精神を昂揚した。

こ の頃から敵兵力は今までの十倍となり、航空機は三倍に増強されドン〳〵、ブルン〳〵、一日中雷鳴の中にあるやうだ。本部で敵機の一日の延機數をはかつた。合計八百六十機、これが我々の頭の上を翔んでゐるのだ。朝六時半といふともうやつてくる。これが日沒まで續く。或時は低く、或時は高く、亂舞する。我等はこれに〃村雀かしましい〃の言葉を送つた。まるで繊の如き敵機である。

〃迅雷的戰法〃て前進

遂に補給路は絶たれた。もう食はずに頑張るよりほかにない。日本の武士は古の昔より〃食はねど高楊枝〃の氣概と日本人的床しき香氣を持つてゐた。その强さ、その美しさは今なほ連綿として兵隊の魂となつて續いてゐる。

航 空機の爆撃は砲撃、自動小銃の音と交錯し今までのやうなドン、ドン、ドンなどゝいふ生ぬるい音ではなくなり、雷鳴の連續音の如きノベツ幕なしの彈音に變つてきた。壕の上を一寸か二寸すれ〳〵に銃彈がヒユツヒユと飛んで行く。

いよ〳〵物と精神力の戰ひとなつてきた。雨はもう何十日となく降り續いてゐる。着てる衣類一切雨水でづぶ濡れになつて仕舞つた。この濡れた衣類を雨の合間にチョツピリ干したいと思ふがそれすら出來ない敵彈の雨。

最初の頃は敵陣に對して味方の陣前にはジヤングルがあり、これが地形的に唯一の援護遮蔽物となつてゐたが、これも最早やきのふ今日の敵の砲撃で見事？ に啓開されこちらは敵からまる見えとなつた。數十町に亘る海岸線の椰子林も無殘敵彈にたふされて仕舞つた。

倒 れたその椰子の木に這ひよつて果實をとつて食をとる日本兵には尊き手數が省けたことだけでもモツケの幸ひだつた。突擊の機會は刻一刻と迫る。

だが低空する敵機の下では全く犧牲を多くするだけで進擊は意の如く行かない。一本の敵開した友軍陣の上を釘づけ飛行をやる。これは一寸の休みもなく我等の頭上を飛び去り飛び來つて日本軍に壕から出る間隙を與へないといふ敵の戰法だ。

なんといふ執拗さであらう。こちらが優勢な時はこちらにいくさをさせずに旗を巻いて逃亡するか、或は白旗を揭げる敵ではあるが、こちらが小勢、加ふるに科學兵器も極めて少いなどゝいふことが判ると大軍を以てカサに掛つて攻めて來る。これが米英軍の正體であり米英軍の弱點である。

こ れは戰ひにのみ慣つた軍ではない。彼等はいまゝでこの手で原住民達を虐使し威嚇し搾取し續けたのだ。いまこそ彼等は正義日本にその誤れる白人優越の觀念を叩き潰されるのだ。數にたよる彼等の精神上のオゴリ、私はこの戰ひでハツキリと見てとつた。ムンダの空中戰でこんな話をきいた。學生兵による敵機百六十機がムンダに來襲の際友軍は敵の三分の一の機數で逆擊その六十機を叩き落した。その時は流石に敵も驚いて蜘蛛の子を散らすやうに逃走したがその翌日まだ百五十機がやつてきた。この日もまた我が方は昨日と同樣六十餘機を撃ち落して潰走せしめた。そして第三日を迎へた。この日もまた前回同樣性懲りもなくやつて來たが百六十機の大編隊だつたといふ、しかも三回とも來襲した敵は同じ學生兵だつた。

このやうに敵は我が方に機數が少いとみて取ると叩かれても、撃ち落されてもハヘの如く反撃してくる。

この敵の數にたよる心理は陸海空ともみんな同じなのだ。

そ の敵と我等はいま少數の兵力を以て對峙してゐるのだ。またも敵機が頭上スレ〳〵に右から、なゝめ左に六機編隊で翔けていつた。〃この機を逃すな〃隊長の號令のもと最前線の兵隊がまづ壕から銃劍を小脇に擬りでた。機銃掃射のため機首を返す暇がない。

〃態アみやがれ〃

兵隊達は最後にはきまつて本能的に出て來る江戸つ子といふよりはモツトピツタリ全日本人的なこの言葉を口にするのだ。

〃態アみやがれ〃

この言葉が出る度に五十米づゝ前進する。この迅雷的戰法には無數の敵機もどうする暇も餘裕もなかつた。

〃何を小癪な〃

と言ひたげな飛行ぶりでこちらの頭上に敵機が來た時には兵隊達は巧に僞裝し、或は地物を利用し、岩藪に、椰子の根元に身を伏せて敵機銃眼からスリ拔けてゐた。

〃これも死角の一つであらう〃

虎穴に入つて虎兒を得る。日本軍傳統のいくさ上手は次々に行はれる。大部隊が堂々と進軍することは出來ないが五十米、また五十米と進み行くジリ押し進擊は漸く敵を狼狽させ始めた。狼狽してくると敵のとる手段は一つしか無なる。

そ れは山と積まれた砲彈、爆彈を無暗に射つてくることだ。兵隊の耳は鼓膜が破

れっんぼになる程だつた〃構はずうたして置け〃これが友軍の命令である。こちらは一發擊てば必ず一人を殺すといふ確信がなければ引金はひかない。銃後の國民が夜の目も寢ずに働いて作り出したこの彈丸、なんで敵の如く心なしにうたれようか。

〃日本の彈丸は生きてゐる〃

逃げおくれた敵を捕へた時一番最初に語つた彼の言葉はこれだつたさうだ。敵兵のいふ如く、

〃日本の彈丸は生きてゐるのだ〃

〃一億の擊ちてし止まむの鬪魂がその儘こり固まつてゐるのだ〃

〃やがてこの彈丸はルーズヴェルトの頭に一發お見舞するんだ〃

銃後國民の不休の戰爭活動に對する感謝の氣持はこの擊滅必滅の焰となつてつはものゝ胸に燃さかる。〃あゝ偉なる哉日本軍〃私は激戰のさ中にもつはもの達にこの言葉を幾度聽けたか知れやしない。

道は一つ〃百戰百勝〃

十二月八日の大詔奉戴日を迎へた。この戰爭が起つてから一周年の記念日である。敵の砲彈下この日は部隊長の宣戰の詔書捧讀があり、遙かに大君ゐます　宮城に向つて拜禮、敵擊滅を誓ひ合つた。

過　去一年間激戰のあとを顧みた。地圖を出して、私は占領地を兵と共に數へてみた。十六年十二月八日英支國境深川地區を擊破してから一年間、九龍を落し香港を占リビルマを奪ひ馬來、スマトラ、フイリツピン、ジヤワ、アンボン、チモール、そしてソロモン群島など十指を以ては數へ切れない。

私は香港一番乘りのあの日の感激を出發點に、我が戰ひのあとをふり返つて、御稜威の偉大さに感泣、これ久しうした。兵隊もまた同樣である。七生報國の精神はます〳〵強く大楠公の昔を偲んで意氣ひとりでに昂る。

〃奉戴日の大勝〃

御稜威に臣等お答へ申しあぐるの道は百戰百勝の道一つあるだけだ。

〃けふは機先を制してブツ放せ〃

隊長の豪放な聲がどんなに兵隊達を喜ばしたことだらう。

〃ブツ放せ〃といふ言葉は兵達にとつては何物にもかへ難いほど嬉しい命令だ。彈を持して放たなかつた味方の重砲陣地がまづ火を吐いた。機關銃、迫擊砲、小銃が續いて火蓋を切る。

敵　の火力、兵力は勿論このころは我に十數倍となつてゐた。從つて彼等の鼻息は荒い。

〃この一戰で、日本軍を一擊に擊碎すべし〃

などの途方もない命令が出たのもこの日であつた。その陣中へ日本軍から猛烈な砲擊をくらつたのだからたまらない。彼等は完全に出鼻を挫かれたが混亂の中からヤツト立直り應戰してきた。

〃一發必中の砲一門は百發一中の砲百門にまさる〃

この金言はいま現實を以て示された。しかも砲門の比率は正に百對一であつたと記憶する。

だが我れに數十倍する巨砲が一齊に門

を開けば〃まぐれあたり〃もあり果然激戰また激戰の嵐をよんだ。

そして我が隊で推定した、この日の敵砲彈（我が陣地に炸裂したもののみ）は四千發を越えた。

勿論友軍の砲身も、熱火の如く燒け狂つた。だのにこの敵彈による損害は準備が十分であつた故殆んどなかつた。

こ　れにひき換へ敵側では砲門を友軍の狙ひ射ちで、損折したものが十門以上もあり、死傷者は數限りなく赤十字章を印した自動車が終日右往左往してゐたのでもわかる。この激戰の最中にわが軍のはうから挺身隊が派遣された。寺澤、中澤、若林、鹽田大尉等が敵陣深く潛入殊勳をたてたのもこの時である。

この陣地の地形上大部隊の進擊は出來ない。そこで將校を長とする少數の挺身隊を作り、敵に近づいて敵陣を脅威するこれは完全に効を奏し、米兵の心膽を奪つた。

敵　の防禦陣地は山のふもとにある。一見するとキャンプをしてゐるやうだ。アウステン山からみるとわが稻垣部隊の陣地は手にとるやうに見える。飛行場も絕好の場所にある。また幕舍には米兵が一ヶ所十名——乃至二十名づゝ入り、この幕舍が白百合の花をさかさにしたやうに百も二百も見渡す附り設定されてある。それがアウステン山の大景觀と調和してこよなく美しい。我々の輕壕生活とはまるで大名と乞食ほども違ふ。その上幕舍には何一つの僞裝がある譯でなく、至極ノンビリしてゐるこの幕舍もこの激戰の一夜があけると美しき逆白百合の花はまはらになつた。正確な我が砲擊でふきとばされた結果である。それでも僞裝する考へもなく、逃げるでもない敵である。きのふの戰爭は忘れたかのやうだ。ほの〴〵と東天に太陽が昇りはじめた。暫らくぶりのよい天氣。

青空は內地の空にまで及んでゐるやう雲もなく、內地ならば晩秋の陽光が兵隊の軍衣を汗ばませはじまつた。戰爭にこんなことがあるだらうか、私はこの眼で米兵の蹶起振りをみた。きのふあれほど友軍に〃コツピドク〃やられた敵がけふは朝から幕舍の外に〃ゴザ〃を持ち出しちゞれた赤い帶に安全剃刀をあてゝゐる。

陣　中にあつてもオシヤレを忘れない彼等である。軍規も何もあつたものではない。そのうちに向ふの幕舍からはまたもボータブルがタンゴを歌つてゐる。足ぶみ、手拍子、スクラム組んで笑ひさゞめく敵兵味方の陣地では、

〃一發行かうか—彼等に一泡ふかしてやらうか〃

の聲が頻りに起る。だがこちらには來るべき決戰に備へ彈丸を貯藏する關係上彼等にしばし人間的最後の樂しみを與へるため砲擊を中止した。

潛水艦で糧秣補給

戰爭のまつ只中でヒゲもそればレコードもかける！　これがアメリカ兵である。

〃戰爭はスポーツなり〃

といふ彼等の戰爭に對する認識はその儘實行されてゐる。

糧　秣はトラックでドン〳〵補給される

ウンと榮養を攝らねば戰爭は出來ない。十人が十人みんな口を揃へてこれをいふ。從つて敵側には日本軍が味はふやうな困苦缺乏といふ言葉はない。困苦缺乏なきところに精强な軍隊の生れる理由はない。その上前線と基地は、一週間乃至二週間で交代する。長くて半月交代だ、これをやらぬとすぐブツ〳〵いふ。言ひ出したら上官も部下もなくなる。それが恐いから敵の上層部では、

〃兵隊を最も効果的に使ふ法〃

などのテキストをたよりに種々角度を變へ彼等の機嫌を損じないやう使ひ分ける。

全 體的に今度の戰鬪を通じ私は米兵は決して强くない。支那兵にも劣るといひたい。

一にも機械、二にも兵器、機械一つをたよつて戰ふのが彼等であり英雄的或は冒險的な點はあるが團結心、または身を全軍の犧牲となつて味方戰捷の緒を作るなどゝいふ兵隊は一名もない。

たゞ彼等は、

〃自分は飛行機大砲によつて護られる〃

といふ信仰を持つてゐる。從つて大砲が自己の周圍に健在する時、飛行機が味方の上空を旋回してゐるときは絶對に大丈夫であると頑張る。

ガ島の如く敵が制空權を獲得、我が方が八方狀況が惡い場合は仲々强い。それは自分は完全に兵器に護られてゐるといふ安心があるからだ。ガ島の敵が頑張つたのはこのためだつた。しかし我が突擊と夜襲には慄え上つてゐる。夜の敵の幕舍は誰一人寢るものがなく警戒に萬全を期してゐる。

敵 にもまた片腹痛い話だがアメリカ式夜襲と突擊がある。十二月十三日の夜である。突然砲擊してきた。こちらはワザと應戰せずに構へてゐると砲擊に續いて三十名乃至五十名で編成した一隊が自働小銃を持つて小藪にも突つこんできた。十分陣地の近くまで引つけておいて、我は十名の兵を以てこれに對抗して行つた。

天地を震慄させるやうな突擊の聲敵は忽ち踵を返へして仕舞つた。これに追討をかける。もとより强き敵ではない。訓練なき悲しさ、忽ちのうち背中から刺殺されるもの、軍刀で首を斬り落されるもの、右手を斬り落されて泣き乍らがけを下つて行くもの、瞬く間に敵の最も勇敢な突擊隊は壊滅された。

歸らぬ突擊隊にビックリした敵は以來一回の突擊もやらなくなつた。

「割に合はないことはやらない」

こ れが彼等の個人主義的思想である。だが、二六時中毎日敵機の下で戰ひを進めることは全く肉彈以外に策がない。敵は最後の一押、最後の五分間を口にしつゝ攻勢に轉じて來た。ジャングルを唯一の盾として日米の血戰はます〳〵熾烈となつて行つた。敵のデツカイ兵がこちらの陣地に接近して壕の中へ手榴彈を投げこむ。彼等は手榴彈投げの訓練が積んでゐないからこちらの壕へ入つても炸裂しない。間髪を入れずこれを取りあげて投げ返す、逃げ行く敵の背中にくつゝいて炸裂する、大きな手をあげたまゝ自分が投げたものを投返されてブツ倒れる米兵、戰況は一進一退、付近の草木を血に染めて苛烈となつてくる。同時に敵戰鬪機の攻擊も行動圏を擴大し、ガ島海

岸の要衝をつくやうになつた。

海 岸地帶これこそ日本軍の唯一の後方基地との連絡地帶である。そこが爆擊され出したのだ。當然海上からの補給路が封じられた。〃補給は困難にして實行不可能なり〃だが唯一の補給の道が殘されてゐた。海底線を辿る潛水艦輸送である。

潛水艦には澤山の糧秣が積みこまれた。ドラム罐の中へ米を入れる、米の中へマツチ、ローソク、粉末味などをつめこれを敵機が眼を皿のやうにしてゐる海を潛つて海岸近くまで運び來り、これを暗夜海上に流し潛水艦はその儘基地へ歸る。ドラム罐は海上に無數に浮び上り波におされて岸邊へ岸邊へと押し流されてくる。それをみると兵隊が裸になつて波を乘越えドラム罐引寄せ作業をする。

こ れが二、三日續いてゐるうちに敵機に發見された。なんでこれを敵が見逃しておく筈があらう。ドラム罐の中には米がある。波と闘ひ乍ら必死になつて罐を引寄よせてゐる兵隊の頭上へ敵の戰鬪機が舞ひ下つてきた。そして兵隊には一發の彈丸もうたずにドラム罐に對して機銃掃射をはじめた。みる〳〵うちに罐には無數の穴があく。そこから海水がドン〳〵入る。

一罐、二罐、三罐次々にドラム罐は米をつめたまゝ海底へ沈んで行つた。潛水艦が折角運んできてくれた一粒千圓の米が憎い敵機のため海底に沈められるのだ。思つただけでも胸が煮えくり返る。

穴があかないうちにと兵隊達は焦りに焦つて、罐を一つでも多く沈まないうちに陸へあげるべく戰つた。そして一粒でも多く前線へ送つた。

〃玉碎〃最後の突擊へ

困苦缺乏！ この言葉をガ島の勇士は全く身を以て經驗した。十二月二十五日から十二日に一食分が七日に半食分しか糧秣は五日目に一食分が七日に半食分しか糧秣が渡らなくなつた。かうなると逆に攻擊精神はいよ〳〵燃えさかつた。

僅 かな米を少しでも多くして食べるにはお粥にするよりほか道はなかつた。常には兵隊達にとつて最も難物のお粥であつたが、いまの場合最も好物にならなければならなかつた。その上各隊ともこのお粥を作るに燃料で頭をいためた。私の隊はこの事については、前々から研究に研究を重ねてゐたので、少しもそれにまごつくやうなことはなかつた。どんな燃料を使つたか……それはヤシの實をとり、この實の中にある堅い肉（コプラ）を一日天干にかける。これを餅の形位に小生切れにし點火する。ヤシ油を多分に含んでゐるので燃えつきは早い、熱量は石炭位、またとない携帶燃料となり煙が立たず火が除り見えないといふので絶讃を博した。戰線にも研究と創意は必要である。

副 食物は勿論調味料は何一つない。するとある兵隊が〃隊長殿けふは御馳走があります〃と私の前にやつてきた。そして天下をとつたやうな晴れがましいよい顏つきだつた。どんな御馳走だらう。珍し氣に私はその兵隊の包みをみた。微塵にも包んだ紙をはいで行く、最後に殘つたものは小指ほどの粉味噌だつた。これを私に、

〃食べて下さい〃

といふのだ。なんでいぢらしくて私がこの粉味噌が食べられよう。食べない私を不審に思つた兵隊は、

〃隊長殿毒は入つてをりません〃

と、ま顔になつていふ。私は涙んでおしいたゞいた。これが戰爭である。これが缺乏と困苦の戰場であることを銘記して戰つた。

實に美しき戰ひである。山にゐるうち三十日も鹽氣にありついたことがない〃鹽がほしい〃〃鹽ツパいものはないか〃いつの間にか兵隊達の朝と晩の〃元氣か〃の變りに出る挨拶に變つてゐた。元氣なものはまだいゝ、病氣の兵隊は頻りに鹽分を要求するこれをきくと兵隊達は十五里、二十里とはなれてゐる海岸に敵の重圍の中を潜り拔け水筒に海水を汲んでくる。

これを御飯に入れて鹽味をつけ戰友に與へた。全くわれ〳〵のからだは海水によつてもちこたへられたといつてもいゝほどだつた。

一方稻垣部隊は鹽に對しては早くから研究を續けてゐた。そして三十名の製鹽隊が選ばれて二十里の山道を下り海岸へ出た。そして飯盒を利用いろ〳〵と口には盡せないやうな苦勞を重ね、しかも夜だけ敵の眼を掠めて製鹽を重ねたが、出來た鹽は十五日間掛つて五合にも足りなかつた。

この鹽を持つて部隊に歸り數百名の部隊勇士に配給した時だけは誰いふとなく〃鹽の神〃として感謝された。それでも隊長以下みなハチ切れるやうな元氣で元旦を迎へた。宮城遙拜後、西山隊長は部下達に對して、

「これから新年の祝をする」といつた。

將校達の盃には兵隊の手でなみ〳〵と神酒が注がれた。盃をあげて戰捷を曉に祈つた。この神酒はあとで判つたことだが水であつたのだ。

水とお酒の區別がつかぬほど我々は缺食を續けてゐたのである。

そ　してこれは最後の一戰に備へる水盃？　つはもの達は言葉には出さないが、何れも胸と胸の中にその決意を固め今度こそは、

〃天皇陛下の御爲に〃

一死奉公の覺悟をきめた。背嚢の中にはまだ數本の恩賜の煙草が大事に殘つてゐた。

戰友と共に恩賜の煙草を分け合ふてのんだ。幾日ぶりかのこの煙草、ノドが鳴り、霧が腹の中へ、吸ひこまれるやうな感じだつた。

一口は自分のために、二口は父のためにのんだ。何故〃父のためにのんだか〃私は有難い御仁慈のほどを父にも分ちたいと香港攻略戰以來今まで持ち續けてきたのである。それをいまこゝを最後の死場所ときめた故、せめて父の分まで子の口で喫はうといふ、その時の氣持だつた『父子の親』肉體はたとへ千里はなれてをらうとも魂は一つになつてゐる。

一月は雨が多く、十月に戻つたやうな天候、兵隊みな雨の中にあつた。十日頃は敵はます〳〵增强され、アウステン山方面の友軍の前面は、みな敵で蟻の這ひ出る隙もないほど戰車、重砲、航空機、艦艇でかためられた。戰鬪は日と共に熾化し友軍は銃兵まで銃を執つて起ち上つた。

銃　なきものも全部竹槍を作つて第一線に躍り出で必勝の信念のもと見敵必殺、一

人十殺戰法で進んだ。一人十殺、千人で一萬人、一萬人で十萬の敵をヤツツケル、だがこれでもまだ殺し切れないほど敵は大軍だ。そして自分達戰友の屍をふみ越えふみ越え進んでくる敵、それを迎へ撃つ友軍、まことに地獄では書き得ない激鬪、ジヤングルは砲彈のため露呈し草は燒け千切れ、肉彈また肉彈の連續、屍山血河慘烈なる近代戰のはげしさを私はこゝにみて部下とともに更に奮ひたつた。アウステン山陣地は、一月二十日には遂に大軍のため包圍隊形をとられた。

〃玉碎〃〃玉碎〃

私は心の中で叫んだ。重要書類は全部燒き捨てた。身にまつはるものとて何一つなくなつた。

稻垣部隊は部隊長以下白鉢巻で最後の突擊をまつた。

本隊も最後の夜襲を、決行する準備が完了した。

敵陣突入の寸劇病兵達は次々に、

「私達がゐたのでは、手足纏ひになるから」と自決の道を選んだ。

悲壯の二字に盡きる。その時である。轉進の命下る。

つはもの達は歯ぎしりを噛みつゝ命を奉じてガ島を去つたのだ。

い　ま私はガ島に殘した英靈の事で胸が一杯である。私はガ島を離るゝ時英靈に誓つた。いま我々は命によつて轉進するけれども、何時の日か必ずこの地に來つて君達の靈前に米兵の首を手向けると。

さうだ、私には米兵の首をガ島の地に眠る英靈に捧げる義務が殘つてゐる。

戰ひはいよ〳〵苛烈悽慘の段階に入つたガ島に激戰中兵隊達は南の空を仰いで、

〃友軍機はまだ來ないか〃

と叫び合つたあの日を想起する。一機でも多く一發でも多く彈丸を前線に送る。これが銃後の人達に與へられた敵に撃つ最短の道である。

ガ島歸還勇士座談會

（一八・八・二二　中部日本新聞掲載）

いまや西南太平洋ソロモン群島の彼方には夜に日をついで悽愴苛烈な一大決戰が展開され、皇軍鐵壁の布陣は陸に空に敵アメリカの大軍と對して微塵も搖ぎなく相次いで輝く戰果が擧げられてゐる。この戰果を聞く度に我々の胸に蘇るものは過ぐるガ島の戰鬪である。來る日も來る日も苦鬪につぐ苦鬪を續けながらソロモンの一孤島ガダルカナル島に敵戰力を

釘付けにして、我が南方作戰の基礎を確立したこれら勇士の勳が今こそはつきり現れてきたのである。今や銃後一億はこのガ島勇士に新たな感謝を捧げると共にその勞苦をしつかりと心に刻み決戰に臨む決意を固めなければならない。中部日本新聞社は特に乞うていま豐橋陸軍病院に白衣の身を養ふこの勇士達の集りを得『ガ島の血戰を語る座談會』を開催した。

【時】八月二十一日　【所】豐橋陸軍病院高師原分院圖書室

出席者　大川信雄少尉（兵庫縣加古郡加古川町）三輪良策上等兵（愛知縣碧日井市高木村田樂原）近藤精一上等兵（岐阜縣郡上郡白鳥町鷲巣）向林貫次郎上等兵（大阪府豐能郡田尻村）中山主稅上等兵（愛知縣碧日井市高木村田樂原）近藤精一上等兵（名古屋市西區十長者町）川瀬照吉上等兵（岐阜縣羽島郡川島村松原島）關戸欽松上等兵（愛知縣西春日井郡北里村小木）三輪弘雄一等兵（名古屋市西區兒玉町）△中部日本新聞伊藤豐橋支局長ほか。

◇伊藤支局長　皆樣には永い間戰地で御苦勞をなされ、特にガダルカナル島で言語に絶する惡戰苦鬪をもつて立派な戰果をあげられ、私達銃後の國民は衷心から感謝致してゐる次第でございます。本日は御療養中の御體をわざ〳〵御集まり下さいまして誠に有難う存じます。只今から皆樣が體驗せられたガダルカナル島の戰鬪の模樣をお伺ひして、これを銃後に傳へ決戰へ奮ひ起つ銃後國民の心の糧としたいと存じます。先づ最初に「敵はどのやうに攻撃してきたか」といふやうなことから御話し願ひたいと存じます。

◇大川少尉　ガ島上陸當時の模樣をお話しますと、自分の任務は船舶警備で船團を護衛しつゝガ島へ向つたのでした。いよ〳〵島がみえだした○日たうとう敵機に發見された。それから敵機は入り變りたち變り執拗に頭上を飛び廻つて爆彈の雨を降らせる。こちらも負けず應戰、こゝに早くも壯烈な戰鬪が開始されたのでした。さうするうちに幸ひにも日は暮れかゝり敵機の攻撃も一時杜絶えたので、この時とばかり揚陸を開始したのでしたがその頃敵機は再びやつてきてわが揚陸地點へ猛攻を浴びせてきたのでした。

◇向林上等兵　自分らが上陸の時は書の間に大體の目標を定めて於て夜に入つてから上陸を開始したのであるが、それでも敵機は發見して猛烈に撃つてきた。最初は二機やつてきてそれがやつと歸つたと思つたら今度は九機やつてきた。舟艇のエンヂンも故障を起して動かなくなつてしまつた。この儘ではどうせ死ななければならないと決死の丁兵二名が綱をもつて裸で海へ飛び込んだ。それに續いて山川直典少尉を隊長とする自分達の一隊が飛び込んだ。眞闇な夜の海は方角さへ判らない。敵の攻撃はいよ〳〵激しいその中を夢中で泳ぎ海岸へ綱を渡しそれで舟艇を曳き上げてやつと上陸に成功した。それから四時間程たつたらもうガ島の夜が明けてきた。

◇近藤上等兵　私の部隊は最初に砲を下し海岸に陣地を布いて敵を待ち構へたが、その時は案外靜かであつた。こんな靜かな島かな！　と思つてゐると夜が明けたら敵の飛行機が來るわ〳〵無茶苦茶にやつて來た。

◇三輪上等兵　椰子の木すれ〳〵に飛んで無茶苦茶に撃ちまくるので、木の葉も枝も吹つ飛んで枯木のやうになつてしまつた所もあつた。

◇關戸上等兵　一度に十二機が自分達を目掛けて四方からやつてきたことがある。おまけに超低空でニヤツと笑ひながら手榴彈を投げて行きやあがつた。

◇近藤上等兵　飛行機から乘り出して笑つてゐるのが見えるのだから癪に障る。しかし癪には障るが少しも恐いとは思はなかつた。

◇三輪一等兵　日本の飛行機が一機でも來れば敵機は全部逃げてしまふ。歸ればその後を追ふやうに現れてくる。最初はわが集團を狙つてきたが、しまひには兵一人でも見つけければ、それを四方から撃ちまくるといふやり方でした。

◇伊藤支局長　敵の攻撃は飛行機の外はどんな風でしたか。

◇大川少尉　飛行機と艦砲射撃です。あの邊の海は急深で海岸近くに敵の軍艦が列を布いてゐて、我々の陣地へ一齊に撃ち込んできた。敵はハンガ岬を中心とする一帶を要塞化し機械力と數をたのんで攻撃してきたのです。

◇關戸上等兵　それに對しわが軍は寡兵よくよ戰つた。自分はこの戰であらゆる困苦にうち克つといふところに、日本軍人の眞の强さがあることを自分ながらはつきりと感じた。

◇伊藤支局長　特に食糧では苦勞されたと聞きましたが。

◇近藤上等兵　食糧は後方にあつても敵の攻撃が激しくて取りに行けない狀態で、毎日の食事は米が飯盒の中蓋へ三分の一位づゝでそれをお粥にしたのです。

◇大川少尉　自分らは着のみ着の儘で上陸したので、食糧は全然なく他の部隊から分けて貰ふのだからそれ以上少かつたので、お粥も一日二回で朝食を遲くし夕食を早くしてやつた。

◇三輪一等兵　滿月の晩、澤蟹を捕へて食べたがあれは美味かつた。

◇關戸上等兵　あれを鹽水で煮て頭からばり〳〵やると實に美味かつたね。あれは榮養もあつてよかつた。

◇中山上等兵　蟹も美味かつたが自分達はノロマといふ猿に似た奴をよく捕へて食つた。

◇三輪一等兵　蝦蟇や蜥蜴もよく食つたものだ。

◇近藤上等兵　米もだん〳〵少くなりしまひには渡らなくなつた。

◇向林上等兵　草の中へこぼした僅かの米を最後の一粒まで丹念に搜した。あれを想ふと、ほんたうに物を粗末には出來ない。

◇關戸上等兵　四人で毎日椰子の水を一本づゝ伐つた。一本に大體四つ位の實があるので、その水を呑みコブラを食べて最後に新芽を摘んで煮て食べた。食べるも

のたく野生の芋蔓も食べた。

◇向林上等兵　どうも昧が全然ないので唐芥子の木を一本持つてきて、それを噛みながら昧の代りにして食つたりした。炊事をするにも煙は煙が見えればすぐ敵機が飛んでくるので絶對に出來なかつた。

◇近藤上等兵　夜中に穴を掘つてその上を毛布で覆つて光が見えないやうにして、明くる日の三回分の炊事を作つておいたりして、この炊事にも一苦勞しました。

◇伊藤支局長　空腹の時はどんな氣がしますか。

◇大川少尉　戰爭のない時は腹が空いてゐるとやつぱり食ふことを考へるのです。兵隊連も〝こんど内地へ歸つたら鱈司を腹いつぱい食ひたい〟とか〝俺は汁粉が食ひたい〟とかいつて話してゐる〟食つたつもりだけ昧つておけ〟といつたら、〝さう思つたら、なほ食ひたくなりました〟といつて元氣に笑つてゐた。

◇近藤上等兵　自分の同僚で水谷といふ兵が或る朝〝實に殘念だ〟といふから譯を尋ねると、ゆふべ夢でお母さんが出て來た。そのお母さんが重箱へ一ぱい、ぼた餅を持つて來てくれた。蓋を取つていよいよ食べやうとしたとたんに目が覺めたといふのである。ほんやたうに殘念さうな顔をしてゐた。果物は椰子だけで何もない。

◇關戸上等兵　芽を出しかゝつた椰子の實　椰子リンゴといはれるそれがある位のものです。

◇向林上等兵　煙草がないので椰子の木の皮を紙で卷いて吸つてみたが……。

◇中山上等兵　あれをよくやつたがどうも辛くて仕方がなかつた。

◇關戸上等兵　あゝしてみると何でも食へない物は無いわけだ。この密から見えるものは木の葉でも何でも皆食へるやうな氣がする。だがこの間試みにタンポポを國でもんで食べてみたが駄目だつた。やつぱり食へない。

◇伊藤支局長　一番苦しかつたことはどのやうなことですか。

◇大川少尉　職地へ出た以上は物の足りないことや敵の來ることは當然のことで、自分の體に對することは少しも苦痛とは考へなかつた。

◇三輪一等兵　戰友が次々と倒れてゆくことが耐へられない苦痛であつた。

◇三輪上等兵　自分もそれが一番苦しかつた。

◇關戸上等兵　敵機なんか何ともないが今まで話し合つてゐた戰友がもう次の時間にゐないのがそれが何よりつらかつた。

◇伊藤支局長　特に嬉しかつたことはどのやうなことですか。

◇大川少尉　敵の飛行場を友軍が占領したといふ話が傳はつて敵機が少しも來なかつた時があつた。あの時は嬉しかつた。

◇近藤上等兵　友軍の飛行機が一機でも來れば敵機は全部逃げてしまふ。その間がこちらの一番嬉しい時です。

◇川瀬上等兵　自分達の上空でたつた一機の友軍機へ敵二機が兩方から襲ひかゝつたことがあつた。その時友軍機が體をかはしたので、敵機同志で衝突して落ちてしまつた。あれは愉快だつた。

◇大川少尉　お正月に米五勺と煙草一本、砂糖一服と榮養食一粒の特別給與を貰つ

た時はみんな嬉しかつたぐらう。

◇伊藤支局長　さうした困苦の中にあつてあのやうに立派に戰ひぬいたといふことが日本軍人の偉大なところですね。

◇中山上等兵　あの困苦缺乏の中でも決して攻擊精神は失はなかつた　自分達も幾度か突擊を行つた。薄暮を利して敵に近づき敵の壕の中へ突込んで行くと敵は聲をあげて泣いた。泣きながら逃げる奴も逃げ遲れて武器を捨て泣きながら握手を上げる奴もあつた。こちらがいくら少くても決して向つて來ない。銃劍を構へ肉彈諸共突入してゆく日本兵を敵はよほど恐しかつたと見える。だから自分達は最後には必ず敵をやつつけてやらなければおかないといふ固い信念を持つてゐた。

◇大川少尉　戰鬪で苦勞すればする程敵愾心が旺盛になつてくる。同僚や部下が一人づゝ減つてゆく度にその氣持が強くなつて何度！　何に見てをれ！　きういふ敵愾心で緊張り通したのです。あの時を考へると、今すぐでも職地へ飛んで行つて敵をやつつけてやりたい氣持になります。

◇伊藤支局長　挺身隊のことについて直接ご覽になつたり御聞きになつたことはありませんか。

◇川瀬上等兵　挺身隊の中澤少尉殿は自分達の隊長殿でした。〝肚擧決行劇にすでに三回に亘つて敵中に侵入し狀況を偵察してをられるのです。

◇三輪上等兵　挺身隊の人達が任務を果して歸つてきた時の嬉しさは未だに忘れない。少尉殿は夜中に敵の飛行場へ潜入し懷中電燈をつけた敵の巡察將校のすぐ後をつゐて、同じやうに電燈をつけて偵察を行つたとのことです。

◇向林上等兵　自分が上陸した時中澤少尉殿が丁度糧秣輪釜の指揮官で來て居られて、それから一週間程行動を共にしてその間に直接お伺ひした話ですが、夜に入つて敵の飛行場へ潜入し御飯して爆發目的地點へ近づいた時、敵の歩哨が煙草を吸ひながら立つてゐた。少尉殿は機を窺ひながら靜かに接近して行くと、その奴がその煙草の吸殼をぷいと捨てた。それが少尉殿の背中へ落ちた。動けば敵に感づかれるし背中は熱いし〟あんな辛かつたことはなかつた〟と少尉殿は語つてをられた。そしてその歩哨交代の隙に爆藥をしかけ爆發に成功したとのことでした。敵兵の煙草の吸殼が背中へ落ちるところに伏せてゐる。その度胸と忍耐は日本軍人ならでは出來ないことでせう。

◇關戸上等兵　挺身隊が敵陣爆破に成功したと聞いた時は嬉しかつた。それで益々士氣が旺盛になつた。

◇中山上等兵　大野挺身隊の杉山勝次上等兵は自分とは入隊以來の親友で各戰場を共に暮した仲でした。出發の朝杉山は自分のところへ來て〝意々お別れだこれを二人で喰かう〟と慰藉の煙草を自分に半分奪れた。そして〝必ずやつゝけるぞ〟といつて出掛けて行つた。雨上りの泥道を元氣に出掛けて行つた、大野挺身隊の後姿がまだはつきりと眼の底に殘つてゐる。それ以來毎日々々見張り所の小山へ登つて今日か明日かとその歸りを待つてゐたが、たうとう歸つてこなかつた。敵

露光量違いの為重複撮影

445
54

陣へ斬り込んで立派に玉碎したことだらう。この仇は必ず討つとみんな心に誓つたのでした。

◇川瀬上等兵　命令で後退する時でも他へ轉進するとは全く考へてゐなかつた。船に乘つてさらに敵の飛行場付近へでも敵前上陸をやるつもりでゐた。

◇關戸上等兵　一時退つて敵をおびき出し一擧にこれをやつゝけるつもりでをつたのです。

◇近藤上等兵　また戻つてもう一度やる覺悟でゐた。

◇伊藤支局長　最後に内地へ歸還されて皆様の感じられたこと。戰爭を通じて銃後に望みたいことなどについてお話し願ひたいと思ひます。

◇近藤上等兵　敵は決して強くはないが機械を巧みに使つてくるそして數が多い。

◇關戸上等兵　敵の歩兵は弱い到底日本の敵ではないと思ふ。

◇三輪上等兵　しかし數が多いのだ。飛行機でも何でもあそこでは數が多かつた。この多い數に向ふにはこちらもやつぱり數を增すことが必要だと思ふ。

◇近藤上等兵　他の戰場の經驗からガ島と比較して考へると敵も相當眞劍になつてきてゐるといふことがいへると思ふ。

◇三輪一等兵　空襲は侮つてはならんが決して恐れることはないと思ふ。

◇近藤上等兵　最も恐ろしいのは爆風ですしかしこれも壕へはいつてゐればのがれることができる。

◇伊藤支局長　結局空襲に備へては防空壕の完備が大切なわけですね。

◇近藤上等兵　話は變るがあちらで一度慰問袋を貰つたが、ふりかけ粉といふような物が入つてゐたが、食物は全部腐つてゐた。南方への慰問袋に食物は不用だと思ひます。

◇岡林上等兵　食物より讀物ですね。

◇中山上等兵　内地の狀況が一番知りたいのです。

◇三輪一等兵　手紙が一番欲しいのです。また嬉しいです。

◇大川少尉　町内會などで同じ内容のものを澤山作られるとそれが同じ部隊へ配られる。誰も貰もが皆同じ物を貰ふ。あゝいふのは兵隊があまり喜ばない。

◇伊藤支局長　長時間にわたり色々ありがたう存じました。一日も早く御全快なさるやう御祈り致します。

昭和十九年二月十五日印刷
昭和十九年二月二十日發行

名古屋市西區南外堀町
發行兼編輯人　愛知縣軍事課

名古屋市中區不二見町
印刷所　中部電氣　有信社
電話南㊀二六五八番

名古屋市西區南外堀町
發行所　愛知縣軍事課

露光量違いの為重複撮影

陣へ斬り込んで立派に玉碎したことだらう。この仇は必ず討つとみんな心に誓つたのでした。

◇川瀬上等兵　命令で後退する時でも他へ轉進するとは全く考へてゐなかつた。船に乘つてさらに敵の飛行場付近へでも敵前上陸をやるつもりでゐた。

◇關戸上等兵　一時退つて敵をおびき出し一擧にこれをやつゝけるつもりでをつたのです。

◇近藤上等兵　また戻つてもう一度やる覺悟でゐた。

◇伊藤支局長　最後に内地へ歸還されて皆様の感じられたこと。戰爭を通じて銃後に望みたいことなどについてお話し願ひたいと思ひます。

◇近藤上等兵　敵は決して强くはないが機械を巧みに使つてくるそして數が多い。

◇關戸上等兵　敵の歩兵は弱い到底日本の敵ではないと思ふ。

◇三輪上等兵　しかし數が多いのだ。飛行機でも何でもあそこでは數が多かつた。この多い數に向ふにはこちらもやつぱり數を增すことが必要だと思ふ。

◇近藤上等兵　他の戰場の經驗からガ島と比較して考へると敵も相當眞劍になつてきてゐるといふことがいへると思ふ。

◇三輪一等兵　空襲は侮つてはならんが決して恐れることはないと思ふ。

◇近藤上等兵　最も恐ろしいのは爆風ですしかしこれも據へはいつてゐればのがれることができる。

◇伊藤支局長　結局空襲に備へては防空壕の完備が大切なわけですね。

◇近藤上等兵　話は變るがあちらで一度慰問袋を貰つたが、ふりかけ粉といふような物が入つてゐたが、食物は全部腐つてゐた。南方への慰問袋に食物は不用だと思ひます。

◇向林上等兵　食物より讀物ですね。

◇中山上等兵　内地の狀況が一番知りたいのです。

◇三輪一等兵　手紙が一番欲しいのです。また嬉しいです。

◇大川少尉　町内會などで同じ内容のものを澤山作られるとそれが同じ部隊へ配られる。誰も彼もが皆同じ物を貰ふ。あゝいふのは兵隊があまり寫ばない。

◇伊藤支局長　長時間にわたり色々ありがたう存じました。一日も早く御全快なさるやう御祈り致します。

445
54

昭和十九年二月十五日印刷
昭和十九年二月二十日發行

名古屋市西區南外堀町
發行兼編輯人　愛知縣軍事課

名古屋市中區不二見町
印刷所　有信社
電話南㊀二六五八番

名古屋市西區南外堀町
發行所　愛知縣軍事課

終